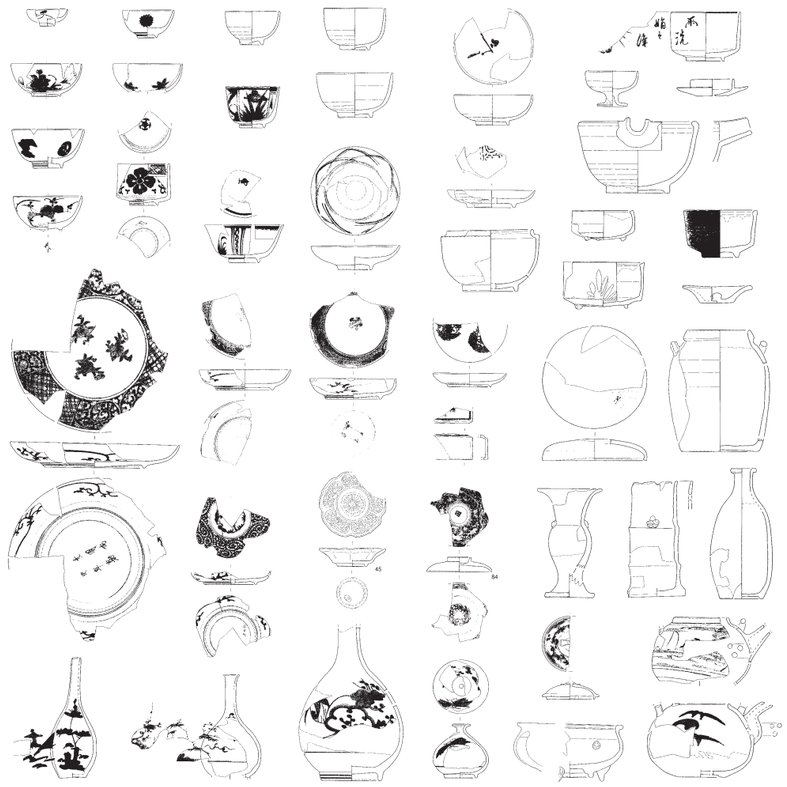
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第254集

鰍沢河岸跡 VI

― 一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う横町地区発掘調査報告書 ―



2008．3

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第二五四集

鰍沢河岸跡 VI

二〇〇八・三

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

鰍沢河岸跡 VI

― 一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う横町地区発掘調査報告書 ―

2008．3

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

調査区遠景（南から）

調査区俯瞰写真

巻頭図版 2

調査区俯瞰写真（東から）

調査区俯瞰写真（南から）

調査区 a 区俯瞰写真

調査区 b 区俯瞰写真

巻頭図版 4

a 区第 1 面検出状況（西から）

a 区 1 号埋甕検出状況（北から）

a 区 2 号石垣検出状況（東から）

a 区 6 号石垣検出状況（東から）

b 区第 1 面焼土層掘り下げ状況（北から）

b 区第 1 面焼土層堆積状況（北東から）

b 区第 2 面検出状況（北から）

b 区第 2 面検出状況（北西から）

1 号土器集中区出土遺物（1）

1 号土器集中区出土遺物（2）

1 号土器集中区出土遺物（3）

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（1）磁器

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（2）磁器

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（3）陶器

鰍沢河岸跡８区出土遺物（４）陶器

鰍沢河岸跡８区出土遺物（５）土器

鰍沢河岸跡８区出土遺物（６）元禄一分判

鰍沢河岸跡８区出土遺物（７）銭貨

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（8）金属製品

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（9）土製品

巻頭図版14

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（10）石製品

鰍沢河岸跡 8 区出土遺物（11）骨角製品

鰍沢河岸跡Ⅵのあらまし

鰍沢河岸跡は、南巨摩郡鰍沢町明神町～横町地区に所在し、江戸時代はじめに京都の豪商角倉了以による富士川の開削によって開かれた富士川水運の船着場を中心とする遺跡で、青柳河岸（増穂町）、黒沢河岸（市川三郷町）とともに「甲州三河岸」と呼ばれていました。江戸幕府の直轄領である甲府盆地一円の年貢米を江戸へ廻送するため、廻米を集積する米蔵が幕府により設定され、また陸上交通路の駿州往還の拠点である宿駅も設置されたことから、陸路、水路の要衝として繁栄を極め、昭和３（1928）年の富士身延鉄道（現在のJR身延線）の全線開通により舟運の役目を終えるまで甲府盆地の経済・文化の玄関口としての役割を担いました。

この地に一般国道52号改築（甲西道路建設）事業を行うこととなり、平成12年から平成19年度まで、埋蔵文化財の記録保存作業として、国土交通省からの委託を受け、山梨県教育委員会が当埋蔵文化財センターを実施機関として発掘調査を進めてきました。

甲府盆地鳥瞰図　1．鰍沢河岸跡
2．黒沢河岸跡
3．青柳河岸跡

大地に刻まれた災害の爪痕

鰍沢河岸跡の発掘調査では、洪水による土砂堆積層をはじめ大火の爪痕である焼土層や地震の痕跡である噴砂など、災害に見舞われた状況が確認されています。

水害（洪水）

鰍沢河岸跡は、甲府盆地の二大河川である笛吹川と釜無川が甲府盆地一円の水をすべて集めて合流する地点から約３kmほど下流の富士川右岸に位置しています。また、巨摩山地から発する南川・東川・戸川が本遺跡のすぐ近くで富士川に合流し、さらに下流約１kmの「禹之瀬」で川幅が極端に狭くなるため、洪水が滞り氾濫が生じ、水害を受けやすい自然環境に立地しています。

人々は度重なる洪水や氾濫に対応するため、石垣を築き盛土による嵩上げを繰り返し、その結果幾重にも埋没した石垣が検出されています。河岸を維持するために自然との共生を図りながら洪水常習地帯に生きた人々の息遣いや生活感覚を垣間見ることができます。

火災（鰍沢文政大火）

文政四（1821）年正月十六日、鰍沢河岸の問屋街から出火した炎が北風にあおられて、民家77軒に加えて、鰍沢河岸の中心的な施設である幕府の御米蔵が年貢米もろともに焼失しています。

遺跡に残る火事の痕跡としては、被災により釉薬が溶けて表面のツヤを失ったり、さらにはプツプツと発泡している陶磁器や建築部材の混在した焼土が対面する石垣の間に一括して投棄され、片づけられた二次的な状態で検出されています。

文政大火に伴う焼土層

表面が発泡した磁器

今日に残された詳細な文献記録と合わせて、これらの焼物は被災時点での暮らしや物流を具体的に物語る貴重な資料となります。

震災（地震）

今回の調査では検出されませんでしたが過去の調査では近世以降と推定される地震による液状化に伴う噴砂が検出されています。遺跡における地震の痕跡には、地震の時期の予知、そして、被害の予測など、私たちの現在、そして、将来の生活を守るための情報がたくさんつまっています。近い将来に東海地震が起こると言われている今日、遺跡で発見された地震の跡を理解し、当時の災害とくらしの関係を明らかにすることは現在の防災にもとても役立ちます。

これらの災害を抜きにして鰍沢河岸における諸事象の動静を語ることは不可能と言えるでしょう。すなわち、当時の歴史事象に係る背景を解明するためには、災害痕跡の実態を把握し、歴史の中に位置づけ、地域独自の災害文化史を捉えることが重要となります。

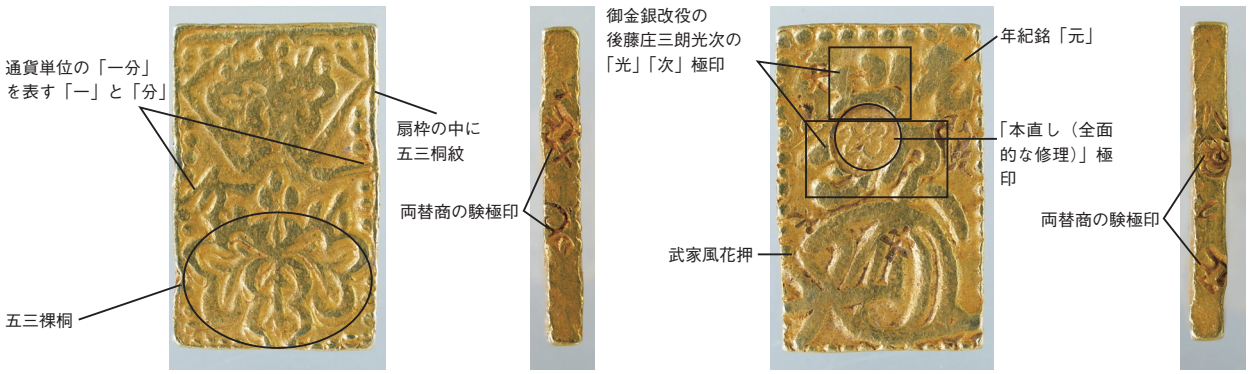
元禄一分判金（げんろくいちぶばんきん）に込められた願い

河岸跡の最北端、鰍沢河岸の運営に係わる商人の居住地域の建物基礎の石垣脇から一枚出土しています。鍛造加工による短冊形の板金で、縦16.5㎜、横10㎜、厚さ1.2㎜、重さ4.44ｇ、金の含有量は約56.6％（雑分は銀）となります。製造された期間は、元禄８（1695）年から宝永７（1710）年（実質的には元禄８年～11年までの４年間であったという）です。表面は長方形の圏点に囲まれ、その上部には扇枠（おうぎわく）に桐紋が、中央には横並びで右から左に「一分」の文字が、下部には裸桐（はだかきり）が配されています。裏面向かって右上端に見える「元」字銘から「元禄一分判金」と特定されます。「元」字は、書体が寸づまりの「短元」と称されるもので、稀少なものです。裏面には幕府の「御金銀改役」だった後藤庄三郎光次の「光次（花押）」極印が見られます。また、裏面および両側面には、両替商が包封した際に打刻した、自家の験極印（けんごくいん）が何個も見らます。

一分判金は、4枚で一両となるもので、甲府城跡で発見された「慶長一分判金（けいちょういちぶばんきん）（慶長６（1601）年）」に次いで県内では2例目となります。慶長一分判金に比べ重さは同じですが、品位が引き下げられたため、厚みがあります。このために、流通頻度の激しさに伴って損傷を受けやすく、通用に支障をきたしたとの記録が多いです。本資料も裏面の「光次（花押）」極印の上部には、金座が本直し（本格修理）を施した際などに打刻した「小桐」験極印が加打刻されています。

悪化の一途をたどる幕府財政を救済するための改悪によって製造されましたが、質を落とす（金を減らすこと）吹替（ふきかえ）によって数量を増やそうと目論んだため急激なインフレを引き起こし、物価の高騰が国民を苦しめたとされています。

鰍沢河岸跡における「元禄一分判金」をはじめ「甲州金壱分判」、「南鐐二朱判」の出土は、江戸から明治時代に経済・物流の面では甲府以上の繁栄を誇った当時の鰍沢河岸の隆盛の一端を語るとともに、いずれも建物基礎の石垣脇から発見されていることから、家や蔵を建てる前に繁栄の祈りを込めて大地に奉納されたものではないかと考えられます。幾多の災害にも負けずこの地に生き続けた人々の祈りのこころを知る大変貴重な資料です。



〈表面〉　〈側面〉　〈裏面〉　〈側面〉

序

本書は、平成19年度に実施した国土交通省関東地方整備局による一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う鰍沢河岸跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

鰍沢河岸跡は、南巨摩郡鰍沢町明神町～横町地区に所在し、江戸時代初期に京都の豪商角倉了以による富士川の開削によって開始された、富士川水運の拠点的な河岸（川の港）として、青柳河岸（増穂町）、黒沢河岸（市川三郷町）とともに「甲州三河岸」と呼ばれていました。鰍沢河岸には、江戸幕府の直轄領である甲府盆地一円の年貢米を江戸へ廻送するため、廻米を集積する米蔵が幕府により設定され、また、陸上交通路の駿州往還の拠点である宿駅も設置されたことから、陸路、水路の要衝として繁栄を極めました。昭和３（1928）年の富士身延鉄道（現在のJR身延線）の全線開通により、舟運の役目を終えるまで、甲府盆地の経済・文化の玄関口としての役割を担いました。

鰍沢河岸跡の当センターによる発掘調査は、平成８年の富士川堤防改修事業（明神白子護岸建設）に先立つ調査に始まり、平成12年度から16年度の白子明神地区宅地水防災事業に伴う調査「鰍沢河岸跡Ａ区」や、平成12年度から18年度の一般国道52号線改築（甲西道路建設）に伴う調査「鰍沢河岸跡Ｂ区・Ｃ区」を実施してきており、これまでに鰍沢河岸の中核をなす年貢米を集積した御米蔵跡をはじめ年貢米の荷積み台跡、御役人のための御詰所跡、駿州街道から御米蔵跡に至る道路跡、船宿などの商家が集中した河岸問屋街や江戸時代から明治時代にかけての大規模な土地造成の痕跡や石垣などが発見され、『鰍沢河岸跡』調査報告書として順次刊行され、本報告はⅥとなります。

今回の主な発掘調査成果としては、鰍沢河岸の運営に係わる商人の居住地域とされる河岸跡の最北端に位置する横町地区「鰍沢河岸跡C区」の調査において、２層にわたる延べ340㎡程の狭い調査面積でしたが、積み重なる石垣や石列などの発見により、洪水常習地帯に生きた人々の暮らしぶりをうかがい知ることができました。また、文政４（1821）年11月16日の鰍沢文政大火で焼け出された陶磁器などの一括廃棄された遺物をはじめとして、地鎮のためにまかれたと考えられる「元禄一分判」など、鰍沢河岸の隆盛の一端を語る貴重な資料を得ることができました。

本書および出土遺物・発掘調査資料が地域の歴史解明あるいは地域学習の糧として活用いただければ幸甚です。

末筆ではありますが、鰍沢河岸跡の発掘調査および報告書作成にあたり、様々なご協力をいただいた機関および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成20年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　**末　木　　健**

例　　言

1．本書『鰍沢河岸跡』Ⅵ　山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第254集は、山梨県南巨摩郡鰍沢町八幡1513－3外（横町地区）に所在する鰍沢河岸跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に先立って、山梨県教育委員会が国土交通省関東地方整備局からの委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

『鰍沢河岸跡』Ⅵとしたのは山梨県埋蔵文化財センターの鰍沢河岸跡の発掘調査報告書の通し番号であり、『鰍沢河岸跡』（1998）山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第148集、『鰍沢河岸跡』Ⅱ（2005）山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第224集、『鰍沢河岸跡』Ⅲ（2006）山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第235集、『鰍沢河岸跡』Ⅳ（2006）山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第238集、『鰍沢河岸跡』Ⅴ（2007）山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第245集に続くためである。

3．発掘調査は、平成19年５月28日～平成19年８月3日の期間に実施した。また、発掘調査終了後の整理・報告書作成については、平成19年８月６日～平成20年３月31日の期間に実施した。

4．本書の編集は、山梨県埋蔵文化財センターの保坂和博・堀込紀行が担当した。各執筆分担については、それぞれの文末に執筆者名を記した。また、自然科学分析などの執筆者はそれぞれの冒頭に記した。

5．本書に掲載した発掘現場での写真は、保坂和博・堀込紀行が撮影した。

6．本書に掲載した遺物写真は、口絵写真をスタジオトータルアイの清水守氏に委託し、その他を堀込紀行が撮影した。

7．測量用写真および歴史景観写真の航空写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。

8．デジタル写真の計測図化作業は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

9．発掘調査時の遺構・遺物出土位置の光波測距儀による測量および整理・報告書作成時のデータ管理・出力には、株式会社シン技術コンサルのコンピュータシステム「遺跡管理システム2000」を使用した。

10．陶磁器・石製品の一部の実測・トレースは、株式会社アルカ、土製品の一部の実測・トレースは、株式会社シン技術コンサルに委託した。

11．銭貨・金属製品の保存処理および一部の実測・トレースは、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。

12．花粉分析・X線回析分析・炭化材同定などの自然科学は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

13．本書に掛かる資料（遺物・写真・図面他の記録類）は山梨県埋蔵文化財センターが一括保管している。

14．発掘調査および報告書作成にあたっては下記の組織･個人からご助言･ご協力をいただいた。ご芳名を記し、深く感謝申し上げる。

西脇康、牧野雅史、鰍沢町教育委員会、鰍沢町まちづくり推進課、山梨交通鰍沢営業所(50音順、敬称略)

15．本調査及び報告書作成に係る組織は以下のとおりである。

調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
発掘調査担当者	保坂和博、堀込紀行
整理担当者	保坂和博、堀込紀行

発掘調査・整理報告書作成従事者

□発掘調査／遺構検出・測量図化等

今津武雄、遠藤実雄、土井みさほ、原田みゆき、樋口京子、樋口啓子、深沢徳子、望月明、望月和歌子

□整理及び報告書作成／遺物洗浄・注記・接合復元・実測・図面浄書・計量・データ管理等

栗原礼子、齋藤里美、萩原里江子（順不同・敬称略）

凡　　例

1．発掘区

鰍沢河岸跡における当センターによる発掘調査は、平成8年度の明神白子護岸工事に先立ち調査を実施したことに始まり、続いて平成12年度から19年度まで行い、調査の進行に従い発掘区を設定した。

平成12年度から16年度の白子明神地区宅地水防災事業に伴う調査範囲を「鰍沢河岸跡Ａ区」、平成12年度から17年度の一般国道52号線改築（甲西道路建設）に伴う調査範囲を「鰍沢河岸跡Ｂ区」、平成17年度から19年度の横町地区の一般国道52号線改築に伴う調査範囲を「鰍沢河岸跡Ｃ区」とした。今回の報告対象は、横町地区の甲西道路建設事業範囲に該当する「鰍沢河岸跡Ｃ区」の平成19年度に実施した発掘調査である。

2．調査区

鰍沢河岸跡C区の調査区は、甲西道路建設事業の優先順位に応じて、１区から８区を設定し、調査を進めた。平成19年度の調査区は、８区となるが石垣の配置が古い地割りに対応しているものがあることから、地籍図にしたがってさらに小区画（ａ区・ｂ区）に分割した。

3．遺構図

ａ．遺構図の標準的な縮尺は以下のとおりである。

検出遺構全体図：1/150　　ａ区・ｂ区遺構配置図：1/70　　基本土層図：1/60

①各遺構平面･断面図

石垣：1/40　　石列：1/40　　埋甕：1/40　　集石：1/40　　土器集中区：1/40　　道路：1/60

②遺物分布図

調査区全体遺物平面分布図：1/120　　ａ区・ｂ区遺物平面・垂直分布図：1/80

１号土器集中区遺物平面・垂直分布図：1/20　　１号道路遺物平面・垂直分布図：1/60

１・２号石垣遺物平面・垂直分布図：1/60　　ｂ区遺物包含層平面・垂直分布図：1/60

ｂ区調査壁出土遺物平面・垂直分布図：1/60

ｂ．方位は､真北を各図中に記号で示した。グリッド軸は真北から東方向に45度回転させた軸をX軸（アルファベット記号を付したもの）としている。

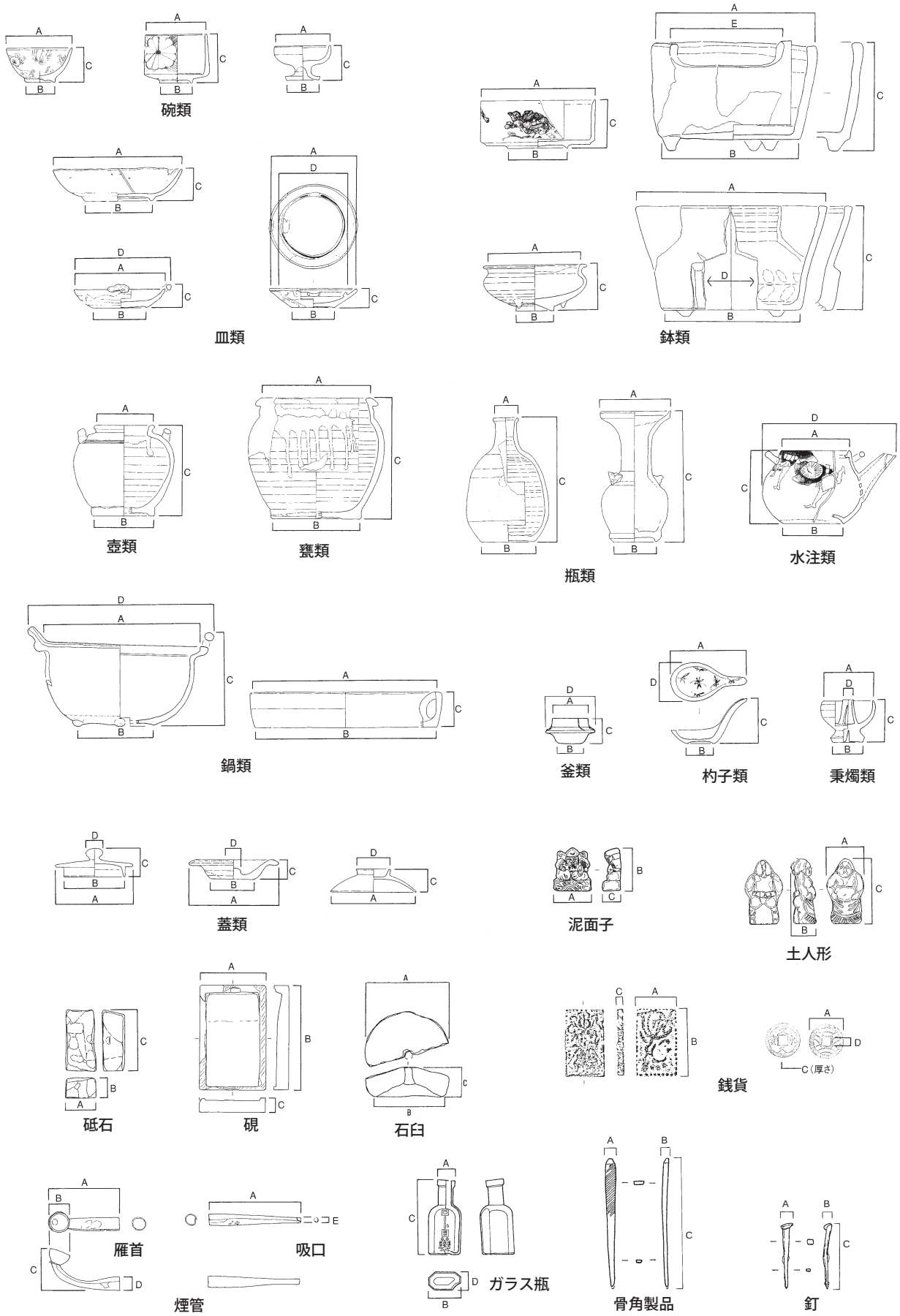
ｃ．主な遺構の図化は、①現場担当者によるデジタルカメラの平面図（石垣、列石、配石など）及び土層断面・石垣等の立面図の２方向からのステレオ撮影及び写真に写し込んだ対空標識（基準点）の測量データを基に、②委託業者（株式会社シン技術コンサル）によるステレオ画像の３次元計測、オルソ画像（合成写真）とデジタル編集素図の作成、デジタルトレースによる図化作業を実施した。なお、デジタル3次元写真計測で作成されたオルソ画像は、PL-80～86に掲載した。

4．遺物ID番号

本報告書に掲載した出土遺物に対しては、一連の通し番号「遺物ID番号」を付し、出土遺物の実測図（PL-32～52）及び遺物観察表に記載した。また、調査現場での光波による遺物取上げは、各遺構ごとに通し番号を付したが、整理段階で1番から連続番号を注記し、「注記ID」として遺物観察表に記載した（各遺構ごとの通し番号は抹消せず、「光波ID」として遺物台帳に記載し、発掘調査段階の記録類との照合作業を行なえるようにした）。

5．遺物実測図

ａ．遺物実測図は、磁器、陶器、土器、土製品、石製品、銭貨、金属製品、骨角製品、プラスチック製品、ガ


碗類
皿類
鉢類
壺類
甕類
瓶類
水注類
鍋類
釜類
杓子類
秉燭類
蓋類
泥面子
土人形
砥石
硯
石臼
銭貨
C（厚さ）
雁首
吸口
煙管
ガラス瓶
骨角製品
釘

遺物計測位置の凡例

ラス製品に配列し、その中をさらに器種・種別順などに並べている。

b．遺物種別ごとの標準的な縮尺は以下のとおりである。

磁器・陶器・土器：1/3（大型品1/6）　土製品：2/3　石製品：1/3（大型品1/6）　金属製品：1/2（銭貨2/3）骨角製品：2/3　プラスチック製品：2/3　ガラス製品：1/3

c．遺物実測図の用例は以下のとおりである。

一点破線：施釉の範囲・目跡・釉薬の掛け分けなど色の異なる範囲や濃淡のある場合の境

破　　線：推定線・輪積み線、ロクロ目・稜線

：熱を受けて陶磁器の表面の施釉が発泡した範囲

：熱を受けて陶磁器の表面の施釉がつや消し状態になった範囲

：煤など炭化物が付着した範囲

：鉄分の付着した範囲

d．遺物IDNo.脇の記号は、熱変質の状況を示す。

●：熱を受けて陶磁器の表面の施釉が発泡したもの

▲：熱を受けて陶磁器の表面の施釉がつや消し状態になったもの

6．遺物観察表

a．計測値：各遺物において計測部位Ａ～Ｅを必要に応じて定めて計測した。基準となる計測位置は遺物計測位置の凡例に示した。なお、観察表中の括弧は推定値を表し、残存部分の計測値は値の後ろに「残」と記した。また「－」は計測不能であることを示す。計測値の単位は、cmを基本としているが、分類１で魚類・貝類・鳥類・陸獣類・哺乳類としたものの単位はmmである。ただし、骨角類であっても分類１で、骨角としているもの（製品に加工されているもの）の単位はcmである。

b．分類：分類１は材質、分類２は器種・種別、分類３は器種・種別内における小分類とし、分類４･分類５は必要に応じて形状等を入力した。なお、分類２･分類３においては『甲府城下町遺跡』（森原明廣2004「甲府城下町遺跡出土遺物分類」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第215集、山梨県教育委員会、149）及び『内藤町遺跡』（井汲隆夫1992「器形分類表と分類基準」新宿区遺跡調査会、23～43）、「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類⑴」『東京大学構内遺跡調査研究年報２ 別冊』（東京大学埋蔵文化財調査室1999）の報告を参考にし、形状に加えて口径や器高等の大きさも考慮して分類を行なった。

c．色調：遺構・遺物観察表中の色調表現は、『標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄2001、日本色研事業株式会社発行）に準拠した。

d．文字／刻印:右から左に横書きされている文字は、遺物観察表中では左から右への現代の表記法で表した。

目　　次

巻頭図版
あらまし
序文
例言
凡例
目次

第１章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の方法と経過…… 1
　第３節　整理の方法と経過…… 3

第２章　鰍沢河岸跡をとりまく環境
　第１節　地理的環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 6

第３章　検出した遺構と遺物
　第１節　遺跡の概要…… 9
　第２節　基本層序…… 9
　第３節　遺構……11
　第４節　遺物……14
　第５節　遺物分布……14

第４章　分析・考察
　第１節　鰍沢河岸跡８区出土の陶磁器・土器群の様相について……15
　第２節　鰍沢河岸跡８区出土の動物遺体……17
　第３節　鰍沢河岸跡８区の自然化学分析……18
　第４節　鰍沢河岸跡８区出土の元禄一分判金ほかの品位分析について……25

遺物観察表……32
遺構図版……39
遺物図版……70
写真図版……93
抄録

挿図・表目次

１－２－１　調査区位置図…… 2
１－２－２　発掘区設定図…… 2
１－２－３　グリッド設定図…… 2
１－２－４　旧地籍図と発掘調査区…… 4
２－２－１　周辺の遺跡分布図…… 6
２－２－２　遺跡一覧…… 6
３－１－１　検出遺構一覧…… 9
３－１－２　検出遺物集計…… 9
３－１－３　検出遺構全体図……10
３－１－４　検出遺構一覧表（1）……12
３－１－５　検出遺構一覧表（2）……13
３－１－６　検出遺物集計表……14
４－１－１　遺構変遷……15
４－１－２　１号土器集中区　陶磁器・土器器種組成表……16
４－１－３　検出遺物の様相（1）【１号土器集中区】……27
４－１－４　検出遺物の様相（2）【１号道路】……28
４－１－５　検出遺物の様相（3）【ａ区その他の遺構】……29
４－１－６　検出遺物の様相（4）【ｂ区遺物包含層】……30
４－１－７　検出遺物の様相（5）【ｂ区各調査壁面】……31
４－２－１　出土動物遺体種名……17
４－２－２　出土動物遺体一覧……17
４－３－１　成分分析の方法と測定元素……19
４－３－２　花粉分析結果……20
４－３－３　植物珪酸体分析結果……20
４－３－４　X線回折図（土壁（SH遺物ID328）白色物質）……21
４－３－５　X線回折図（甕（UK遺物ID178）内付着物）……21
４－３－６　X線回折図（甕（遺物ID7911）内付着物）……21
４－３－７　樹種同定結果……22
４－３－８　成分分析結果……22
４－４－１　品位分析結果……26

図版目次

遺構図

1　土層断面・石垣位置図……39
2　土層断面図（1）ａ・ｂ区北壁・ｂ区南壁……40
3　土層断面図（2）ｂ区東壁・ｂ区西壁……41
4　ａ区遺構配置図……42
5　ａ区１号石垣……43
6　ａ区２・６号石垣……44
7　ａ区１号道路……45
8　ａ区２・３・５号石列・１号埋甕……46
9　ｂ区第1面焼土層……47
10　ｂ区第2面遺構配置図……48
11　ｂ区３・４号石垣……49
12　ｂ区５号石垣・４号石列……50
13　ｂ区１～３号集石・1号土器集中区……51
14　１号土器集中区遺物分布図（1）……52
15　１号土器集中区遺物分布図（2）磁器……53

16　１号土器集中区遺物分布図（3）磁器 ……54
17　１号土器集中区遺物分布図（4）磁器 ……55
18　１号土器集中区遺物分布図（5）陶器 ……56
19　１号土器集中区遺物分布図（6）陶器 ……57
20　１号土器集中区遺物分布図（7）陶器 ……58
21　１号土器集中区遺物分布図（8）陶器・土器・石製品・銭貨 ……59
22　遺物平面分布図（磁器・陶器・土器）……60
23　遺物平面分布図（その他の遺物）……61
24　遺物平面・垂直分布図（1）ａ区（磁器・陶器・土器）……62
25　遺物平面・垂直分布図（2）ａ区（その他の遺物）……63
26　遺物平面・垂直分布図（3）ｂ区（磁器・陶器・土器）……64
27　遺物平面・垂直分布図（4）ｂ区（その他の遺物）……65
28　遺物平面・垂直分布図（5）ａ区１号道路 ……66
29　遺物平面・垂直分布図（6）ａ区その他の遺構 ……67
30　遺物平面・垂直分布図（7）ｂ区遺物包含層 ……68
31　遺物平面・垂直分布図（8）ｂ区各調査壁面 ……69

遺物実測図

32　磁器　碗類（1）……70
33　磁器　碗類（2）……71
34　磁器　碗類（3）・皿類（1）……72
35　磁器　皿類（2）……73
36　磁器　皿類（3）・鉢類 ……74
37　磁器　瓶類・水注類・釜類・杓子類……75
38　磁器　蓋類　陶器　碗類（1）……76
39　陶器　碗類（2）・皿類（1）・器台類（1）……77
40　陶器　器台類（2）・鉢類（1）……78
41　陶器　鉢類（2）……79
42　陶器　鉢類（3）……80
43　陶器　鉢類（4）・壺類・瓶類（1）……81
44　陶器　瓶類（2）・水注類・鍋類・秉燭類・蓋類（1）……82
45　陶器　蓋類（2）　炻器　蓋類・水注類・瓶類・甕類　土器　皿類 ……83
46　土器　蓋類・鉢類（1）……84
47　土器　鉢類（2）・鍋類　陶器　甕類 ……85
48　土製品　石製品（1）……86
49　石製品（2）……87
50　銭貨……88
51　金属製品　骨角製品　プラスチック製品……89
52　ガラス製品……90
53　熱を受けた陶磁器（1）……91
54　熱を受けた陶磁器（2）……92

遺構写真

55　１号石垣……93
56　２号石垣……94
57　３号石垣……95
58　４号石垣……96
59　５号石垣……97
60　６号石垣……98
61　１号石列……99
62　２号石列……100
63　３号石列……101
64　４号石列……102

65　５号石列…… 103
66　１号集石…… 104
67　２号集石…… 105
68　３号集石…… 106
69　１号埋甕…… 107
70　１号土器集中区…… 108
71　１号道路…… 109
72　１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区…… 110
73　１号廃棄…… 111
74　ａ区検出遺構…… 112
75　ｂ区検出遺構…… 113
76　調査前後・空撮風景…… 114
77　ａ区土層断面…… 115
78　ｂ区焼土層断面…… 116
79　ｂ区焼土層遺物検出状況…… 117
80　オルソ画像：ｂ区東壁・西壁…… 118
81　オルソ画像：ｂ区南壁・北壁…… 119
82　オルソ画像：１号埋甕・２号石垣…… 120
83　オルソ画像：３号石垣・５号石垣（1）…… 121
84　オルソ画像：４号石垣・５号石垣（2）…… 122
85　オルソ画像：６号石垣…… 123
86　オルソ画像：３号石列・５号石列…… 124

遺物写真

87　磁器　碗類（1）…… 125
88　磁器　碗類（2）…… 126
89　磁器　碗類（3）・皿類（1）…… 127
90　磁器　皿類（2）…… 128
91　磁器　皿類（3）・鉢類・瓶類（1）…… 129
92　磁器　瓶類（2）・壺類・水注類・釜類・杓子類・蓋類…… 130
　　陶器　碗類（1）……
93　陶器　碗類（2）…… 131
94　陶器　碗類（3）・皿類・鉢類（1）…… 132
95　陶器　鉢類（2）…… 133
96　陶器　鉢類（3）・壺類・瓶類・水注類（1）…… 134
97　陶器　水注類（2）・鍋類・秉燭類・蓋類
　　炻器　蓋類・水注類（1）…… 135
98　炻器　水注類（2）・瓶類・甕類　土器　皿類・蓋類・鉢類・鍋類・甕　土製品（1）…… 136
99　土製品（2）　石製品（1）…… 137
100　石製品（2）　銭貨（1）…… 138
101　銭貨（2）…… 139
102　銭貨（3）　金属製品（1）…… 140
103　金属製品（2）　プラスチック製品　ガラス製品…… 141
104　動物遺体…… 142
105　花粉化石・植物珪酸体…… 143
106　炭化材…… 144
107　土壁・鉄滓外観写真及び断面組織…… 145
108　蛍光Ｘ線スペクトル分析部位画像…… 146
109　走査型電子顕微鏡画像…… 147
110　見込文様・銘款等（1）…… 148
111　見込文様・銘款等（2）…… 149
112　見込文様・銘款等（3）…… 150

第１章 調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

国土交通省では一般国道52号線の渋滞緩和のため南アルプス市（旧八田村）の双田橋から鰍沢町までの区間のバイパス道路である甲西道路の建設を進めてきた。本路線建設予定地の南端部分が周知の埋蔵文化財包蔵地である「鰍沢河岸跡」にあたるため、山梨県教育委員会学術文化財課と国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所とで協議･調整を図り、事前に試掘調査を行い、その結果に基づき発掘調査を実施していくととなった。

試掘調査は、平成10年度から用地買収や建物撤去等が終了した箇所から順次実施し、その結果に基づき平成12年度から平成19年度にかけて国土交通省から委託を受け、山梨県教育委員会が埋蔵文化財センターを実施機関として発掘調査を進めてきた。

今回報告する調査地区は、当初古絵図等の資料から松本藩米蔵の存在が予想され、「松本藩米蔵跡」と呼称したが、平成17・18年度の調査によって別地点であることが確認されたことから、調査地点の大字をとって「横町地区」の名称とすることとした。また、「鰍沢河岸跡C」の名称でも呼ぶ場合もある（凡例「発掘区」）。

横町地区（鰍沢河岸跡Ｃ）の発掘調査は、東川を渡る橋脚部分および橋脚工事により閉鎖となる町道の付け替え工事に伴う事前調査であり、平成16年12月21・22日の試掘調査で石垣等の遺構の存在が確認されたことから（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第225集『山梨県内分布調査報告書（平成16年度）』）、平成17年度から開始し、今回報告する平成19年度が最終年度となる。

今回の発掘調査に関わる文化財保護法に基づく手続きは、次のとおりである。

◆平成19年5月11日 付け教埋文第85号、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の　　着手報告を山梨県教育委員会教育長に提出。

◆平成19年８月16日付け教埋文第85号－２、文化財保護法第100条第２項の規定により埋蔵文化財の発見通知を鰍沢警察署長に提出。

なお、鰍沢河岸跡における甲西道路建設事業をはじめ白子明神地区護岸事業及び宅地水防災事業に伴う事前調査により当センターにおいて刊行された報告書は、次のとおりである。

◎山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集（1998）『鰍沢河岸跡　明神白子地区埋蔵文化財発掘調査』

◎山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集（2005）『鰍沢河岸跡Ⅱ　白子明神地区宅地水防災事業に伴う発掘調査報告』

◎山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第235集（2006）『鰍沢河岸跡Ⅲ　一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う発掘調査報告書』

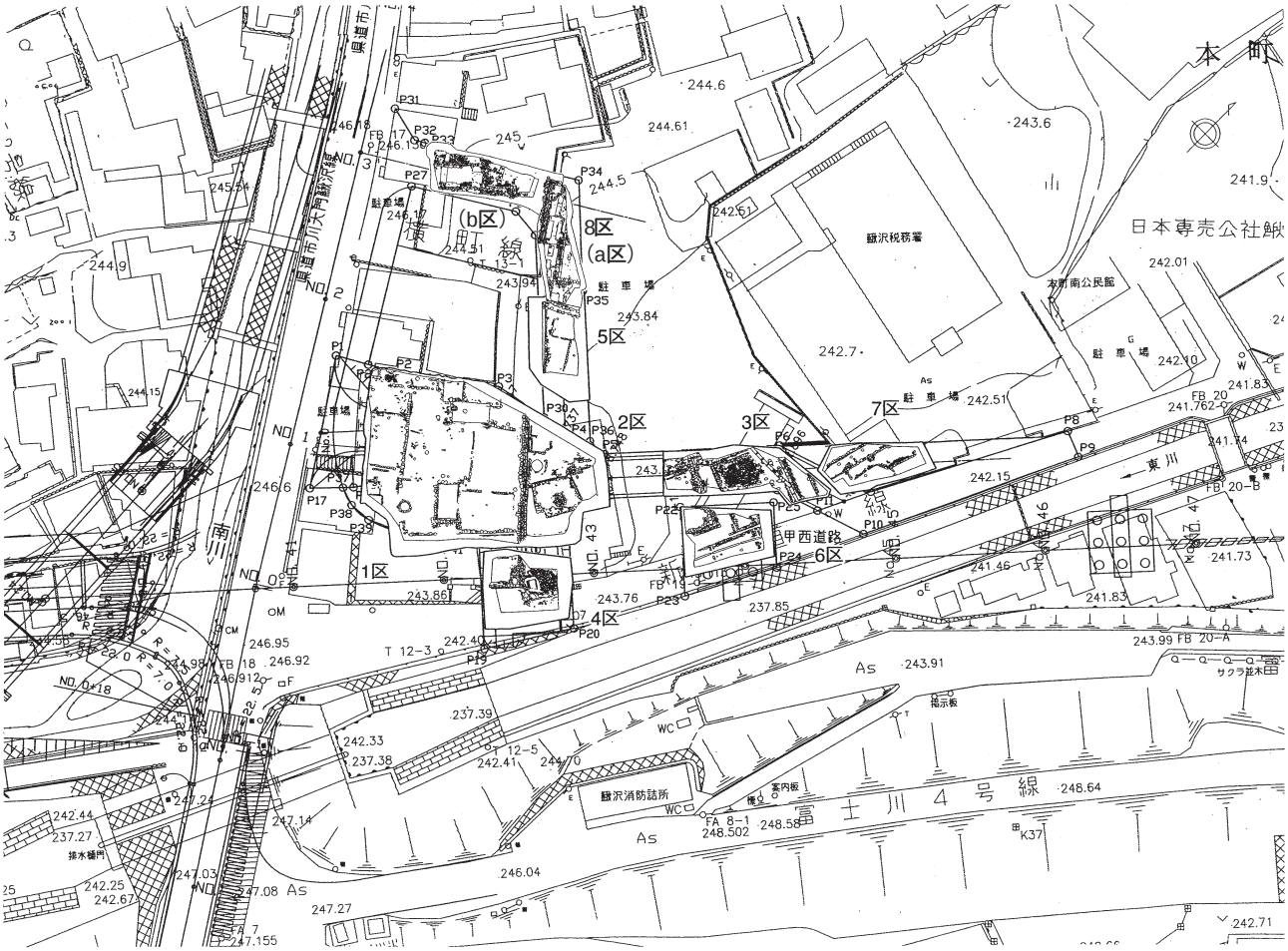
◎山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第238集（2006）『鰍沢河岸跡Ⅳ　一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う鰍沢口留番所地区発掘調査報告書』

◎山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第245集（2007）『鰍沢河岸跡Ⅴ　一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う横町地区発掘調査報告書』

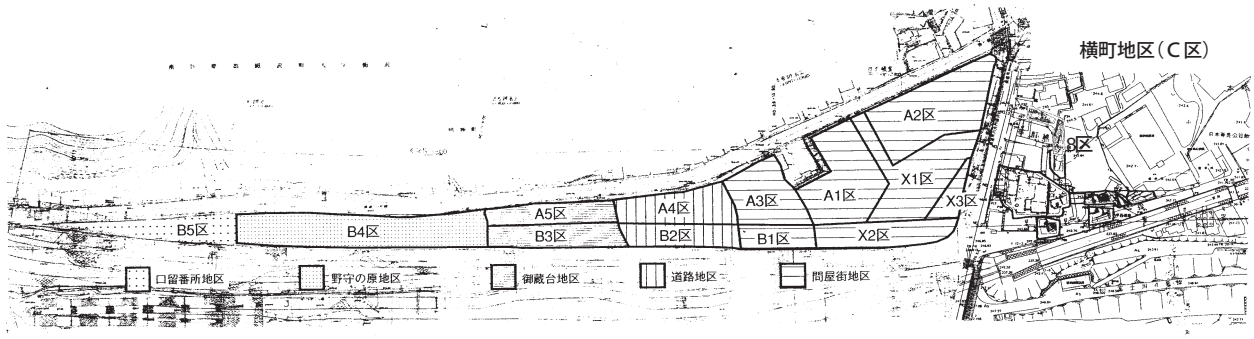
第２節　調査の方法と経過

１．調査期間

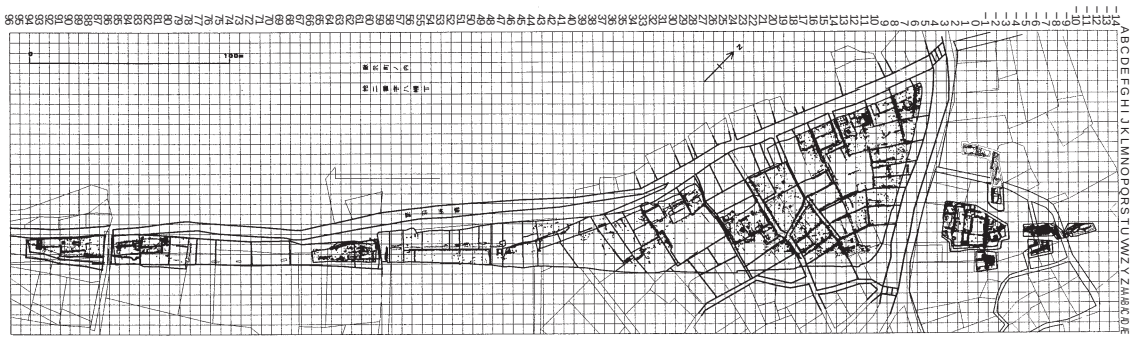
発掘調査は、平成19年５月28日から開始し、平成19年８月３日に終了した。表土剥ぎ作業を５月28日～30日、遺構確認・精査作業を６月１日～８月１日、埋め戻し作業を８月２・３日に実施した。



1－2－1　調査区位置図



1－2－2　発掘区設定図



1－2－3　グリッド設定図

２．発掘区の設定

発掘調査範囲を図１‐２‐２に示した。宅地水防災事業範囲をＡ区、一般国道甲西道路建設事業範囲をＢ区、横町地区の一般国道甲西道路建設事業範囲をＣ区とした。Ｘ地区としたのは、調査開始段階で準備が整わずに調査予定とできなかった範囲である。今回の報告対象は、横町地区の甲西道路建設事業範囲に該当するＣ区における平成19年度に実施した調査範囲となる。

３．調査区の設定

鰍沢河岸跡C区の調査区は、図１‐２‐１に示した。甲西道路建設事業の優先順位に応じて、１区から８区を設定し、調査を進めた。１区から７区は、平成17・18年度に調査を終了し、平成19年度は８区の調査を実施した。８区については、図１‐２‐４に示したように石垣の配置が古い地割りに対応しているものがあることから、地籍図にしたがってさらに小区画（ａ区・ｂ区）に分割した。

４．調査面積

調査対象の単純面積は約170㎡であるが、埋没石垣をはじめとする遺構が2層確認されたため、延べ調査面積は約340㎡となる。

５．グリッドの設定

グリッドの設定は、図１‐２‐３に示したように平成12年度から継続する調査のグリッド割を使用した。グリッド起点の「Ａ‐０」を平面直角座標Ⅷ系原点（緯度：360000，経度1383000）からの距離（旧日本測地系）Ｘ＝51150m、Ｙ＝3550m（世界測地系に合致させるために改定された日本測地系2000による「Ａ‐０」の値は、Ｘ＝－50797.3376m、Ｙ＝－3832.0713mである）として、反時計回りの回転角315度を鰍沢グリッドの軸として５m四方の区画を一つとするグリッドを設定した。

グリッドの名称も同じく平成12年度から継続し、南東方向には５メートルごとにアルファベット大文字のＡから割り当て、南西方向には数字で０から割り当てを行なった。また、北東方向の数字の割り当てついては、平成17・18年度の設定を継承し、０から－１、－２とマイナス表記とした。グリッドの名称は、各グリッドの北隅の交点の内側に表記した。

６．遺物出土位置の測量記録

遺物出土位置の記録は、光波測距儀と小型コンピュータによる測量システムを導入したが、表層部（埋土）の遺物については一括遺物としてまとめて取り上げた。測量システムによる遺物の取上げは、各遺構ごとに通し番号を付し、管理した。

７．遺構の測量

一部の平坦な地点では、平板測量を行なったが、主には調査担当者のデジタル写真撮影による写真計測データを基に外部委託による図面化を行ない、短期間における２層にわたる各遺構面での調査への対応を図った。また、一部の石垣立面図や調査終了段階の遺構平面図についてはラジコン・ヘリコプターによる写真測量を採用した。

第３節　整理の方法と経過

１．整理期間

整理作業は、平成19年８月６日から平成20年３月31日にかけて実施した。

２．遺物の整理

出土遺物については、プラスチック・コンテナ約25箱あり、水洗・注記の後に、種別ごとに分類して接合作業を実施した。報告する遺物の抽出は、陶磁器や土器については、全体の1/3以上で、口縁部から底部まで残存し、

全体の復元実測が可能なもの、また部分的であっても時期や産地などが特徴的なもの、出土点数が少なく希少なものなどを対象とした。土製品、金属製品、石製品については、形の明瞭なものについて抽出したが、泥めんこ・煙管・銭貨は、すべて掲載した。

調査現場での光波による遺物取上げは、各遺構ごとに通し番号を付したが、整理段階で1番から連続番号を注記し、「注記ID」として遺物観察表に記載した（各遺構ごとの通し番号は抹消せず、「光波ID」として遺物台帳に記載し、発掘調査段階の記録類との照合作業を行なえるようにした）。また、本報告書に掲載した出土遺物に対しては、一連の通し番号「遺物ID」を付し、出土遺物の実測図（PL-32～52）及び遺物観察表に記載した。

３．遺構図の整理

写真測量から図化した図面に対して、平板測量図面、光波測量図面、デジタル写真計測図面を合成追記して遺構平面図・立面図・断面図等を作成した。測量システムにより取上げた遺物については、平面および垂直分布図を作成し、遺構との関連性を分析した。

（保坂　和博）

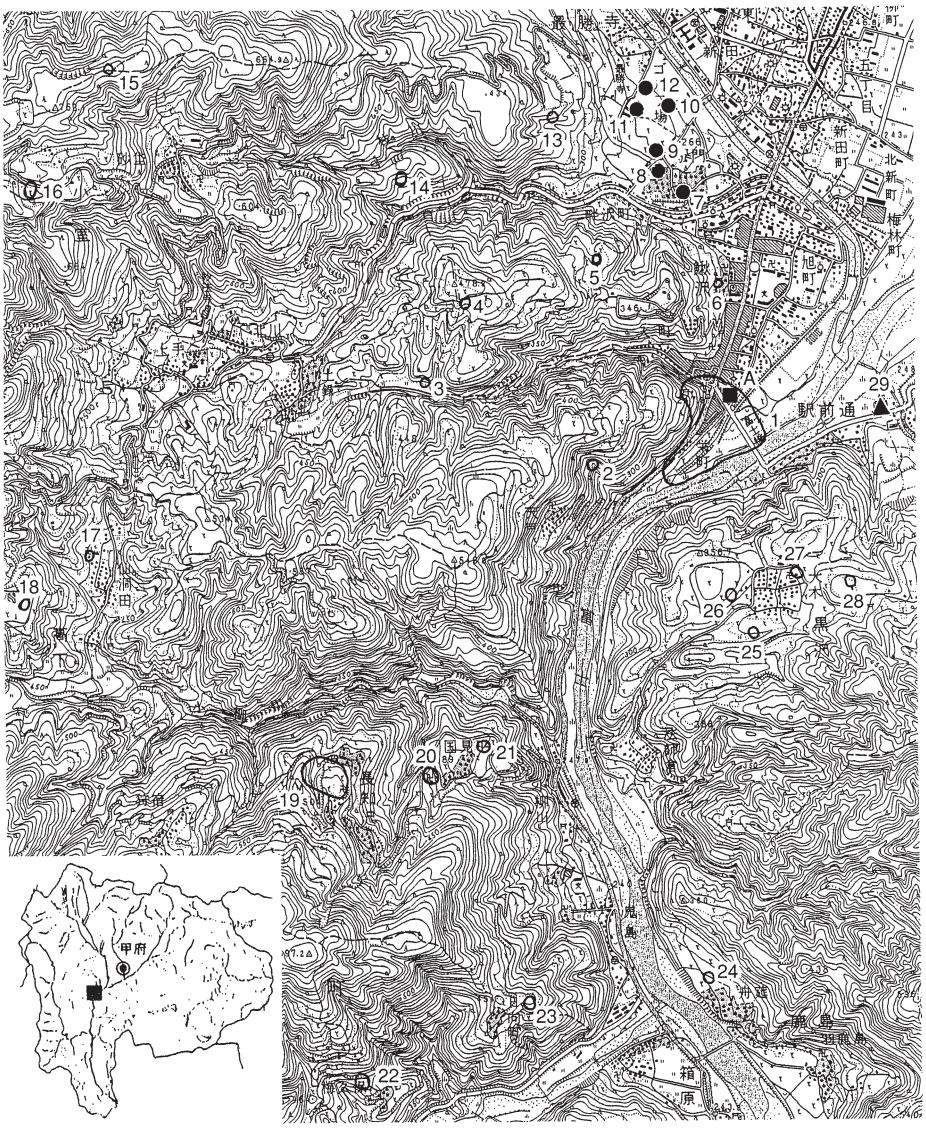
1－2－4　旧地籍図と発掘調査区（S＝1/800）

第２章 鰍沢河岸跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

１．鰍沢町の地形的特徴

鰍沢町は甲府盆地の最南端、甲府市から約16㎞に位置しており、日本三大急流のひとつである富士川の流れが釜無川、笛吹川等を合してここから本流となっている。町の広さは東西10.3㎞、南北8.3㎞で面積47.7㎢である。町は西から東に傾斜し、西部には明石山系に属する御殿山、源氏山、八町山等がせまり地形は急峻である。北東部は富士川沖積地氾濫原地帯で、平坦な地形に商店・官公署・病院・住宅等が集中して市街地をつくり、これに対して東部富士川沿いや南部の大柳川山間流域には、帯状の平坦地が点在してここに農山村集落が形成されている。



A　鰍沢河岸跡横町地区
（H19調査地区）
1　鰍沢河岸跡(近世～近代)
2　天戸瓦窯跡（近世）
3　小室下土録遺跡（古墳）
4　大法師Ｂ遺跡（古墳・中世・近世）
5　大法師Ａ遺跡（中世・近世）
6　大井氏屋敷（中世）
7　最勝寺馬門古墳（古墳）
8　大塚古墳（古墳）
9　無名塚１号墳（古墳）
10　塚穴遺跡（古墳）
11　無名塚２号墳（古墳）
12　鎌塚古墳（古墳）
13　最勝寺大堀田遺跡
（縄文・弥生・古墳）
14　最勝寺砦跡（中世）
15　菖蒲池遺跡（縄文・弥生・古墳）
16　小室桧平遺跡（縄文・弥生・古墳）
17　仙洞田氏屋敷
18　下高下遺跡（縄文・弥生）
19　日向遺跡（縄文・平安・中世）
20　植村遺跡（平安・中世）
21　国見平遺跡（縄文・平安・中世）
22　細久保遺跡（中世・近世）
23　日向町遺跡（近世）
24　舟筵遺跡（縄文・平安・中世・近世）
25　家ノ前遺跡（縄文）
26　寺ノ前遺跡（縄文・平安）
27　大木氏屋敷
28　宮ノ前遺跡（旧石器・縄文）
29　黒沢河岸跡

２－２－１　周辺の遺跡分布図

２．鰍沢河岸跡の位置

鰍沢河岸跡は山梨県南巨摩郡鰍沢町字中坂から明神・白子・横町の各地区の範囲で、国道52号線に沿って南北550ｍの長さがあり、東西方向は富士橋の橋脚下付近までの220ｍの幅をもつ。今回の調査区は富士川の右岸に位置するが、本遺跡の前面の流れは、甲府盆地内すべての河川の水を集めたものであり、従って本遺跡が位置

するのは大変水害に見舞われやすい場所である。

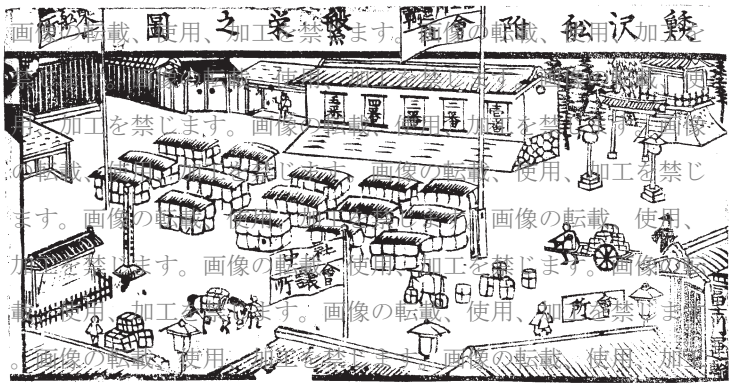
第２節　歴史的環境

１．鰍沢河岸周辺の遺跡

鰍沢河岸跡は富士川に落ちる山地斜面上と、山地を出て富士川に注ぐ南川（みながわ）の小扇状地上に立地する。鰍沢町内の山間部には縄文時代の小規模な遺跡が点々と存在し、対岸の台地上には縄文中期の集落宮ノ前遺跡（図２－２－１-28）が存在する。町境に近い増穂町馬門や最勝寺には古墳も数基知られており（図２－２－１－７）、農耕社会の定着・発展が古墳時代前期にさかのぼることを物語っている。

２．鰍沢河岸の繁栄

鰍沢河岸跡は角倉了以によって慶長19年（1614年）までに開削された富士川舟運の川の港である。舟運の目的の一つは年貢米を甲州から江戸まで運搬することにあった。そのため年貢米を集積する「御米蔵」が鰍沢に設置され、甲斐国の運輸・経済に大きな役割を果たした。「御米蔵」は増穂町の青柳河岸や市川三郷町の黒沢河岸にも置かれて「三河岸」と呼ばれ、鰍沢は陸路の宿駅としても整備され交通の要衛として大いに繁栄した。



２－２－２　鰍沢舩附繁栄の図（『商法便覧』山梨県立図書館蔵）

西　暦	元　号	出　来　事	主な水害
1607	12	角倉了似、川筋改修。通船開始。	
1613	18	角倉玄之再工事	
1632	寛永　9	御廻米の開始	
1638	15	青柳河岸に米蔵建造	
1673	延宝元年	諏訪藩の米蔵、鰍沢河岸に設置	
1680	8		御蔵台移転
1689	元禄　2		７月満水
1719	享保　4		御蔵台移転
1728	13		３回満水
1757	宝歴　7	天神ヶ滝の工事	
1765	明和　2	市川代官所が置かれ、甲府、石和、市川の三代官所支配となる	
1790	寛政　2		御蔵内水湛
1799	11		御蔵地形二尺上げ
1802	享和　2		御蔵内湛水二尺上げ
1843	天保　14	河原部村（現韮崎市）に新河岸場取立許可	
1872	明治　5	三河岸～岩淵間の運賃、三河岸で取り決め	
1874	7	富士川運輸会社設立認可	
1875	8	〃　　設立（2月1日）	
	〃	富士川通船規則（富士川沿巨摩郡、八代郡）	
1878	11	富士川運輸会社から青柳運輸会社独立	
	〃	回漕分会社創立	
1881	14	富士川拡張会社創立	
1884	17	陸運会社（内国通運会社鰍沢代理店、中島分会社など）設立	運輸会社小屋流失
1886	19	この頃、帆かけ舟が現れる	
1889	22	東海道線開通	
1898	31		会社蔵四尺浸水
1903	36	中央線、甲府～八王子間開通	
1915	大正　4	富士身延鉄道、富士～芝川間開通	
1920	9	〃　　身延まで延長	
1923	12	身延乗合自動車、鰍沢～身延　飛行艇、鰍沢～身延	
	〃	富士川運輸会社解散	
1928	昭和　3	富士身延鉄道、全線開通	

２－２－３　富士川水運に関わる年表

３．調査区の歴史

今回調査を行った区域について戦後に限って言及すると、鰍沢町が所有していた地域と現在もその場所に在住されている牧野雅史さんの父祖が所有していた地域とに大きく二つに分けることができる。本調査区からは石垣と建物の礎石が確認されたが、石垣は牧野さん所有地の外周に巡らされていたものであり、当時その土地で生活していた牧野雅史さんの証言によって、昭和30年代半ばまでそこに石垣が存在していたことが確認された。また建物の礎石についても同じく牧野さんの証言によって、昭和30年代半ばまでそこに木造平屋建ての家屋が数棟建っていたことがわかった。しかしその後昭和36年に土地の所有権が鰍沢町から山梨交通株式会社に移転し、その間に何らかのかたちで建物が取り壊され、土地が造成されて現在に至っている。

４．鰍沢河岸と水害・火災

山梨県は古来より風水害の多い県として知られているが、その一番の原因は毎年決まって本土を襲来する台風であり、本県の場合はそれに急峻な地勢と脆弱な地質という悪条件が加わるのである。県下の河川は大小180余

りあるが、多くは標高1,000m以上の山岳に源を発し一挙に流下するため、出水時には激流となることが多く水禍をもたらす。

本調査区の土壌の堆積や遺物の分布状況を分析してみると、そこには度重なる水害の影響が見られる。従って、ここでは特に本調査区の土層断面理解のために必要と考えられる、江戸時代以降の水害の記録を『鰍沢町誌』から拾ってみた。また、水害ではないものの本調査区の土層を理解するために重要と考えられる文政大火（1821年）についても併せて記録を拾ってみた。

元禄２（1689）年　洪水のため御米蔵流出

享保13（1728）年　富士川大満水

延享４（1747）年　富士川大満水

宝暦７（1757）年　富士川大満水

寛政２（1790）年　富士川大満水。以来富士川底が年々高くなった、鰍沢河岸御米蔵まで水つきとなって商人塩荷物など大損害を受ける。

文政４（1821）年　１月16日夜に起こった鰍沢文政大火（以下「文政大火」と略す）は、甲府代官所支配下の村々の年貢米を納めた御米蔵や御詰所を含む御蔵台すべてと民家77軒を焼失させた。この文政大火によって焼失した米の弁済は年貢を納めた甲府代官所支配下の村々の郡中（百姓の組合）に求められ、一方鰍沢村側では中心的施設である御米蔵と河岸問屋街の中心部を失い、御蔵台の再建をめぐっては約１年間にわたって紛糾し、江戸の勘定奉行所の裁定を受けるまでになっている。なお文政大火にまつわる一連の出来事は『原田家文書（鰍沢町指定文化財）』の中に詳細に残されており、当時の人々の生々しい行動をたどることができる。

文政11（1828）年　富士川洪水、鰍沢地内浸水家屋180戸、床上２尺に及び下流れ30尺の増水にて松村雁堤の備前堤決壊、10数ヶ村に浸水あり。

安政2（1855）年　５月30日富士川洪水、下流岩松村松岡水神下堤防決壊東部11ヶ所浸水。

安政4（1857）年　５月17日より大雨あり、28日富士川出水、青柳村八幡下字外河原３町歩余決地。

慶応3（1867）年　８月富士川洪水、鰍沢地内浸水数200戸以上、床上浸水は文政11年の際より１尺以上高かりしという。

明治31（1898）年　９月５日から７日まで３日間豪雨、瀧の如く河川悉く氾濫し、山岳の崩壊甚だしく北巨摩郡下もっとも被害大、中巨摩東八代これに次ぐ、死者150、流失家屋450戸、田畑流失1200町歩、侍従差遣さる。

明治40（1907）年　８月22日から５日間に亘って豪雨が続き、25日に発生した大水害全県におよぶ、特に日川・重川・御手洗川流域せい惨を極め日川村、一宮村一帯は見渡す限り巨石累々たる河原と化す。死者232人、負傷189人、家屋の流失破損11,942戸、堤防決壊98,961箇所、道路流失1,686箇所、橋梁流失1,686箇所、田畑の流失3,616町歩。

明治43（1910）年　８月９日から10日にかけて県下に大洪水が起き、特に荒川、塩川の氾濫が大きく、甲府市をはじめ盆地の南部一帯の被害甚大。
御岳川の氾濫による土砂崩壊で警備中の宮本駐在北島長吉巡査殉職。

昭和34（1959）年　８月14日早朝、山梨県下を襲った第７号台風は、前日来の豪雨をかちあい、最大雨量600㎜瞬間風速48mという記録的な猛威を振い、樹齢百年余の大木を根こそぎへし折り、家をなぎ倒し、堤防を決潰させて、住家、耕地を押し流し、果樹をもみ落とすなど、見るもの聞くものをして震えあがらせ、瞬時にして、死者53名、行方不明36名、重軽傷者1,796人、流失家屋333戸、全壊1,396戸、半壊3,895戸、罹災者7,601世帯、34,751人、橋梁流失547箇所、田畑の流失3,789haにのぼる、まことに本県史上希有の惨状を呈するに至り

ました。

昭和34（1959）年　近畿地方から中部地方を襲った台風１５号を伊勢湾台風と呼んでいる。山梨県では９月26日を中心に県下各地に大災害がもたらされたが、特に釜無川富士川沿岸を中心に被害は大きかった。被害状況であるが、被害世帯は7,168世帯に及び、床上床下浸水の世帯は8,551世帯にものぼった。南巨摩郡下では30戸の住家流失が記録されており全県下52戸の大半を占め、この数字からして水害の大きさを知ることができる。死者は全県下で15人に及び鰍沢町内でも死者を出すなど被害は甚大であった。

江戸時代の大きな水害としては寛政２（1790）年、文政11（1828）年と慶応３（1867）年があり、とりわけ慶応３年の水害は被害が大きかったようである。また明治年間は毎年のように満水が記録され水害も多発しているが、大正に入るとめっきり減少する。昭和に入ってからの水害は何といっても昭和34年の２度の洪水が大きな爪痕を残している。被害の大小に関わらず、本調査地点の土層の解釈にこれらの災害年代を考慮に入れる必要がある。

（堀込紀行）

引用文献

鰍沢町誌編纂委員会（1996）『鰍沢町誌』上巻
鰍沢町誌編纂委員会（1996）『鰍沢町誌』下巻
山梨県総務部広報課（1962）『昭和三十四年災害誌』
山梨県県民室（1973）『昭和四十一年災害誌』
甲府地方気象台（1970）『山梨県の気象』
山梨県教育センター（1985）『河内路・西郡路』，山梨県歴史の道調査報告書第７集
山梨県教育委員会（1988）『東河内路』，山梨県歴史の道調査報告書第16集
山梨県埋蔵文化財センター（1998）『鰍沢河岸跡』，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集
山梨県埋蔵文化財センター（2005）『鰍沢河岸跡』Ⅱ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集
山梨県埋蔵文化財センター（2006）『鰍沢河岸跡』Ⅲ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第235集
山梨県埋蔵文化財センター（2006）『鰍沢河岸跡』Ⅳ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第238集
山梨県埋蔵文化財センター（2007）『鰍沢河岸跡』Ⅴ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第245集

第３章 検出した遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

鰍沢河岸跡は、江戸時代はじめに京都の豪商角倉了以による富士川の開削によって開かれた富士川水運の船着場を中心とする遺跡であり、青柳河岸（増穂町）、黒沢河岸（市川三郷町）とともに「甲州三河岸」と呼ばれていた。鰍沢河岸には、江戸幕府の直轄領である甲府盆地一円の年貢米を江戸へ廻送するため、廻米を集積する米蔵が幕府により設定され、また、陸上交通路の駿州往還の拠点である宿駅も設置されたことから、陸路、水路の両方の要衝として繁栄を極めた。昭和3（1928）年の富士身延鉄道（現在のJR身延線）全線開通により舟運の役目を終えるまで甲府盆地の経済・文化の玄関口としての役割を担ってきた。

これまでの鰍沢河岸跡の発掘調査の成果としては、鰍沢河岸の中核をなす年貢米を集積した御米蔵跡をはじめ年貢米の荷積み台跡、御役人のための御詰所跡、駿州街道から御米蔵跡に至る道路跡、船宿などの商家が集中した河岸問屋街や江戸時代から明治時代にかけての大規模な土地造成の痕跡や建物跡、石垣、石列などが重層的に発見されており、大いに発展した状況が確認されている。

＜遺構＞

今回の調査で検出した遺構は、近世から昭和30年代半ばに所属するもので、総数21基である（表3-1-1）。遺構の検出状況は、石垣SG1を境界とするａ区とｂ区において様相が異なる。ａ区では、３面の遺構面が発見され、現地表下約２ｍの深さから道路SF1など、昭和30年代半ばの造成により埋没した1面の遺構群を確認したが、ｂ区では２面の遺構面が発見され、現地表下約２ｍの深さから１面となる江戸時代後半の焼土層（52層）を検出した。

＜遺物＞

今回の調査で出土した遺物は、近世から昭和に帰属し、総破片数2,089点、総重量141,528ｇ（昭和30年代半ばの廃棄資料（HS1）を除く）である（表3-1-2）。遺物総破片数のうち、磁器・陶器・土器の破片数は、1,258点で、昭和30年代半ば廃絶の建物跡に伴う瓦の破片数489点を除いた総数1,600点の中では、78％となり主体的である。これらの製作年代は17世紀後半代から20世紀中葉まで幅広い年代幅を持つが、主体的な時期としては17世紀後半から18世紀後半となる。

3-1-1　検出遺構一覧

遺構種類（記号）	石垣（SG）	石列（SR）	集石（SS）	埋甕（UK）	土器集中区（DS）	道路（SF）	建物跡（SB）	礎石（SO）	瓦集中（KS）	廃棄帯（HS）	合計
遺構数	6	5	3	1	1	1	1	1	1	1	21

3-1-2　検出遺物集計

遺構	磁器	陶器・_器	土器	土製品	瓦	石製品	金属製品	骨角製品	ガラス製品	合計
総破片数	672	522	64	10	489	27	167	2	136	2089
総重量（ｇ）	10468.59	33590.143	5144.53	112.6	80894.2	7639.4	2236.58	1.3	1440.6	141527.943

第２節　基本層序

今回の調査地点（鰍沢河岸跡C区）における土層堆積は、これまでに報告されてきた他の調査区（鰍沢河岸跡A・B・X区）同様に洪水堆積層と人為的な盛土層に特徴付けられる。洪水堆積層は、甲府盆地の二大河川である笛吹川と釜無川の合流点のすぐ下流にあること、また巨摩山地から発する南川・東川・戸川が本遺跡のすぐ近くで富士川に合流しており、さらに下流約1kmに狭窄部である兎の瀬をもつことなどによりもたらされたものである。また、人為的な盛土層は、頻繁に訪れる洪水に対応して、家屋を建て替える際などに敷地の地盤を嵩上げするた

1
0
97
96
95
L
M
N
O
P
Q
R
b区
a区
X=51178.284
X=51181.820
X=51185.355
X=51188.891
X=51192.426
X=51195.962
X=51199.498
Y=3493.432
Y=3489.896
Y=3486.360
Y=3482.825

3-1-3　検出遺構全体図

めに盛土を行なったものであり、大半は石垣で保護されている。
各調査区における土層の堆積状況は、次のとおりである。

1．ａ区の土層堆積

ａ区の土層堆積として26層（1～26層）に分層し、標準的な土層堆積状況は次のとおりである。

ａ．北壁土層断面「PL-2　土層断面図（1）北壁・南壁」（PL-77）

「ａ区北壁土層」では、表土から第１遺構面（昭和30年代半ば廃絶遺構）まで厚さ約1.6ｍを10層に分層し、遺構面直上に厚さ1.2ｍの造成に伴う盛土（9・10層）を確認した。

ｂ．2号石垣土層断面「PL-6　ａ区2・6号石垣」（PL-82）

ａ区北壁盛土（9・10層）の下層よりさらにコンクリート類が検出された盛土11層および１号道路整地層12層を確認した。

ｃ．1号道路土層断面「PL-7　ａ区1号道路」（PL-77）

1号道路面より下層に堆積する13～26層を確認した。13～14層は１号道路整地層、15～19層は自然堆積層、20～23層は第2遺構面で検出した6号石垣整地層と考えられる。

ｂ区との共通に確認される土層は、21層以下となる。

各層の遺物出土状況は、「PL-28　遺物平面･垂直分布図（5）ａ区１号道路」および「図4-1-4」に示したように、１号道路整地層からは1870年代以降、6号石垣整地層からは1680年代以降の遺物が確認されている。

2．ｂ区の土層堆積

ｂ区の土層堆積として48層（13～57層、a～c層）に分層し、標準的な土層堆積状況は次のとおりである。

ａ．東壁および西壁土層断面「PL-3　土層断面図（2）東壁・西壁」（PL-80）

「ｂ区東壁･西壁土層断面」では、28、32、39、42、46層などをはじめ、度重なる洪水堆積層が確認されている。

ｂ．北壁・南壁土層断面「PL-2　土層断面図（1）北・南壁」（PL-81）

「ｂ区北壁土層断面」では、ｂ区の洪水堆積層を切って１号石垣が構築された状況が確認されている。

「ｂ区南壁土層断面」では、県道整備に伴うa～c層にわたる攪乱の堆積状況が確認されている。

ｃ．第1面焼土層「PL-9　ｂ区第1面焼土層」（PL-78）

第１遺構面を構成する焼土層（52層）以下、57層までの堆積状況が確認されている。

ｂ区各調査壁面における遺物出土状況は、「PL-31　遺物平面・垂直分布図（8）ｂ区各調査壁面」および「図4-1-7」に示したように39、42層を中心に1680年以降の遺物が確認されている。

第１面焼土層以下の各層（52～57層）における遺物出土状況は、「PL-30　遺物平面・垂直分布図（7）ｂ区遺物包含層」および「図4-1-6」に示したように、52～54、56層から1680～1780年代までの遺物が層位的に確認されている。

第３節　遺構

検出遺構は、ａ区およびｂ区において近世から昭和に所属する石垣6面、石列5基、集石3基、埋甕1基、土器集中区1基、道路1、建物跡1棟、礎石1基、瓦集中区1基、廃棄帯1基の総数21基が確認された。

各遺構の概要は、遺構一覧表（表3-3-4、表3-1-5）に掲載した。

（保坂和博）

3-1-4　検出遺構一覧表（１）

地区		遺構面		遺構名	位置	形状	遺物	時期	性格	図版No.
a	a区では、主な時代の遺構面が3面確認され、1面に石垣1面、石列2基、道路1、建物跡1棟、礎石1基、瓦集中区1基、廃棄帯1基、2面に石垣1面、石列1基、埋甕1基、3面に石垣1面を検出した。なお、2面および3面の遺構は、狭い調査区において現地表下から深さ2m以上におよび法面等の安全確保ができないため、トレンチ調査により確認されたものであり、この他に遺構が存在することが想定される。	1	現地表下約2mの深さから南東ー北西方向に通る道路SF1を検出し、この道路を挟んで道路南側の石垣SG1、石列SR2と北側の建物跡SB1、礎石SO1、石列SR1、瓦集中区KS1が対面する形で確認された。また、N-(-2)GとO-(-2)G内の道路面直上に廃棄帯HS1が確認された。	道路SF1	M-(-2)G、N-(-2)G、O-(-2)Gに位置する。 SF1の両側縁に沿う形で石垣SG1、石列SR2およびSR1が確認された。	南東ー北西方向に通り、長さ12m、幅1.7mを測る。南東端はSR3に切られ、北西端は調査区外へ延びている。道路面は、直下で確認された石垣SG6に伴う盛土層(9層以下)をベースに8層積み重ね、厚さ50cmの版築層を形成している。	「図4-1-4」参照。	明治前半の地籍図(図1-2-4)の地割線軸にー致している。 昭和30年代半ば頃廃絶。	昭和30年代半ばまで道路として使用されていたことが、聞き取り調査で明らかにされている(「第2章第2節3.調査区の歴史」参照)。	PL-7,71
				石垣SG1	M-(-2)G、N-(-2)Gに位置し、a区とb区の境界をなし、北面する。	道路SF1に沿う形で南東ー北西方向で長さ8m、天端は破壊されているがトレンチ部分の最大高1.9mを測る。両方向はさらに調査区外へ延び、南東方向へは平成19年度に実施した鰍沢町教育委員会の調査地区にも連続している。 石積み法は、谷積みであり、使用石材は、非加工の亜角礫～亜円礫で、平坦な面を表面に出して、平坦面を構成するように積まれている。	「図4-1-5」参照。	明治前半の地籍図(図1-2-4)の地割線軸と並行する。 昭和30年代半ば頃廃絶。	土地の区画であり、SF1同様に昭和30年代半ばまでの使用が明らかである。 石垣上段部はその後まもなく行なわれた造成時に破壊された状況が北西側の石垣前面の造成土内に転落した構築石材により確認された(PL-73ー88・90)。	PL-5,55
				石列SR1	N-(-2)G、O-(-2)Gに位置する。	建物跡SB1に伴う礎石SO1と幅30cm程の間隔を空け並列し、その間に瓦を充填した瓦集中区KS1を形成している。自然石による1列1段で南東端はSO1南東コーナー部より始まり、北西端でL字状に屈曲し、長さ8mを測る。		昭和30年代半ば頃廃絶。	瓦集中区KS1と構成する建物跡SB1に伴う雨水施設を考えられる。	PL-4,55
				石列SR2	N-(-2)G、O-(-2)Gに位置する。	自然石による1列1段で道路SF1に面する石垣SG1の前面に並列し、石垣脇の側溝と考えられる。		昭和30年代半ば頃廃絶。	石垣SG1及び道路SF1に伴う施設(側溝)と考えられる。	PL-8,62
				石列SR3	O-(-3)Gに位置する。	石列SR1の南東方向への延長線上に位置し、自然石(径20～30cm大)を2列並列し、溝としての機能がある。	「図4-1-5」参照。	昭和30年代半ば頃廃絶。	建物跡SB1に伴う排水施設と考えられる。	PL-8,63
				建物跡SB1	N-(-2)G、N-(-3)G、O-(-2)G、O-(-3)Gに位置する。	L字状を呈する礎石SO1および石列SR1と瓦集中区KS1で構成されている。SO1に囲まれた内側の床面は、床下に炭化材をー面に敷き詰めている状況を検出した。	「図4-1-5」参照。	昭和30年代半ば頃廃絶。	石垣SG1同様に道路SF1に面して昭和30年代半ばまで使用されていた木造平屋建て家屋の1棟であることが、明らかにされている。	PL-4,72
				礎石SO1	N-(-2)G、N-(-3)G、O-(-2)G、O-(-3)Gに位置する。	建物跡SB1の礎石であり、調査区内ではL字状の平面形を呈し、さらに調査区外へ展開している。使用石材は、非加工の亜角礫～亜円礫の他、門扉の軸受け用の石(長さ約75cm、幅約30cm、厚さ約15cmで直径約8cm、深さ約2cmの円形の穴を持つ)などを転用している。		昭和30年代半ば頃廃絶。	昭和30年代半ばまで使用されていた木造平屋建て家屋の礎石である。	PL-4,72
				瓦集中区KS1	N-(-2)G、O-(-2)G、O-(-3)Gに位置する。	並列する石列SR1と礎石SO1の幅30cm程の間に瓦を充填している。N-(-2)Gに集中して検出されたが、礎石SO1に沿って建物跡の周りから出土している。		昭和30年代半ば頃廃絶。	石列SR1と構成する建物跡SB1に伴う雨水施設と考えられる。	PL-4,72
				廃棄帯HS1	N-(-2)G、O-(-2)Gに位置する。	a区1面の遺構面を覆う盛土10層(a区北壁基本土層)内に長軸4m、短軸1.5mの楕円形状の範囲を中心に牛乳瓶、化粧瓶、ビニール類、板ガラス、缶類などの生活雑貨の他、コンクリートブロックなどが確認された。	「図4-1-5」参照。	昭和30年代半ば頃廃棄。	昭和30年代半ばにおける本地点での造成に伴いー括廃棄されたものである。	PL-4,73
		2	1面で確認された道路SF1の25cm程(道路版築2層直下)下から石垣SG2、石列SR5、埋甕UK1を検出した。	石垣SG2	a区の北西端のM-(-2)Gに位置する。 石垣SG1に垂直に交差し、東面する。	2段1列で南西ー北東方向へ長さ1.3m、高さ50cmを測り、北東方向はさらに調査区外へ延びている。石積み法は、礫の長軸を水平にし、横目地が通る整層積みである。	「図4-1-5」参照。	Ⅲ期(1870～1890年代)段階の遺物が中心となる。	ー部のみの検出状況であるが、土地の区画をなすと考えられる。 石垣SG1との切り合い関係は、石垣SG1(旧)→石垣SG2(新)となる。	PL-6,56,82
				石列SR5	M-(-2)G、N-(-2)Gに位置し、石列SR2の20cm程下から検出された。	南東ー北西方向で長さ5mを計り、やや不明瞭な箇所もあるが、石垣SG1に面をなすように並列する。確認したエリアよりさらに両方向に延びるものと思われる。南東端には、埋甕UK1が埋設されている。	「図4-1-5」参照。 同じレベルで近接して擂鉢(ID128)、土瓶(ID151)、焜炉(ID176)が出土している。	Ⅲ期(1870～1890年代)段階の遺物が中心となる。	2面の遺構面から石垣SG1の基部に沿う形で検出され、石垣SG1に伴う排水施設と考えられる。	PL-8,65,86
				埋甕UK1	N-(-2)Gに位置する。	石列SR5の南東端で検出された。大甕の土器を埋設しており、口縁部～胴部上半部にかけて石列SR2の設置に伴う影響で破壊された状況であるが、土の詰まった土器内部の上面から破片が出土している。	「図4-1-5」参照。	Ⅲ期(1870～1890年代)段階の大甕が使用されている。	石列SR2に伴う水溜施設と考えられる。 埋設された大甕(ID178)の内部から魚類(サバ属)の歯骨(「第4章第2節厳沢河岸跡8区出土の動物遺体」参照)が出土している。	PL-8,69,82
		3	1面で確認された建物跡SB1の60cm程下からSG6を検出した。	石垣SG6	O-(-2)G、O-(-3)Gに位置する。	西ー北東方向に緩やかにカーブを描き、両方向へはさらに調査区外へ延びている。長さ約4m、天端は削平されているが、最大高70cmを測る。遺存状態で3段検出されており、石積み法は、乱積みで、使用石材は、非加工の亜角礫～亜円礫を用い、平坦な面を表面に出して、平坦面を構成するように積まれている。南西部には、遺存状況は悪いが階段状の礫の配置が3段見られる。北西方向への広がりは不明確であるが、道路SF1の版築層(1～8層)の下層に見られる9層以下は、SG6の盛土層と推定される。	N-(-2)Gのトレンチによる調査で石垣SG1の基底部付近にあたるSG6の盛土層21層内から「元禄ー分判金」が発見されている。	整地層21層からは、Ⅰ期(1680～1780年代)段階以降の遺物が確認されている。	N-(-2)Gの2号トレンチによる調査で石垣SG1の基底部付近にあたるSG6の盛土層21層内から「元禄ー分判金」が発見されている。	PL-6,60,85

3-1-5　検出遺構一覧表（２）

地区		遺構面		遺構名	位置	形状	遺物	時期	性格	図版No.
b	b区では、主な時代の遺構面が2面確認され、1面に石垣1面、2面に石垣2面、石列1基、集石3基、土器集中区1基を検出した。 b区の各遺構面においては、南西から北東方向へ1mにおよぶ比高差（北東急傾斜面）が確認され、度重なる南川の洪水により形成されたものと思われる。b区の調査開始以前の状況は、高さ約1.5mの石垣により2段に分かれる形で宅地造成されていた。	1	南西から北東方向へ傾斜する形で現地表下約2mの深さから1面となる焼土層（52層）を検出した。この上面は、県道（南西）側から流れ込んだ南川による洪水堆積層に覆われ、いく筋にも抉られた状況を呈し、洪水の激しさを物語っている。 1面では上段部を洪水により崩された状況の石垣SG5を確認したが、2面に伴う遺構と考えられる。また、焼土層の上面から石垣SG5の南西ー北東方向の石垣に沿う形で長軸60cm大の礫群が検出されたが、石垣SG5あるいは石列SR4に伴うものかは不明である。	焼土層 （52層）	L-1G～L-(-2)G、M-1G～M(-2)Gに位置する。	石垣SG5を除くb区全体に南西から北東方向へ急傾斜する地形に沿って焼土層が確認された。最も厚く堆積している地点で深さ50cmを測る。	「図4-1-4」参照。	Ⅰ期（1680～1780年代）段階の遺物が中心となる。	この焼土層は、文政大火によって焼失した場所から本地点に運び込まれたものと思われる。	PL-9,78,79
		2	1面の焼土堆積層（52層）の直下から石垣SG3・SG4・SG5、石列SR4、集石SS1～SS3、土器集中区DS1を検出した。	石垣SG3	M-1G～M-(-1)Gに位置する。	石垣SG5に対面する西面を呈し、南西ー北東方向で緩やかにカーブを描いている。両方向へはさらに調査区外へ延び、北東方向では平成19年度に実施した鰍沢町教育委員会の調査地区にも連続している。長さ約7.3m、天端は削平されているが遺存の良好な南西端で4段検出され、最大高90cmを測る。北東側は1列1段のみ確認された。石積み法は、基段部では、礫の長軸を水平にし、横目地が通る整層積みであるが、他は乱積みとなる。使用石材は非加工の亜角礫～亜円礫を用い、平坦な面を表面に出して平坦面を構成するように積まれている。南西端の根石の直下を深堀したところ、根石から30cm程の地点で長軸30cm大の非加工の亜角礫や亜円礫が2段ほど確認され、さらにこの礫群と根石との間に10cm大の礫が充填されたかのようにまとまって確認された。地盤の弱い土地において石垣の基礎を安定させるために築かれた基礎構造である可能性がある。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	土地の区画となる。	PL-11,57,83,84
				石垣SG4	M-0G、M-(-1)Gに位置する。	石垣SG5に対面する西面（南西ー北東方向）は、1列1段で長さ3m、北面（南東ー北西方向）は1列3段で長さ1.5m、高さ約60cmを測り、L字状を呈する。南西端は石垣SG4に切られたためか、途切れている。北東方向へは調査区外へ延び、石垣SG3同様、平成19年度に実施した鰍沢町教育委員会の調査地区にも連続している。南東ー北西方向の北面する石垣の下には、洪水の影響により崩落したと思われる礫が散在して検出された。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	土地の区画となる。	PL-11,58,84
				石垣SG5	L-1G、L-0Gに位置する。	南西ー北東方向で長さ4.2m、南東ー北西方向で長さ1.2mを測り、L字状を呈するが、両方向とも調査区外へ延びている。上段部は、削平されており、また高さは傾斜地に構築され、高低差があるため、北西隅は4段で80cm、南東端は2段で40cm程が遺存している。石積み法は、乱積みとなる。使用石材は、非加工の亜角礫～亜円礫を用いている。南東ー北西方向の北面する石垣の下には、石垣SG4と同様な形で礫が検出された。南西ー北東方向の東面する石垣に沿う形で長軸60cm大の3つの礫が並んで検出されたが、崩落したものかあるいは石列SR4に伴うものかは不明である。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	土地の区画となる。	PL-12,59,83,84
				石列SR4	L-1G、L-0Gに位置する。	石垣SG5の東面の基段部に沿うように南西ー北東方向に1列1段で長さ3mを測る。南西端では、45度近くの角度をもって立ち上がように積まれており、さらに調査区外へ延びている。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。		PL-12,64,83
				集石SS1	M-0Gに位置する。	石垣SG3に沿う形で長軸1.4m、短軸40cmの範囲に10cm前後の自然礫がまとまって確認された。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	集石SS2も同様な形で石垣SG4に沿って検出されており、これらの集石は、それぞれの石垣に付随し、西面する石垣の前面ー帯に敷かれていたものと考えられる。	PL-13,66
				集石SS2	M-(-1)Gに位置する。	石垣SG4に沿う形で、長軸2m、短軸50cmの範囲に10cm前後の自然礫がまとまって確認された。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	遺存状況は悪いが、集石SS1同様に西面する石垣の前面ー帯に敷かれていたものと考えられる。	PL-13,67
				集石SS3	L-0G、L-(-1)G、M-0G、M-(-1)Gに位置する。	石垣SG5の北面する石垣下の崩落した礫から南東方向の石垣SG3へ広がる礫のまとまりが確認された。		文政大火による焼土層およびb区西壁42層によって埋没している状況から廃絶年代の下限は、Ⅱ期段階（1780～1860年代）と考えられる。	SG3とSG5を繋ぐかのような礫の配列も見られたが、SG5から崩落した礫の広がりとも考えられ、また遺存状況が悪いため、全体的な配列状況を捉えるまでには至らなかった。	PL-13,68
				土器集中区DS1	L-1G、L-0Gに位置する。	石垣SG5に区画された土地の上面に磁器・陶器・土器を主体として、石製品、銭貨など総数650点におよぶ遺物が検出された。	「図4-1-5」参照。 遺物の出土状況は、主な器種ごとの遺物分布図（PL-14～21）に示したが、分布の状況や接合資料が多いことから個体資料ごとにばら撒いて廃棄している状況が捉えられる。	Ⅰ期（1680～1780年代）段階の遺物が中心となるが、文政大火後である。	磁器と陶器には、生産段階とは異なる二次的な被熱により表面の釉薬が溶けて発泡しているものや、釉薬がもつ光沢感を失ったものが数多く確認された。これらは、文政大火により被災資料を一括廃棄したものと考えられる。	PL-13,70

第４節　遺物

検出された遺物は、近世から昭和に帰属し、その内容は、磁器・陶器・炻器・土器・土製品・瓦・金属製品・石製品・ガラス製品・骨角製品などから構成される。

出土遺物は、総破片数2,089点、総重量141,528ｇ（昭和30年代半ばの廃棄資料（HS1）を除く）となり（表3-1-2)、材質別破片数と重量は、各遺構単位ごとに計測し、表3-1-6に掲載した。

鰍沢河岸跡8区での近世（17世紀後半から18世紀後半）に帰属する遺物では、磁器・陶器・土器、金属製品の破片数･重量が相対的に多く、特に主体的な磁器と陶器については、磁器では肥前系、波佐見系、陶器では瀬戸･美濃系が供伴する傾向がある。

特筆すべき遺構としては、陶磁器・土器類を推定個体数50個体以上出土した１号土器集中区があり、詳細については、第4章第１節「鰍沢河岸跡8区出土の陶磁器・土器群の様相について」に記述した。

各遺物の概要は、遺物観察表（ｐ32～38）のとおりである。

3-1-6　検出遺物集計表

遺構	磁器	陶器･炻器	土器	土製品	瓦	石製品	金属製品	骨角製品	ガラス製品	合計
	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数
	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)
石垣SG1	55	52	7	4	18	2	11		28	177
	629.1	2781.19	1419.1	8.2	1209.1	171.2	135.6		231.1	6584.6
石垣SG2	33	21	2	1		1	2	1	9	70
	440.4	344.3	59.6	1.1		155	12.9	0.3	48.5	1062.1
石列SR3	20	2	1			1			1	25
	102.1	18.3	1.2			698.9			2.1	822.6
埋甕UK1		1	1							2
		6600	10.5							6610.5
土器集中区DS1	69	43	17	1		7	2			139
	4314.9	11798.6	2922.53	23.5		1041	6.3			20107
道路SF1	219	144	13	2	17	2	46		20	463
	1278.42	2732.98	286.8	1.1	2223.2	49.4	691.6		194.8	7458.3
建物跡SB1	84	40	5		97	8	12		48	294
	555.2	419.4	50		19788	522.7	848.6		809.4	22993
瓦集中区KS1	13				352	1	2		21	389
	99.4				57330.4	1.4	23.6		62.8	57518
遺物包含層（b区西壁）	30	29	4	2		1	4		3	73
	984.7	1156	90.2	78.7		4497.8	83.9		57.6	6948.9
遺物包含層（b区南壁）	1	2					13		1	17
	33.7	179.9					204		9	426.6
遺物包含層（b区北壁）	9	6					1			16
	54	138					2.9			194.9
遺物包含層（b区東壁）	2	6	2							10
	45.2	238.6	44.4							328.2
遺物包含層（b区42層）	5	16	5				2		2	30
	177.1	342.2	101.9				3.6		2.2	627
遺物包含層（b区52層）	19	22					50			91
	617.5	2819.3					113.48			3550.3
遺物包含層（b区53層）	6	15					6			27
	165.9	766.8					16.9			949.6
遺物包含層（b区54層）	32	45	1			2	4			84
	222.27	1507.72	35.3			42.1	14.4			1821.8
遺物包含層（b区55層）	3	2								5
	21.8	9								30.8
遺物包含層（b区56層）	32	48	4			1	3			88
	396.8	671.05	98.7			80.1	9.1			1255.8
遺構外（a区）	8	6	2		5		1	1		23
	32	100.3	24.3		343.5		3.5	1		504.6
表土剥ぎ	32	22				1	8		3	66
	298.1	966.5				379.8	66.2		23.1	1733.7
合計	672	522	64	10	489	27	167	2	136	2089
	10468.6	33590.1	5144.53	112.6	80894.2	7639.4	2236.58	1.3	1440.6	141528

第５節　遺物分布

a・b区における遺物分布状況をPL22～31に図示した。a区では、第１面の１号道路（PL-28)、１号～２号石垣（PL-29)、b区では、遺物包含層（52層～57層）（PL-30)、各調査壁面（PL-31）における遺物分布状況が捉えられ、各検出遺物の様相については、図4-1-4～4-1-7に整理した。a区1号道路下層の遺物群は土層堆積状況および遺物年代から第２面の6号石垣に帰属するものと考えられる。

第４章 分析・考察

第１節　鰍沢河岸跡8区出土の陶磁器・土器群の様相について

１．陶磁器・土器の出土様相と土地利用

鰍沢河岸跡8区からは、コンテナ箱にして約25箱の陶磁器・土器類など、総破片数2,089点、総重量141,528ｇが出土した。これらの遺物は､17世紀後半から昭和まで連続して出土が認められ､今回の調査で検出した石垣6面、石列5基、集石3基、埋甕1基、土器集中区1基、道路1、建物跡1棟、礎石1基、瓦集中区1基、廃棄帯1基の遺構とともに、これまでの調査成果から鰍沢河岸の運営に関わる商人の居住地域の最北端に関係するものであると考えられる。これらの遺構の年代は、①出土資料による遺構廃絶の年代の推定、②遺構の切合関係、③遺構の主軸方位の違い、④文献史料による土地利用上の改変などに基づき時期区分を行った（表4-1-1）。この結果、近世から昭和にかけて、Ⅰ期:17世紀第３四半期～18世紀第３四半期頃、Ⅱ期:18世紀第３四半期～19世紀第３四半期頃、Ⅲ期：19世紀第３四半期～19世紀第４四半期頃、Ⅳ期：19世紀第４四半期～20世紀前半頃の４つに細分した。

本調査地点出土の陶磁器・土器群の様相を遺構検出状況、遺構の変遷などと対比させてその特徴を概観すると次のようになる。

Ⅰ期：３～６号石垣、４号石列、１～３号集石などが1821年の鰍沢文政大火による焼土層（ｂ区52層）に覆われた形で確認されている。焼土層からは、二次的被熱を受けた肥前系の磁器や瀬戸・美濃系の陶器が出土している（図4-1-6）。

Ⅱ期：鰍沢文政大火で被災したと推定される一括資料が出土している遺構として１号土器集中区出土資料がある。1680～1870年代に比定される推定個体数（底部の中央など個体に１カ所しかない特定の部位をカウントする方法）57個体が出土している（図4-1-3)。

Ⅲ期：１～２号石垣、１号埋甕、５号石列などにおいて1870～1890年代に比定される瀬戸・美濃系の陶器が確認されている（図4-1-5）。

Ⅳ期：１号道路、１号建物跡、１号礎石、１号瓦集中区などにおいて1910年以降に比定される瀬戸・美濃系の磁器が出土している（図4-1-5）。これらの遺構は、昭和30年中頃の造成に伴い埋没され、埋設土内からはビール瓶、牛乳瓶、プラスチック製品などのゴミを伴う１号廃棄帯が確認されている（図4-1-5）

4-1-1　遺構変遷図

<table>
<tr><th colspan="3">時期区分</th><th>年代</th><th></th><th colspan="10">遺構名</th></tr>
<tr><th>時代</th><th>各期</th><th>地震･災害</th><th></th><th>遺物包含層</th><th>土器集中区</th><th>石垣</th><th>石列</th><th>集石</th><th>埋甕</th><th>道路</th><th>建物跡</th><th>礎石</th><th>瓦集中区</th><th>廃棄帯</th></tr>
<tr><td rowspan="12">近世</td><td rowspan="4">Ⅰ期</td><td></td><td rowspan="4">1680</td><td rowspan="4">56層
54層
53層</td><td></td><td rowspan="4">3～6号</td><td rowspan="4">4号</td><td rowspan="4">1～3号</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">Ⅱ期</td><td></td><td rowspan="4">1780</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>1821年文政大火</td><td>52層（焼土層）</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>b区砂礫層堆積</td><td>42･39層</td><td>1号</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">Ⅲ期</td><td></td><td rowspan="4">1870</td><td></td><td></td><td rowspan="8">1～2号</td><td rowspan="4">5号</td><td></td><td rowspan="8">1号</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">Ⅳ期</td><td></td><td rowspan="4">1910</td><td></td><td></td><td rowspan="4">1～3号</td><td></td><td rowspan="4">1号</td><td rowspan="4">1号</td><td rowspan="4">1号</td><td rowspan="4">1号</td><td rowspan="4">1号</td><td rowspan="4">1号</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>現在
（昭和30年代）</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

２．廃棄のあり方について

１号土器集中区出土資料を対象として本遺跡における廃棄活動の一端を捉えてみたい。

＜遺構の性格＞本遺構は、５号石垣により区画された造成地上に陶磁器・土器類などが、20㎝大の自然礫とともに一括廃棄され、火災後のゴミ捨て場として利用されている。

＜遺構の規模＞平面形は、南北に長い楕円形を呈し、西端は調査区外へ延びており、未検出であが、南北約3.2m、東西約1.3m、確認面からの深さは最大で25㎝程を測り、その容量は、1.04m³である。

＜遺物の総量・密度＞遺物の材質は、陶磁器・土器類をはじめ土製品、石製品、金属製品があり、総破片数650点、（その内、陶磁器類の推定個体数57個）、総重量20,107ｇで、本遺跡における総破片数の33％、総重量の15％の遺物が出土している。遺物包含密度（遺物総重量を遺構の容量で除する）は、19333（ｇ/m³）である。

＜遺物の検出状況＞本遺構の西端は、未検出であるが、遺物の平面及び垂直分布からは調査地点に遺物の集中する傾向が捉えられ（P-14）、また陶磁器・土器類は同一個体を個々にばらまいた状態で出土し、約650点の破片が推定個体数57個体に復元されている（PL-15～21）。

＜遺物の製作年代＞各材質の中で数量的に最も多く確認された磁器・陶器・土器の製作年代は、㊨期（1680～1780年）であり、肥前系のくらわんかや京焼風陶器碗など、1710～1740年代が製作の中心となる（PL-110～112）。

陶磁器類は、肥前系・波佐見系磁器の碗類、皿類、鉢類、瓶類が30個体、瀬戸・美濃系陶器の碗類、皿類、鉢類、瓶類、壺類、蓋類が17個体となり、二地域の生産地が主体的となる。また、復元された陶磁器・土器類の57個体中27個体は二次的な被熱を受けており、鰍沢文政大火（1821年）による火災資料とみられる（PL-53.54）。

以上のように本遺構では、本遺跡の他の遺構に比べて大規模で（遺物総量が多い）、積極的な（遺物包含密度が高い）廃棄が確認された。また、陶磁器・土器類の個体資料が多く含まれ、これらの器種組成が生活用具をほぼ網羅しており、少なくとも一世帯以上の生活用具がセットで廃棄されている状況が捉えられた（表4-1-2）。

今後は、他の遺構や遺跡における廃棄のあり方を含めて検討し、考古学的方法による江戸時代の人々の生活復元に結びつける分析を行っていきたい。

（保坂和博）

4-1-2　１号土器集中区　陶磁器・土器　器種組成表

器類	材質	磁器			陶器					炻器				土器		合計
	産地	肥前系	波佐見系	瀬戸・美濃系	肥前系	京・信楽系	瀬戸・美濃系	志戸呂系	産地不明	肥前系	堺系	常滑系	産地不明	在地系	産地不明	
	器種	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数	推定個体数
碗類	小坏	1														1
	小碗	3					1									4
	中碗	8	3				1									12
	大碗	1														1
	仏飯器	1					1									2
皿類	小皿	3					1									4
	五寸皿	2														2
	灯明皿						1									1
鉢類	大鉢						1									1
	片口鉢						1									1
	擂鉢										1					1
	蓋物鉢						1									1
	香炉	1					2									3
	火入				1											1
	火鉢														1	1
瓶類	小瓶	1														1
	中瓶	1					1									2
	大瓶	4														4
	仏花瓶						2									2
	髪油壺	1														1
	掛花入						1									1
壺類	中壺						1									1
甕類	大甕								1			1				2
水注類	土瓶								1							1
鍋類	土鍋								1							1
	焙烙														1	1
器台類	灯明受皿							1								1
蓋類	蓋物蓋						1									1
	中壺蓋						1									1
	蓋								1							1
推定個体数合計		27	3	0	1	0	17	1	4	0	1	1	0	0	2	57

第２節　鰍沢河岸跡８区出土の動物遺体

資料はすべて発掘の際に目視により採集されたものである。所属年代は近世中期から現代にわたる。分析方法については過去の報告（植月2006ａ・ｂ）と同様である。分析の結果、貝類３種、魚類１属、鳥類１種、哺乳類３種が確認された（表４－２－１）。いずれも過去の報告でも確認されている種である。今回は地点が限られていたことから、資料総数は少なく、組成を論じるまでには至らない。しかし、いずれも年代が確定できている点で意義がある。特に近世中～後期に海産貝類（ハマグリ、アカガイ）の流入、カモシカやシカといった狩猟獣の消費が確認できた点は、鰍沢河岸における当該期の流通、消費活動を考える上で注目される。

（植月学）

４－２－１　出土動物遺体種名

斧足綱	BIVALVIA
アカガイ	*Scapharca broughtonii*
マガキ	*Crassostrea gigas*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
サバ属	*Scomber* sp.
鳥綱	AVES
ニワトリ	*Gallus gallus domesticus*
哺乳綱	MAMMALIA
ウマ	*Equus caballus*
ニホンジカ	*Cervus nippon*
カモシカ	*Capricornis crispus*

４－２－２　出土動物遺体一覧

分析番号	遺物ID	注記ID	出土地点	年代	種	部位	左右	位置	数	計測（mm）	備考
2	300	1200	ｂ区調査区西壁39層	近世後期	アカガイ	―	右		1	SL:91	
3	301	1925	ｂ区調査区西壁45層	近世中期	ハマグリ	―	右		2		殻長5～6cm程度か
4	302	―	ａ区1号廃棄	現代	マガキ	―	左		2	SH:75	
	303						右		3	SH:55,44	
5	304	26	ａ区調査区北壁10層		ウマ	大腿骨	左	近位端外側	1		
6	305	139	ａ区1号道路8層	近世中～後期	哺乳類	四肢骨？	?	破片	1		イノシシ／シカ大
	306	140							1		イノシシ／シカ大
7	307	165	ａ区1号道路9層						1		イノシシ／シカ大
8	308	298	ａ区6エリア8層		カモシカ	橈骨	左	近位端	1	Bp:32.4	9と同一個体
9	309	299				尺骨	左	近位端	1		8と同一個体
10	310	627	ａ区1号埋甕	近現代	サバ属	歯骨	右	遠位部	1		
12	311	1205	ｂ区調査区西壁40層	近世後期	シカ	中節骨	?	完存	1		
13	312	―	ａ区2号石垣脇	近現代	ニワトリ	脛足根骨	右	近位端	1		
14	313	―				尺骨	左	近位端	1		
15	314	―				大腿骨	左	遠位端	1		
16	315	―			ニワトリ？	上腕骨	右	近位部	1		
17	316	―				大腿骨	左	近位部ー遠位部	1		
18	317	―			鳥類	長骨	?	骨幹部	1		
19	318	―							1		

引用文献

植月　学（2006a）「鰍沢河岸跡出土の動物遺体」『鰍沢河岸跡』Ⅲ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第235集，pp.319－328

植月　学（2006b）「木枠出土の動物遺体」『鰍沢河岸跡』Ⅳ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第238集，pp.49－53

第３節　鰍沢河岸跡８区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

山梨県南巨摩郡鰍沢町に所在する鰍沢河岸跡は、富士川右岸の沖積地に立地している。鰍沢河岸跡は、江戸時代初期、京都の角倉了以によって富士川が開削され、鰍沢から駿河の岩淵（静岡県庵原郡富士川町）まで開通した際に開かれ、富士川舟運の流通の要衝地として発展したとされている。

今回の発掘調査区（８区）では、造成等によって構築された石垣をはじめとして、石垣の間からは文政４年（1821年）の大火に伴って生じたと見られる焼土や炭化材等の塵芥物が大量に混じる堆積物（ｂ区焼土層）が確認されている。また、ａ区からは、甕が埋設された状態（１号埋甕）で検出されている。

本報告では、上記したｂ区焼土層より出土した遺物（炭化物、土壁、鉄滓）や堆積物、ａ区出土（１号埋甕）の甕内付着物を対象に自然科学分析調査を行い、堆積物形成時の古環境や遺物の種類や性格、甕の用途等について検討する。

１．試料

試料は、ｂ区焼土層と同層より出土した炭化材や土壁、鉄滓、ａ区出土（１号埋甕）の甕内付着物と、過去の発掘調査で出土した溜ん尻に用いられた甕内より採取した付着物からなる。以下に、各試料の概要及び分析手法を示す。

(1) ｂ区焼土層（土壌）

試料は、土壁試料（SH遺物ID319）に付着した土壌である。当初、土壁（SH遺物ID320）付着土壌が候補とされたが、乾燥・固化しており試料採取時に土壁を破損する恐れがあったことから、前述した土壌を代替試料として採取としている。当試料を対象に花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

(2) ｂ区焼土層（炭化材）

試料は、分析対象候補とされた炭化材より遺存状況や形状等から選択・抽出した７点である。炭化材は、その形状から板状（SH遺物ID321～325）、棒（柱？）状（SH遺物ID326）、形状不明（SH遺物ID327）に分類される。これらの試料を対象に炭化材同定を行う。

(3) ｂ区焼土層（土壁）

試料は、被熱の影響から橙褐色～褐色を呈する土壁（SH遺物ID320）と、漆喰とみられる白色物質が認められる土壁（SH遺物ID328）の２点である。土壁（SH遺物ID320）は、厚さ約４㎝の板状を呈し、平坦面は褐色および暗褐色を呈する。比較的軟質であり、分析処理時の切断面には最大径約5mmの亜円～亜角礫状の細礫～粗粒砂や、植物繊維様の痕跡（植物体はない）が観察される。また、後者の土壁（SH遺物ID328）では、漆喰とみられる白色物質を分析対象としたことから、土壁表面より当該試料を採取している。これらの試料のうち、土壁（SH遺物ID320）については薄片作成鑑定、土壁（SH遺物ID328）より採取した白色物質についてはX線回折分析を行う。

(4) ａ区１号埋甕（甕内付着物）

試料は、甕（UK1 遺物ID178）内の胴下～底部にかけて付着する白～（暗）褐色を呈する物質であり、遺存状況の良好とみられる箇所より採取を行っている。試料採取を行った箇所からは、これらの物質は、塗膜状に剥ぎ取ることが可能であり、ある程度の厚みをもって付着していた状況が窺われる。また、今回分析対象とした甕は、過去の本遺跡の発掘調査成果等から溜ん尻と称される遺構の一部と推定される甕と類似することが指摘されたことから、比較対照試料として同様の性格が示唆される甕（『鰍沢河岸跡』Ⅱ報告、遺物ID7911）の底面付近に認められた茶褐色を呈する付着物を採取している。これらの2試料につい付着物中の結晶鉱物、化合物の検出を目的としてX線回折分析を行う。

(5) ｂ区焼土層（鉄滓）

試料は、椀形滓とみられる径約７㎝の金属遺物（SH遺物ID329）である。当試料については、試料の性状や生成過程の検証を目的として、外観及び顕微鏡観察、化学成分分析を行う。

２．分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛, 比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。

(3) 胎土薄片作成鑑定

試料は、樹脂による固化の後、ダイヤモンドカッターにより試料を22×30×15㎜大の直方体に切断して薄片用のチップを作成する。チップをスライドガラスに貼り付け、＃180～＃800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1㎜以下まで研磨し、さらに、メノウ板上で＃2500の研磨剤を用いて正確に0.03㎜の厚さに調整する。スライドガラス上で薄くなった薄片の上にカバーガラスを貼り付け、観察プレパラートとする。

(4) X線回折分析

試料は、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料は、以下の条件で測定を実施する。検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Ｃｕ（Ｋα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3㎜
Voltage：40KV	Scanning Speed：2°/min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：ＳＣ	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2～45

(5) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現世標本と比較して種類を同定する。

同定根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等は、島地･伊東（1982)、Wheeler他（1998)、Richter他（2006）を参考にする。各樹種の木材組織については、林（1991)、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(6) 金属学的調査

試料は、外観的特徴をデジタルカメラ（富士写真フィルム工業：Finepix　F401）および実体顕微鏡（オリンパス光学工業：SZ－40型）により観察・記録する。代表的な箇所について、組織観察用および成分分析用に約20㎜に切断する。組織観察用試料は、断面が観察面になるように樹脂埋め込みし組織を固定後、鏡面になるまで研磨し、金属顕微鏡（オリンパス光学工業：BX51M型）にて観察･記録する。成分分

4－3－1　成分分析の方法と測定元素

試料名	分析方法	元　　素
鉄滓（H19カジカ8区　SH遺物ID329）	容量法	T・Fe、M・Fe、FeO、Fe2O3
	蛍光X線分析法	SiO2、Al2O3、CaO、Mgo、P2O5
	ICP発光分光分析法	TiO2、MnO、Cu、V
	原子吸光分析法	K2O、Na2O

析用試料は、エタノール中で洗浄して土砂を取り除いた後、乳鉢にて微粉砕し、表４－３－１に示す成分をJIS法に準拠して実施する。

３．結果

(1) 花粉分析

結果を表４－３－２に示す。花粉化石の検出状況は悪く、定量解析に耐えうる個体数は得られなかった。また、検出された花粉化石も保存状態は不良であり、花粉外膜が破損あるいは溶解しているものが多く認められる。検出された種類は、木本花粉ではモミ属やツガ属、マツ属、草本花粉ではイネ科やソバ属、アカザ科が1～6個体検出されるのみである。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表４－３－３に示す。検出された植物珪酸体は少なく、タケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属等が認められたのみである。珪化組織片は、全く検出されない。

(3) 胎土薄片作成鑑定

土壁は、シルト質な基質を有し、極細粒砂～細礫サイズの砕屑片を中量程度含む。塊状を呈し、淘汰は不良である。砂粒および細礫は、中量の玄武岩、少量の石英・斜長石・凝灰岩、微量の黒雲母・安山岩、および、極めて微量の斜方輝石・単斜輝石・角閃石・酸化角閃石・緑廉石・パンペリー石・沸石・ジルコン・燐灰石・不透明鉱物・デイサイト・チャート・ホルンフェルス・脈石英・脈沸石からなる。玄武岩は褐色を呈し、粘土鉱物化しているものが多い。砂粒および細礫に配向性は認められない。

基質は、粘土鉱物、鉱物片、炭質物、水酸化鉄などから構成され、褐色を呈する。孔隙が散在し、径0.2～2.5㎜程度で充填鉱物は認められない。植物繊維と判断される砕屑物は鏡下で確認することはできないが、植物繊維様の痕跡が認められたことから、散在する孔隙は植物体の抜けた痕跡の可能性もある。

(4) X線回折分析

X線回折図を図４－３－４～６に示す。図中最上段に試料のX線回折図、下段に検出された鉱物の回折パターンを示している。文中で（　）内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

土壁（SH遺物ID328）から採取した白色物質より検出された鉱物は、方解石（calcite）、石英（quartz）である。一方、甕内付着物（UK1遺物ID178）からは、水酸燐灰石（hydroxylapatite）、石英（quartz）、付着物（遺物№7911）からは、石英（quartz）、斜長石（曹長石:albite）、カリ長石（正長石:orthoclase）、雲母鉱物（白雲母:muscovite）等の鉱物が検出された。

(5) 炭化材同定

結果を表４－３－７に示す。炭化材は７点中６点が針葉樹のモミ属、１点が落葉広葉樹のカツラに同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（Abies）　マツ科

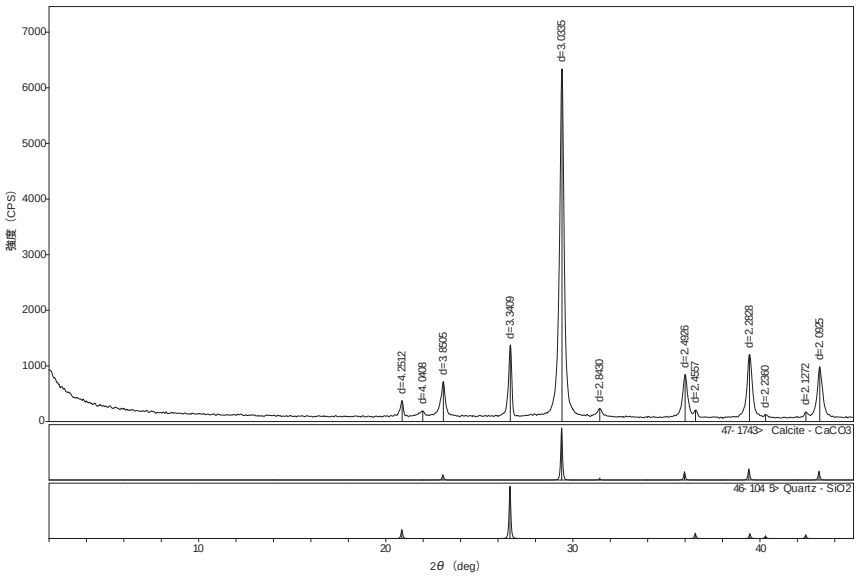
軸方向組織は基本的に仮道管のみで構成されるが、SH遺物ID323には傷害樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は広試料から狭い試料まである。SH遺物ID323の傷害樹脂道は、年輪界近くで接線方向に多数配列する。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、水平壁・垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１－４個。放射組織は単列、１－20細胞高。

４－３－２　花粉分析結果

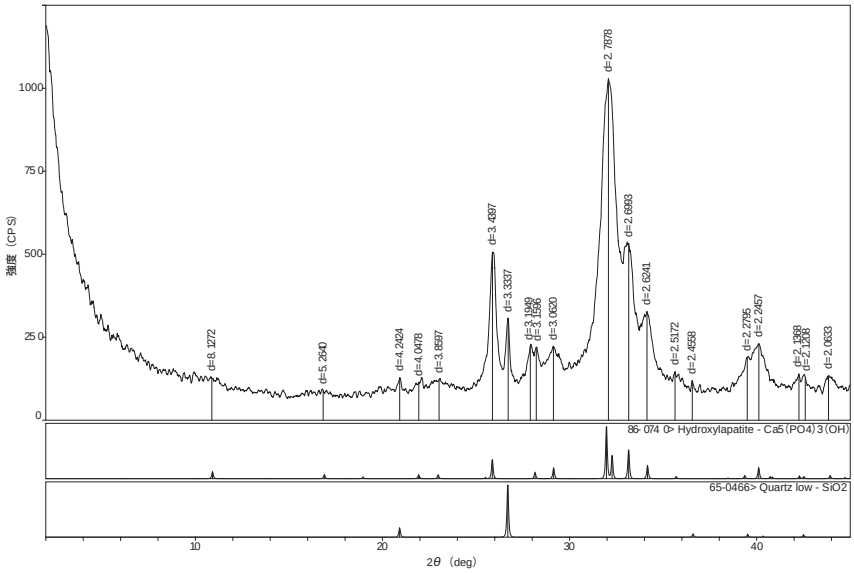
種　類	b区焼土層（SH遺物ID319土壌）
木本花粉	
モミ属	1
ツガ属	2
マツ属	6
草本花粉	
イネ科	5
ソバ属	2
アカザ科	2
不明花粉	1
シダ類胞子	
シダ類胞子	3
合　計	
木本花粉	9
草本花粉	9
不明花粉	1
シダ類胞子	3
総計（不明を除く）	21

４－３－３　植物珪酸体分析結果

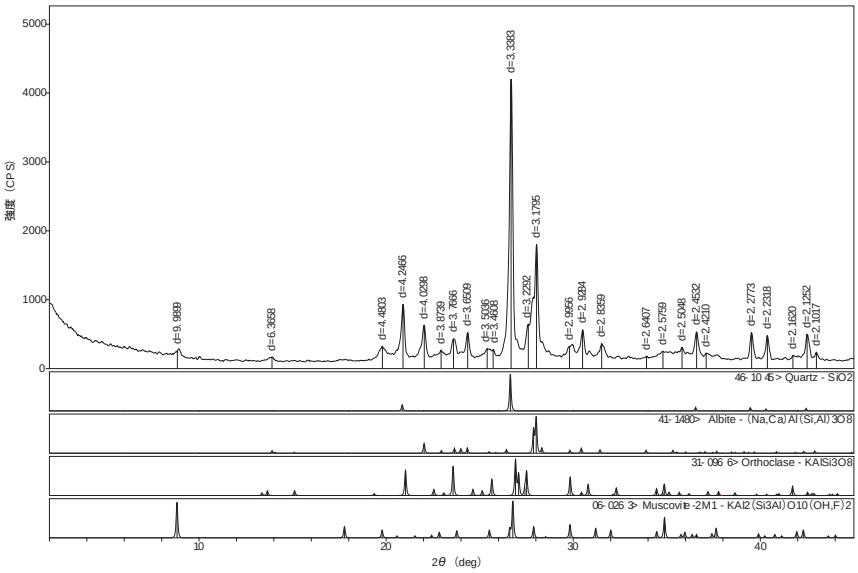
種　類	b区焼土層（SH遺物ID319土壌）
イネ科葉部短細胞珪酸体	
タケ亜科	3
ウシクサ族ススキ属	1
イチゴツナギ亜科	1
不明キビ型	1
不明ダンチク型	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
タケ亜科	2
シバ属	2
不明	4
合　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	7
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8
総　計	15



4－3－4　X線回折図（土壁（SH遺物ID328）白色物質）



4－3－5　X線回折図（甕（UK1 遺物ID178）内付着物）



4－3－6　X線回折図（甕（遺物ID7911）内付着物）

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1－2細胞幅、1－30細胞高。

4－3－7　樹種同定結果

試料			樹種
遺構名	遺物ID	形状	
b区焼土層	SH321	板状	モミ属
	SH324	板状	モミ属
	SH327	形状不明	カツラ
	SH326	棒状（柱？）	モミ属
	SH322	板状	モミ属
	SH323	板状	モミ属
	SH325	板状	モミ属

(6) 金属学的調査

1）外観観察（PL-107-1）

試料の法量は、75×65㎜、厚さ20㎜、重量84.0gである。全体的には茶褐色で椀型形状を呈し、底部に相当する部分には土砂が付着する。また、中央の一部には黒色光沢を呈する領域の存在も観察される。

2）組織観察（PL-107-2～3）

鉄滓の上層部は鉄錆、薄片（酸化鉄）や湯玉などから構成される（PL-107-3）。内部は通常の鉄滓組成で、白色結晶のウスタイト（理論化学組成；FeO）・灰色板状・長柱状結晶のファヤライト（理論化学組成；2FeO－SiO2）と暗灰色の非晶質珪酸塩からなり、チタン化合物は見当たらない（PL-107-4）。全体的には空孔の多い鉄滓であり、上層部の薄片や湯玉などの存在から半溶融した鉄浴表面にて生成した鉄滓とみられる。なお、Aの部分の一部には、僅かであるが金属銅や空孔内部に酸化銅が存在する。

3）成分分析

結果を表4-3-8に示す。全鉄（T・Fe）が約50％を占めており、鉄分の高い鉄滓である。チタン（Ti）分は約0.2％と少ない。また、造滓成分は約25％と少なく、明らかに小鍛冶工程にて生成したものと考えられる。また、銅（Cu）分が約1.3％弱と高い値を示すことは、組織観察で確認された金属銅や酸化銅の存在形態から推定される結果と調和する。

4－3－8　成分分析結果　（単位:重量%）

T・Fe	M・Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO
50.66	0.48	45.58	21.09	15.28	5.11	2.37	1.45

MnO	TiO_2	K_2O	Na_2O	P_2O_5	V	Cu	造滓成分
0.08	0.24	0.69	0.39	0.32	0.01	1.28	25.29

1）造滓成分:SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O

4．考察

(1) 古植生

b区焼土層を構成する堆積物と推定される土壌（SH遺物ID319）の分析調査では、花粉分析では、木本類でモミ属、ツガ属、マツ属、草本類でイネ科、ソバ属、アカザ科の花粉化石が検出されたが、全体的に保存状態が悪く、検出個数も21個と少なかった。花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。検出された種類は、比較的分解に強い花粉や分解が進んだ場合でも同定可能な種類からなり､経年変化等の影響を強く受けていることが示唆される。植物珪酸体分析では、ススキ属、イチゴツナギ亜科、タケ亜科の短細胞珪酸体やタケ亜科、シバ属の機動細胞珪酸体が検出されたが、いずれも僅かであり、珪化組織片は確認できなかった。珪化組織片や植物珪酸体は、比較的熱に強く火災の際の被熱で消失することは考えにくいことから、土壌中の植物珪酸体含量は低かったことが推定される。

鰍沢河岸跡では、各箇所で花粉分析や植物珪酸体分析が実施されている。A１区北半の試料を除くと今回と同様に花粉化石の産出状況は不良であるが、今回検出された種類はほとんどの調査地点で検出されている（パリノ･サーヴェイ株式会社,2005,2006）。大型植物化石を対象とした分析調査では、モミ属の葉やアカマツ（マツ属）の葉などが検出されていることから、今回検出された花粉化石は、周囲に生育していた種類を反映している可能性がある。また、栽培種のソバ属が検出されたが、過去の調査でも同様に花粉化石が確認されていることから、遺跡周辺での栽培が推定される。

(2) 木材利用

b区焼土層から出土した炭化材は、遺存状況から板状や棒状を呈するものが認められ、試料７点のうち6点がモミ属、１点がカツラであった。モミ属は、比較的大径木になり、木理は通直で割裂性が高く加工は容易であるが､保存性は低いとされる。カツラも比較的大径木になり､全体的に均質で割裂性が大きく加工は容易であるが、

強度・保存性は低いとされる。

鰍沢河岸跡では、文政の大火で焼失した建物の建築部材を対象に分析調査が実施されており、棒状や板状を呈する部材にモミ属を主体とする傾向が確認されている（パリノ･サーヴェイ株式会社,2005,2006）。今回の結果は、上記した調査成果に認められた傾向と調和的であることや炭化材の形状等の特徴から、建築部材等に由来する可能性がある。また、A1区北半南壁や地割U23の木葉堆積層を対象とした調査では、モミ属の葉が大量に検出されていることから、モミ属の木材は遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。一方、カツラは、漆塗椀や道路地区から出土した炭化材、自然木等に確認されており、モミ属と同様に入手可能な木材であったと考えられる。これまでのところ、用途が明らかなものは漆器椀の1点のみであり、建築部材には確認されていない。カツラの利用状況については、さらに資料を蓄積する必要がある。

（3）土壁

鰍沢河岸跡付近の富士川両岸に迫る山地は、新第三紀中新世に形成された鰍沢累層と呼ばれる地質により構成されている。日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）によれば、鰍沢累層は、玄武岩溶岩を挟む安山岩質およびデイサイト質の凝灰角礫岩、火山角礫岩からなるとされている。また、鰍沢累層を含む巨摩山地の火砕岩には、各所に変質帯が分布し、変質帯に特有な鉱物として緑廉石や沸石およびパンペリー石などが記載されている。分析対象とした土壁（SH遺物ID320）に含まれる岩石片は、玄武岩および凝灰岩を主体とし、安山岩やデイサイトも含まれるなど、鰍沢累層の地質とよく整合し、変質鉱物も認められた。このことから、土壁の素材は、鰍沢河岸跡周辺の堆積物に由来する可能性がある。

また、土壁（SH遺物ID320）には、極めて微量ではあるが、チャートやホルンフェルスなど鰍沢累層の地質とは異質な岩石片も認められた。尾崎ほか(2002)などの地質図により､鰍沢町から周辺域の地質をみると､チャートは釜無川上流の右岸側上伊那郡に広く分布する秩父帯の中に認められ、ホルンフェルスは、釜無川右岸に分布する円井深成岩体や甲斐駒ヶ岳深成岩体などの周縁部に形成された岩石に由来する可能性がある。したがって、土壁の素材とされた土の中には、富士川上流域すなわち釜無川流域に分布する地質に由来する砕屑物も混在していると考えることができる。

土壁（SH遺物ID328）に認められた白色物質の性格として推定された漆喰は､一般には壁の上塗りに使用され、石灰に繊維などを混ぜて練り上げた材料からなる。X線回折法による鑑定結果では、方解石の回折線が明瞭に検出されたことから、本物質は炭酸カルシウム（石灰）からなることが確認され、漆喰とする所見を支持する結果と言える。

（4）甕内付着物

今回分析対象とした甕は、鰍沢河岸跡の過去の発掘調査成果から、溜ん尻と称される生活雑廃水等の排水施設の一部に相当する甕の可能性や、トイレ等に関わる遺構の可能性が推定された。甕（UK1 遺物ID178）内に認められた付着物のX線回折法による鑑定結果では、付着物中には水酸燐灰石が含まれることが指摘される。水酸燐灰石は、生物燐灰石の基本構造をなす物質であり、骨や歯、貝の殻等に含まれるほか、土壌中のカルシウムと結合したリン酸が燐灰石に類した構造をなすことが知られている。なお､､燐灰石は尿石中にも含まれる物質で、他のカルシウム塩、マグネシウム塩、タンパク質等を伴うことが多いが、本分析結果では燐灰石以外の他のカルシウム塩、マグネシウム塩が認められなかった。一方、比較対照試料とした同様の性格が示唆される甕（遺物ID7911）内付着物の鑑定結果では、石英、斜長石、カリ長石、雲母鉱物など、造岩鉱物が検出された以外、他の鉱物（化合物）は認められなかった。この結果から、甕（UK1 遺物ID178）内付着物と成分が異なることが指摘されるが、検出された鉱物は土壌中に普通にみられる鉱物であることから、付着物は土壌等に由来する可能性がある。

これまで、上記したような用途や性格が推定される甕内付着物を対象とした分析調査は少なく、今回の分析結果のみから甕の用途や性格を特定するには至らない。ただし、甕（UK1 遺物ID178）付着物には燐灰石が含まれるといった特徴が確認されたことから、今後は燐灰石の由来等の検証が課題と言える。この点については、同様の分析事例の蓄積や、X線回折分析では検出できない非晶質物質や有機物等の分析を行い、評価・検討することが望まれる。

(5) 鉄滓

外観及び組織観察、成分分析結果から、分析対象とした金属遺物（SH遺物ID329）は、小鍛冶工程において生成した鉄滓と判断された。また、鉄滓の特徴として、通常の精錬鍛冶工程では存在しえない銅成分の存在が指摘される。

過去に実施された鰍沢河岸跡から出土した鉄器や鉄滓、羽口を対象とした調査では、濃度が0.00％オーダーの分析で銅分は殆ど検出されていない（JFEテクノリサーチ株式会社2005a,2005b）。また、銅を含む鉄鉱石は世の中に存在するが、製錬工程で地鉄に分配され、鉄滓中には残らないのが通常である。一方、分析対象とした鉄滓中には、銅の組織が金属銅や酸化銅として存在することから、原料鉄鉱石由来のものではなく、鉄以外に銅素材が本鉄滓生成過程で存在したものと考えられる。

なお、銅素材、あるいは、銅成分の由来については、1）例えば、古材の鉄器を再利用する鍛冶工程（修復？）で、古材に付随して存在した銅分が鉄滓生成過程で混入したこと、2）鍛冶炉にて、銅関連材料を加熱処理しており、その微細破片等が炉壁に残留していた（鍛冶炉の兼用）こと等が推定される。この点については、遺物の出土状況やこれまでの発掘調査成果等から、本来帰属すると考えられる遺構の推定や、遺構から出土した同様の遺物を対象とした分析調査により検討する必要がある。

引用文献

林　昭三（1991）日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫（1995）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，pp.81－181.

伊東　隆夫（1996）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．pp.66－176.

伊東　隆夫（1997）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，pp.83－201.

伊東　隆夫（1998）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，pp.30－166.

伊東　隆夫（1999）日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，pp.47－216.

JFEテクノリサーチ株式会社（2005a）「羽口・鉄滓等の理化学分析」『鰍沢河岸跡』Ⅱ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第224集，pp456－461.

JFEテクノリサーチ株式会社（2005b）「釘の理化学分析」『鰍沢河岸跡』Ⅱ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第224集，pp.462－466.

近藤　錬三（2004）植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，pp.46－64.

三宅　尚・中越　信和（1998）森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，pp.15－30.

中村　純（1967）花粉分析．古今書院，pp.232.

日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）日本の地質４　中部地方Ⅰ．共立出版，pp.330.

尾崎正紀・牧本　博・杉山雄一・三村弘二・酒井　彰・久保和也・加藤碩一・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久（2002）20万分の1地質図幅「甲府」，産業技術総合研究所地質調査総合センター．

パリノ･サーヴェイ株式会社（2005）「鰍沢河岸跡の自然科学分析」『鰍沢河岸跡』Ⅱ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第224集，pp.431－451.

パリノ･サーヴェイ株式会社（2006）「鰍沢河岸跡の自然科学分析」『鰍沢河岸跡』Ⅲ，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第235集，pp.311－318.

Richter　H.G.，Grosser D.，Heinz I. and Gasson P.E.（編）（2006）針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫･藤井　智之･佐野　雄三･安部　久･内海　泰弘（日本語版監修），海青社，pp.70.［Richter　H.G.，Grosser D.，Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東　隆夫（1982）図説木材組織．地球社，pp.176.

徳永　重元・山内　輝子（1971）花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，pp.50－73.

Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（編）（1998）広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，pp.122.［Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

第４節　鰍沢河岸跡８区出土の元禄一分判金ほかの品位分析について

今回、鰍沢河岸跡出土の元禄一分判金を分析するに当たり、県内遺跡出土の金貨についても併せて分析を行う機会を得た。そこで、比重法と蛍光Ｘ線分析法の２種類の方法によって、金貨の品位の分析とその方法の比較を行った。また、走査型電子顕微鏡を用いて金貨の表面観察から、用いられた技術の調査を行った。

その結果について報告する。

○　分析資料

・慶長一分判金（甲府城跡出土県指定史跡『甲府城跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第222集）
・甲州壱分判（甲定金）（鰍沢河岸跡出土『鰍沢河岸跡』Ⅱ、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集：遺物ID4092）
・甲州壱分判（甲定金）（鰍沢河岸跡出土『鰍沢河岸跡』Ⅱ、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集：遺物ID4093）
・元禄一分判金（鰍沢河岸跡出土　遺物ID206）

○　分析方法

精密科学天秤を用いた比重法と、蛍光Ｘ線分析法を用いて、各金貨の品位の分析とその方法の比較を行った。条件を以下に示す。

・比重法

精密科学天秤（ザルトリウス（株）製CP224S）を用いた比重計（自作）による。測定は各５回行い、その平均を用いた。

そして、西脇らが報告した計算式[1)] を用いて品位の計算を行った。計算式を以下に示す。

$$\frac{Mg}{Mt}=\frac{\rho_g(\rho_t-\rho_s)}{\rho_t(\rho_g-\rho_s)}$$

Mg：主たる金属の質量（g）　Mt：金属貨幣の質量（g）

ρg：主たる金属の密度（g/cm³）　ρt：従たる金属の密度（g/cm³）　ρs：金属貨幣の密度（g/cm³）

・蛍光Ｘ線分析（XRF）

分析は、下記の装置・条件で資料の表裏各２ヶ所の合計４ヶ所について分析を行い、その平均値を用いた。

分析装置：エスアイアイ・ナノテクノロジー（株）製SEA5230HTW
管電圧：50kV
管電流：36μA
測定環境：真空
測定時間：300sec
測定範囲：1.8mmφ
定量法：ファンダメンタルパラメーション法（FP法）

・走査型電子顕微鏡（SEM）

金貨の作製に用いられた技術を解明するため、走査型電子顕微鏡を用いて表面観察を行った。観察条件・倍率は資料によって異なるものについては、写真（PL-109）を参照されたい。

装置：（株）ニコン製　環境制御型電子顕微鏡Quanta600
観察方法：２次電子像

○　結果

各資料の分析結果を表４-４-１に示す。また、これまで知られている金貨の品位について西脇らが報告したデー

タ[2) 3)] を表に併記した。比重法による結果は、全ての資料で金－銀の二元系の品位での計算である。一方、蛍光X線分析では金－銀－銅の三元系で分析を行っている。

写真図版PL-108に各資料における蛍光X線スペクトルと分析部位の写真を示す。分析は可能な限り凹凸の無い平らな部分で行っている。スペクトルから、金、銀、銅以外にはごく僅か鉄等の痕跡が見られる程度である。

比重法の結果から、全ての金貨において知られている品位と同様の品位が示された。中でも、慶長一分判金では金の品位が90wt％弱と非常に高い値が示され、その後品位が著しく落ちた元禄一分判金では金の品位が55wt%強となっている。また、甲斐国内のみで流通されたものとして知られている甲州金の中で、後半に製作されたとされる甲州壱分判（甲定金）が２点鰍沢河岸遺跡より出土しているが、これらの品位は70wt％弱の値が示されている。

今回、全ての資料において蛍光X線分析におけるデータの方が、比重法によるデータに比べ金の品位が高いことが表に示されている。これは、今回調査を行った資料全てにおいて「色揚げ」と呼ばれる技法が行われているためである。

4－4－1　品位分析結果

元素（wt%）	鰍沢河岸跡出土						甲府城跡出土		参考データ*		
	元禄一分判金		甲州壱分判（甲定金）				慶長一分金		慶長一分金	元禄一分金	甲州壱分判（甲定金）
			ID4092		ID4093						
	比重法	XRF	比重法	XRF	比重法	XRF	比重法	XRF			
金（Au）	56.6	61.0	67.6	72.6	68.4	74.8	85.5	88.8	85.57	56.41	66.7－69.7
銀（Ag）	43.4	38.7	32.4	26.1	31.6	24.6	14.5	11.0	14.3	43.19	
銅（Cu）		0.3		1.3		0.6		0.2			
そ の 他									0.13	0.6	

＊慶長一分判金、元禄一分判金の値は、公表値を記載した[2)]。 甲州壱分判は、比重法で測定した値を示している[3)]。

この「色揚げ」とは、表面付近の銀を化学的に除去して金の濃度を高めることで、表面の金色を強く見せる技法である。今回用いた蛍光X線分析は表面分析であるため、この金濃度が高い部分の影響によって数パーセントほど金の品位が高く示されているものと考えられる。この「色揚げ」は、金の品位が80wt%以上の慶長小判でも行われていることが知られており[4)]、同時期の慶長一分判金でも今回の測定によって同様の結果が得られたと考えられる。

今回の分析方法の比較から、金貨の品位を分析する場合では、可能であれば比重法で行うことが望ましいことが改めて示された。ただし、大判のように墨書がある場合では用いることができない。

ところで、慶長一分判金、元禄一分判金に比べ、甲州壱分判（甲定金）では銅の成分が多く含まれている。甲州金は甲州のみの流通のため、甲府の金座で作られたと考えられる。一方、慶長・元禄一分判金はどこの金座の製作かは分からないが、この銅の濃度差は各金座の技術の差と考えられるのであろうか。興味深い結果である。

そして、全ての金貨についてSEMを用いて表面観察を行ったところ、「色揚げ」後に金の金属層を形成するために生じる、表面を擦った跡や凹みが観察された。各金貨のSEM画像を写真に示す。

「色揚げ」は、薬剤を用いて表面層の銀のみを除去して表面の金の濃度を高めることで金色を向上させる技術である。そのため、銀成分除去後では原子状の金が表面層に存在することが知られている[5)]。そのため、光沢が無く、表面を何らかの道具を用いて擦ることで表面に金の金属層を作ることを行っている。その工程の痕跡が、表面の擦った跡や均一に擦る作業が出来ていない凹んだ部分に見ることが出来る。

今回観察したSEM画像からも、全ての金貨において「色揚げ」が行われていることが示された。

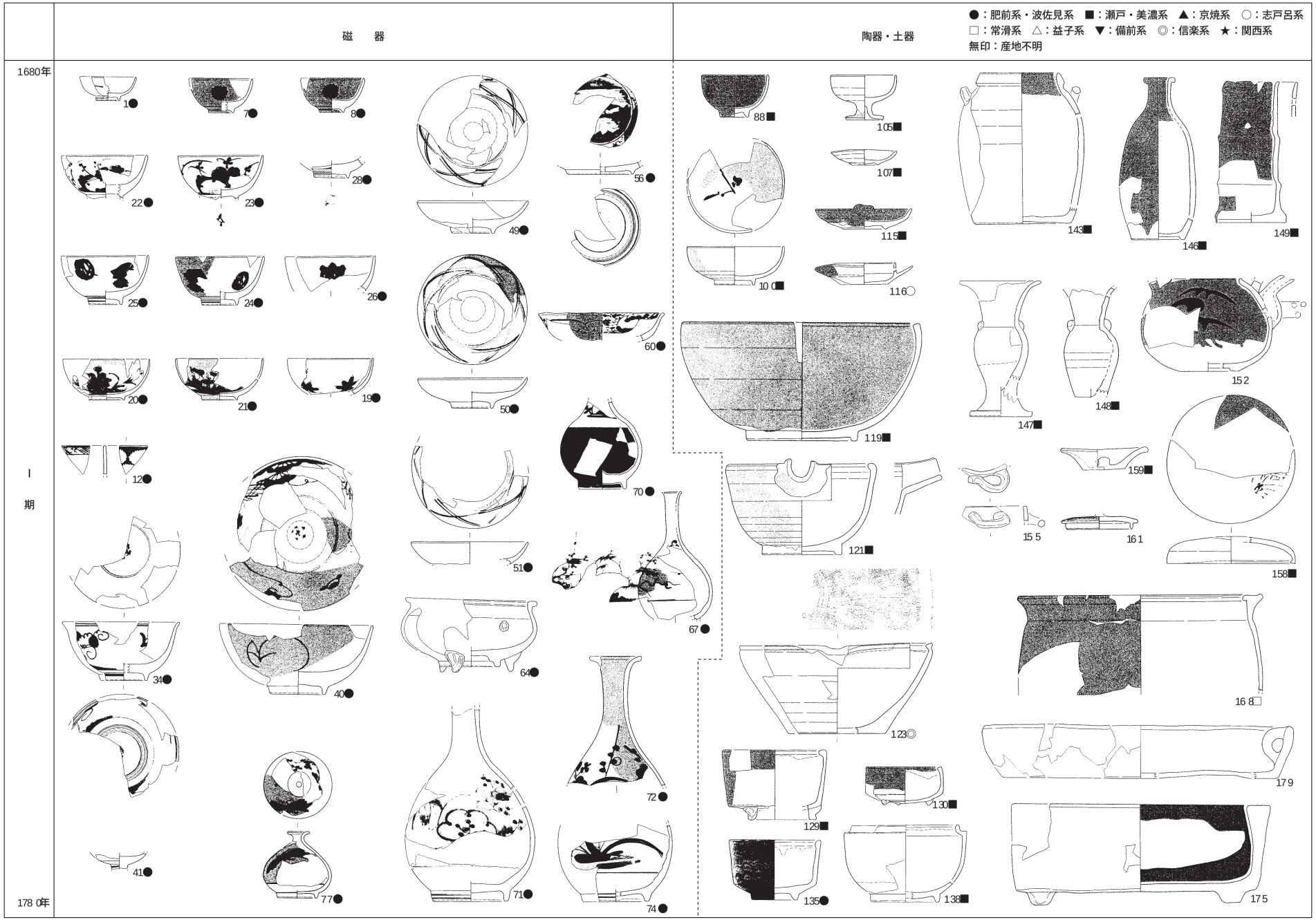
以上で、山梨県内から出土した金貨についての分析の報告とさせて頂く。今回、この調査の機会を与えて頂いた山梨県埋蔵文化財センターの諸氏に感謝したい。

（沓名貴彦）

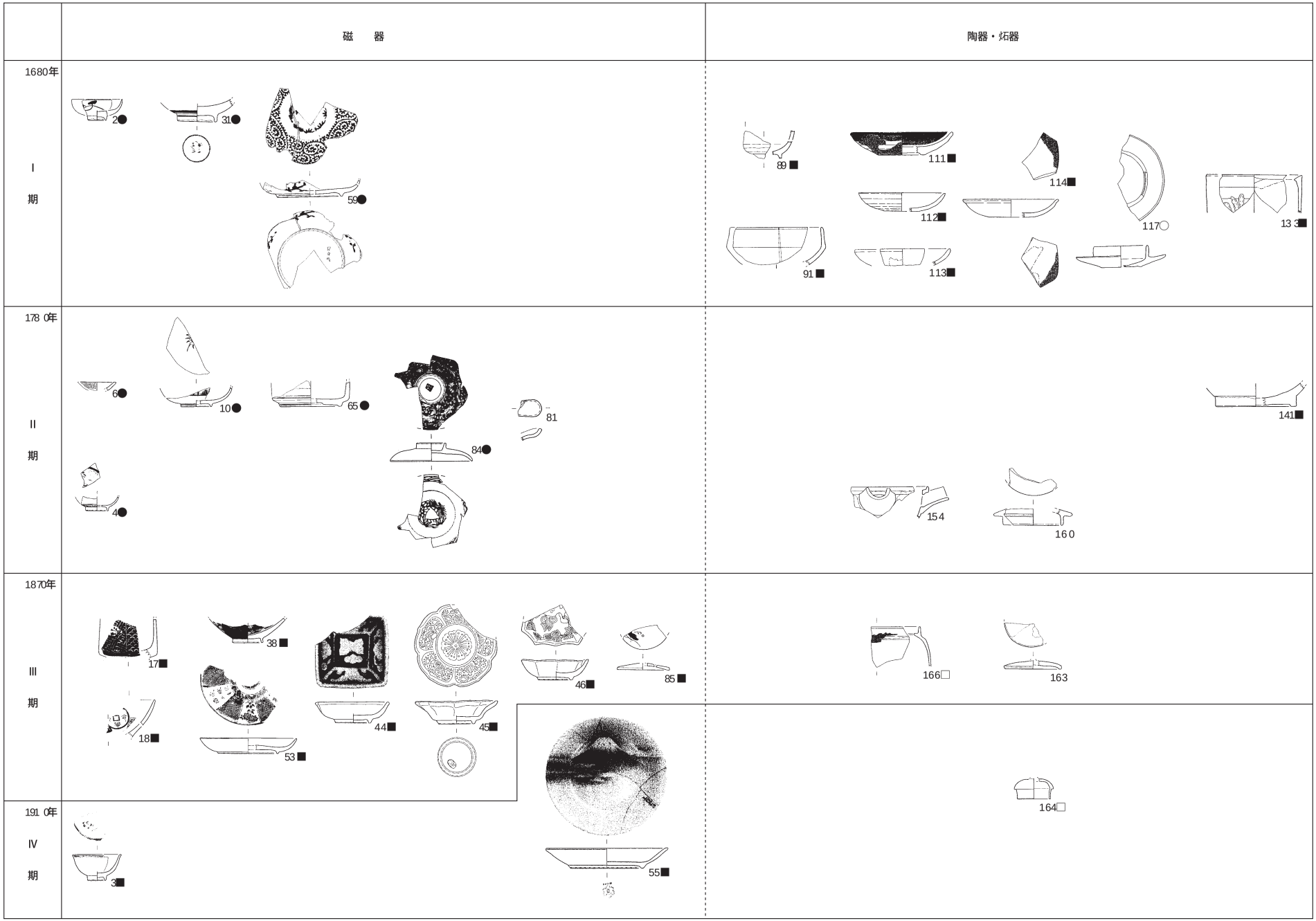
引用文献

1）西脇、今村（2004）『計量史研究』，26（1），pp.21－28
2）西脇（2005）『計量史研究』，27（1），pp.1－13
3）西脇、小松、今村（2005）『金山史研究』，5，pp.15－27
4）上田（1993）『金融研究』，12（2），pp.103－125
5）伊藤（2005）『金山史研究』，5，pp.103－111

5－1－3　検出遺物の様相（1）【1号土器集中区】



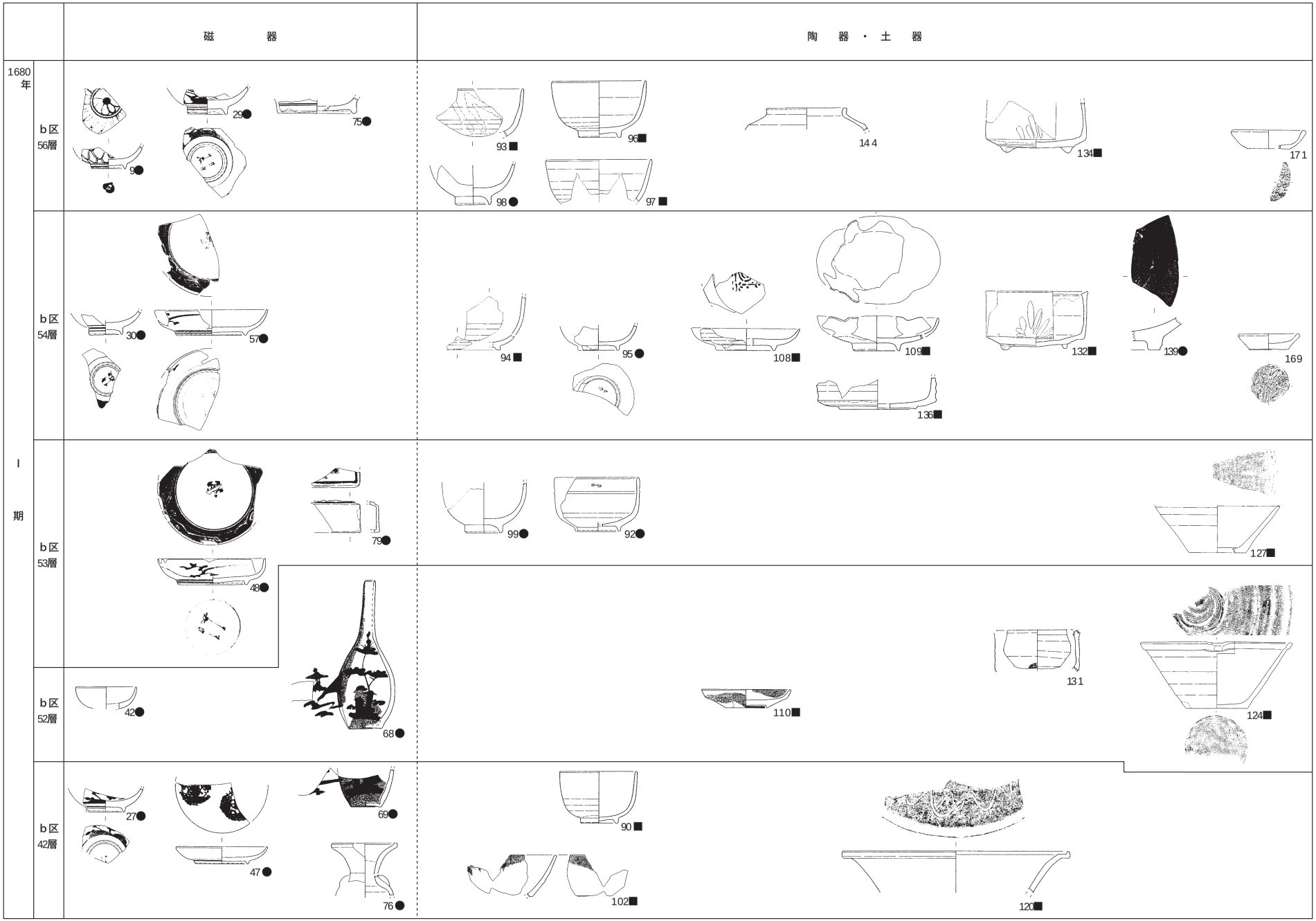
5－1－4　検出遺物の様相（2）【a区1号道路】



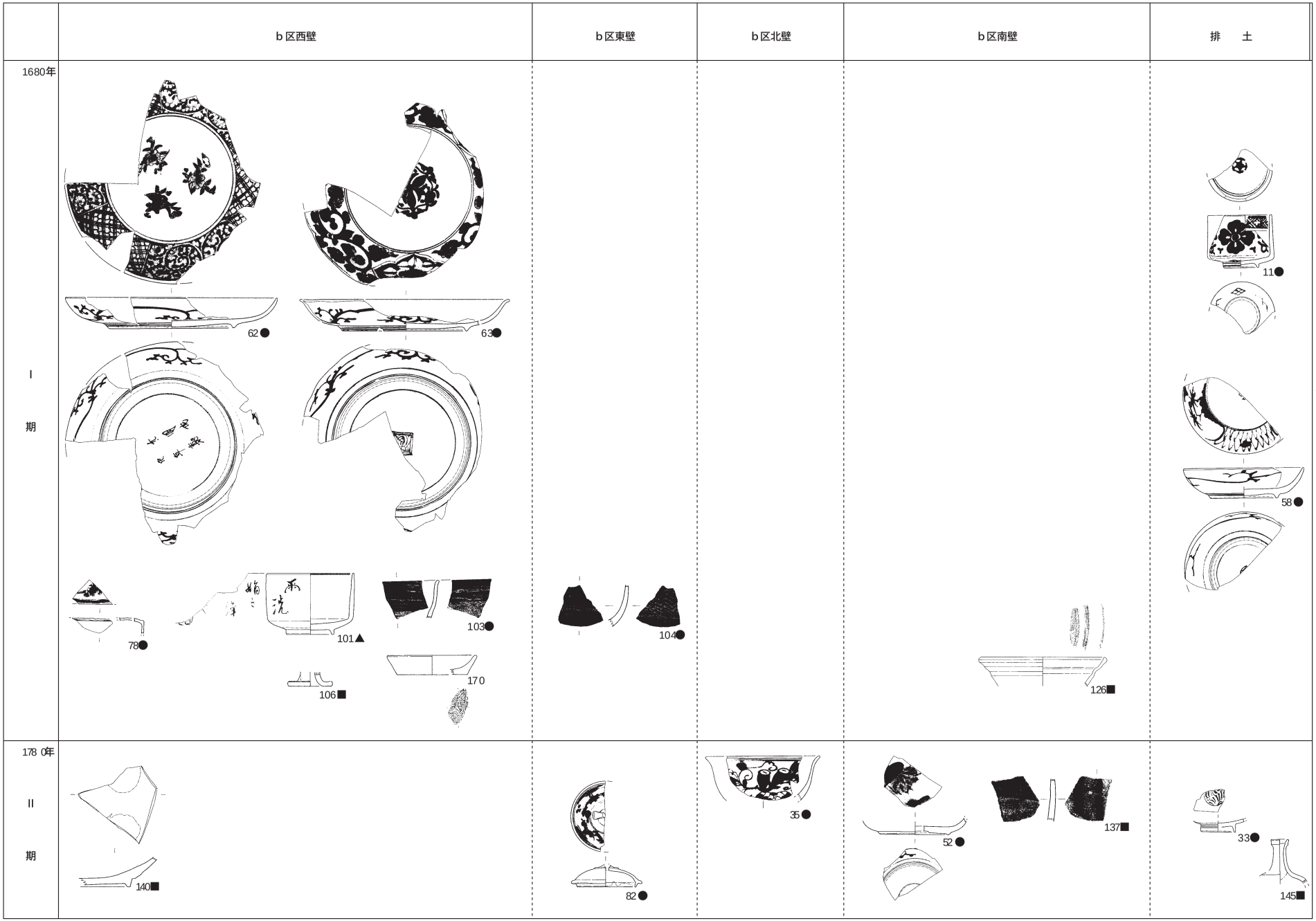
5－1－5　検出遺物の様相（3）【a区その他の遺構】

	1号石垣・1号建物跡	2号石垣	3号石列・1号埋甕・1号廃棄帯
1680年 I 期	1号石垣（SG 1） 32●　43●　118■　122■　173		3号石列（SR 3） 61●
1780年 II 期	83●　36■　5■　13■	37■　156■	
1870年 III 期	14■　15■　151△　162◇　153　165□　128■　176	66■　150△　87■　86★	1号埋甕（UK 1） 178
1910年 IV 期	1号建物跡（SB 1） 167▼　157　80	16■　39■	1号廃棄帯（HS 1） 172　176　177

5－1－6　検出遺物の様相（4）【b区遺物包含層】



5－1－7　検出遺物の様相（5）【b区各調査壁面】



遺物観察表

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
1	DS1	1340/1350/1584/1599	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	小坏	丸形		15.4	(6.3)	(2.5)	2.7		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	折れ松葉文						肥前系	1690～1780	
2	1エリア9層	133	a区	1号道路21層	磁器	碗類	小坏	丸形		20.0	5.7	2.0	2.4		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	水草文						肥前系	1690～1780	
3	1面一括	-	a区	1面	磁器	碗類	小坏	端反形		11.4	(5.4)	(2.0)	2.9		白ガラス質		畳付無釉	吹絵付・手描	コバルト／透明釉／上絵	グラデーション	グラデーション	赤絵				瀬戸・美濃系	1930～1940	
4	1エリア6層	352	a区	1号道路18層	磁器	碗類	薄手酒坏	-		2.5	-	(2.4)	1.7残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	櫛形高台文		帆船文				肥前系	1820～1860	
5	SG1ワキ	433	a区	1号石垣脇	磁器	碗類	薄手酒坏	-		3.1	-	(2.5)	1.5残		白ガラス質		畳付無釉	手描き	コバルト／透明釉	櫛形高台文	—	江戸絵付け草文				瀬戸・美濃系	1840～1870	
6	SF1-9層	96	a区	1号道路21層	磁器	皿類	紅皿	貝殻形		1.3	(4.3)	-	0.9残		白		型押し		透明釉	鎬文						肥前系	1780～1860	
7	DS1	1389/1414/1432/1630/1760	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	小碗	丸形		62.9	7.2	(2.8)	3.9		白灰		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	コンニャク印判菊花文				発泡あり	なし	肥前系	1690～1740	
8	DS1	1427/1451/1510/1623/1749	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	小碗	丸形		60.5	(7.2)	2.6	4.0		白灰		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	コンニャク印判菊花文				発泡あり	なし	肥前系	1690～1740	
9	AN	1052	b区	56層	磁器	碗類	小碗	丸形		32.5	-	3.8	2.6残		白灰	記号	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	二重網目文	網目文	二重圏線内に花文				肥前系	1690～1740	
10	9エリア8層	338	a区	1号道路8層	磁器	碗類	小碗	半球形		14.0	-	3.4	2.2残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	矢羽文		火炎宝珠文				肥前系	1780～1860	
11	ハイド	-	-	廃土	磁器	碗類	小碗	半筒形		58.1	(7.1)	(3.8)	6.0		白		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	花文	四方襷文	コンニャク印判五弁花文	高台外に菱形、山文			肥前系	1740～1820	
12	DS1	1900	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	小碗	半筒形		5.2	-	-	3.3残		白			手描き	呉須／透明釉	雪輪文	四方襷文					肥前系	1780～1820	
13	SG1ワキ	552	a区	1号石垣脇	磁器	碗類	小碗	輪花形		62.0	(7.5)	(3.4)	6.0		白ガラス質		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	菖蒲文	帯文					瀬戸・美濃系	1840～1870	
14	SG1ワキ	431	a区	1号石垣脇	磁器	碗類	小碗	筒形		64.0	(5.0)	3.5	6.0		白ガラス質	角記号	畳付無釉	手描き	コバルト／透明釉	草花文			圏線			瀬戸・美濃系	1870～1890	
15	SG1ワキ	472	a区	1号石垣脇	磁器	碗類	小碗	筒形		23.3	-	2.8	4.6残		白ガラス質	角記号	畳付無釉	手描き	コバルト／透明釉	草花文　鎬			圏線			瀬戸・美濃系	1870～1890	
16	SG2ワキ一括	-	a区	2号石垣脇	磁器	碗類	小碗	丸形		51.5	7.8	2.8	4.7		白ガラス質		畳付無釉	ゴム印判	コバルト／透明釉	市松文・花文						瀬戸・美濃系	1920～1940	
17	SF1-2層	63	a区	1号道路14層	磁器	碗類	小碗	筒形		20.7	-	-	4.5残		白ガラス質			銅版印判	コバルト／透明釉	紗綾文・青海波文・窓絵						瀬戸・美濃系	1880～1940	
18	SF1一括	-	a区	1号道路	磁器	碗類	小碗	丸形		8.7	-	-	4.3残		白ガラス質			銅版印判	コバルト／クロム／透明釉	古銭文						瀬戸・美濃系	1880～1940	
19	DS1	1398/1629/1670	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	浅半球形		25.9	(9.5)	-	4.1残		白			手描き	呉須／透明釉	若松文						肥前系	1690～1740	
20	DS1	1296/1297/1305/1345/1883/1885/1886/1890	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	浅半球形		94.6	9.8	4.0	4.6		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	蔸文				つや消し	激しいひび割れ	肥前系	1690～1740	
21	DS1	1320/1322/1341/1344/1346/1349/1387/1416/1429/1504/1804//1845	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	浅半球形		87.2	(9.9)	3.9	4.8		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	蔸文				つや消し	激しいひび割れ	肥前系	1690～1740	
22	DS1	1337/1397/1468/1535/1846	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形	くらわんか手	93.7	(9.8)	-	4.9残		白灰		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	雪輪梅樹文						波佐見系	1680～1810	
23	DS1	1377/1663	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形	くらわんか手	114.1	9.6	-	5.0残		白灰	記号	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	雪輪梅樹文						波佐見系	1680～1810	
24	DS1	1320/1323/1347/1375/1750	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形		73.3	(10.1)	(3.9)	5.6		白灰		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	コンニャク印判鶴丸文・熨斗文				発泡あり	なし	肥前系	1690～1740	
25	SH,DS1	830/835～837/839/840/1287/1487/1679/1789/1795/1860/1895	b区	52層 1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形		150.8	9.9	3.6	5.5		白灰		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	コンニャク印判鶴丸文・熨斗文						肥前系	1690～1740	
26	DS1	1338/1512/1644/1683/1816/1839	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形		41.4	(10.2)	-	4.0残		白灰		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	コンニャク印判桐花文						肥前系	1690～1740	
27	SA	735	b区	42層	磁器	碗類	中碗	丸形		30.5	-	(4.2)	2.8残		白灰	記号	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	草花文						波佐見系	1680～1810	
28	DS1	1675	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	丸形		46.9	-	(3.9)	2.4残		白灰	記号	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉							波佐見系	1680～1810	
29	AN	1123	b区	56層	磁器	碗類	中碗	丸形		80.7	-	4.3	3.3残		白	くずれ「太明年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	雪輪梅樹文						肥前系	1690～1740	
30	SS	941	b区	54層	磁器	碗類	中碗	丸形		27.6	-	3.6	2.6残		白	くずれ「太明年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉							肥前系	1690～1740	
31	4エリア10層	228	a区	1号道路22層	磁器	碗類	中碗	丸形		95.4	-	4.3	2.7残		白	くずれ「太明年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉				圏線			波佐見系	1680～1810	
32	SG1上一括	-	a区	9層	磁器	碗類	中碗	丸形		51.9	-	4.0	2.2残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉			圏線内に草文				波佐見系	1680～1810	
33	ハイド	-	-	廃土	磁器	碗類	小碗	-		9.1	-	(3.8)	1.6残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	圏線		丸文				肥前系	1780～1860	焼継あり
34	DS1	1275/1331/1357/1518/1537/1540	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	端反形		143.8	(13.2)	(5.2)	6.7		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	蔓草文		二重圏線内にコンニャク印判五弁花文	圏線			肥前系	1690～1780	
35	北ヘキ3・5層,DS1	1170/1235/1672/1763	b区	54・56層 1号土器集中区	磁器	碗類	中碗	端反形		32.5	(12.8)	-	5.0残		白	記号		手描き	呉須／透明釉	蔓草文						肥前系	1690～1780	
36	SG1ワキ	455/716	a区	1号石垣脇	磁器	碗類	中碗	端反形		31.0	(11.5)	(4.5)	6.5残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	山水文	墨弾き円形文	二重圏線内に宝珠文				瀬戸・美濃系	1820～1830	焼継あり
37	SG2ワキ9層	697/718	a区	2号石垣脇21層	磁器	碗類	中碗	端反形		42.9	(11.1)	4.2	5.5		白ガラス質		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	螺旋文	帯文	二重圏線内に宝珠文				瀬戸・美濃系	1840～1870	
38	12エリア2層	421	a区	1号建物跡東脇14層	磁器	碗類	小碗	平形		20.1	-	(3.3)	2.8残		白ガラス質			型紙印判	コバルト／透明釉	米俵・鼠文		微塵唐草文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
39	SG2ワキ一括	-	a区	2号石垣	磁器	碗類	碗	丸形		31.7	(9.3)	3.3	5.0		白ガラス質		畳付無釉	手描き	コバルト／クロム／透明釉	楓文						瀬戸・美濃系	1930～1940	
40	DS1	1304/1308/1318/1335/1365/1395/1401/1406/1425/1446/1492/1556/1631/1748/1751/1761/1764/1769/1814/1873	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	大碗	丸形		400.0	17.4	6.1	8.0		白		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	草文	蔓草文	二重圏線内にコンニャク印判五弁花文		つや消し	なし	肥前系	1690～1740	

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
41	DS1	1905	b区	1号土器集中区	磁器	碗類	仏飯器			34.5	-	-	1.8残		白灰			手描き	呉須／透明釉	圏線						肥前系	1690～1780	
42	SH	768/786/1903	b区	52層	磁器	碗類	仏飯器			31.1	(6.8)	-	2.5残		白				透明釉							肥前系	1690～1780	
43	SG1ワキ	434	a区	1号石垣脇	磁器	皿類	極小皿			25.2	(9.8)	(6.0)	2.4		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	扇文		圏線			肥前系	1690～1780	
44	1エリア8層	177	a区	1号道路20層	磁器	皿類	極小皿	隅切四方形		73.2	8.0	4.0	2.3		白ガラス質		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉		陽刻文に呉須塗り蔓草文	陽刻文に呉須塗り蔓草文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
45	SF1西	723	a区	1号道路西側	磁器	皿類	極小皿	輪花形		77.7	9.0	4.1	2.6		白ガラス質	高台内凸記銘	畳付無釉		透明釉		陽刻唐草文	陽刻花文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
46	SF1-9層	79	a区	1号道路21層	磁器	皿類	極小皿	隅切形		28.5	(7.4)	(3.8)	2.3		白ガラス質		畳付無釉		透明釉		陽刻葉文	陽刻葉文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
47	DS2	1265	b区	42層	磁器	皿類	小皿	丸形		33.7	(10.2)	(5.9)	2.0		白		畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	圏線	-	コンニャク印判花丸文	圏線			肥前系	1690～1740	
48	SL	887/945/980/1004/1006/1008/1022	b区	53層	磁器	皿類	小皿	腰張形		134.3	12.0	7.6	2.9		白	くずれ「太明年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	墨弾き菱形文	コンニャク印判五弁花文	圏線			肥前系	1690～1780	
49	DS1	1315/1374/1447/1483/1594/1669/1680/1704/1794/1800/1896/1901	b区	1号土器集中区	磁器	皿類	小皿	丸形		201.3	12.4	4.6	3.7		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉		格子文	蛇の目釉剥ぎ				肥前系	1690～1780	
50	DS1	1334/1353/1364/1408/1415/1437/1671/1769/1797	b区	1号土器集中区	磁器	皿類	小皿	丸形		201.9	12.4	4.4	3.5		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉		格子文	蛇の目釉剥ぎ		発泡あり	なし	肥前系	1690～1780	
51	DS1	1283/1289/1445/1573/1591/1598/1608/1844	b区	1号土器集中区	磁器	皿類	小皿	丸形		53.0	13.1	-	2.5残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉		格子文	蛇の目釉剥ぎ				肥前系	1690～1780	
52	南カベ	2	b区	b層	磁器	皿類	小皿	丸形		33.7	-	(7.8)	残1.9		白		蛇の目凹形高台	手描き	呉須／透明釉	唐草文		樹木文				肥前系	1780～1860	
53	KS1東1一括	-	a区	1号瓦集中区	磁器	皿類	小皿	丸形		35.0	(10.9)	(6.7)	1.8		白ガラス質	記号？	畳付無釉	型紙印判	コバルト／透明釉		網目文・唐花・文字	丸文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
54	12エリア7層	429	a区	1号建物跡東脇19層	磁器	皿類	小皿	-		6.9	-	-	1.2残		白ガラス質		畳付無釉	型紙印判	コバルト／透明釉			花文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
55	SF1上砂	19～23	a区	10層	磁器	皿類	小皿	平形		148.0	13.7	8.1	2.3		白ガラス質	カマヤ陶器岐1086	畳付無釉	吹絵付	コバルト／クロム／透明釉			霞み富士文				美濃	1940	統制番号製品
56	DS1	1543/1588	b区	1号土器集中区	磁器	皿類	五寸皿	-		63.6	-	7.4	1.9残		白	「太明(年製？)」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	圏線	-	山水文	圏線			肥前系	1690～1780	
57	SS	917/1005/1010	b区	54層	磁器	皿類	五寸皿	丸形		64.8	(12.7)	(7.9)	2.9		白	「太明(年？)製」	畳付無釉	手描き／印判	呉須／透明釉	唐草文	墨弾き菱形文	コンニャク印判五弁花文	圏線			肥前系	1690～1780	
58	ハイド	-		廃土	磁器	皿類	五寸皿	丸形		107.9	(13.6)	(7.5)	3.5		白	記号	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	網文・竹文	五弁花文	圏線			肥前系	1690～1780	
59	2エリア9層	190/191/708	a区	1号道路21層	磁器	皿類	五寸皿	丸形		65.9	-	(7.4)	1.8残		白	焼継印	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	蛸唐草文	環状松竹梅文	圏線			肥前系	1690～1780	焼継あり
60	DS1	1410/1636	b区	1号土器集中区	磁器	皿類	五寸皿	輪花形		55.6	(14.0)	-	3.2残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	花唐草文に窓絵			発泡あり	なし	肥前系	1690～1780	
61	SR3一括	-	a区	3号石列	磁器	皿類	五寸皿	輪花形		49.1	(13.8)	(7.6)	4.2		白	「(太明？)年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉／鉄彩	唐草文、口唇に鉄彩	花唐草文					肥前系	1690～1780	
62	西ヘキ9a層	1203	b区	39層	磁器	皿類	中皿	丸形		400.0	(24.0)	(14.0)	3.5		白	くずれ「太明成化年製」	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	唐草文・網目文	花文3つ	圏線			肥前系	1690～1780	
63	西ヘキ9a層	1039/1202	b区	39層	磁器	皿類	中皿	輪花形		200.0	(23.7)	(14.0)	3.6		白	二重角渦福文	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	唐草花文	六角唐花文	圏線			肥前系	1690～1780	
64	DS1	1312/1358/1484/1501/1504/1570/1609/1610/1662/1775/1790	b区	1号土器集中区	磁器	鉢類	香炉	偏平鼎形		550.3	(14.7)	6.6	8.5				畳付無釉		青磁釉		貼付けあり					肥前系	1690～1780	
65	10エリア7層	379	a区	1号道路19層	磁器	鉢類	火入	半筒形		28.7	-	(6.9)	2.9残		白		蛇の目凹形高台	手描き	呉須／透明釉	圏線						肥前系	1780～1860	
66	SG2ワキ	665	a区	2号石垣脇	磁器	鉢類	鉢	-		42.7	-	-	2.2残		白ガラス質		蛇の目凹形高台	型紙印判	コバルト／透明釉	摺絵文		微塵唐草文				瀬戸・美濃系	1870～1890	
67	DS1	1430/1431/1438/1473/1482/1820/1826/1857	b区	1号土器集中区	磁器	瓶類	小瓶	端反辣韮形		151.3	(2.1)	-	14.7残		白			手描き	呉須／透明釉	松竹梅文				発泡あり	なし	肥前系	1690～1780	
68	SH	762/770/772/777/799/800/852/859	b区	52層	磁器	瓶類	小瓶	四方面取辣韮形		228.4	1.0	1.7.2	3.8		白		底部無釉	手描き	呉須／透明釉	松・家屋文				発泡あり	変形小/激しいひび割れ	肥前系	1690～1780	
69	SA	748	b区	42層	磁器	瓶類	小瓶	四方面取辣韮形		39.4	-	(3.5)	4.3残		白		底部無釉	手描き	呉須／透明釉	草花文				発泡あり	変形小	肥前系	1690～1780	
70	DS1	1279/1326/1344/1352/1379/1428/1433/1443/1455/1575/1614/1625/1682/1758/1767/1776/1777/1780	b区	1号土器集中区	磁器	瓶類	中瓶	逆蕪形		255.3	-	5.3	10.0残		白		畳付無釉	手描き	呉須／鉄彩／透明釉	草文／胴部より下鉄彩						肥前系	1650～1690	
71	DS1	1288/1306/1310/1313/1319/1339/1354/1359/1382/1385/1388/1393/1394/1402/1419/1435/1467/1480/1503/1509/1513/1544/1550/1560/1580/1620/1634/1648/1665/1713/1734/1742/1752/1781/1786/1799/1803/1878/1879/1889/1897	b区	1号土器集中区	磁器	瓶類	大瓶	端反辣韮形		600.0	-	8.2	21.9残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	雪輪・竹・梅文						肥前系	1690～1780	
72	DS1	845/1290/1303/1407/1413/1434/1527/1533/1564/1574/1606/1745/1747/1759/1766/1768/1783/1787/1893	b区	1号土器集中区	磁器	瓶類	大瓶	端反辣韮形		216.0	6.0	-	14.9残		白			手描き	呉須／透明釉	梅文				つや消し	なし	肥前系	1690～1780	
73	DS1	1418/1884/1888	b区	1号土器集中区	磁器	瓶類	大瓶	端反辣韮形		33.2	6.3	-	4.2残		白			手描き	呉須／透明釉					つや消し	なし	肥前系	1690～1780	
74	SH,DS1	845/1290/1303/1407/1413/1434/1527/1533/1564/1574/1606/1745/1747/1759/1766/1768/1783/1787/1893	b区	52層 1号土器集中区	磁器	瓶類	大瓶	端反辣韮形		161.5	-	(7.3)	8.8残		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	草文				つや消し	なし	肥前系	1690～1780	
75	AN	1058	b区	56層	磁器	瓶類	瓶？	-		24.4	-	(8.8)	1.9残		にぶい黄橙		畳付無釉		呉須／透明釉	圏線						肥前系	1690～1780	
76	SA	756	b区	42層	磁器	瓶類	仏花瓶	逆蕪嘲叭口形		50.2	(7.3)	-	6.0残		白灰				青磁釉		両耳貼付け					肥前系	1690～1780	
77	SH,DS1	829/1277/1458/1628/1710/1752/1871	b区	52層 1号土器集中区	磁器	瓶類	髪油壺	胴丸形		91.7	2.6	4.4	7.7		白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	藁束文・梅樹文				つや消し	ひび割れ	肥前系	1690～1780	

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
78	西ヘキ9a層	873/1195	b区	39層	磁器	水注類	水滴	豆腐形		7.7	-	-	1.7残		白		型押し	手描き	呉須／透明釉			陽刻花文				肥前系	1680～1780	
79	SL	873/1195/ハイド	b区	53層	磁器	水注類	水滴	豆腐形		17.6	-	-	3.6残		白		型押し	手描き	呉須／透明釉			陽刻花文				肥前系	1680～1780	
80	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	磁器	釜類	釜	羽釜形		10.7	3.9	11.9	0.2		白													ミニチュア
81	1エリア8層	172	a区	1号道路20層	磁器	杓子類	散蓮華	-		3.0	2.7残	-	1.0残	2.0残	白				黄釉									焼継あり
82	東ヘキ6層	1919	b区	32層	磁器	蓋類	蓋物蓋	丸形		22.5	(7.9)	(6.6)	2.5残	-	白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉			樹木文				肥前系	1780～1860	
83	SG1ワキ	449/561/575	a区	1号石垣脇	磁器	蓋類	中碗蓋	端反形		21.3	(9.6)	-	2.9	(4.0)	白		畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	竹・竹文	雷文繋ぎ文	圏線				肥前系	1800～1860	
84	10エリア7/12層	372/374/375/390～395	a区	1号道路19・24層	磁器	蓋類	中碗蓋	丸形		40.8	(9.2)	-	2.1	3.2	白ガラス質	異形字	畳付無釉	手描き	呉須／透明釉	唐草文	四方襷文	圏線内に環状松竹梅文				瀬戸・美濃系	1820～1860	
85	1エリア10層	148	a区	22層	磁器	蓋類	水注蓋	平形		6.3	(5.9)	-	0.8残		白ガラス質			手描き	コバルト／透明釉			草文				瀬戸・美濃系	1870～	
86	SG2ワキ	667	a区	2号石垣脇	磁器	蓋類	水注蓋			11.7	(5.8)	-	1.2残		白			手描き	コバルト／透明釉			草花文				関西系	1870～	
87	SG1ワキ上埋土	655	a区	9層	磁器	蓋類	蓋	四角形		30.3	-	-	1.9		白ガラス質		畳付無釉	手描き	クロム・透明釉／赤絵			花文				瀬戸・美濃系	1870～	焼継あり
88	DS1	1281/1286/1646/1676/1842	b区	1号土器集中区	陶器	碗類	小碗	丸形		74.5	7.5	3.0	4.8		灰白		底部無釉		灰釉					発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1680～1780	
89	9エリア8層	334	a区	1号道路20層	陶器	碗類	小碗	丸形		9.0	-	-	3.3残		灰白				鉄彩／灰釉	下部に鉄彩						瀬戸・美濃系？	1680～1780	
90	DS2	1239/1241/1246/1921	b区	42層	陶器	碗類	小碗	腰張形		63.9	(8.7)	4.0	5.9		灰白		底部無釉		鉄釉							瀬戸・美濃系	1680～1780	
91	4エリア9層	234～237	a区	1号道路21層	陶器	碗類	小碗	腰折形		34.4	(10.4)	-	4.3残		灰黄			掛分け	鉄釉／灰釉	縦に鉄釉／灰釉掛分け	縦に鉄釉／灰釉掛分け					瀬戸・美濃系	1750～1780	
92	SL	874～879/982～986	b区	53層	陶器	碗類	小碗	胴細形半筒形		93.1	(9.4)	5.0	6.1		灰白		畳付無釉		灰釉	凸帯あり　横S字文						瀬戸・美濃系	1780～1820	
93	AN	1047/1122	b区	56層	陶器	碗類	碗	丸形		28.9	-	-	5.5残		灰白		底部無釉		鉄釉							瀬戸・美濃系	1610～1680	
94	SS	936/1085	b区	54層	陶器	碗類	碗	丸形		31.7	-	-	6.2残		灰白		底部無釉		鉄釉／藁灰釉	鉄釉に藁灰釉掛け	鉄釉に藁灰釉掛け					瀬戸・美濃系	1680～1780	
95	SS	928/1023	b区	54層	陶器	碗類	中碗	腰張形		30.9	-	(4.6)	2.8残		灰白	草書体銘「清水」	底部無釉		灰釉							肥前系	1650～1690	
96	AN	1045/1099/1100/1229	b区	56層	陶器	碗類	中碗	腰張形		107.7	10.7	4.7	6.4		灰白		底部無釉		鉄釉							瀬戸・美濃系	1680～1780	
97	AN	1046/1240/1242～1244	b区	56層	陶器	碗類	中碗	腰張形		50.2	(11.9)	-	4.7残		灰白				暗灰釉							瀬戸・美濃系	1680～1780	
98	AN	1026	b区	56層	陶器	碗類	中碗	呉器形		91.3	-	3.8	4.5残		灰白		畳付無釉		灰釉							肥前系	1650～1690	
99	SL	871/872/911～914	b区	53層	陶器	碗類	中碗	呉器形		86.1	-	4.0	5.7残		灰白		畳付無釉		灰釉							肥前系	1650～1690	
100	DS1	1581/1728/1765/1876	b区	1号土器集中区	陶器	碗類	中碗	浅半球形		119.4	11.0	4.4	4.4		灰白		底部無釉		呉須／灰釉			花文		つや消し	変形小	瀬戸・美濃系	1680～1780	
101	西ヘキ9a層	1223	b区	39層	陶器	碗類	中碗	半筒形		188.2	(9.7)	5.3	7.0		淡黄		底部無釉	手描き	鉄絵／灰釉	「雨洗　婿々　？津」絵	口縁部に鉄彩					京焼系	1680～1780	
102	SA	736/737/1181	b区	42層	陶器	碗類	碗	杉形		30.4	-	-	4.8残		灰白				呉須／灰釉	口縁部に呉須掛け	口縁部に呉須掛け					瀬戸・美濃系	1700～1770	
103	西ヘキ9a層	1211	b区	39層	陶器	碗類	拳骨形碗	-		12.0	-	-	4.2残		明褐灰			刷毛目	白泥／灰釉	横刷毛目	横刷毛目					肥前系	1680～1740	
104	東ヘキ	1922	b区	47層	陶器	碗類	碗	-		19.1	-	-	4.7残		にぶい赤褐			刷毛目	白泥／灰釉	横櫛刷毛目	横刷毛目					肥前系	1680～1740	
105	DS1	1284/1285/1298/1301/1542/1554/1555/1832/1911	b区	1号土器集中区	陶器	碗類	仏飯器	台底抉り込み		85.6	7.3	4.0	5.1		明褐灰		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1700～1780	
106	西ヘキ9a層	1217	b区	39層	陶器	腕類	仏飯器	台底抉り込み		9.9	-	(5.0)	1.6残		灰黄		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1700～1780	
107	DS1	1421	b区	1号土器集中区	陶器	皿類	小皿	丸形		28.9	7.4	2.9	1.8		灰白		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1780～1860	
108	SS	966/967/ハイド	b区	54層	陶器	皿類	小皿	丸形		44.6	(12.2)	6.5	2.5		黄灰		底部無釉	型紙印判	鉄絵／灰釉			摺紙文様				瀬戸・美濃系	1680～1780	
109	SS	953/991/1019	b区	54層	陶器	皿類	小皿	花菱形		97.1	-	(5.3)	4.0残		灰白		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1700～1730	
110	SH	764/813/824～827/834/957	b区	52層	陶器	皿類	小皿	盤形		100.6	10.0	4.6	2.1		灰白		底部無釉		黄釉					発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1700～1770	
111	4エリア8層	243/244	a区	1号道路20層	陶器	皿類	小皿	丸形		49.6	(11.5)	(5.3)	2.6		暗灰黄		底部無釉		うのふ釉							瀬戸・美濃系	1680～1780	煤付着
112	SF1-9層	1089	a区	1号道路21層	陶器	皿類	灯明皿	-		20.2	(9.8)	(4.0)	2.1残		灰色				鉄釉							瀬戸・美濃系	1750～	
113	SF1-9層	1002/110	a区	1号道路21層	陶器	皿類	灯明皿	-		9.4	(10.8)	(7.0)	1.8残		褐灰				鉄釉							瀬戸・美濃系	1750～	
114	SF1-6層	71	a区	1号道路18層	陶器	皿類	灯明皿	-		16.5	(10.8)	(5.0)	2.0残		にぶい褐				鉄釉							瀬戸・美濃系	1750～	煤付着
115	DS1	1302/1456/1471/1619/1664/1674/1805	b区	1号土器集中区	陶器	皿類	灯明皿	摘付き		113.0	11.0	4.8	2.8		灰白		底部無釉		黄釉	1ケ所に突起				発泡あり	なし	志戸呂系	1730～1780	
116	DS1	1404/1439/1449/1465/1525	b区	1号土器集中区	陶器	器台類	灯明受皿	油溝アーチ状？		74.3	(11.0)	5.4	2.4	7.1	灰褐		底部無釉		鉄釉						あり	瀬戸・美濃系		煤付着
117	1面一括	-	a区	1面	陶器	器台類	灯明受皿	油溝切立状？		43.0	(10.0)	(4.6)	2.4	(6.0)	褐灰		底部無釉		鉄釉							瀬戸・美濃系？	1750～	
118	SG1ワキ4層	465/466/585	a区	1号石垣脇16層	陶器	器台類	灯明受皿	-		31.7	(8.9)	3.2	2.3		褐灰		底部無釉		鉄釉							瀬戸・美濃系？	1750～	
119	DS1	1267/1355/1383/1366/1426/1454/1461/1475/1492/1496/1505/1517/1501/1522/1545/1570/1583/1639/1671/1622/1712/1735/1754/1773/1785/1880	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	大鉢	丸形		1400.0	27.3	12.6	13.5		灰白		底部無釉		灰釉					つや消し	変形小	瀬戸・美濃系	1680～1780	
120	SA	739/1221	b区	42層	陶器	鉢類	大鉢	溝縁形		106.2	(25.8)	-	4.7残		灰白			櫛描き	灰釉		波状櫛描き					瀬戸・美濃系	1770～1800	
121	DS1	1834/1835/1840/1841/1848/1849/1852～1854/1858/1862～1868	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	片口鉢	丸形口縁切込		600.0	16.5	9.0	10.9		灰白		底部無釉		鉄釉					つや消し	なし	瀬戸・美濃系	1780～1820	
122	SG1ワ　キ・SG2ワキ一括	445/515	a区	1・2号石垣脇	陶器	鉢類	餌擂鉢	口縁無装飾		49.8	(14.0)	(6.2)	5.3		浅黄		底部無釉		鉄釉		放射状摺り目					瀬戸・美濃系	1750～1868	
123	DS1	1270/1309/1356/1460/1622/1635/1685/1705/1772/1807/1808/1825/1877/1894	b区	1号土器集中区	石器	鉢類	擂鉢	口縁内凸帯		544.5	(21.8)	(11.0)	10.3		褐灰		底部無釉		鉄釉	口縁部に鉄釉掛け	放射状摺り目					堺・赤石系	1750～	
124	SH	801/971/1081/1062/1232/1250/1254～1263	b区	52層	陶器	鉢類	擂鉢	折縁形		2400.0	33.8	13.8	15.3		灰白				鉄釉		放射状摺り目	回転状摺目				瀬戸・美濃系	1710～1740	
125	SS	929	b区	54層	陶器	鉢類	擂鉢	-		304.8	-	(15.0)	6.0残		浅黄		底部無釉		鉄釉		放射状摺り目					瀬戸・美濃系	1710～1740	

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
126	南ヘキ・東ヘキ5層	3/1918	b区	b層・30層	陶器	鉢類	擂鉢	-		154.9	(28.0)	-	6.6残		浅黄											瀬戸・美濃系	1710～1740	
127	SL	894	b区	53層	陶器	鉢類	擂鉢	-		248.4	-	(13.0)	10.8残		浅黄		底部無釉		鉄釉		放射状摺り目					瀬戸・美濃系	1710～1740	
128	SG1ワキ2層	616	a区	1号石垣14層	陶器	鉢類	擂鉢	-		800.0	-	13.8	9.7残		淡黄		底部無釉		鉄絵／灰釉	草文	全面摺目	全面摺目				瀬戸・美濃系	1780～1860	
129	DS1	1266/1268/1269/1370/1378/1489/1665/1818/1819/1827/1829/1847/1856/1898	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	香炉	三足半筒形		256.3	11.4	(10.5)	8.0		灰白		底部無釉		灰釉					発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1690～1780	
130	DS1	1466/1522/1589/1620/1626/1627/1720/1724/1732/1810	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	香炉	三足半筒形		125.1	8.6	6.3	4.3		灰		底部無釉		灰釉					発泡あり	変形小	瀬戸・美濃系	1690～1780	
131	SH	816～819	b区	52層	陶器	碗類	香炉	-		28.1	(9.6)	-	4.8残		浅黄											瀬戸・美濃系	1710～1740	
132	SS	985/989/1002	b区	54層	陶器	鉢類	香炉	三足半筒形		131.5	(11.4)	8.0	6.7		灰白		底部無釉	彫刻	黄釉	削り花模様						瀬戸・美濃系	1710～1740	
133	SF1-9層	99	a区	1号道路21層	陶器	鉢類	香炉	三足半筒形		14.9	(11.0)		4.3残		灰色				黄釉	削り花模様						瀬戸・美濃系	1710～1740	
134	AN	1128/1129	b区	56層	陶器	鉢類	香炉	三足半筒形		98.1	-	(8.9)	5.8残		浅黄		底部無釉	彫刻	黄釉	削り花模様						瀬戸・美濃系	1710～1740	
135	DS1	1616/1718/1719/1725/1736/1838	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	火入	半筒形		272.9	10.3	5.1	6.7		黒褐		底部無釉	刷毛目	白泥／灰釉	横櫛刷毛目						肥前系	1690～1740	
136	SS	949/979	b区	54層	陶器	鉢類	香炉	浅筒形		128.6	-	(8.6)	3.6残		浅黄		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1690～1780	
137	南カベ	1	b区	b層	陶器	鉢類	火鉢？	-		25.0	-	-	4.8残	-	明褐灰				鉄彩／銅釉／灰釉	灰釉地に銅釉たらし	横鉄彩・灰釉					瀬戸・美濃系？	1780～1860	
138	DS1	1272/1291/1292/1424/1552/1562/1568/1643	b区	1号土器集中区	陶器	鉢類	蓋物鉢	丸形		257.8	12.0	7.6	8.7	12.2	灰白		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1680～1780	
139	SS	924	b区	54層	陶器	鉢類	鉢	-		154.0	-	-	3.7残		褐灰		底部無釉	刷毛目	白泥／灰釉		回転刷毛目					肥前系	1690～1740	
140	西ヘキ9a層	1222	b区	39層	陶器	鉢類	鉢	-		91.6	-	-	3.3残		黄灰		底部無釉		灰釉			丸い目跡あり				瀬戸・美濃系	1780～1860	
141	12エリア7層	424	b区	1号建物跡東脇19層	陶器	鉢類	鉢	-		71.1	-	(9.0)	2.7残		褐灰		底部無釉		灰釉			目跡あり				瀬戸・美濃系	1780～1860	
142	DS1	1366	b区	1号土器集中区	陶器	甕類	不明	-		110.8	-	-	6.8残		褐灰				鉄釉									
143	DS1	1325/1381/1391/1396/1400/1405/1417/1444/1488/1495/1547/1548/1563/1568/1571/1610/1615/1737/1774/1778/1784/1796/1798/1806	b区	1号土器集中区	陶器	壺類	中壺	双耳形		669.6	8.8	10.9	17.4		灰白		底部無釉		黄釉	両側に把手				発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1780～1860	
144	AN	1037/1078	b区	56層	陶器	壺類	中壺	肩衝形		18.4	(9.2)	-	2.7残		にぶい黄橙				鉄釉									
145	ハイド	-		廃土	陶器	瓶類	中瓶	べこかん		20.6	1.8	-	5.1残		灰黄											瀬戸・美濃系	1780～	
146	DS1	1271/1274/1333/1478/1561/1565/1587/1602/1641/1650/1686/1688/1779/1817/1828/1830/1831/1833/1834/1850/1851	b区	1号土器集中区	陶器	瓶類	中瓶	撫肩形		448.7	3.4	6.1	18.7		灰		底部無釉		灰釉					発泡あり	激しい割れ	瀬戸・美濃系	1730～1780	
147	AN,DS1	1097/1098/1293/1320/1481/1553/1709/1710/1716/1722/1726/1729/1730/1811	b区	56層 1号土器集中区	陶器	瓶類	仏花瓶	瓶子丸耳形		336.6	(9.0)	6.9	15.5		灰白		轆轤糸切	掛分け	鉄釉／灰釉	両耳貼付け　下部に鉄釉						瀬戸・美濃系	1780～1800	
148	DS1	1757	b区	1号土器集中区	陶器	瓶類	仏花瓶	瓶子丸耳形		233.1	-	-	12.5残		灰白				灰釉	両耳貼付け						瀬戸・美濃系	1780～1800	
149	DS1	1343/1372/1491/1572/1607/1678/1723/1739/1740/1741/1791/1822/1836/1855/1875/1882/1887/1891/1892	b区	1号土器集中区	陶器	瓶類	掛花生	竹筒形		373.9	5.9	8.1	16.3		灰白		底部無釉		鉄釉	竹節突起あり				発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1690～1780	
150	SG2ワキ9層	712	a区	2号石垣脇21層	陶器	水注類	土瓶	丸形		154.3	7.6	-	9.5残	-	にぶい橙		底部無釉	手描き	白泥／鉄絵／緑絵／透明釉	山水文						益子系	1910～	
151	SG1ワキ2層	614	a区	1号石垣14層	陶器	水注類	土瓶	丸形		119.2	-	7.6	7.3残	-	にぶい橙		底部無釉	手描き	白泥／鉄絵／緑絵／透明釉	山水文						益子系	1910～	
152	SH,DS1	847/1336/1379/1380/1384/1390/1399/1420/1422/1457/1586/1595/1611/1633/1661/1673/1770/1788/1809/1824/1843/1870/1872	b区	52層 1号土器集中区	陶器	水注類	土瓶	丸形		600.0	8.2	6.9	10.9	18.0	灰		底部無釉	手描き	鉄絵／緑釉／灰釉	竹葉文				発泡あり	なし		19c	
153	SG1ワキ	597	a区	1号石垣脇	陶器	鍋類	土鍋	-		1.4	-	-	1.1残		橙		貼付		透明釉									ミニチュア
154	2エリア11層	194～199	a区	1号道路23層	陶器	鍋類	行平	丸形		22.2	-	-	3.6残		にぶい橙				鉄釉	注口・口縁に施釉							19c	
155	DS1	1316/1317/1474/1528/1874	b区	1号土器集中区	陶器	鍋類	不明	横付き把手		37.5	-	-	2.5残		灰白				鉄釉	把手貼付け								
156	SG1ワキ4層	598～600	a区	1号石垣脇16層	陶器	秉燭類	秉燭	-		9.3	-	-	3.6残	-	褐灰				鉄彩							瀬戸・美濃系	1780～1860	
157	SB1床面一括	-	a区	1号建物跡	陶器	秉燭類	秉燭	たんころ形		58.2	5.0	4.0	3.0	0.8	にぶい褐		底部無釉		鉄釉									
158	DS1	1311/1423/1448/1501/1557/1590/1721/1792	b区	1号土器集中区	陶器	蓋類	蓋物蓋	丸形		210.7	14.8	-	3.0残		灰白			型紙印判	鉄絵／灰釉			型紙文様		発泡あり	なし	瀬戸・美濃系	1700～1750	ID138の蓋
159	DS1	1351/1409/1411/1441/1702	b区	1号土器集中区	陶器	蓋類	中壺蓋	落とし蓋		91.1	9.4	4.8	2.5	1.4	灰白		底部無釉		灰釉							瀬戸・美濃系	1780～1860	ID143の蓋か？
160	2エリア9層	188	a区	1号道路21層	陶器	蓋類	土瓶蓋	-		11.6	(8.6)	(6.6)	1.9残	-	にぶい橙				緑釉								19c～	
161	DS1	1332/1333/1342/1453	b区	1号土器集中区	陶器	蓋類	蓋	-		70.1	8.8	7.4	1.6残	-	灰白				緑釉					発泡あり	なし		19c	
162	SG1ワキ	471	a区	1号石垣脇	陶器	蓋類	蓋	-		12.7	-	-	1.7残	1.7	浅黄				鉄絵／緑釉／灰釉			渦巻き文				信楽系	19c～	
163	12エリア	411	a区	1号建物跡東脇24層	陶器	蓋類	蓋	平形		8.3	(6.1)	-	0.9残	-	黄灰				呉須／灰釉			釉薬掛分け					19c～	
164	1エリア8層	171	a区	1号道路20層	炻器	蓋類	急須蓋	丸形		6.6	(4.5)	(3.7)	2.3残	-	にぶい赤褐											常滑系	1910～	
165	SG1ワキ	468	a区	1号石垣脇	炻器	水注類	土瓶	-		5.4	-	-	1.6残	-	にぶい黄橙					横線						常滑系	19c～	
166	5エリア2層	278	a区	1号道路14層	炻器	水注類	土瓶	-		10.5	-	-	4.6残	-	褐灰				鉄釉							常滑系	19c～	煤付着
167	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	炻器	瓶類	瓶	四方形		67.3	4.6残	-	6.3残	10.7残	にぶい赤褐		全面無釉	彫刻		松文「・・目の儀ひや松・・」						備前系	1830～	
168	DS1	1360/1362/1363/1367/1369/1462～1464/1479/1494/1499/1506/1508/1516/1520/1521/1524/1526/1534/1538/1539/1546/1549/1576～1578/1592/1596/1597/1603/1613/1634/1640/1648/1649/1653/1665/1684/1689/1699～1701/1706/1715/1731/1733/1744/1755/1771/1793	b区	1号土器集中区	炻器	甕類	大甕	口縁断面T字形		4800.0	54.2	-	22.4残		灰				自然灰釉					発泡あり	変形大/激しい割れ/表面剥離	常滑系	18c～19c	

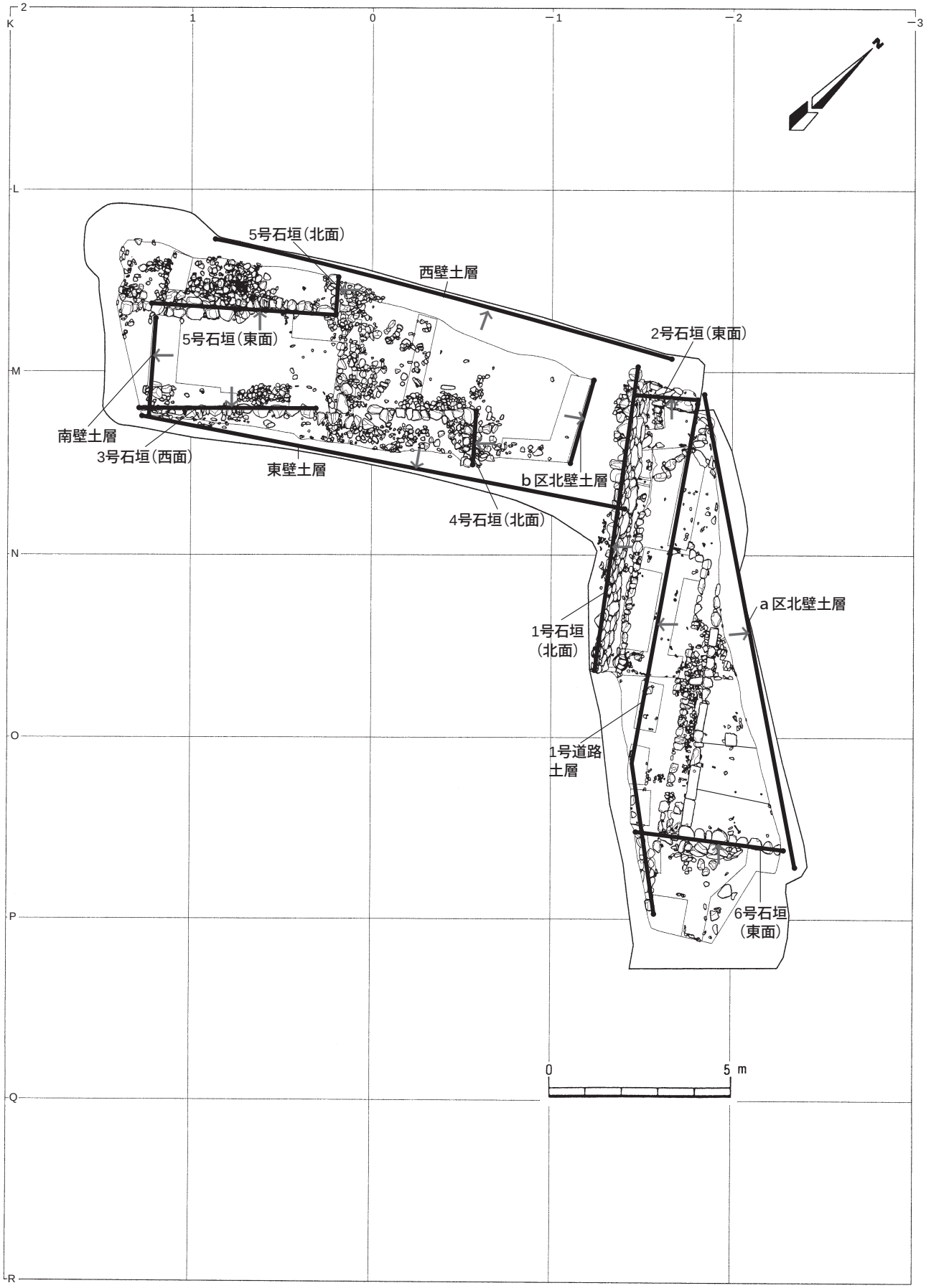
遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
169	SS・SR	959/1018	b区	54・55層	土器	皿	極小皿	平形無高台		35.3	（6.8）	（4.6）	1.8		明赤褐		ロクロ底糸切											
170	西ヘキ9b層	1207	b区	40層	土器	皿	小皿	平形無高台		18.7	（10.0）	（8.0）	2.2		明赤褐		ロクロ底糸切											
171	AN	1101～1105	b区	56層	土器	皿	小皿	平形無高台		20.3	（8.4）	（5.0）	2.1		灰褐		ロクロ底糸切											
172	HS1一括	-	a区	1号廃棄	土器	蓋類	火消壺蓋			963.4	（19.0）	11.6	6.1残	5.6	赤褐色													
173	SG1ワキ	469/470	a区	1号石垣脇	土器	鉢類	火鉢	胴丸形		91.6	（15.0）	-	7.0残		にぶい褐													煤付着
174	HS1一括	-	a区	1号廃棄	土器	鉢類	七厘	-		3600.0	-	19.0	16.3残		赤褐色		ロクロ											煤付着
175	DS1	1497/1500/1502/1523/1529/1530/1569/1593/1617/1637/1647/1653/1659/1666/1668/1681/1687/1690～1694/1697/1698/1717/1739/1829/1913～1916	b区	1号土器集中区	土器	鉢類	火鉢	方形		1400.0	29.2	27.2	11.7		灰白													煤付着
176	SG1ワキ2層	615	a区	1号石垣脇14層	土器	鉢類	焜炉	竈形？		1210.9	（29.0）	（22.8）	20.4残		にぶい褐													
177	SG1ワキ上砂層	617/618	a区	10層	土器	鉢類	七厘	筒形		3800.0	27.5	22.0	24.5		にぶい橙													煤付着
178	UK1	621/622/624/625/628/631/633/635/637/638/640～642/644～648	a区	1号埋甕	陶器	甕類	大甕	-		6600.0	（44.4）	23.0	42.1残		にぶい褐													
179	DS1	1273/1307/1469/1470/1472/1477/1536/1541/1551/1628/1642/1654/1656～1658/1696/1704/1727/1746/1756/1801/1815/1822/1823/1861/1881/1899	b区	1号土器集中区	土器	鍋類	焙烙	内耳形		800.0	34.8	31.1	6.1		橙						内耳							
180	SG2ワキ2層	684	a区	2号石垣脇14層	土製品（泥めんこ）	面摸	縁起物	獅子頭		1.1	1.5	1.2	0.7		橙		型押し											
181	8エリア1層	348	a区	1号道路13層	土製品（泥めんこ）	面摸	神仏	大黒天		0.6	1.1	1.4	0.5		橙		型押し											
182	SG1ワキ	508	a区	1号石垣脇	土製品（泥めんこ）	面摸	縁起物	達磨		0.6	1.0	1.4	0.5		橙		型押し											
183	10エリア7層	381	a区	1号道路19層	土製品（泥めんこ）面摸	紋章				0.5	1.1	1.1	0.4		橙		型押し											
184	SG1ワキ	540	a区	1号石垣脇	土製品	ボタン	-	-		0.2	1.0	1.0	0.5		にぶい橙					赤彩								
185	SG1ワキ	456	a区	1号石垣脇	土製品	人形類	-	-		4.8	（3.3）	1.3	（2.4）		にぶい橙													
186	SG1ワキ	462	a区	1号石垣脇	土製品	人形類	-	-		2.5	（2.0）	0.6	（2.8）		にぶい橙													
187	西ヘキ9b層	1204	b区	40層	土製品	人形類	-	-		18.5	2.7残	2.0残	4.5残		にぶい橙													
188	HS1一括	-	a区	1号廃棄	石製品類	小形加工品	砥石			182.4	5.30	1.83	11.77残															
189	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	石製品類	小形加工品	砥石			159.6	3.04	2.74	10.26															
190	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	石製品類	小形加工品	砥石			168.4	3.38	2.53	11.87															
191	AN	1121-2	b区	56層	石製品類	小形加工品	棒状礫			79.6	3.97残	2.49残	12.25残															
192	SG1ワキ2層一括	-	a区	1号石垣脇14層	石製品類	小形加工品	棒状礫			170.1	4.17	2.90	11.26															
193	DS1	1567	b区	1号土器集中区	石製品類	小形加工品	棒状礫			273.4	4.83	2.42	14.51															
194	DS1	1566	b区	1号土器集中区	石製品類	小形加工品	棒状礫			318.2	3.43	3.58	15.14															
195	ハイド	-		廃土	石製品類	小形加工品	棒状礫			379.8	5.60	3.69残	15.04残															
196	SS	962～964	b区	54層	石製品類	小形加工品	硯？			36.3	4.25	1.07	8.81															
197	DS1	1813	b区	1号土器集中区	石製品類	小形加工品	砥石			333.0	7.29	7.28	4.37															
198	SR3一括	-	a区	3号石列	石製品類	小形加工品	不明			698.9	5.80	5.63	17.16															
199	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	石製品類	小形加工品	石筆			1.1	0.4	-	3.3残															
200	7エリアKS1	307	a区	1号瓦集中区	石製品類	小形加工品	石筆			1.4	0.5	-	3.1残															
201	SF1西一括	-	a区	1号道路西側	石製品類	小形加工品	石筆			1.4	0.5	-	1.7残															
202	SG1ワキ	614	a区	1号石垣脇	石製品類	小形加工品	石筆			1.1	0.6	-	1.5残															
203	SF1－1層	35	a区	1号道路13層	石製品類	小形加工品	石筆			0.9	0.6	-	1.3残															
204	SB1-1層一括	-	a区	1号建物跡28層	石製品類	小形加工品	ボタン			5.6	2.25	0.63	2.25															
205	西ヘキ10a層	1134	b区	42層	石製品類	大形加工品	石臼			4497.8	14.7残	14.4残	11.4残															
206	2エリア9層	1945	a区	1号道路21層	銭貨(金)	一分判金	元禄			4.44	16.4×10.2	-	1.4															
207	SS	922	b区	54層	銭貨(銅)	穴あき銭	古寛永			2.4	23.1	5.6	0.6															
208	SL	881-1	b区	53層	銭貨(銅)	穴あき銭	古寛永			3.1	24.3	5.8	0.7															
209	SF1－8層	74	a区	1号道路20層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永	文銭		3.7	24.0	5.8	1.1															背文
210	SL	881-2	b区	53層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永	文銭		3.4	24.9	5.4	1.1															背文
211	10エリア7層	382	a区	1号道路19層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.5	23.1	6.0	0.9															
212	1エリア10層	176	a区	1号道路22層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.0	21.2	6.7	0.6															歪み
213	1エリア10層	150	a区	1号道路22層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.0	21.8	5.9	0.5															
214	SG1ワキ	505	a区	1号石垣脇	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.1	22.5	6.7	0.6															
215	SH	863	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.2	22.2	6.7	0.7															
216	SH	844	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.7	24.5	6.5	0.9											歪み				接合痕
217	SH	807	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.9	23.3	6.4	0.8											歪み				
218	SH	779	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.1	23.1	6.7	0.7															
219	SH	802	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.8	23.4	6.2	0.9															

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
220	SH	769	b区	52層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			1.3	23.4	-	1.0												歪み			接合痕
221	AN	1087	b区	56層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.6	24.6	6.0	0.7															
222	北ヘキ3･5層	1165	b区	54･56層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.9	23.1	6.0	0.8															
223	DS１	1904	b区	1号土器集中区	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.7	23.1	5.8	0.7												ひび割れ			
224	SL	881-3	b区	53層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			2.9	23.4	6.2	0.6															
225	SL	881-4	b区	53層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			3.4	25.3	6.1	0.8															
226	SL	881-5	b区	53層	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永			3.2	25.1	6.2	0.7															
227	9エリア4層	346	a区	1号建物跡15層	銭貨(銅)	穴あき銭	不明銭			2.5	22.8	5.6	1.1															
228	SG2ワキ	668	a区	2号石垣脇	銭貨(銅)	穴あき銭	新寛永	四 文 銭･21波		4.0	27.1	6.2	1.1															
229	SG1ワキ2層	553	a区	1号石垣脇14層	銭貨(銅)	穴あき銭	文久永寶	11波･草文		2.9	26.6	7.3	0.7															
230	SS	969	b区	54層	銭貨(銅)	穴あき銭	雁首銭			2.3	20.8	8.0	1.3															
231	DS１	1912	b区	1号土器集中区	銭貨(銅)	近代硬貨	半銭銅貨			3.6	22.0	-	0.9															明治十年
232	SF1－1層	48	a区	1号道路13層	銭貨(銅)	近代硬貨	半銭銅貨			3.3	22.0	-	1.1															明治15年
233	西ヘキ9ｂ層	1206	b区	40層	銭貨(銅)	近代硬貨	半銭銅貨			3.3	21.7	-	0.7															明治17年
234	SG1ワキゾウ	676	a区	1号石垣脇13層	銭 貨(ア ル ミ) 砂	近代硬貨	一銭			0.9	17.2	-	1.3															昭和15年
235	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	銭 貨(ア ル ミ)	近代硬貨	一銭			0.6	15.5	-	1.2															昭和17年
236	12エリア1層一括	427	a区	1号建物跡 東脇28層	銭貨(銅)	近代硬貨	五円銅貨			3.3	21.6	5.1	1.1															歪み
237	SG1ワキ一括	-	a区	1号石垣脇	銭貨(銅)	近代硬貨	五円銅貨			2.4	21.6	4.8	1.4															昭和25？年/接合痕
238	AN	1054	b区	56層	金属(銅)	煙管				5.3	55.7×17.7	-	13.7															
239	8エリア9層	322	a区	1号道路21層	金属(銅)	煙管				5.4	49.1×10.8	-	10.4															
240	SH	856	b区	52層	金属(銅)	鋲				0.5	18.7×9.6	-	4.7															
241	SH	773	b区	52層	金属(銅)	鋲				0.3	11.2×10.6	-	0.1															
242	SH	776	b区	52層	金属(銅)	鋲				0.4	10.7×10.4	-	0.3															
243	SH	857	b区	52層	金属(銅)	鋲				0.3	11.7×11.4	-	0.1															
244	SS	944	b区	54層	金属(銅)	鋲				0.3	10.4×10.3	-	0.1															
245	SL	883	b区	53層	金属(銅)	こはぜ				0.9	22.1×19.8	-	0.6															歪み
246	SF1－10層	113	a区	1号道路22層	金属(銅)	砂子				13.0	75.3×72.0	-	0.4															接合痕
247	SH	778	b区	52層	金属(鉄)	釘				1.1	34.1×5.7	-	4.1															
248	SH	798	b区	52層	金属(鉄)	釘				1.5	41.5×8.8	-	3.7															
249	1エリア9層	119	a区	1号道路21層	金属(鉄)	釘				11.0	58.1×8.5	-	9.1															
250	SH	812	b区	52層	金属(鉄)	釘				21.1	107.2×15.1	-	14.9															接合痕
251	10エリア7層	359	a区	1号道路19層	金属(鉄)	釘				14.2	119.8×13.3	-	9.2															
252	8エリア9層	313	a区	1号道路21層	金属(鉄)	釘				15.5	73.5×12.0	-	12.5															
253	1エリア9層	169	a区	1号道路21層	金属(鉄)	釘				7.2	56.1×12.1	-	7.4															
254	SA	742	b区	42層	金属(銅)	鐔				1.7	38.3×22.5	-	0.1															歪み
255	5エリア	279	a区	22層	金属(鉄)	鎹？				23.1	73.2×18.3	-	8.1															
256	SH	782	b区	52層	骨角	ボタン？				0.7	0.5	1.3	1.5															
257	SG2ワキゾウ	675	a区	2号石垣脇13層	骨角	つまようじ				0.3	-	-	-	0.1														
258	SG1ワキ2層	615	a区	1号石垣脇14層	プラスチック	バッチ？				3.9	1.9	(2.0)	0.6															
259	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	薬品用	目薬ビン			25.2	-	2.6	1.8	8.0														
260	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	薬品用	薬瓶			93.9	2.0	4.1	11.1	5.0														
261	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	薬品用	薬瓶			118.9	2.9	4.3	11.3		「＋」(底面)													
262	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	飲料品用	飲料瓶			409.4	2.6	5.0	23.3	6.2	※1													
263	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	飲料品用	飲料瓶			648.8	2.4	6.6	27.0		※2													
264	HS1一括	-	a区	1号廃棄	ガラス	飲料品用	飲料瓶			566.9	2.6	6.5	27.0	7.9	※3													
265	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	ビー玉			16.6	16.6																	
266	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	ビー玉			7.2	1.8																	
267	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	ビー玉			2.7	1.3																	
268	SF1－1層	45	a区	1号道路13層	ガラス	玩具	ビー玉			2.3	1.2																	
269	SF1一括	-	a区	1号道路	ガラス	玩具	ビー玉			3.3	1.4																	
270	SF1西一括	-	a区	1号道路西側	ガラス	玩具	ビー玉			2.3	1.2																	
271	8エリア4層	309	a区	1号道路16層	ガラス	玩具	ビー玉			6.7	1.7																	
272	SG１ワキ	436	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			5.7	1.6																	
273	SG１ワキ	440	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			15.8	2.4																	

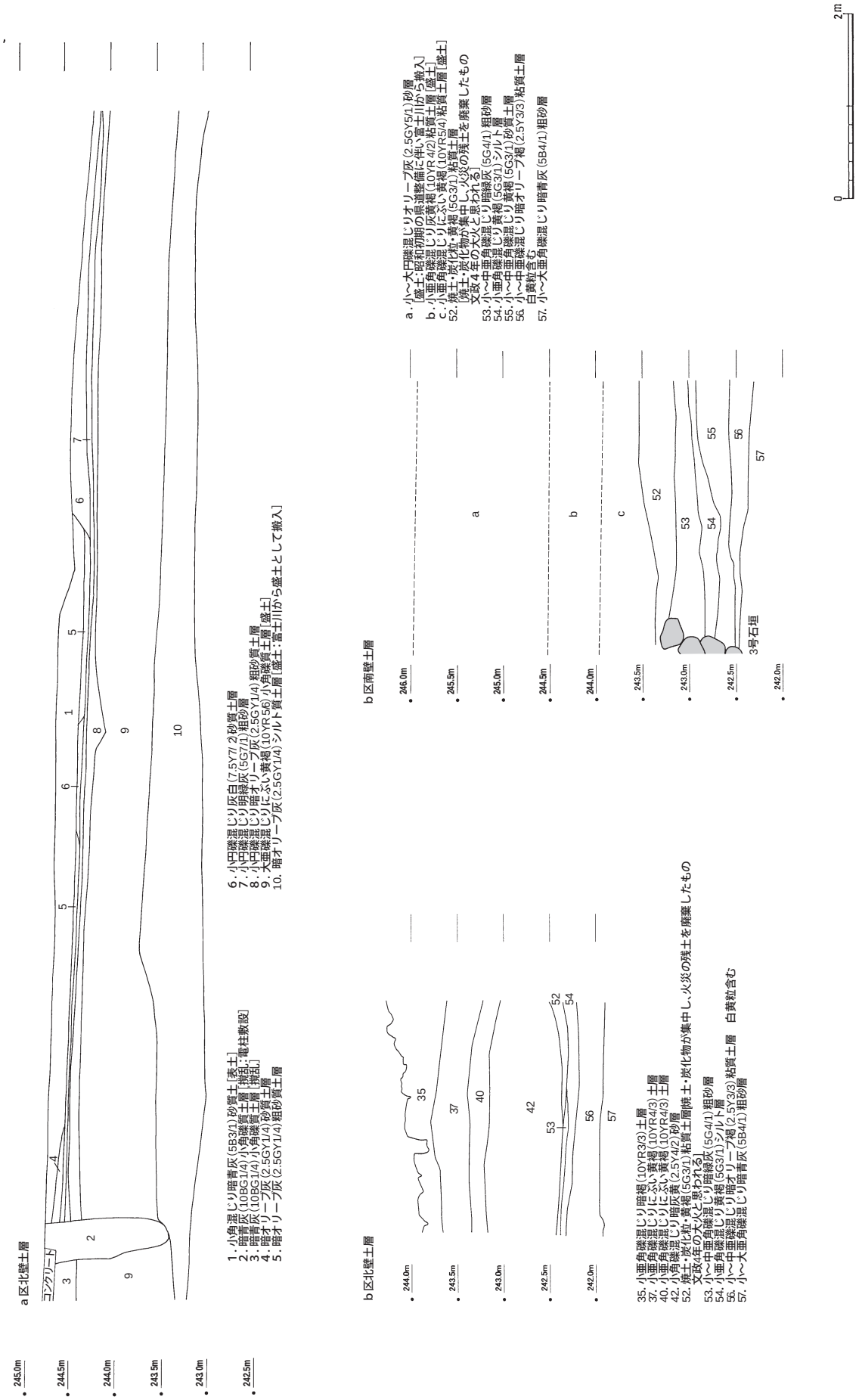
※1 「Ribbon bitron」「7&Y」
※2 「Torys」「KOTOBUKIYA LIMITED」「12&4」
※3 「Torys THIS MARK IS YOUR ASSURANCE OF PURITY AND QUALITY」「KOTOBUKIYA LIMITED」「809 Y 4」

遺物ID	注記名	注記ID	調査区	遺構名ほか	分類1（材質）	分類2（器種・種別）	分類3（詳細器種）	分類4（形状・分類）	分類5	重さ	A口径他	B底径他	C器高他	D長さ／縦他	胎土色	文字／刻印	成形	絵付	絵付具／釉薬	外面文様	内面文様	見込み文様	底面文様	熱変質	熱変形	推定産地	推定年代	備考
274	SG１ワキ	513	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			3.5	1.4																	
275	SG１ワキ	514	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			4.1	1.5																	
276	SG１ワキ	518	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			7.4	1.8																	
277	SG１ワキ	519	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			6.3	1.7																	
278	SG１ワキ	520	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			7.2	1.7																	
279	SG１ワキ	521	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			8.3	1.8																	
280	SG１ワキ	522	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			7.5	1.8																	
281	SG１ワキ	523	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			6.1	1.7																	
282	SG１ワキ	524	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	ビー玉			6.9	1.7																	
283	SG1ワキ3層	574	a区	1号石垣脇15層	ガラス	玩具	ビー玉			4.4	1.5																	
284	西壁28層	1234	b区	37層	ガラス	玩具	ビー玉			6.2	1.7																	
285	SR3一括	-	a区	3号石列	ガラス	玩具	おはじき			2.1	1.9		0.4															
286	SF1一括	-	a区	1号道路	ガラス	玩具	おはじき			1.2	1.6		0.4															
287	SF1－8層	75	a区	1号道路20層	ガラス	玩具	おはじき			2.6	1.8		0.5															
288	SF1西一括	-	a区	1号道路西側	ガラス	玩具	おはじき			1.0	1.6		0.3															
289	SG１ワキ一括	-	a区	1号石垣脇	ガラス	玩具	おはじき			0.7	1.5		0.3															
290	SG２ワキ	661	a区	2号石垣脇	ガラス	玩具	おはじき			0.8	1.4		0.4															
291	SG2ワキ一括	-	a区	2号石垣脇	ガラス	玩具	おはじき			1.4	1.9		0.3															
292	SG2ワキ一括	-	a区	2号石垣脇	ガラス	玩具	おはじき			0.8	1.5		0.3															
293	SG2ワキ一括	-	a区	2号石垣脇	ガラス	玩具	おはじき			0.9	1.5		0.3															
294	8エリア1層	269	a区	1号道路13層	ガラス	玩具	おはじき			1.1	1.7		0.3															
295	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	おはじき			2.5	2.1		0.4															
296	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	おはじき			1.3	1.8		0.4															
297	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	おはじき			1.2	1.8		0.2															
298	SB1-１層一括	-	a区	1号建物跡28層	ガラス	玩具	おはじき			1.3	1.5		0.4															
299	SA	741	b区	42層	ガラス	玩具	おはじき			1.0	1.6		0.3															
300	西壁9a層	1200	b区	39層	貝類	アカガイ	－	右			SL:91																	自然科学分析資料
301	東壁12層	1925	b区	49層	貝類	ハマグリ	－	右																				殻長5～6cm程度か 自然科学分析資料
302	HS1一括	-	a区	1号廃棄	貝類	マガキ	－	左			SH:75																	自然科学分析資料
303			a区	1号廃棄				右			SH:55,4#																	自然科学分析資料
304	SF1上砂	26	a区	1号道路10層	陸獣類	ウマ	大腿骨	左	近位端外側																			自然科学分析資料
305	1エリア8層	139	a区	1号道路20層	哺乳類	哺乳類	四肢骨？	？	破片																			イノシシ/シカ大 自然科学分析資料
306		140	a区	1号道路20層																								イノシシ/シカ大 自然科学分析資料
307	1エリア9層	165	a区	1号道路21層																								イノシシ/シカ大 自然科学分析資料
308	6エリア8層	298	a区	1号道路20層	陸獣類	カモシカ	橈骨	左	近位端		Bp:32.4																	309と同一個体 自然科学分析資料
309		299	a区	1号道路20層			尺骨	左	近位端																			309と同一個体 自然科学分析資料
310	UK1	627	a区	1号埋甕	魚類	サバ属	歯骨	右	遠位部																			自然科学分析資料
311	西壁9b層	1205	b区	40層	陸獣類	シカ	中節骨	？	完存																			自然科学分析資料
312	SG2一括	-	a区	2号石垣脇	鳥類	ニワトリ	脛足根骨	右	近位端																			自然科学分析資料
313	SG2一括	-	a区	2号石垣脇			尺骨	左	近位端																			自然科学分析資料
314	SG2一括	-	a区	2号石垣脇			大腿骨	左	遠位端																			自然科学分析資料
315	SG2一括	-	a区	2号石垣脇	鳥類	ニワトリ？	上腕骨	右	近位部																			自然科学分析資料
316	SG2一括	-	a区	2号石垣脇			大腿骨	左	近位部－遠位部																			自然科学分析資料
317	SG2一括	-	a区	2号石垣脇	鳥類	鳥類	長骨	？	骨幹部																			自然科学分析資料
318	SG2一括	-	a区	2号石垣脇																								自然科学分析資料
319	SH	1930	b区	52層	土	土壌		焼土層																				自然科学分析資料
320	SH	1934	b区	52層	土	土壌		被熱																				自然科学分析資料
321	SH	1926	b区	52層	木製品	板材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
322	SH	1927	b区	52層	木製品	板材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
323	SH	1929	b区	52層	木製品	板材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
324	SH	1931	b区	52層	木製品	板材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
325	SH	1935	b区	52層	木製品	板材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
326	SH	1928	b区	52層	木製品	角材	板状	炭化材	モミ属																			自然科学分析資料
327	SH	1933	b区	52層	木製品	-	－	炭化材	カツラ																			自然科学分析資料
328	SH	-	b区	52層	土	土壁	漆喰付着																					自然科学分析資料
329	SH	862	b区	52層	金属(鉄)	鉄滓																						自然科学分析資料

PL－1　土層断面・石垣位置図

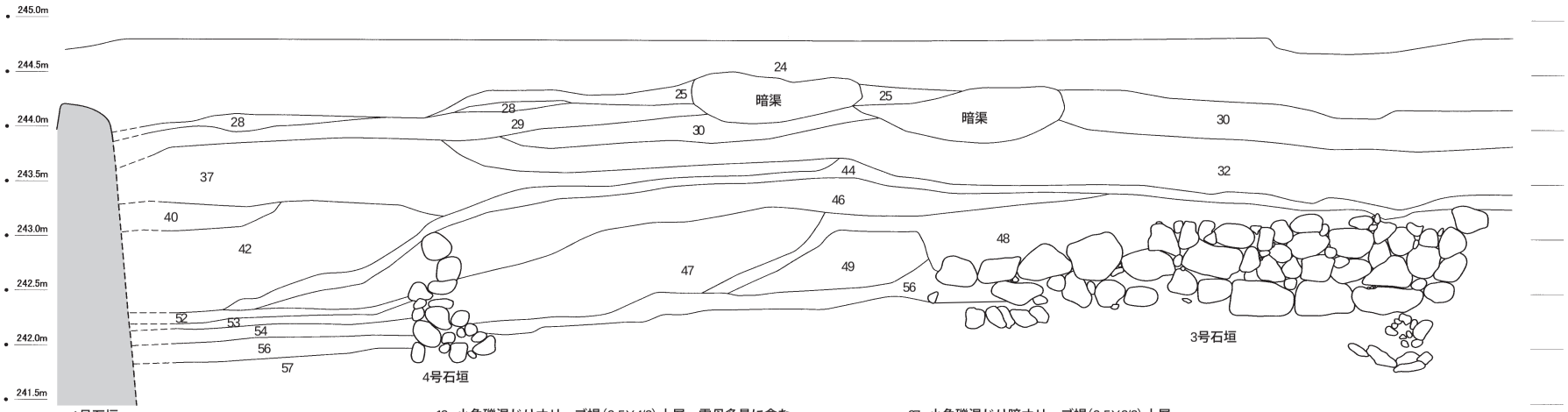


PL－2　土層断面図（1）a・b区北壁・b区南壁



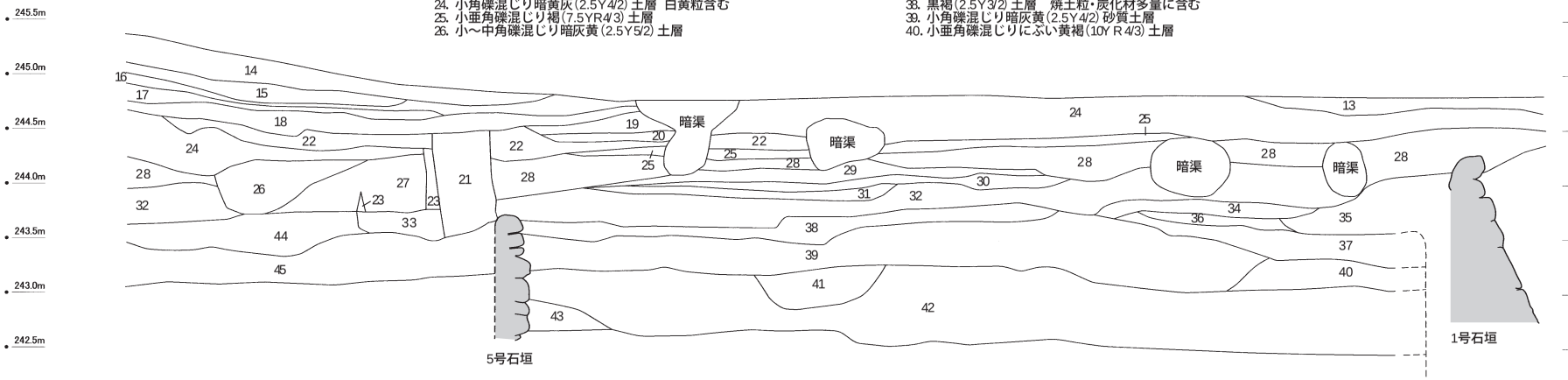
PL－3　土層断面図（2）b区東壁・b区西壁

b区東壁土層



13. 小角礫混じりオリーブ褐（2.5Y 4/3）土層　雲母多量に含む
14. 小角礫混じりオリーブ褐（2.5Y 4/4）土層　極少量の炭化粒を含む
15. 小角礫混じりにぶい黄褐（5YR4/3）土層
16. 小～大亜角礫混じり黄灰（2.5Y 4/1）土層
17. 小角礫混じり黒褐（2.5Y 3/1）土層
18. 小～大角礫混じり黒褐（2.5Y 3/2）土層
19. 小亜角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）砂質土層
20. 小亜角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）土層
21. 小円礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）土層
22. 小角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）土層
23. 暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）土層
24. 小角礫混じり暗黄灰（2.5Y 4/2）土層　白黄粒含む
25. 小亜角礫混じり褐（7.5YR4/3）土層
26. 小～中角礫混じり暗灰黄（2.5Y 5/2）土層
27. 小角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）土層
28. 小～大角礫混じり暗黄灰（2.5Y 5/2）粗砂層
29. 小亜角礫混じり褐（7.5YR4/3）土層　白黄粒含む
30. 小亜角礫混じり灰黄褐（10Y R 4/2）砂質土層
31. 小亜角礫混じり褐（7.5YR4/3）土層　白黄粒含む
32. 小～中角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）土層
33. 小角礫混じりオリーブ褐（2.5Y 4/3）土層　白色粒を多量に含む
34. 小亜角礫混じりにぶい黄褐（10Y R 4/3）砂質土層
35. 小亜角礫混じり暗褐（10Y R 3/3）土層
36. 小亜角礫混じり暗褐（10Y R 3/3）砂質土層
37. 小亜角礫混じりにぶい黄褐（10Y R 4/3）土層
38. 黒褐（2.5Y 3/2）土層　焼土粒・炭化材多量に含む
39. 小角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）砂質土層
40. 小亜角礫混じりにぶい黄褐（10Y R 4/3）土層

b区西壁土層



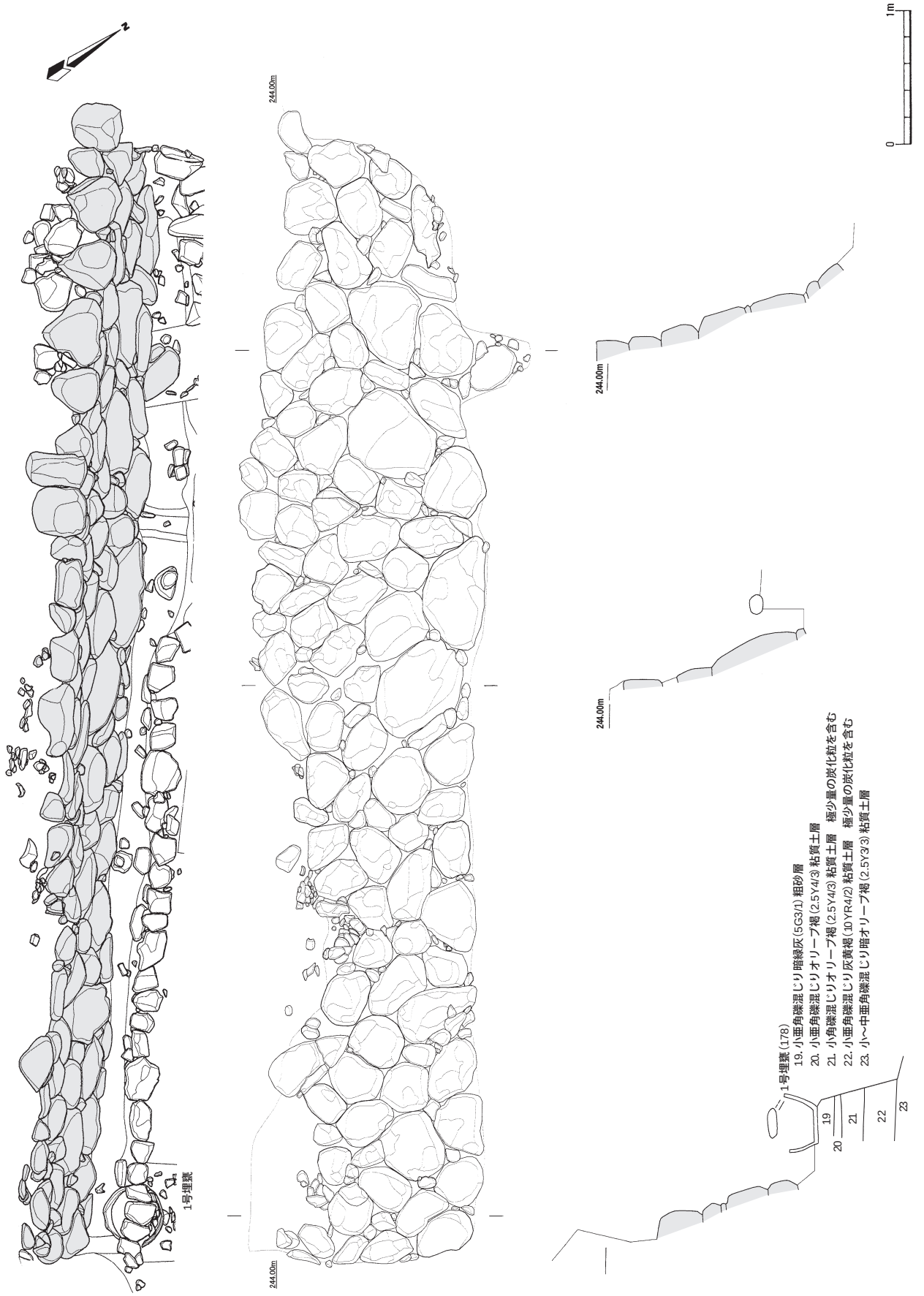
41. 小角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）土層
42. 小角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）砂層
43. 小～中亜角礫混じり暗褐（10Y R 3/3）土層　炭化粒を多量に含む
44. 黒褐（2.5Y3/2）土層［38層と同一層］　焼土粒・炭化材多量に含む
45. 小角礫混じり暗灰黄（2.5Y 4/2）土層
46. 小～大亜角礫混じり暗黄灰（2.5Y 5/2）粗砂層
47. 小～中亜角礫混じり暗黄灰（2.5Y 5/2）粗砂層
48. 小～大亜角礫混じり黒褐（10Y R 3/2）土層
49. 小～中亜角礫混じり暗黄灰（2.5Y 5/2）粗砂層
52. 焼土・炭化粒・黒褐（7.5YR3/2）粘質土層［焼土・炭化物が集中し、火災の残土を廃棄したもの　　文政4年の大火と思われる］
53. 小～中亜角礫混じり暗緑灰（5G 4/1）粗砂層
54. 小亜角礫混じり黄褐（5G 3/1）シルト層
56. 小～中亜礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）粘質土層　白黄粒含む
57. 小～大亜角礫混じり暗青灰（5B 4/1）粗砂層

0　2m

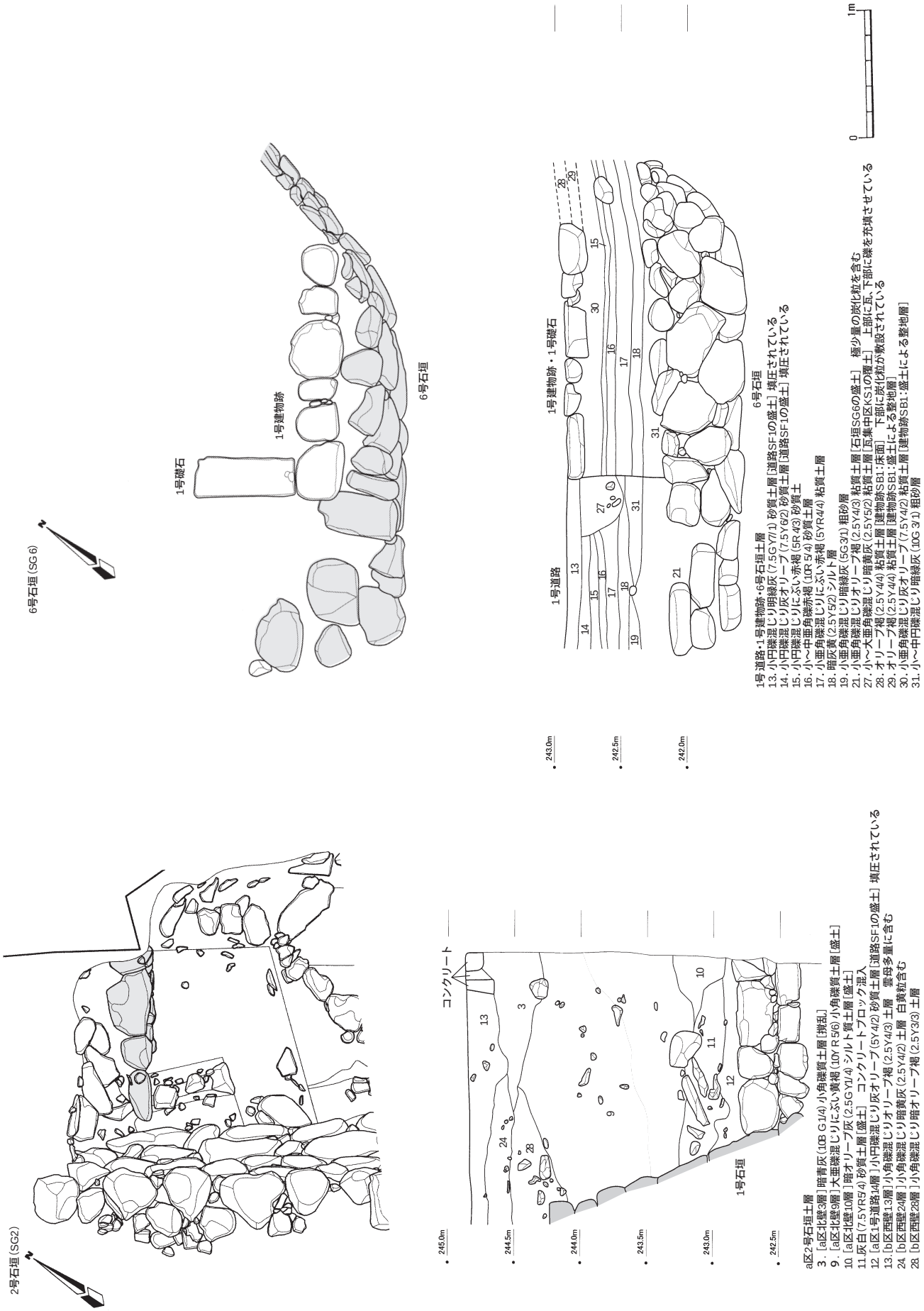
PL－4　a区遺構配置図

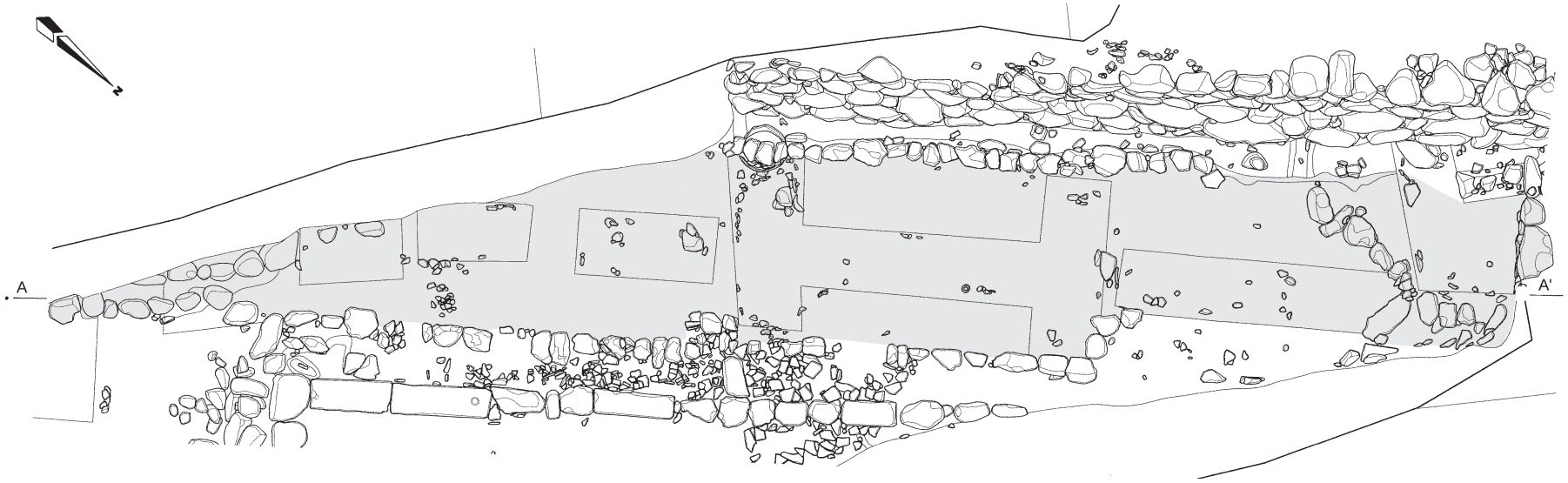
－2
N
O
P
－3
2号石垣
1号石垣
1号石列
2号石列
1号礎石
1号埋甕
1号瓦集中区
1号廃棄
1号建物跡
3号石列
6号石垣
① ～㊷ :トレンチNo.
0
2m

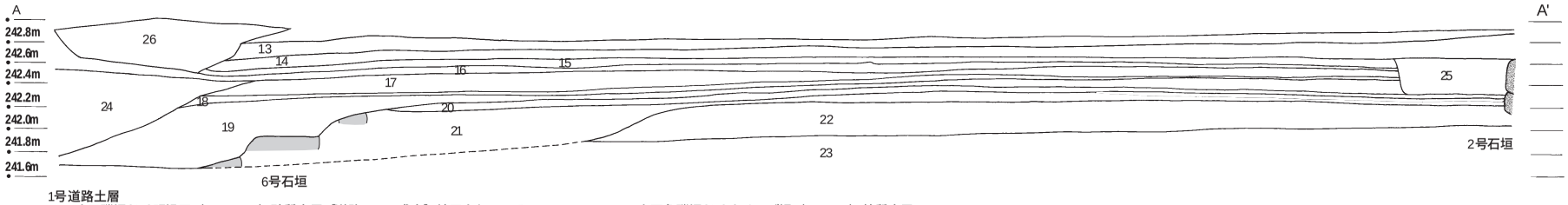
PL－5　a区1号石垣


N
1号埋甕
244.00m
244.00m
244.00m
244.00m
1号埋甕（178）
19. 小亜角礫混じり暗緑灰（5G3/1）粗砂層
20. 小亜角礫混じりオリーブ褐（2.5Y4/3）粘質土層
21. 小角礫混じりオリーブ褐（2.5Y4/3）粘質土層　極少量の炭化粒を含む
22. 小亜角礫混じり灰黄褐（10YR4/2）粘質土層　極少量の炭化粒を含む
23. 小～中亜角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y3/3）粘質土層
19
20
21
22
23
0
1m

PL－6　a区2・6号石垣


6号石垣（SG6）
1号礎石
1号建物跡
6号石垣
1号道路
1号建物跡・1号礎石
6号石垣
1号道路・1号建物跡・6号石垣土層
13. 小円礫混じり明緑灰（7.5GY7/1）砂質土層［道路SF1の盛土］填圧されている
14. 小円礫混じり灰オリーブ（7.5YG6/2）砂質土層［道路SF1の盛土］填圧されている
15. 小円礫混じりにぶい赤褐（5R 4/3）砂質土
16. 小～中亜角礫赤褐（10R 5/4）砂質土層
17. 小亜角礫混じりにぶい赤褐（5YR4/4）粘質土層
18. 暗灰黄（2.5YY5/2）シルト層
19. 小亜角礫混じり暗緑灰（5G3/1）粗砂層
21. 小亜角礫混じりオリーブ褐（2.5Y4/3）粘質土層［石垣SG6の盛土］　極少量の炭化粒を含む
27. 小～大亜角礫混じり暗黄灰（2.5Y5/2）粘質土層［五集中区KS10覆土］　上部に瓦、下部に礫を充填させている
28. オリーブ褐（2.5Y4/4）粘質土層［建物跡SB1：床面］　下部に炭化粒が敷設されている
29. オリーブ褐（2.5Y4/4）粘質土層［建物跡SB1：盛土による整地層］
30. 小亜角礫混じり灰オリーブ（7.5Y4/2）粘質土層［建物跡SB1：盛土による整地層］
31. 小～中円礫混じり暗緑灰（10G 3/1）粗砂層
2号石垣（SG2）
コンクリート
1号石垣
a区2号石垣土層
3. ［a区北壁3層］暗青灰（10B G1/4）小角礫質土層［撹乱］
9. ［a区北壁9層］大亜礫混じりにぶい黄褐（10Y R 5/6）小角礫質土層［盛土］
10. ［a区北壁10層］暗オリーブ灰（2.5GY1/4）シルト質土層［盛土］
11. 灰白（7.5YR5/4）砂質土層［盛土］　コンクリートブロック混入
12. ［a区1号道路14層］小円礫混じり灰オリーブ（5Y4/2）砂質土層［道路SF1の盛土］填圧されている
13. ［b区西壁13層］小角礫混じりオリーブ褐（2.5Y4/3）土層　雲母多量に含む
24. ［b区西壁24層］小角礫混じり暗黄灰（2.5Y4/2）土層　白黄粒含む
28. ［b区西壁28層］小角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y3/3）土層
245.0m
244.5m
244.0m
243.5m
243.0m
242.5m
243.0m
242.5m
242.0m
0
1m



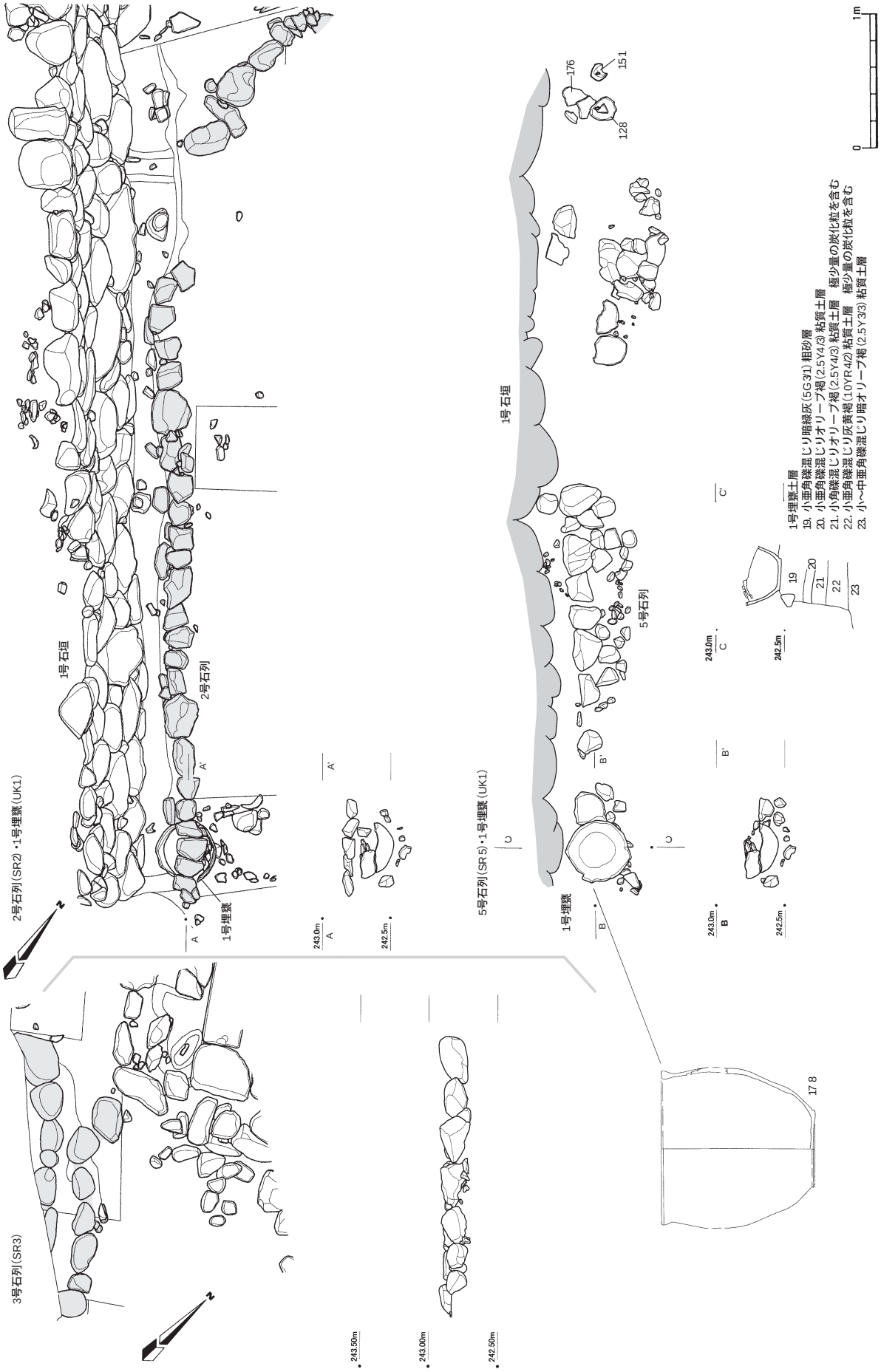


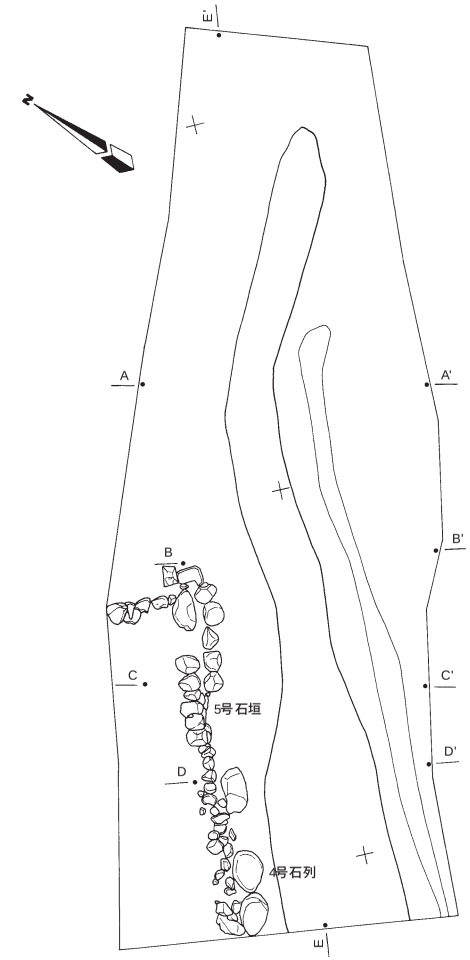
1号道路土層
13. 小円礫混じり明緑灰（7.5GY 7/1）砂質土層［道路SF1の盛土］填圧されている
14. 小円礫混じり灰オリーブ（7.5Y 6/2）砂質土層［道路SF1の盛土］填圧されている
15. 小円礫混じりにぶい赤褐（5R 4/3）砂質土
16. 小～中亜角礫赤褐（10R 5/4）砂質土層
17. 小亜角礫混じりにぶい赤褐（5YR 4/4）粘質土層
18. 暗灰黄（2.5Y 5/2）シルト層
19. 小亜角礫混じり暗緑灰（5G 3/1）粗砂層
20. 小亜角礫混じりオリーブ褐（2.5Y 4/3）粘質土層
21. 小亜角礫混じりオリーブ褐（2.5Y 4/3）粘質土層［石垣SG6の盛土］極少量の炭化粒を含む
元禄一分判金（ID206）は、石垣SG1脇のこの層に含まれていた
22. 小亜角礫混じり灰黄褐（10YR 4/2）粘質土層　極少量の炭化粒を含む
23. 小～中亜角礫混じり暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）粘質土層
24. 小～中亜礫混じりオリーブ黒（5Y 3/2）砂質土層
25. オリーブ褐（2.5Y 4/3）粘質土層［石垣SG2構築に伴う掘削］
26. 小円礫混じり暗青灰（5B3/1）粗砂層［石列SR3の影響による変色範囲］

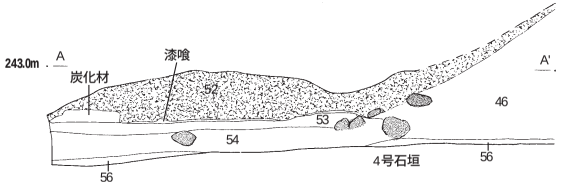
0　2m

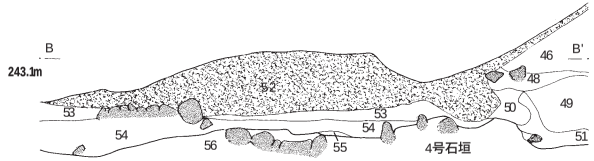
PL－7　a区1号道路

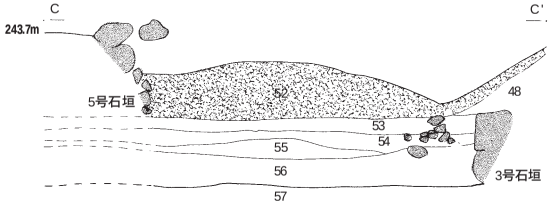
PL－8　a区2・3・5号石列・1号埋甕

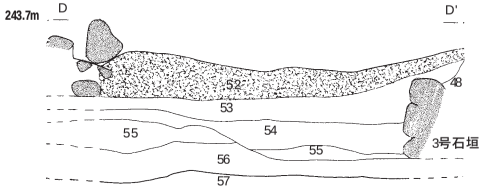




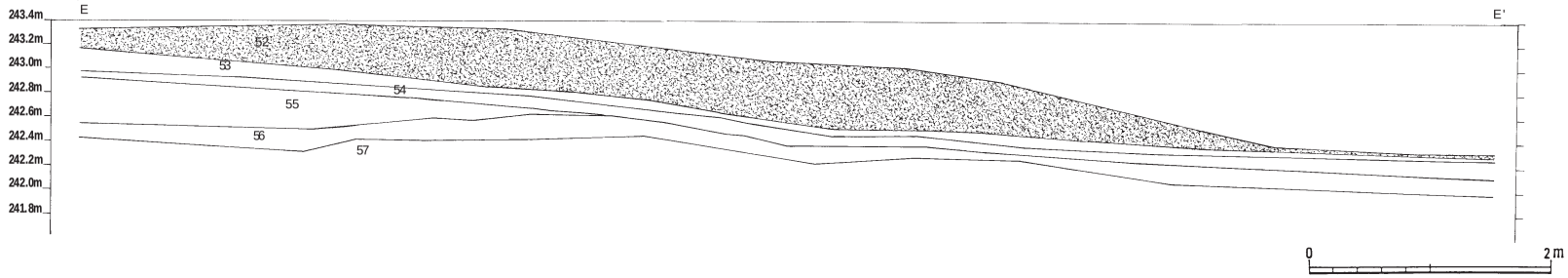








46. 小亜角礫混じりにぶい黄褐(10YR4/3)土層
48. 小～大亜角礫混じり黒褐(10YR3/2)土層
49. 小～中亜角礫混じり暗黄灰(2.5Y5/2)粗砂層
50. 小～中亜角礫混じり黒褐(10YR3/2)土層
51. 暗赤褐(5YR3/4)粘質土層
52. 焼土・炭化粒・黒褐(7.5YR3/2)粘質土層[焼土・炭化物が集中し、火災の残土を廃棄したもの 文政4年の大火と思われる]
53. 小～中亜角礫混じり暗緑灰(5G4/1)粗砂層
54. 小亜角礫混じり黄褐(5G3/1)シルト層
55. 小～中亜角礫混じり黄褐(5G3/1)砂質土層
56. 小～中亜礫混じり暗オリーブ褐(2.5Y3/3)粘質土層 白黄粒含む
57. 小～大亜角礫混じり暗青灰(5B4/1)粗砂層

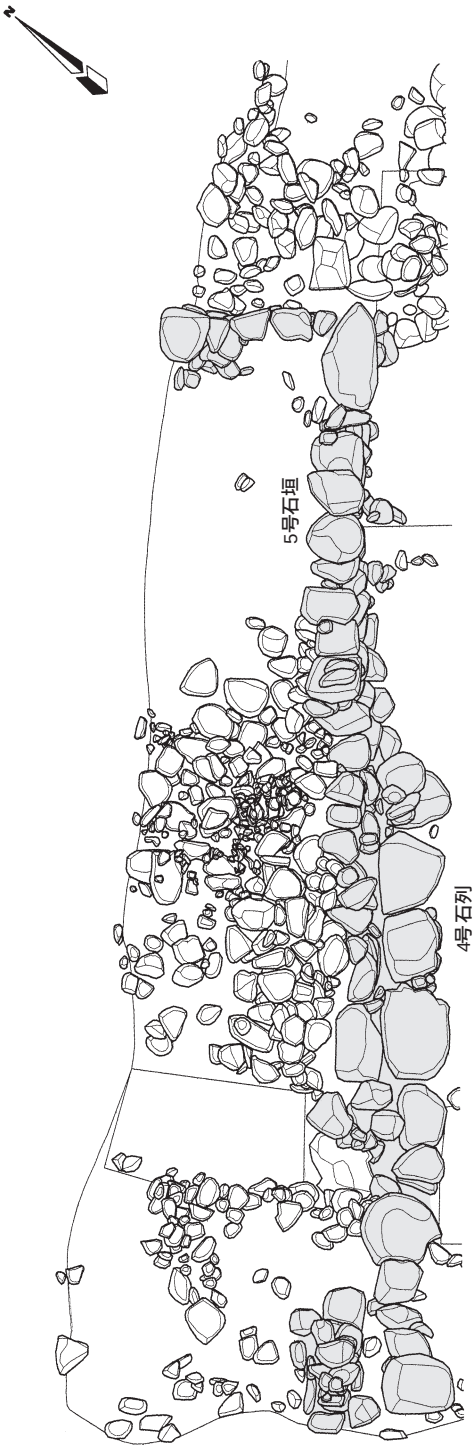


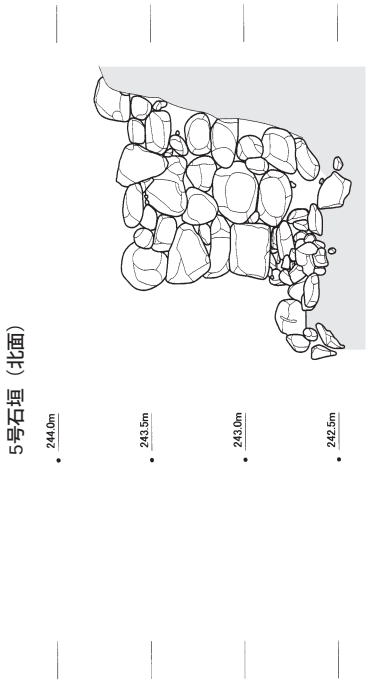
PL－9 b区第1面焼土層

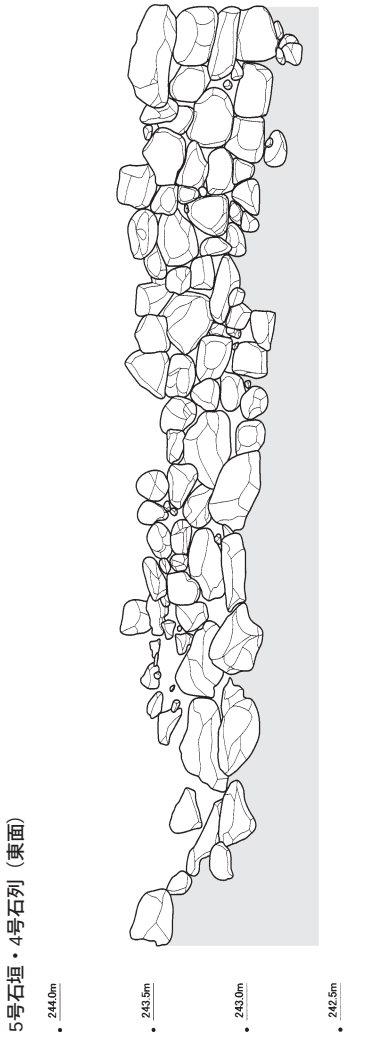
PL－10　b区第2面遺構配置図

PL－11　b区3・4号石垣

PL－12　b区5号石垣・4号石列

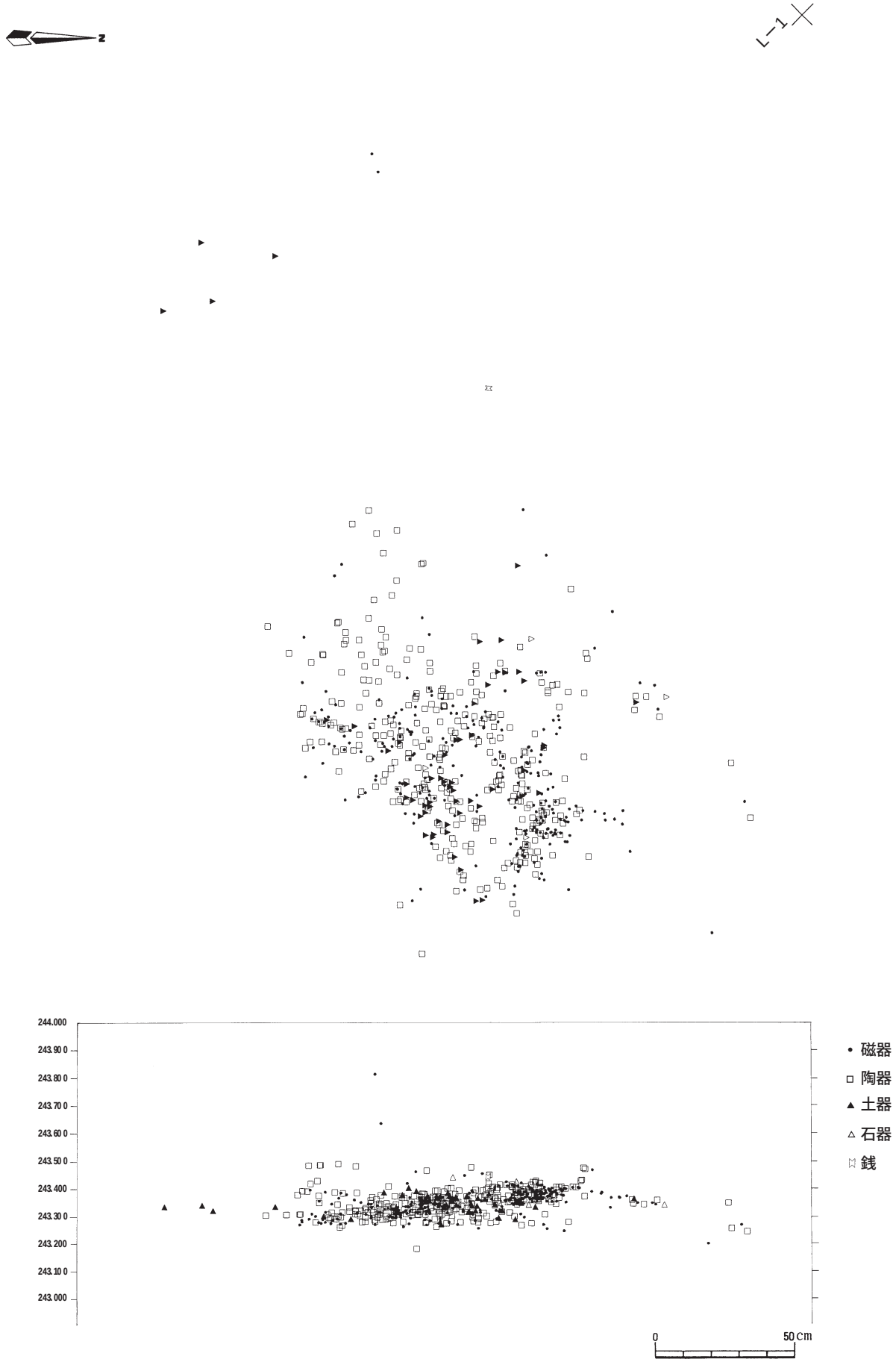




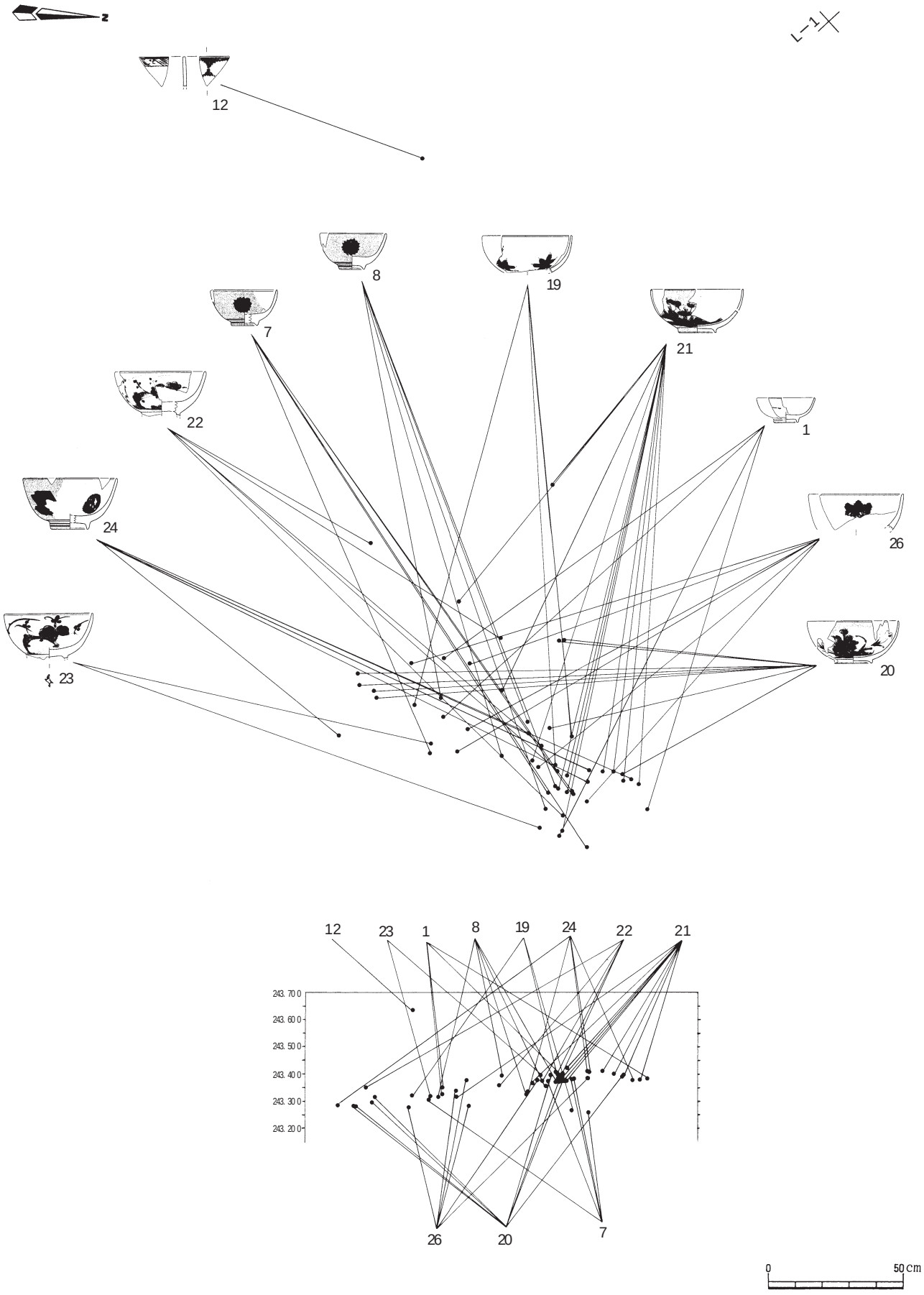


PL－13　b区1～3号集石・1号土器集中区

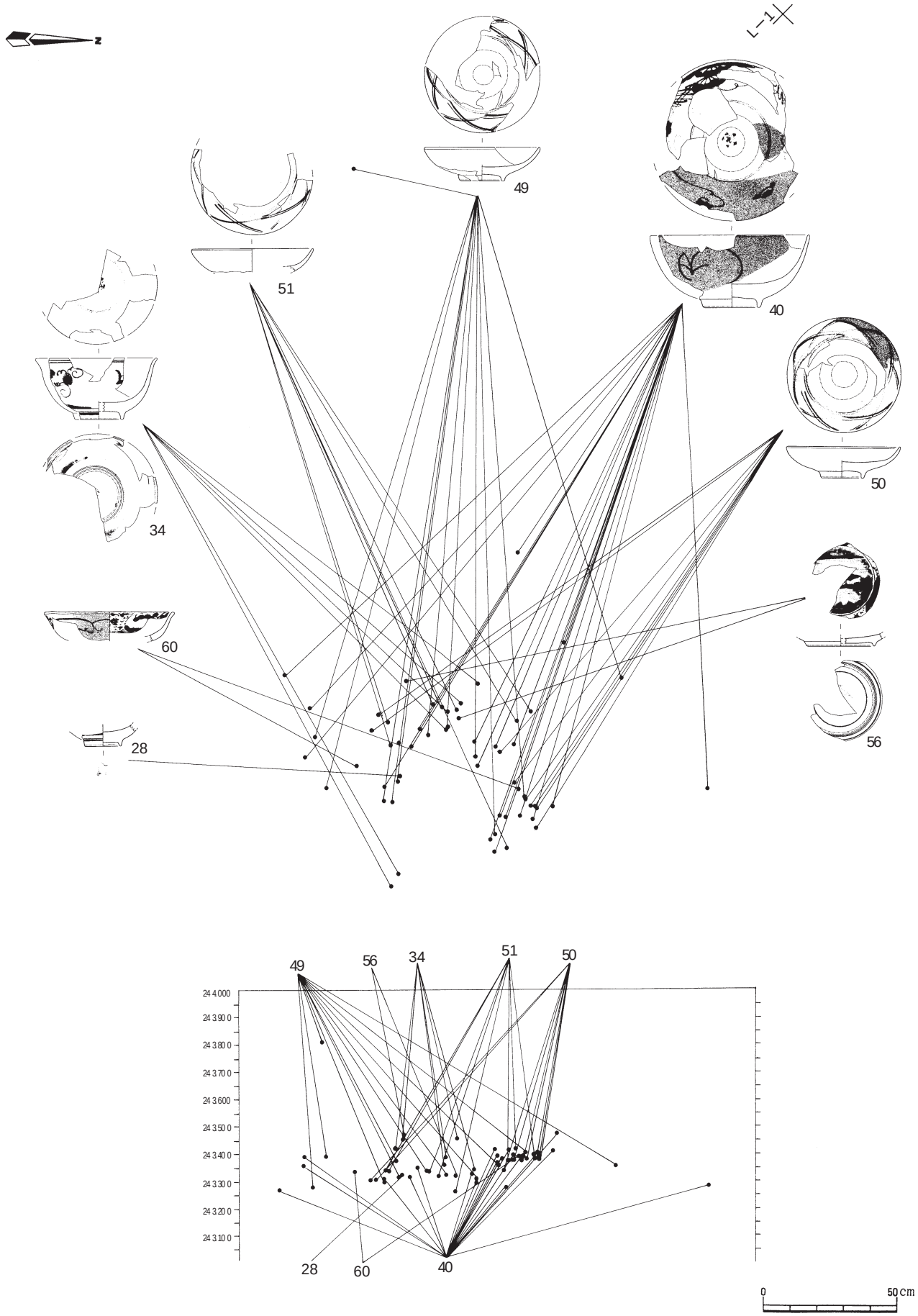
PL－14　1号土器集中区遺物分布図（1）



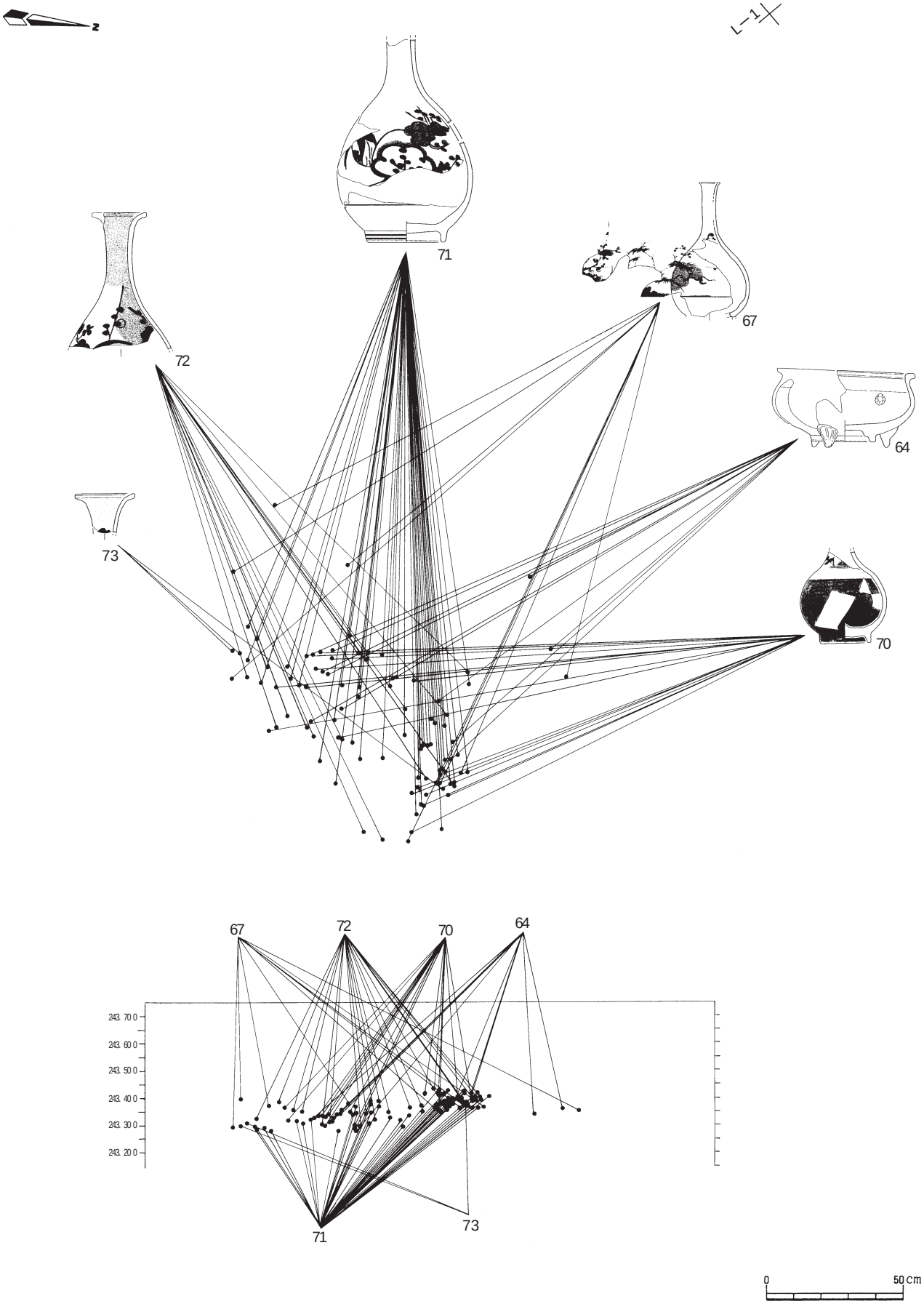
PL－15　1号土器集中区遺物分布図（2）磁器



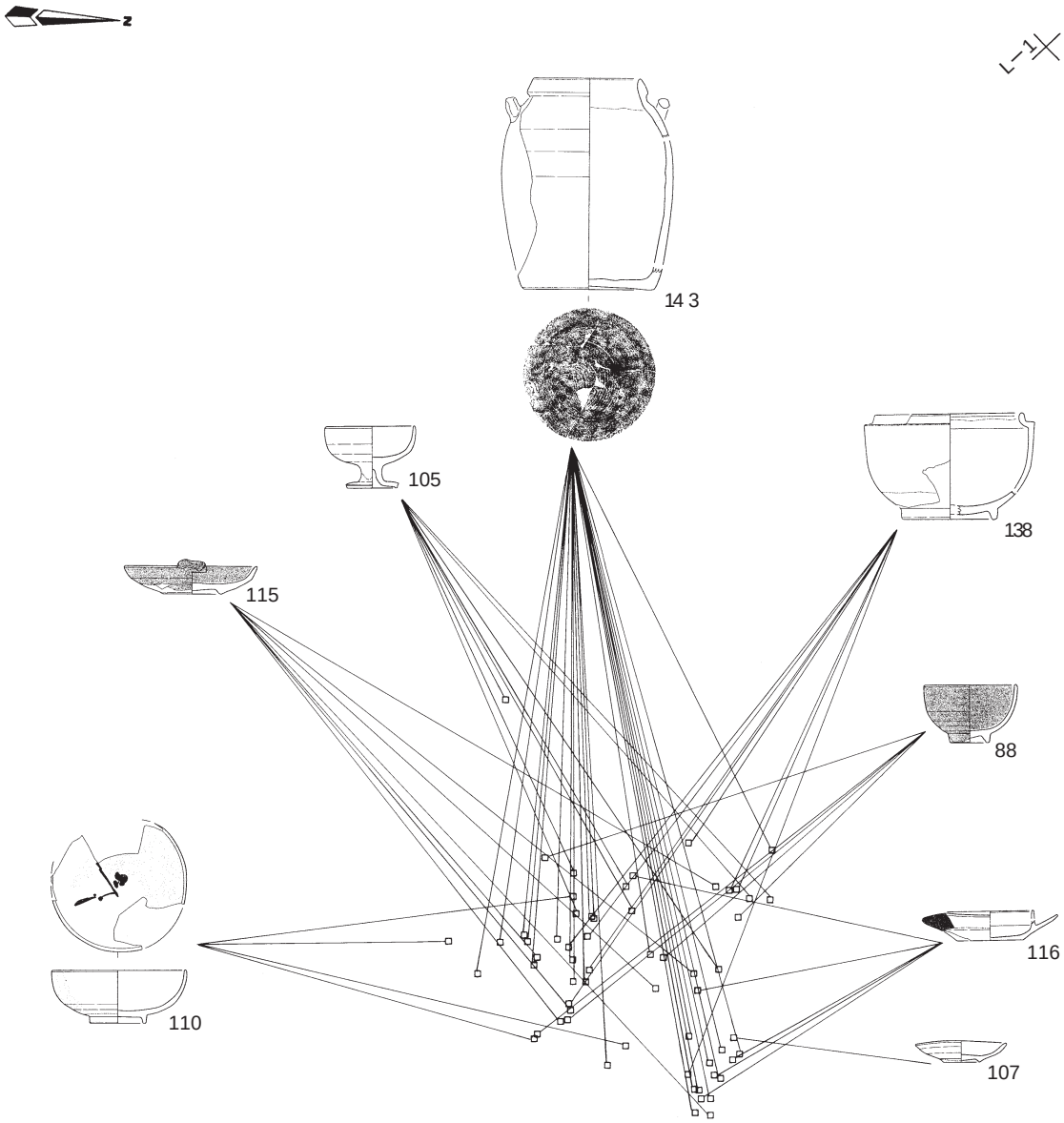
PL－16　1号土器集中区遺物分布図（3）磁器

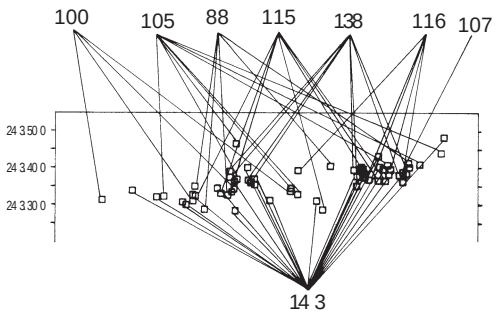


PL－17　1号土器集中区遺物分布図（4）磁器

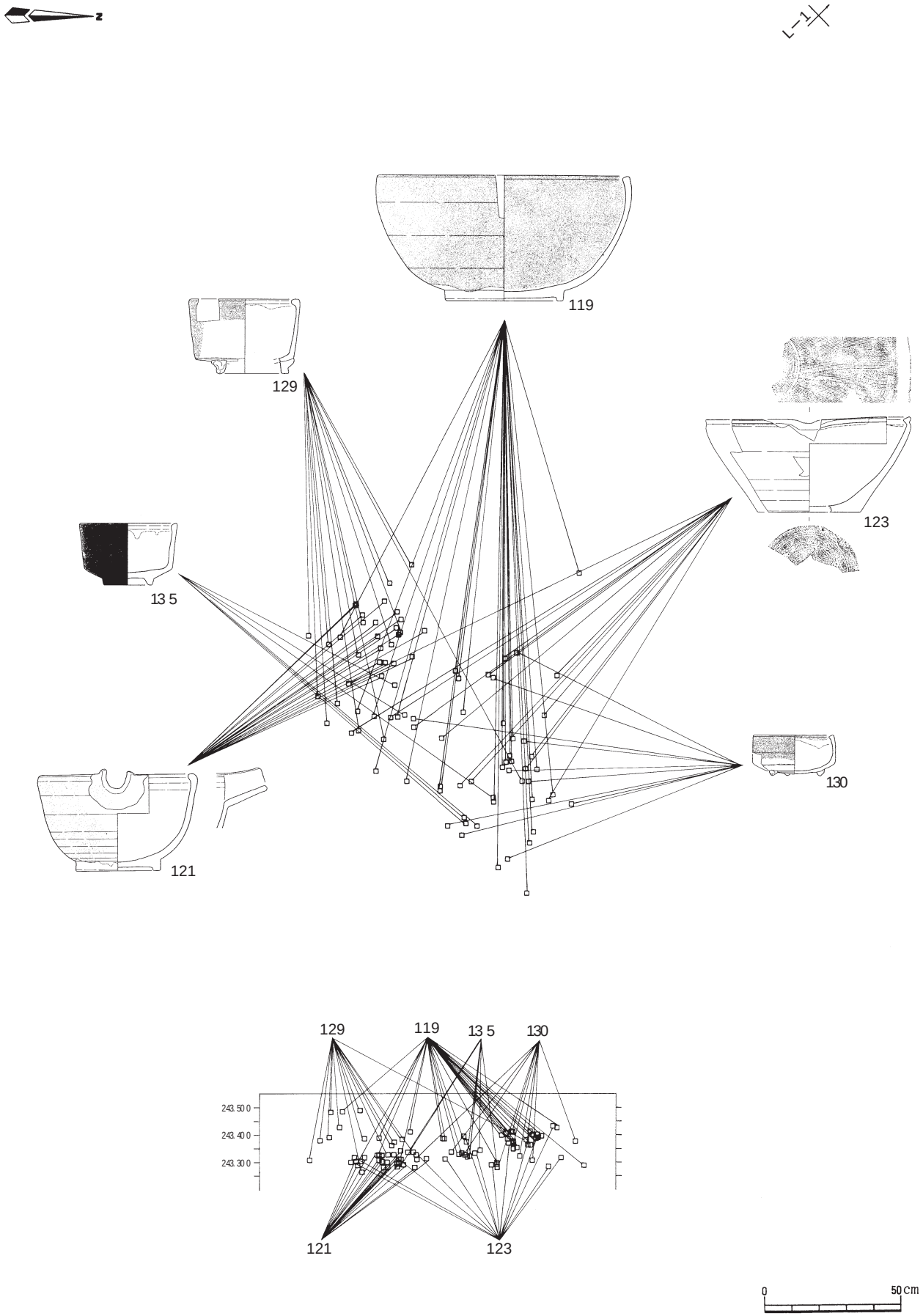


PL－18　1号土器集中区遺物分布図（5）陶器

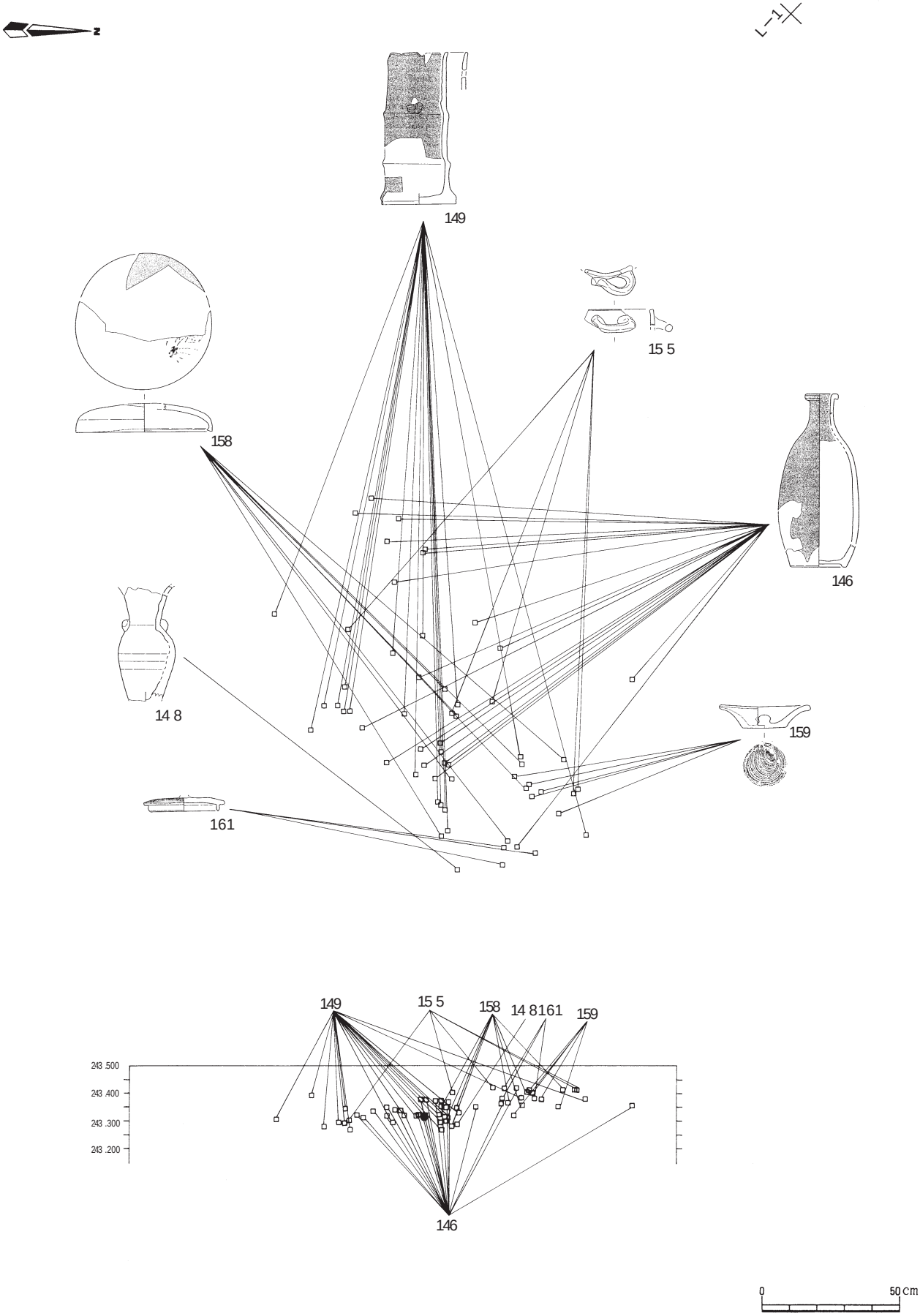




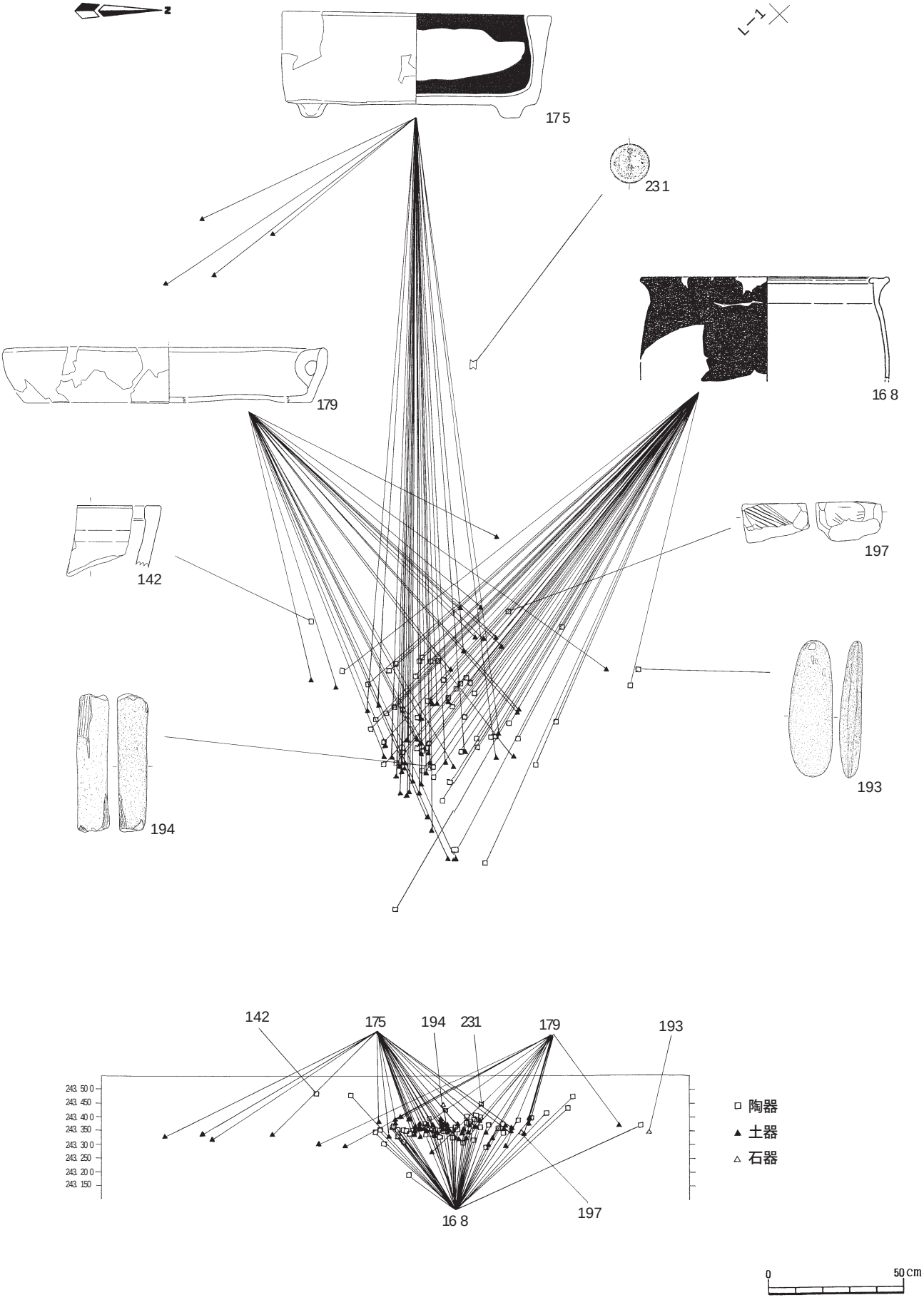
PL－19　1号土器集中区遺物分布図（6）陶器



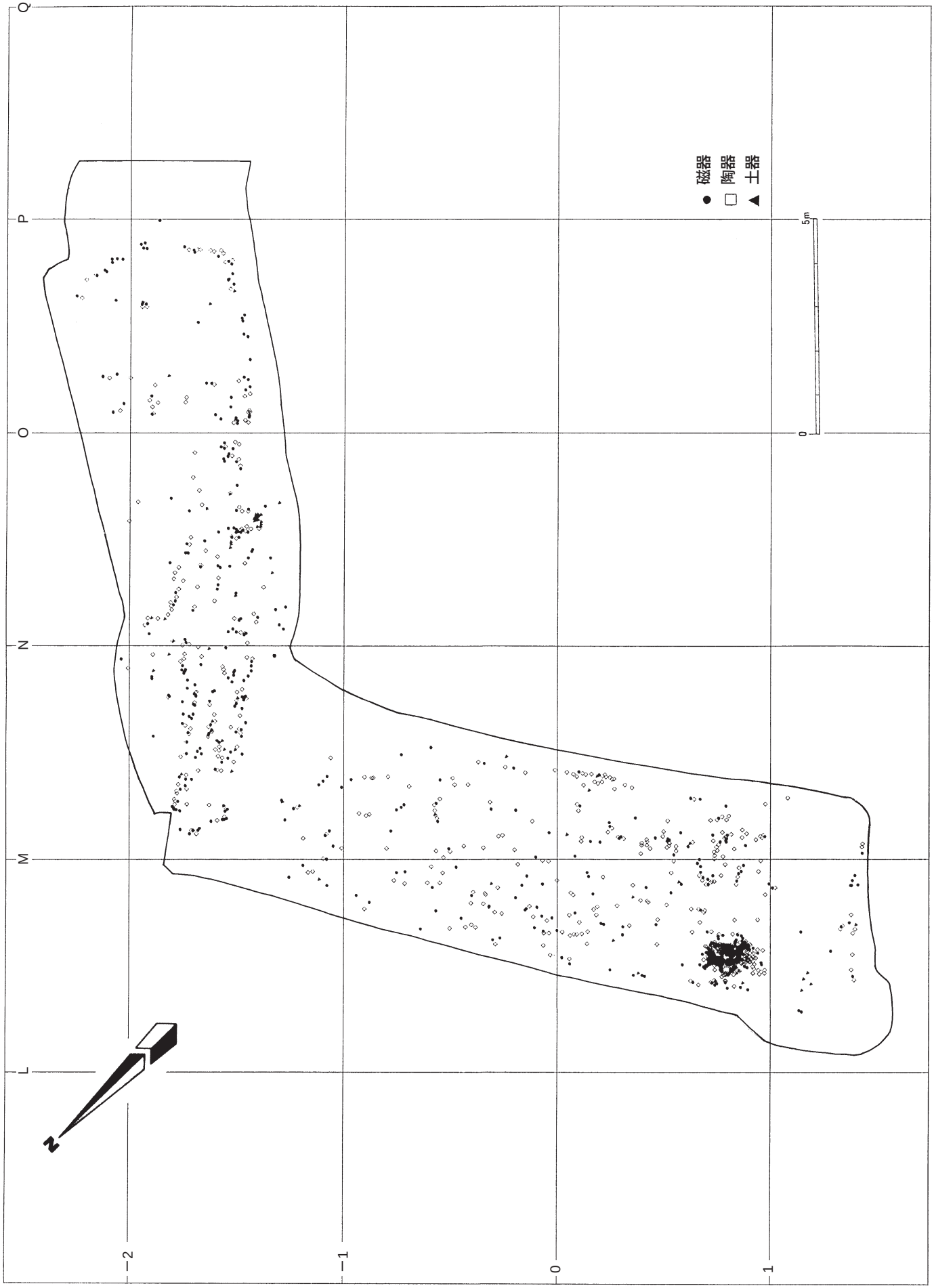
PL－20　1号土器集中区遺物分布図（7）陶器



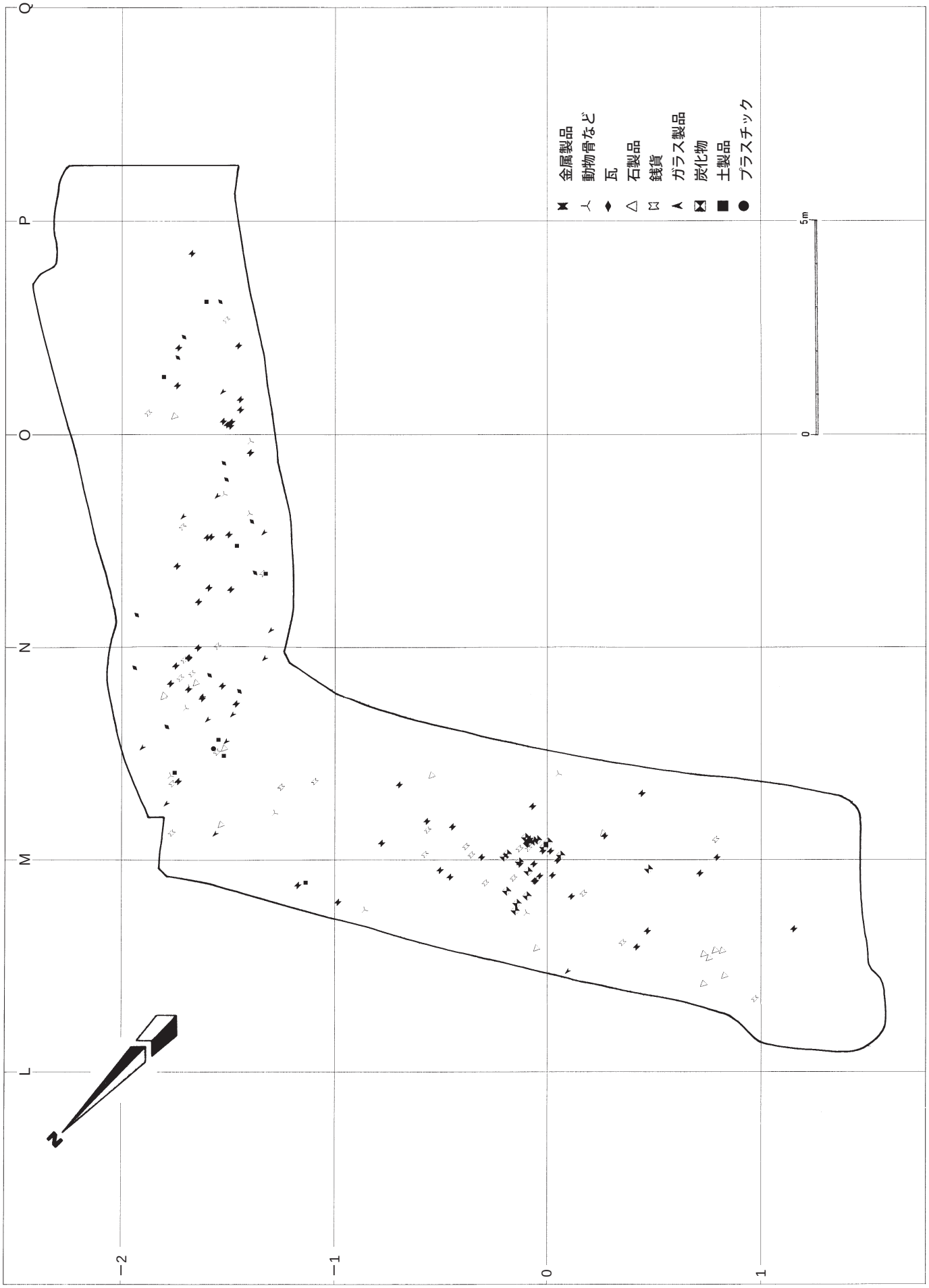
PL－21　1号土器集中区遺物分布図（8）
陶器・土器・石製品・銭貨



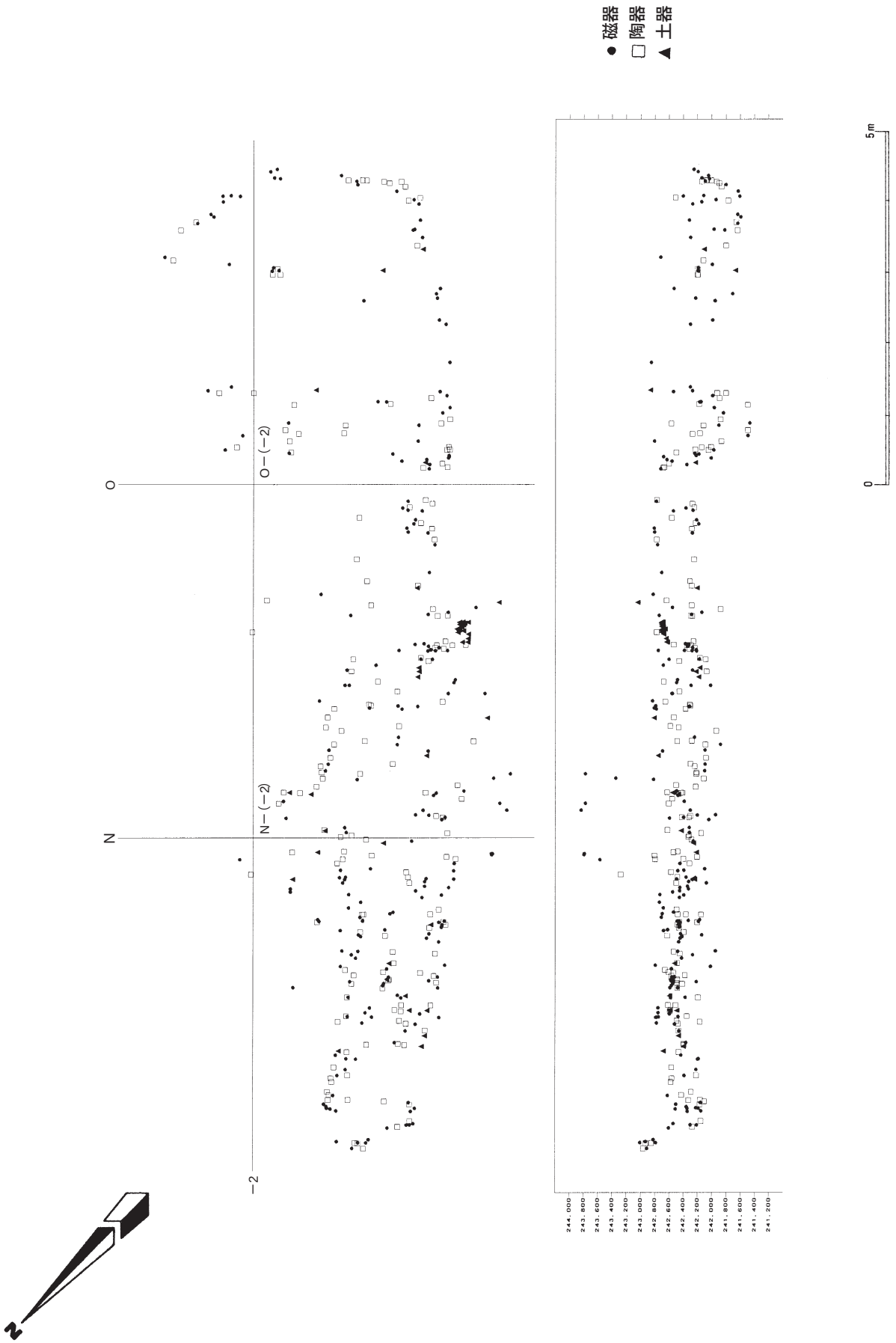
PL－22　遺物平面分布図（磁器・陶器・土器）



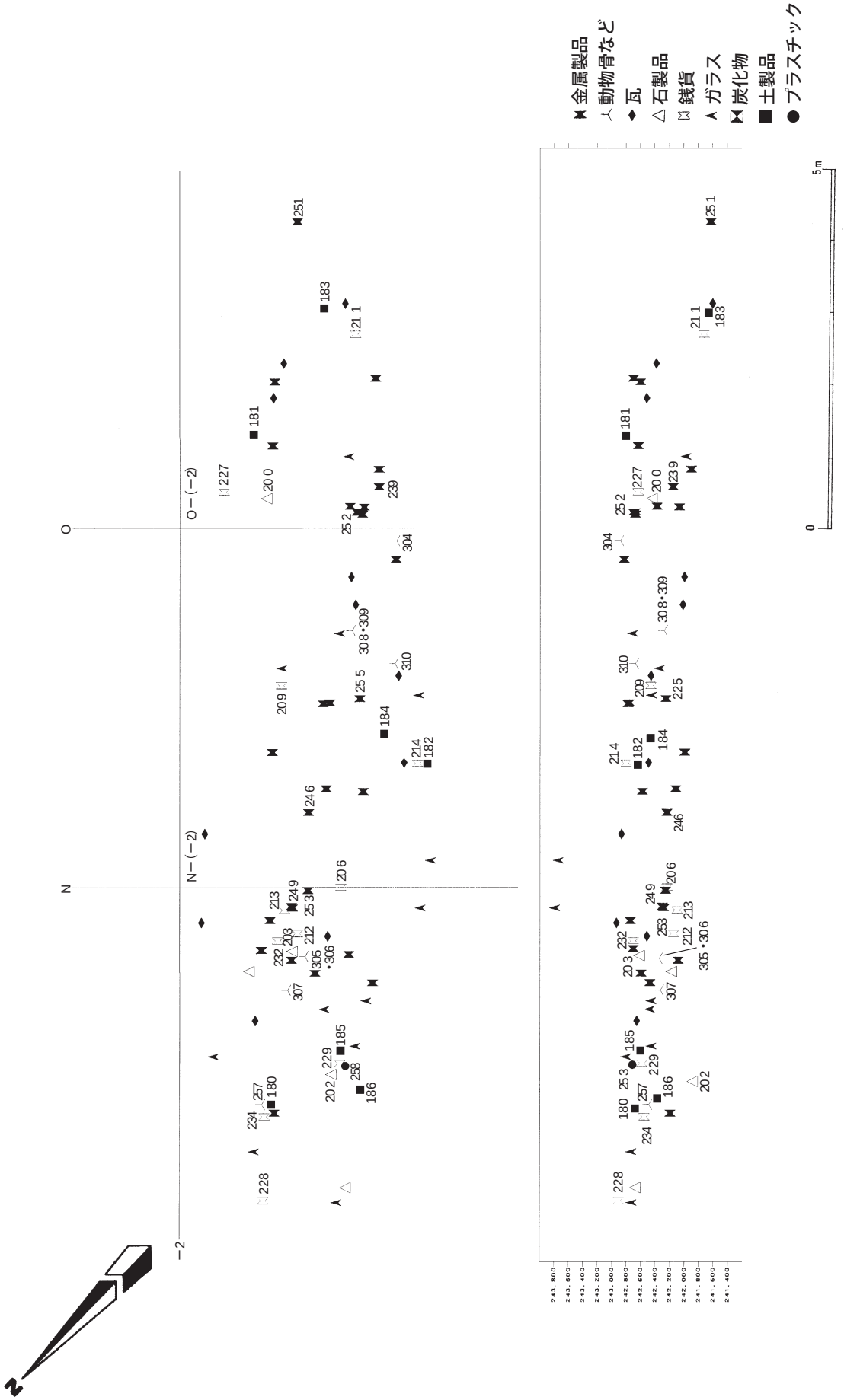
PL－23 遺物平面分布図（その他の遺物）



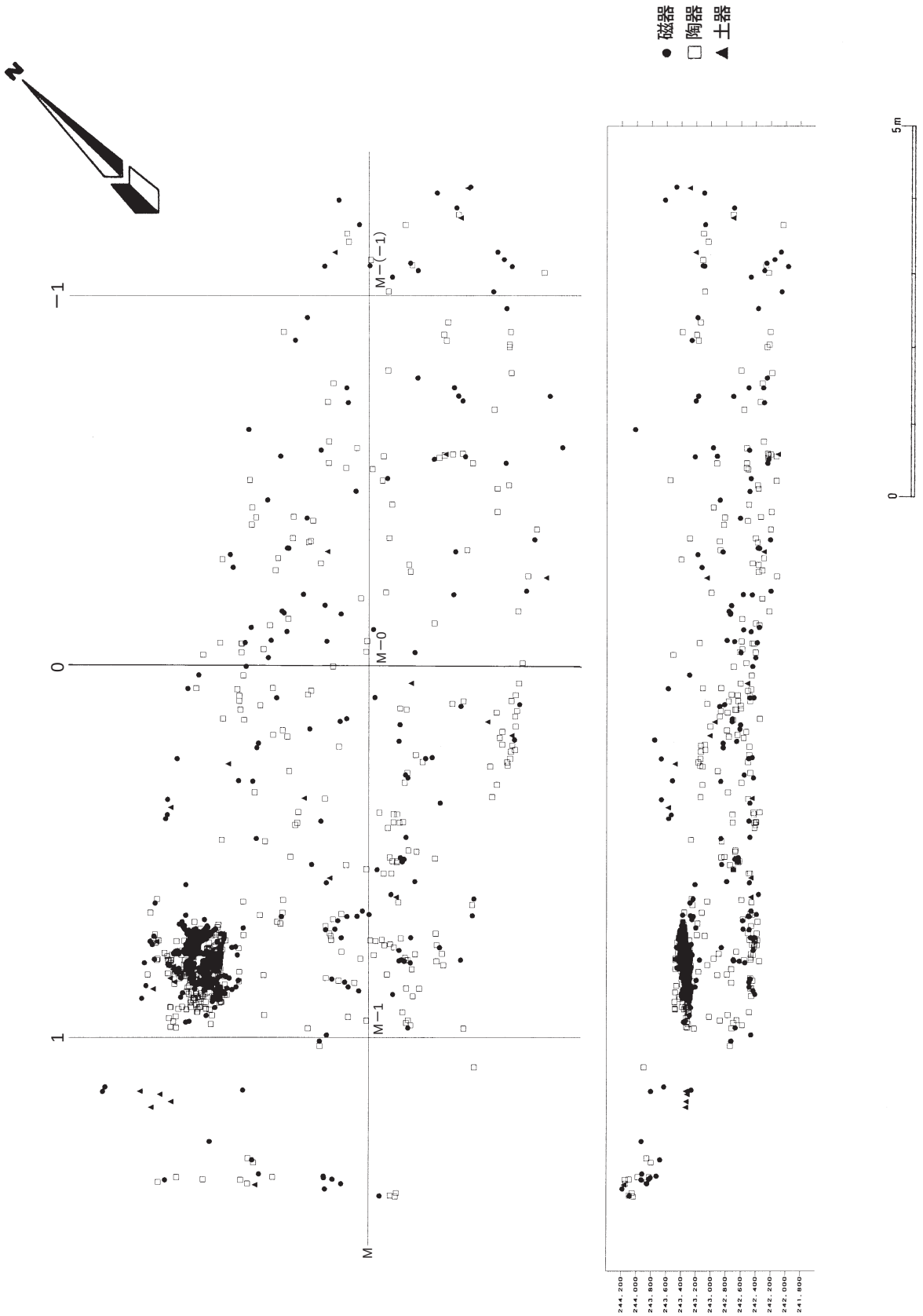
PL－24 遺物平面・垂直分布図（1）
a区（磁器・陶器・土器）



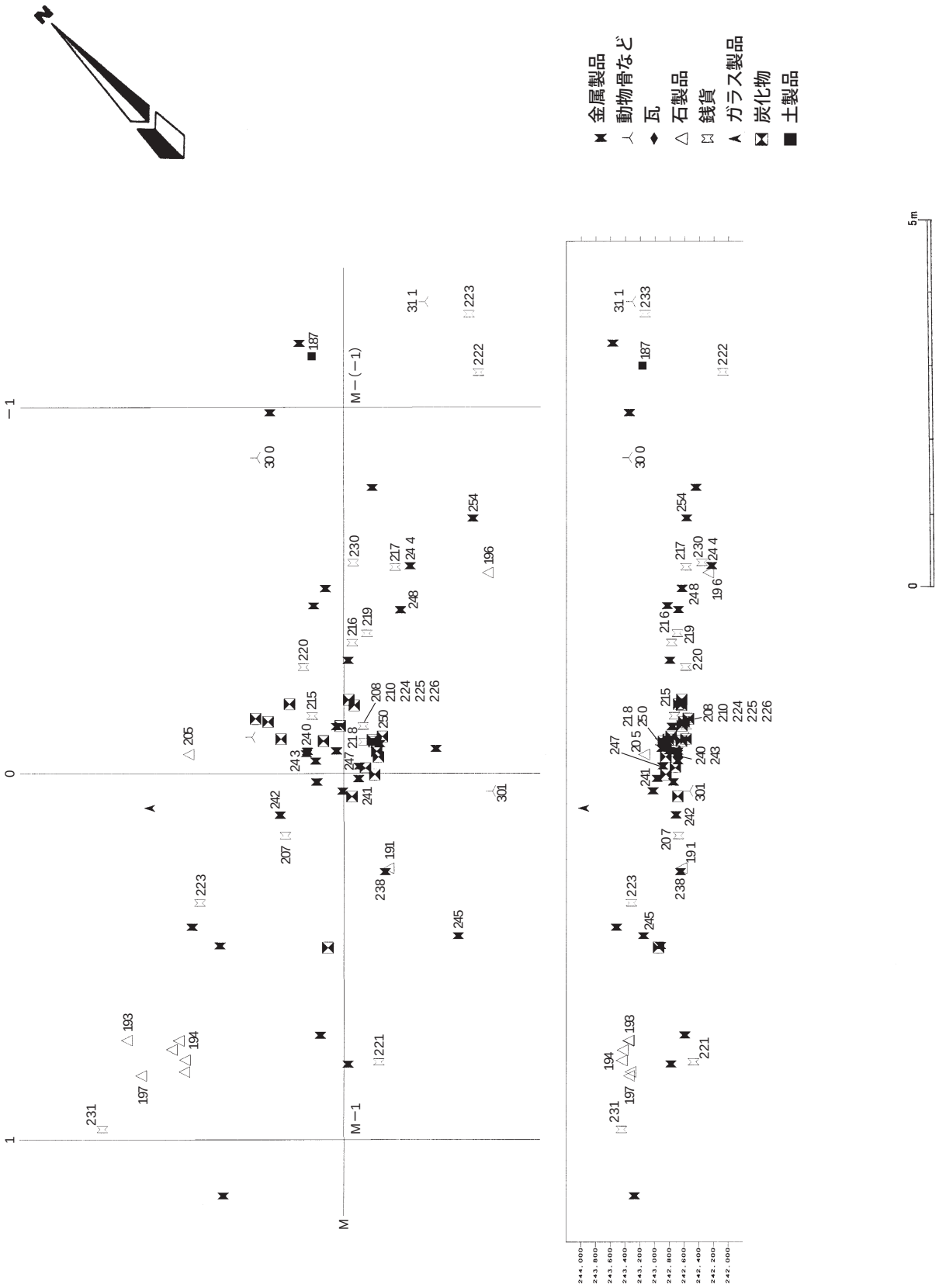
PL－25　遺物平面・垂直分布図（2）
a区（その他の遺物）



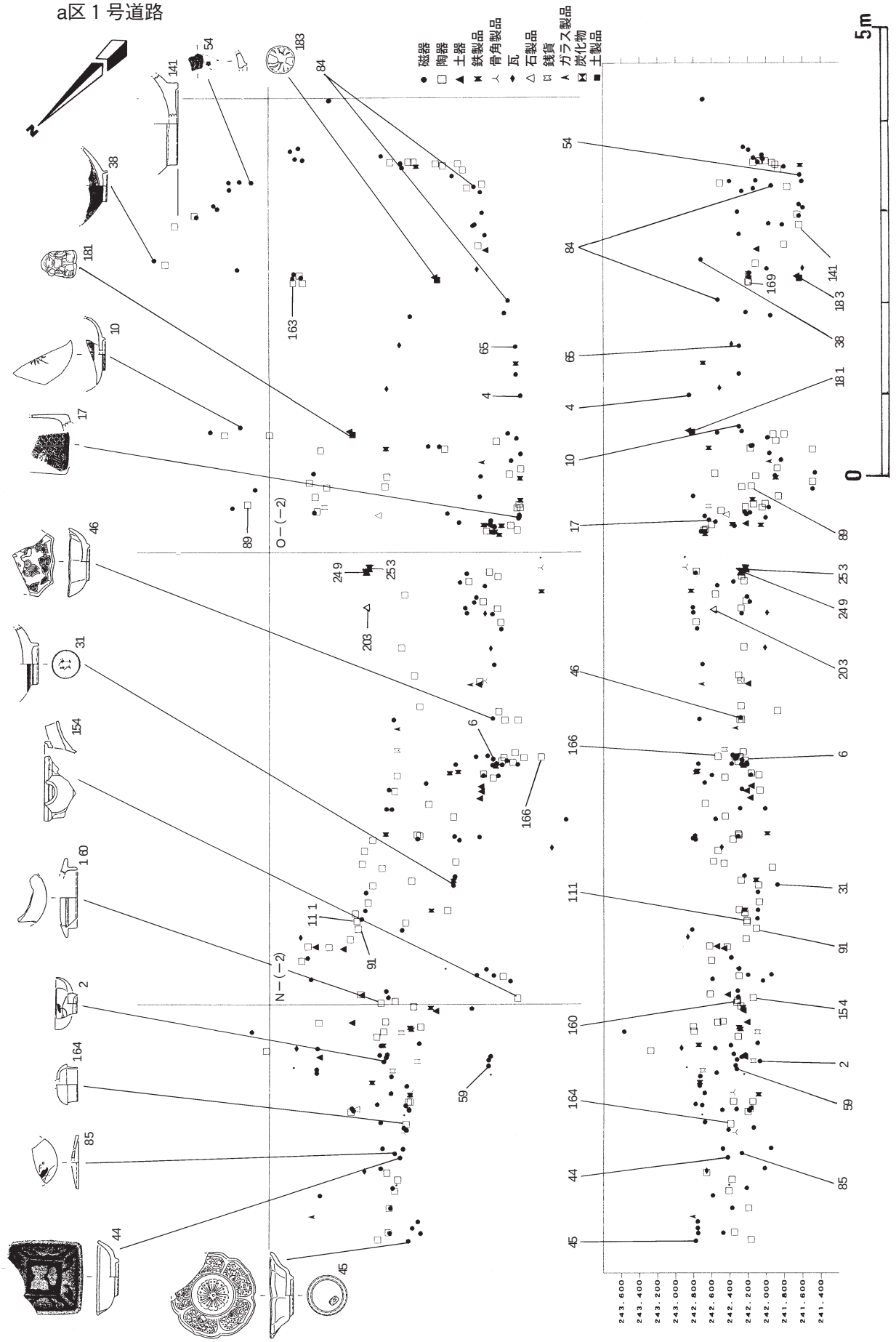
PL－26　遺物平面・垂直分布図（3）
b区（磁器・陶器・土器）



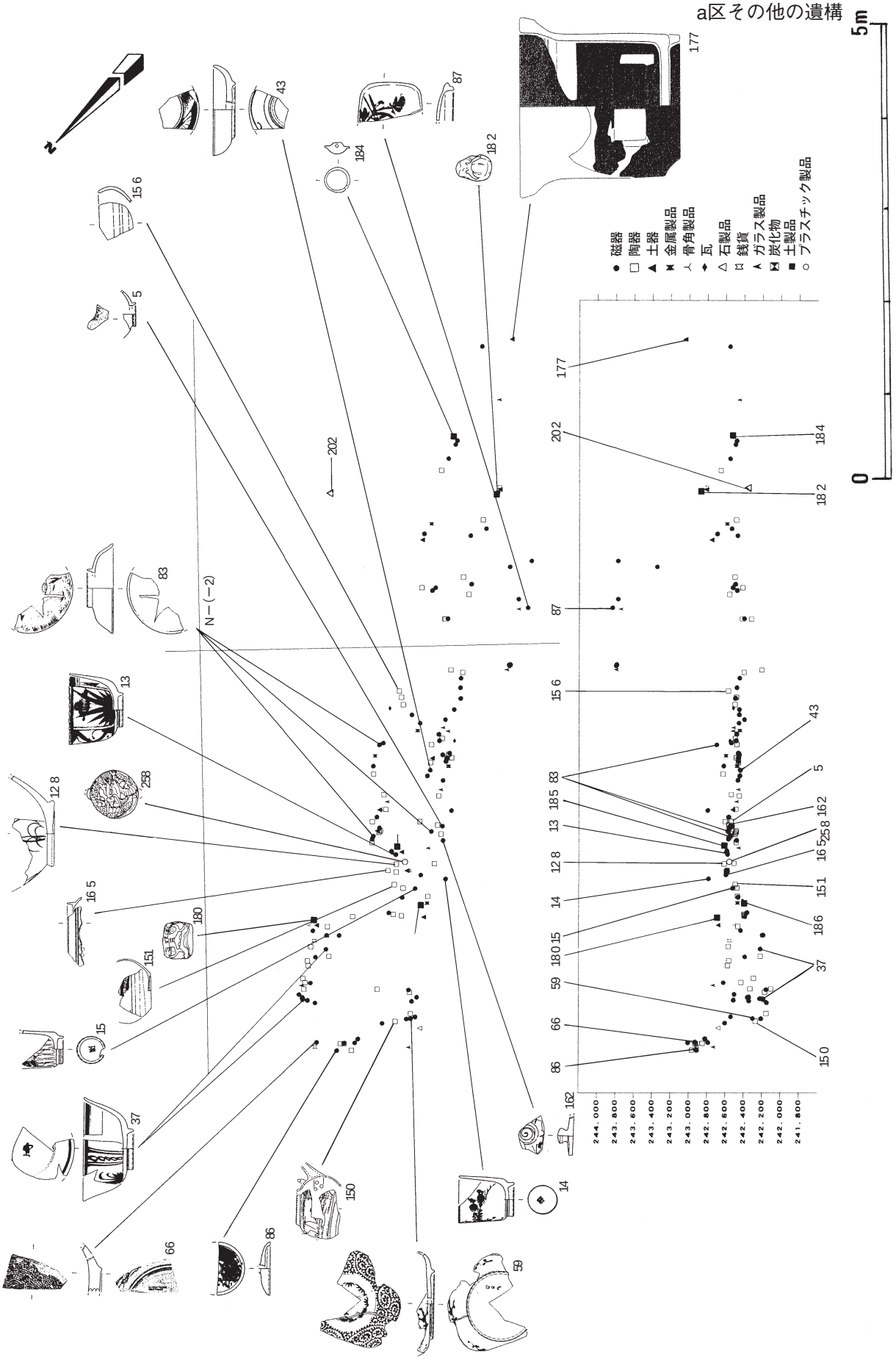
PL－27　遺物平面・垂直分布図（4）
b区（その他の遺物）



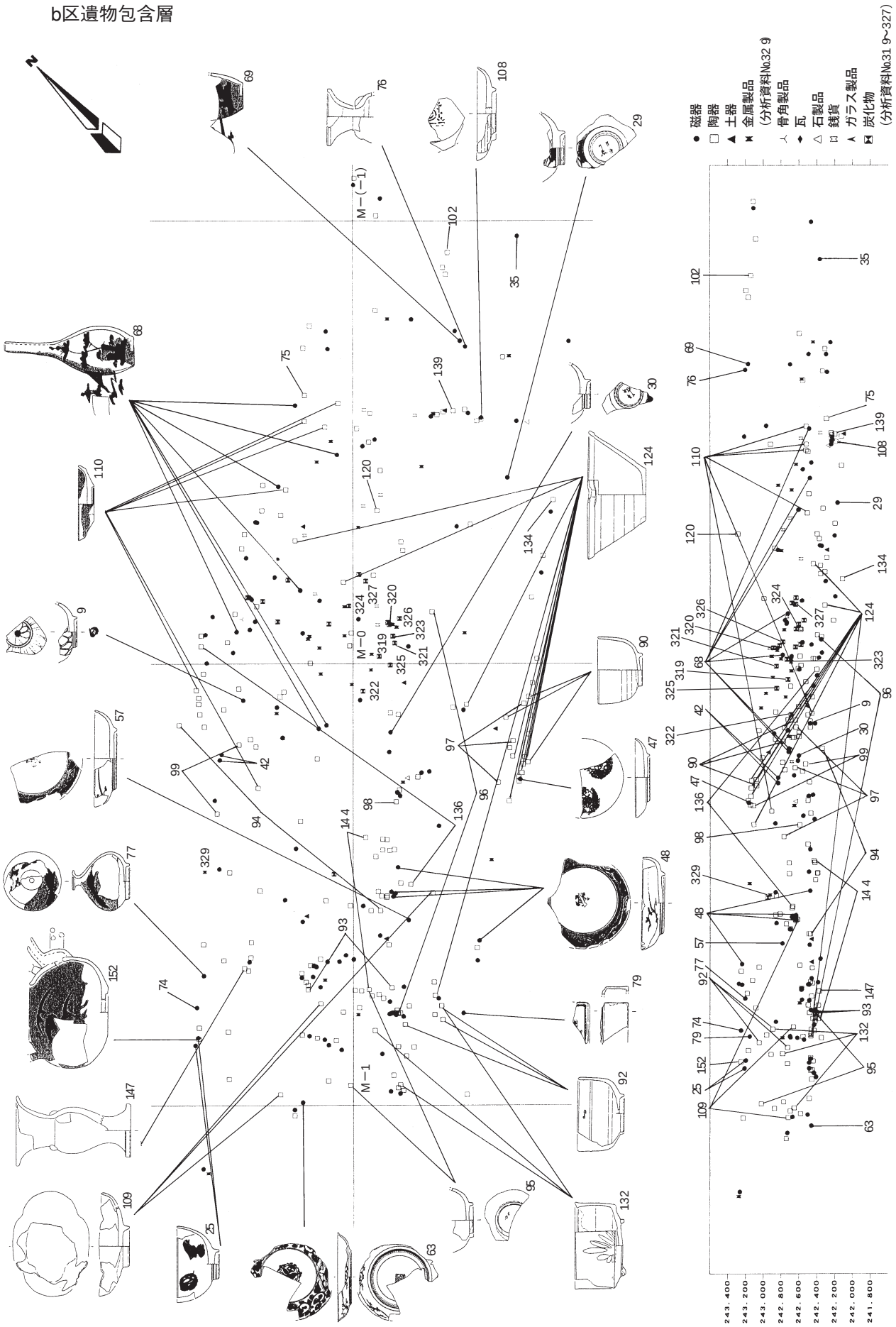
PL—28　遺物平面・垂直分布図（5）
a区１号道路



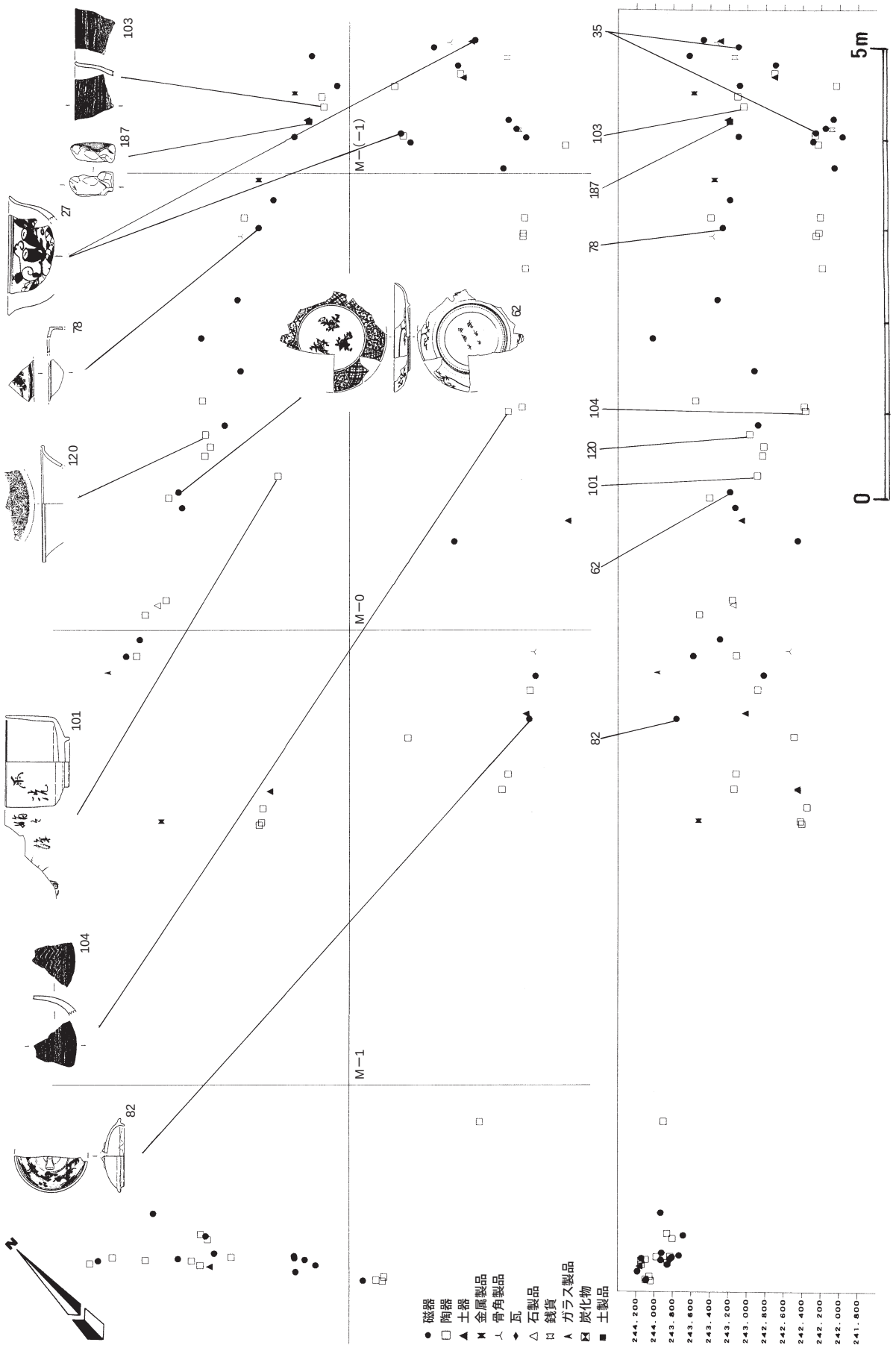
PL－29　遺物平面・垂直分布図（6）
a区その他の遺構



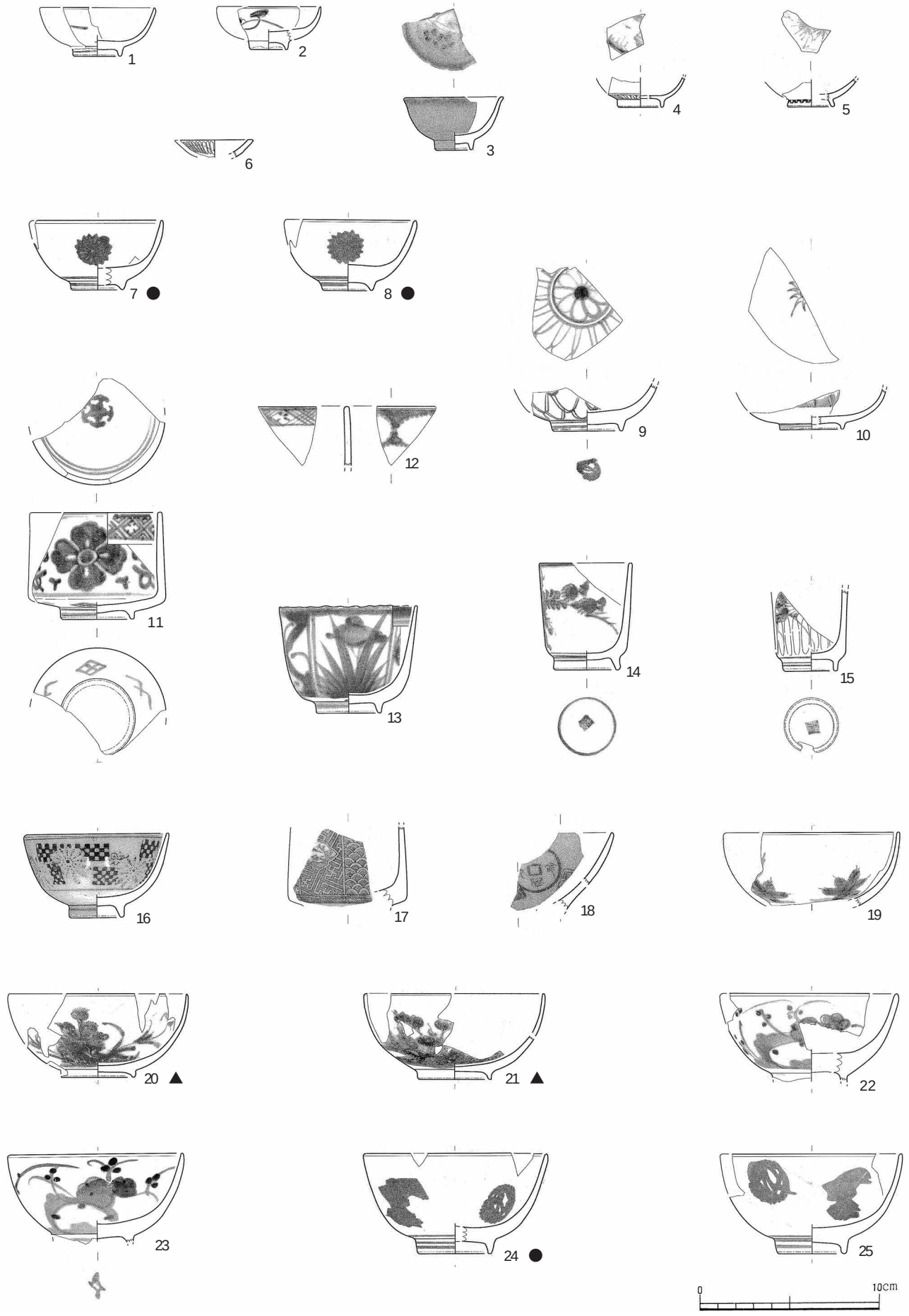
PL－30　遺物平面・垂直分布図（7）
b区遺物包含層

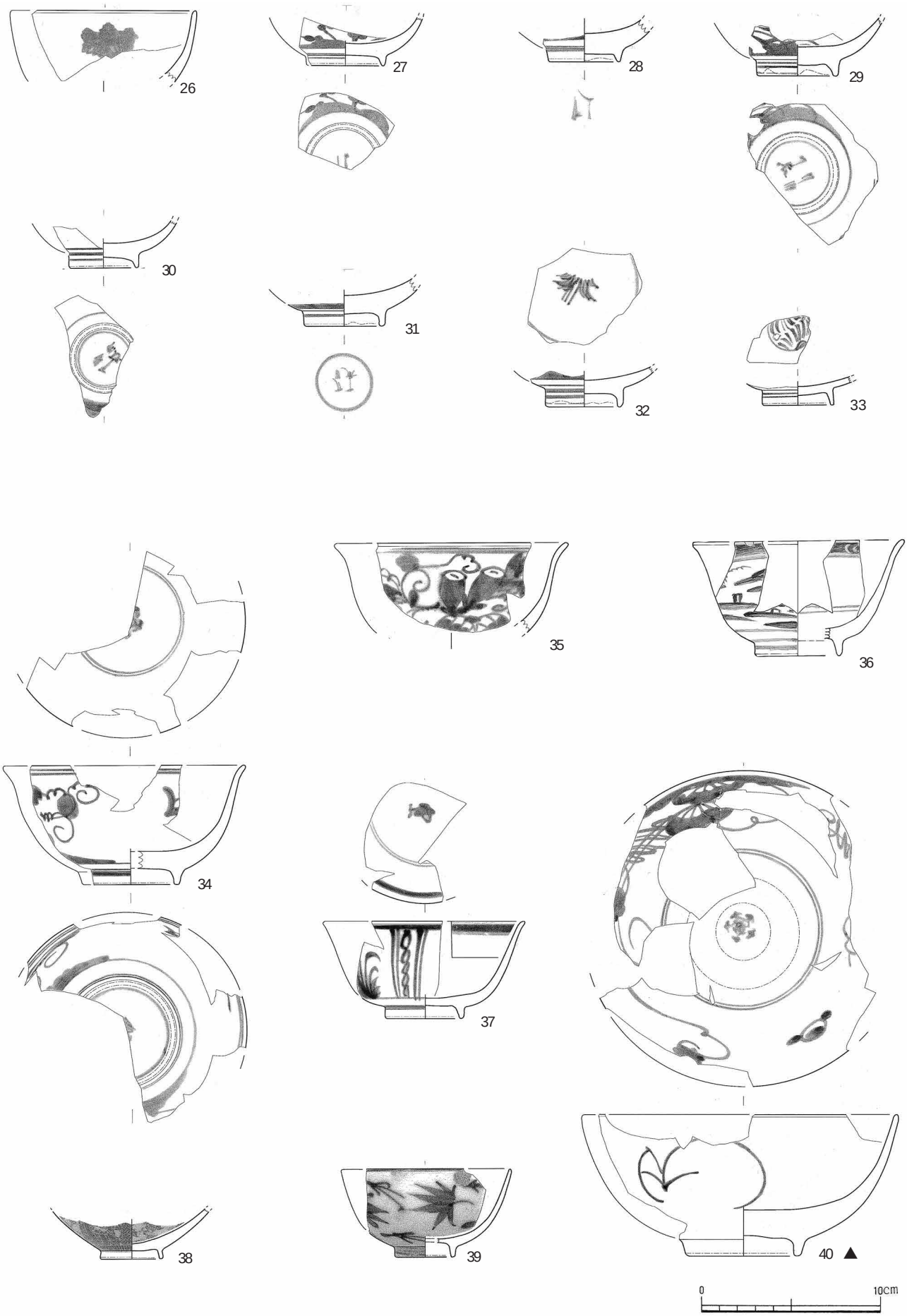


PL－31　遺物平面・垂直分布図（8）
b区各調査壁面

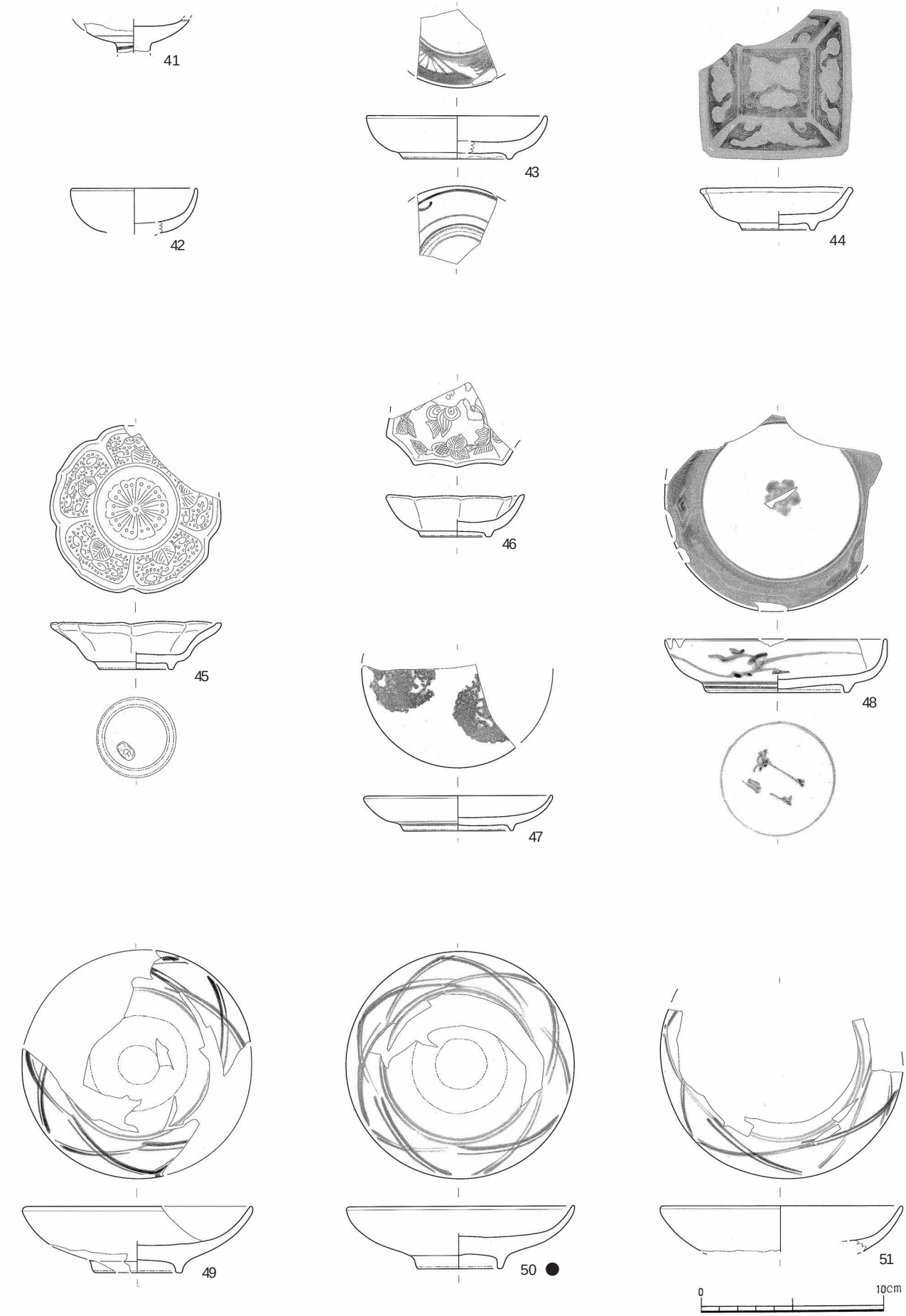


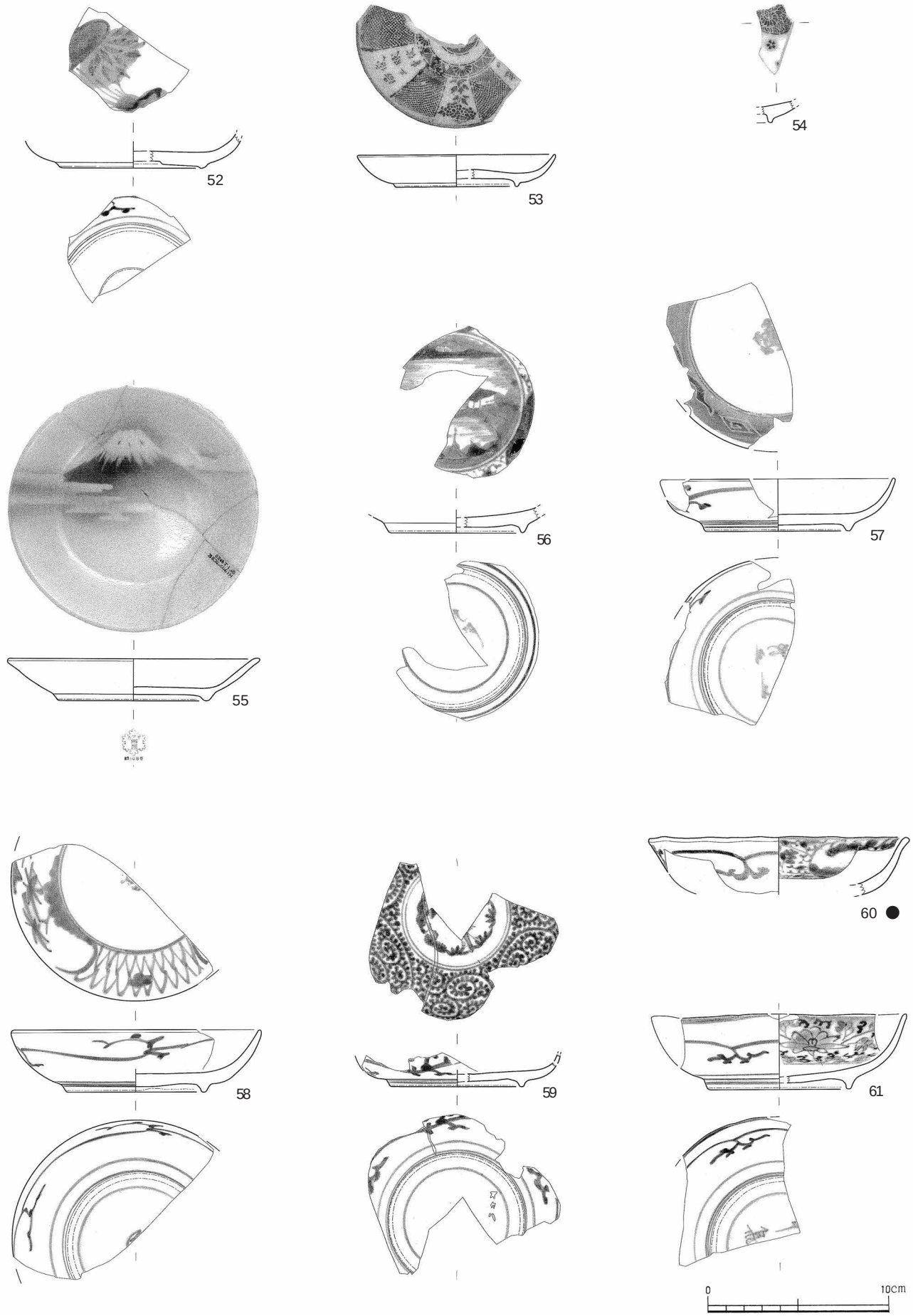
PL－32　磁器 碗類（1）



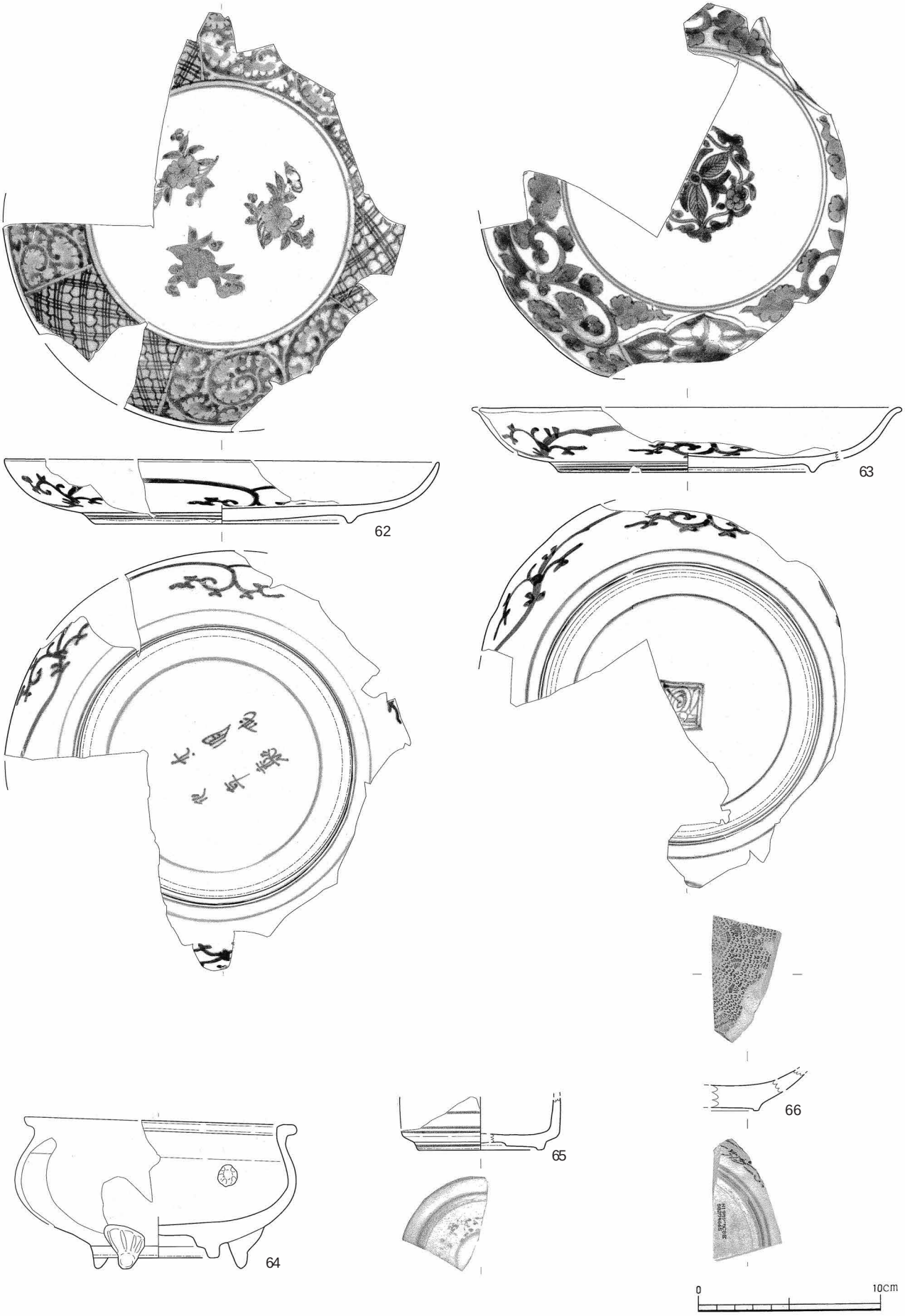

26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40 ▲
0
10cm

PL－34　磁器 碗類（3）皿類（1）

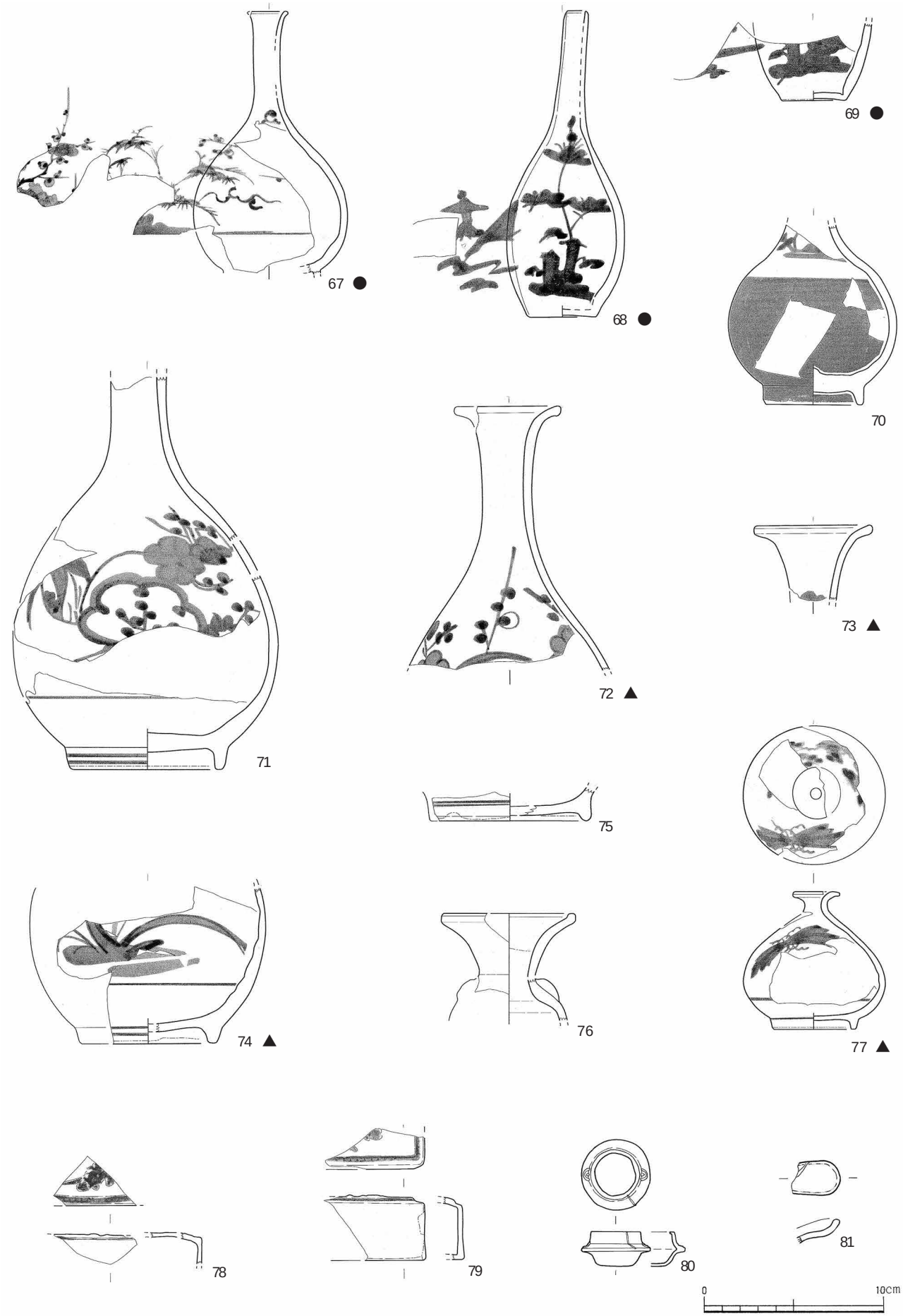



52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
10cm

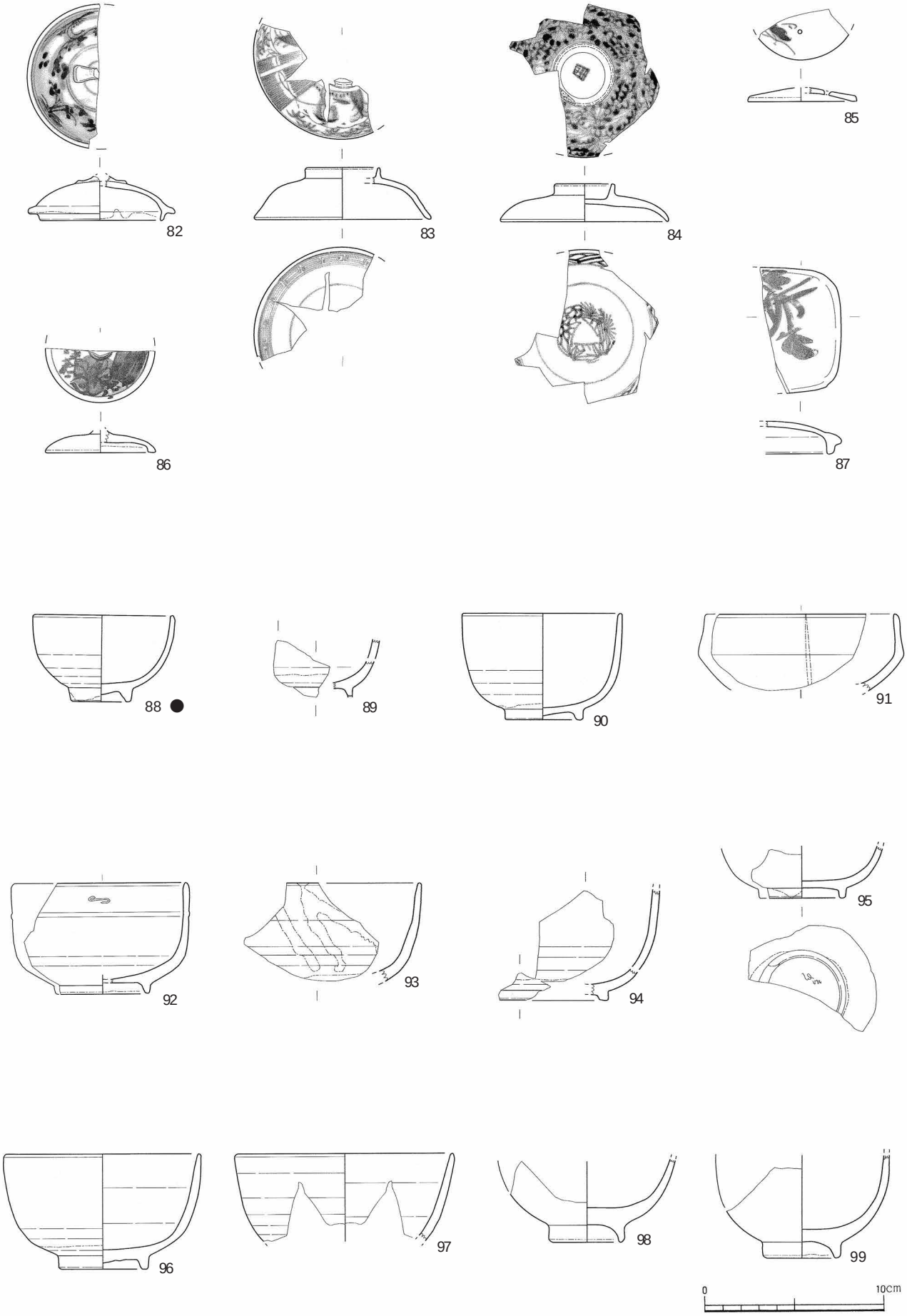
PL－36　磁器 皿類（3）・鉢類

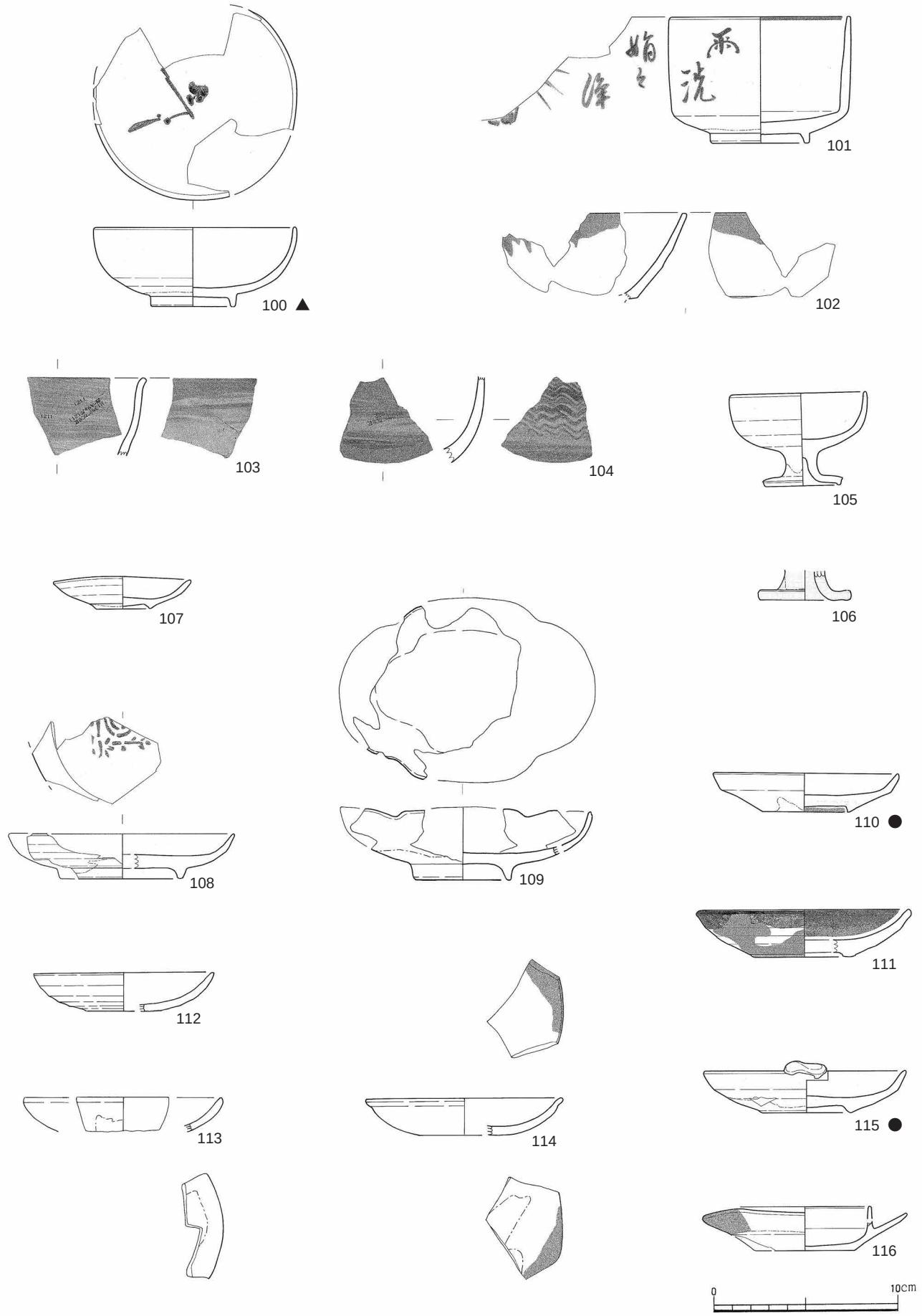


PL－37　磁器 瓶類・水注類・釜類・杓子類

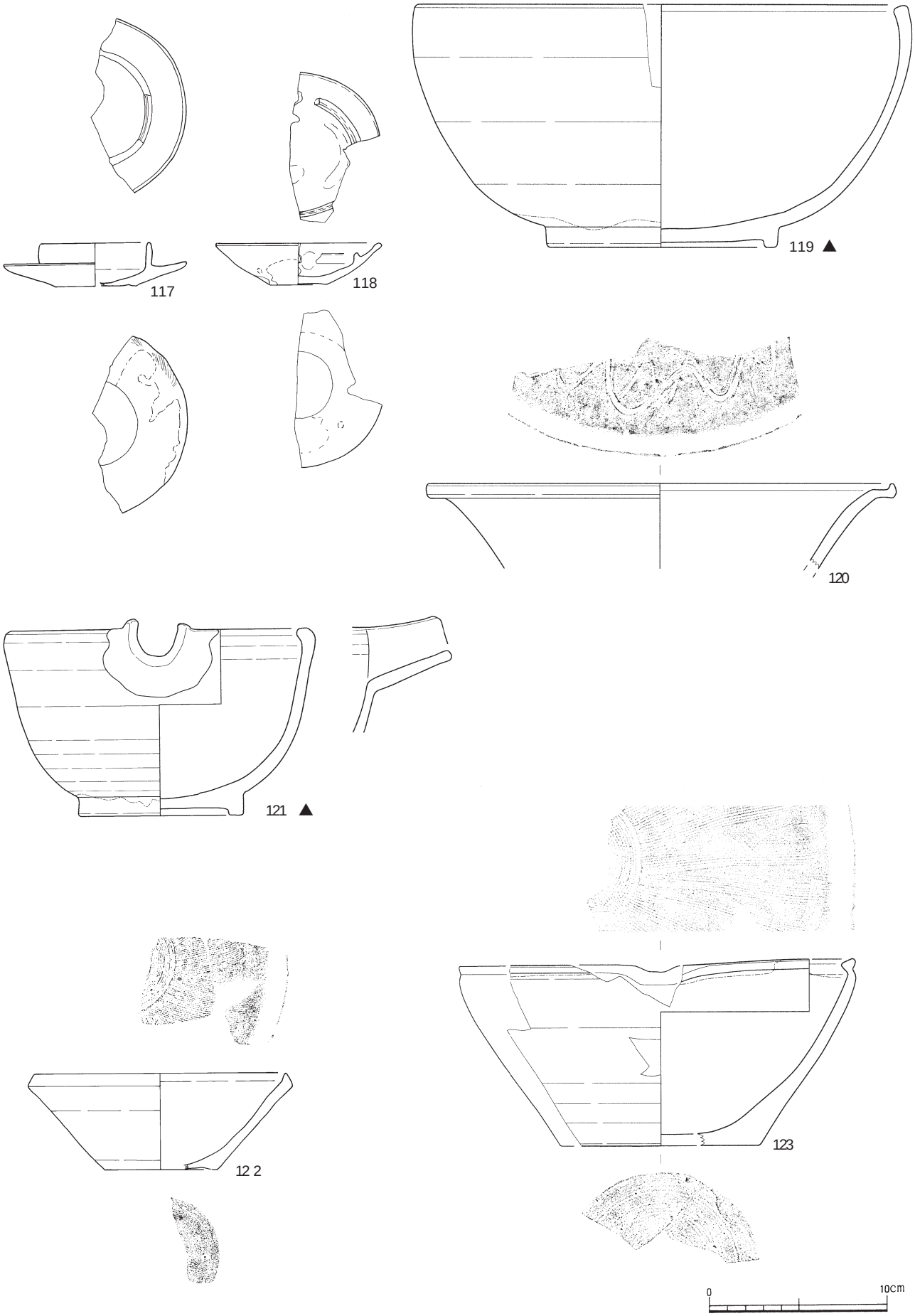


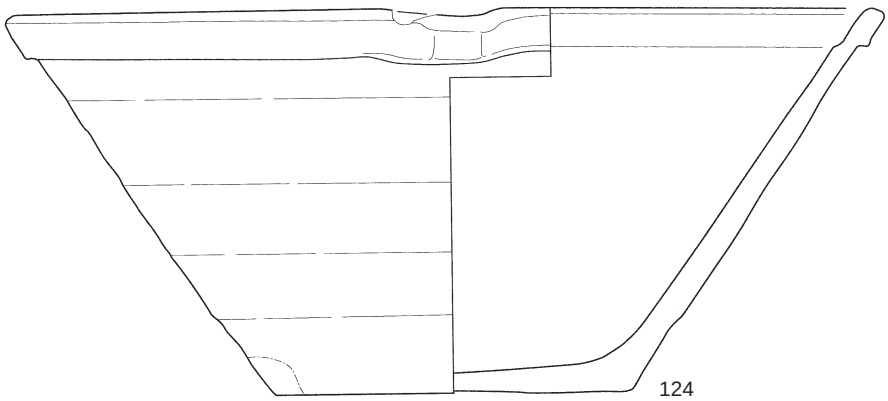
PL－38　磁器 蓋類　陶器 碗類（1）



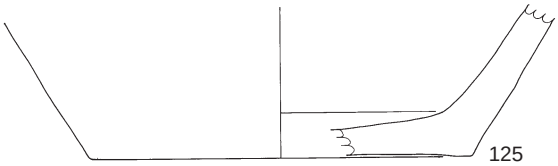

100 ▲
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110 ●
111
112
113
114
115 ●
116
0
10cm

PL－40　陶器 器台類（2）・鉢類（1）

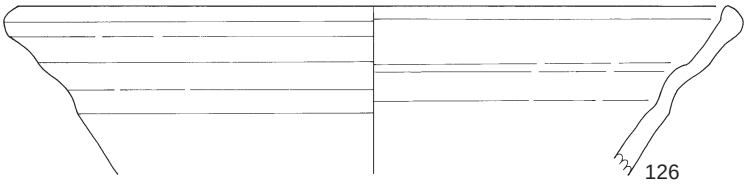




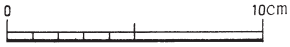
124



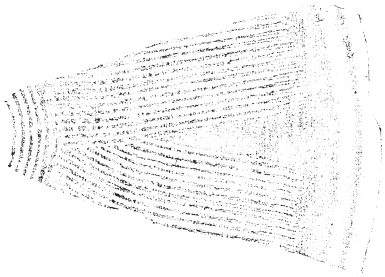
125

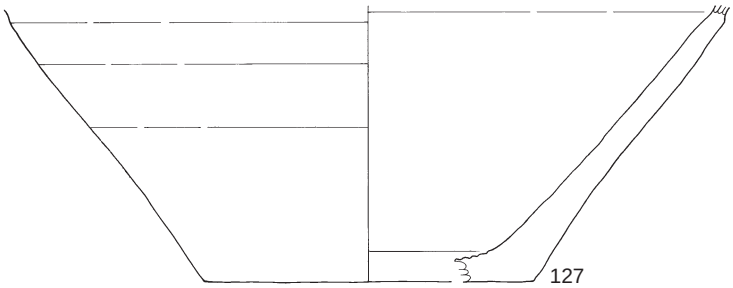


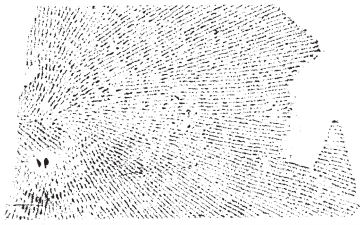
126

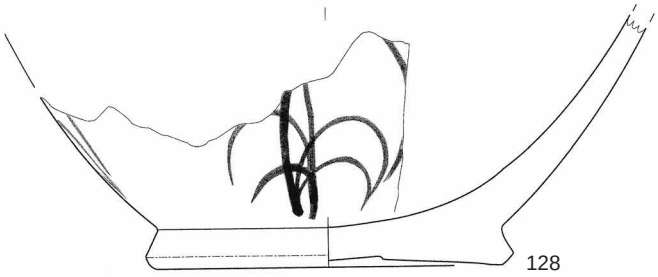


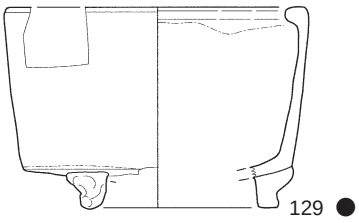
PL－42 陶器 鉢類（3）

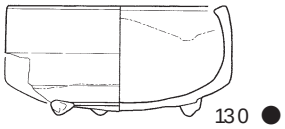


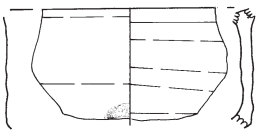


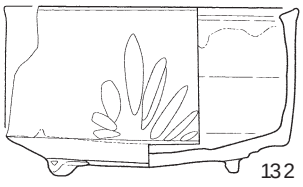


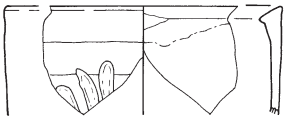


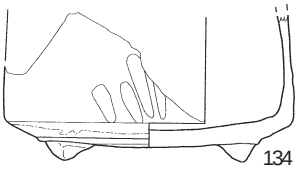


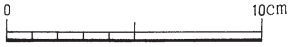




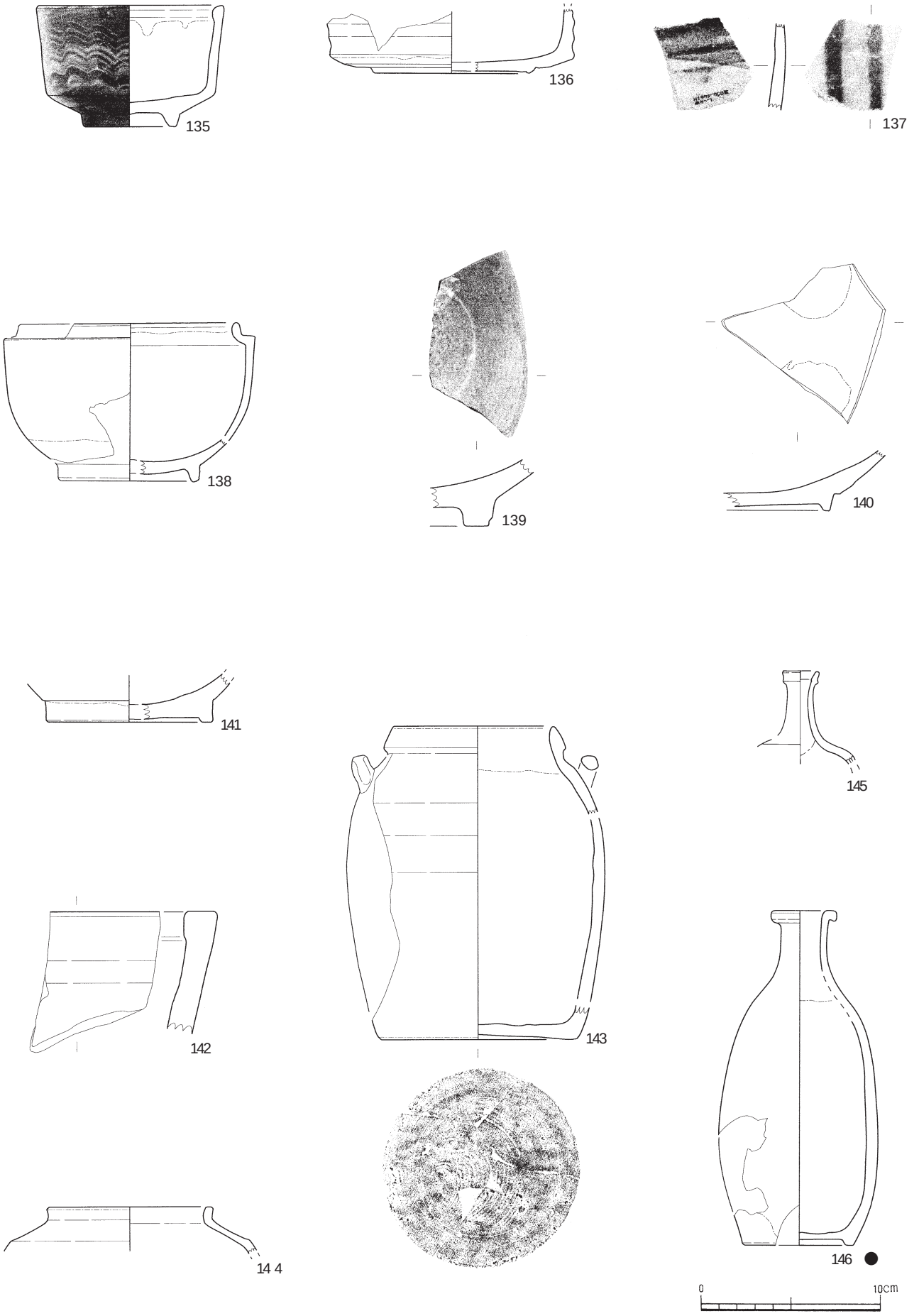




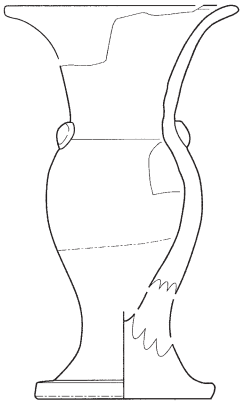




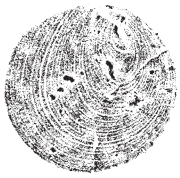
PL－43　陶器 鉢類（4）・壺類・瓶類（1）

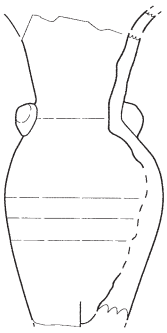


PL－44　陶器 瓶類（2）・水注類・鍋類・秉燭類・蓋類（1）

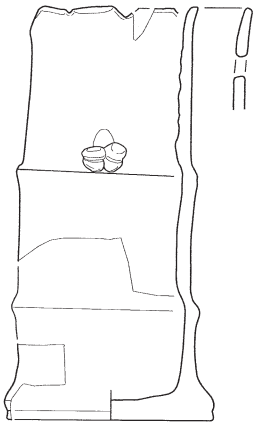


147

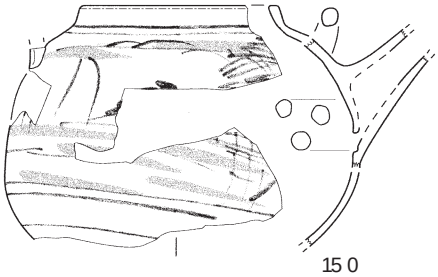




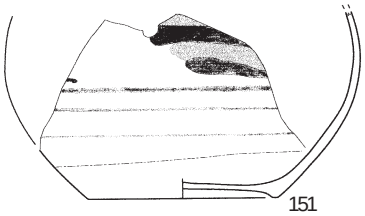
148



149 ●

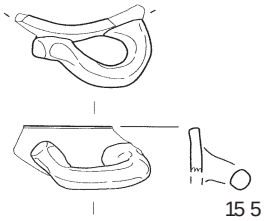


15 0

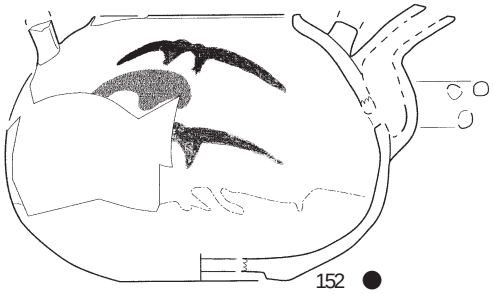


151

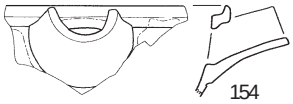
153



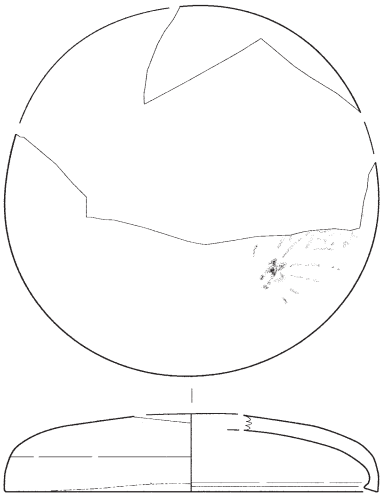
15 5



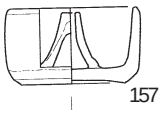
152 ●



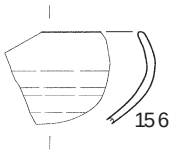
154



158 ●



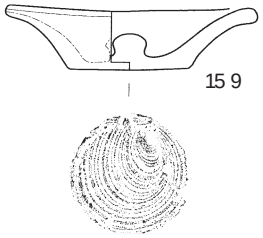
157

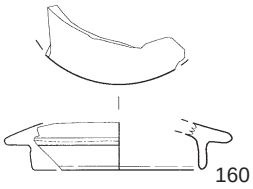


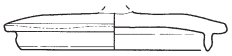
15 6

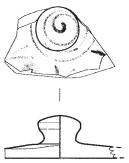
0　10cm

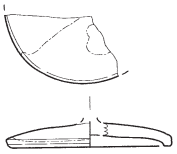
PL－45　陶器 蓋類（2）　炻器 蓋類・水注類・瓶類・甕類　土器 皿類

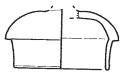

159

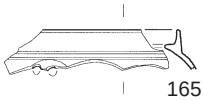

160

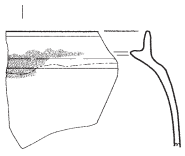

161 ●

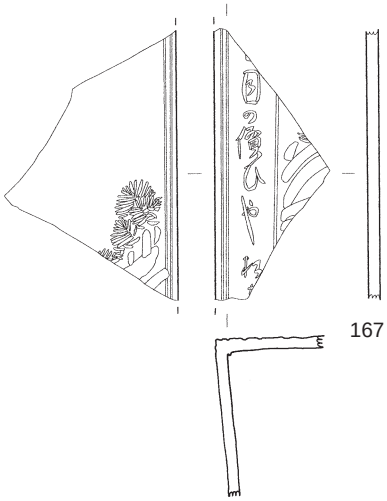

162

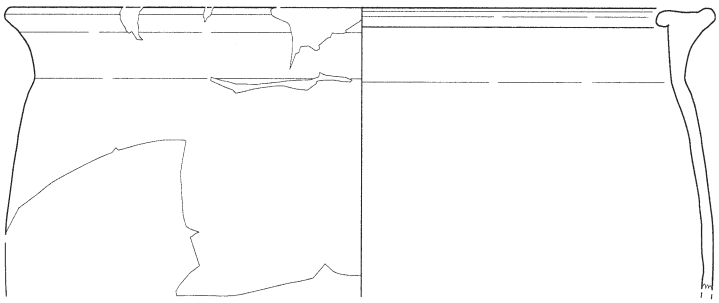

163

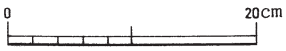

164


165

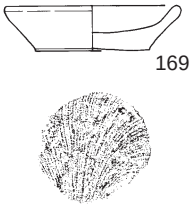

166

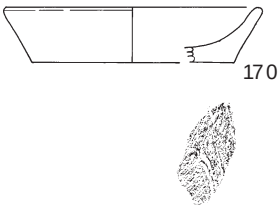

167

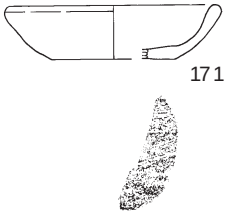

168 ●

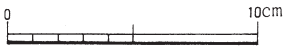


(168)

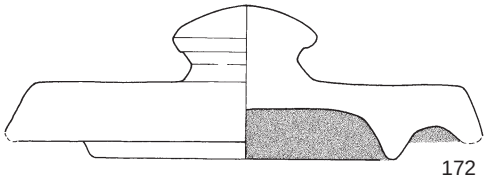

169

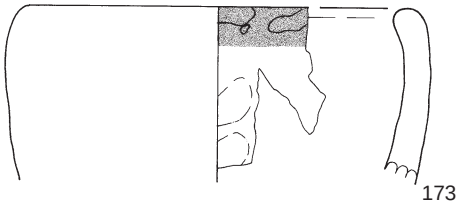

170

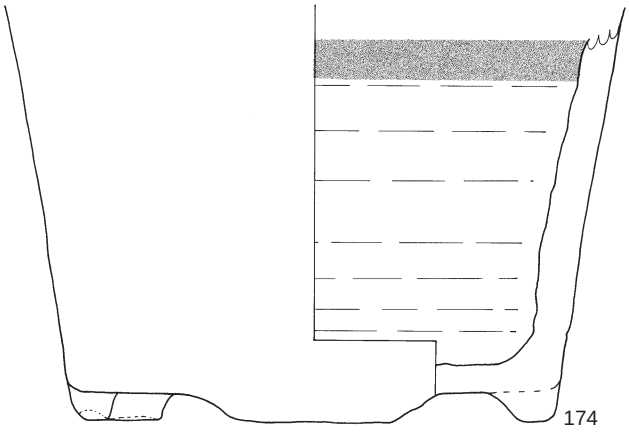

171

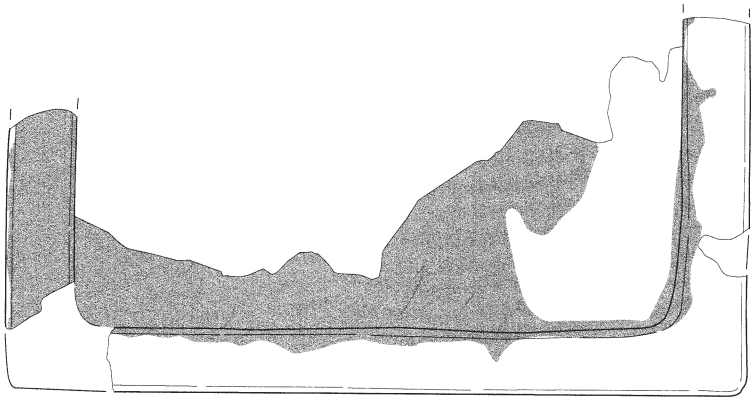


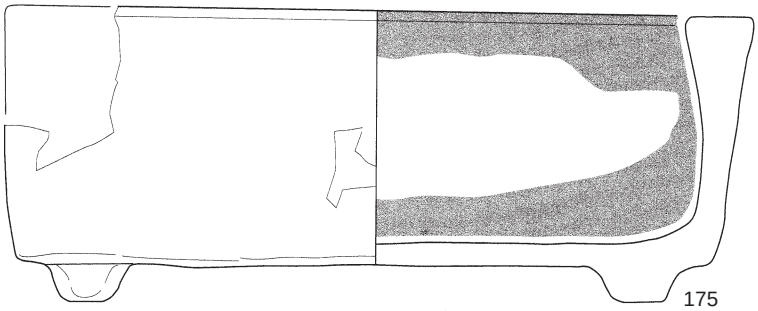
PL－46　土器 蓋類・鉢類（1）

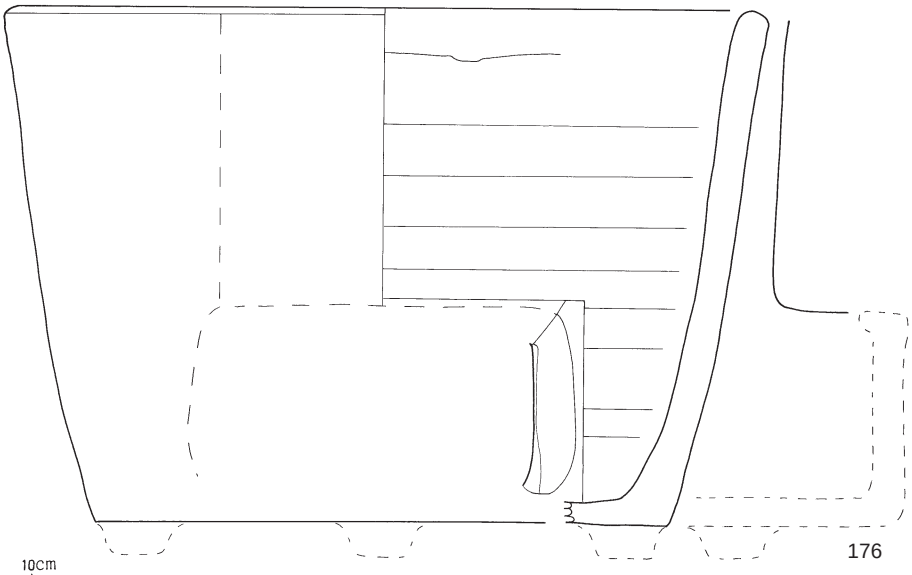


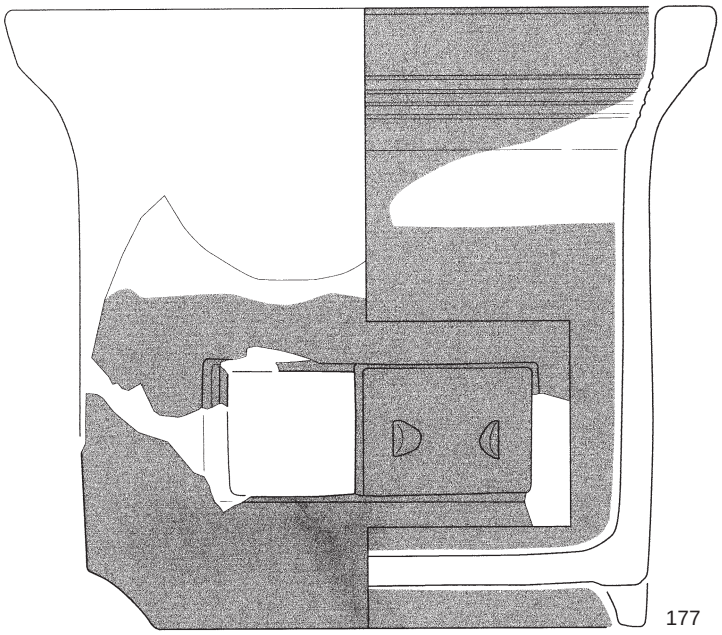




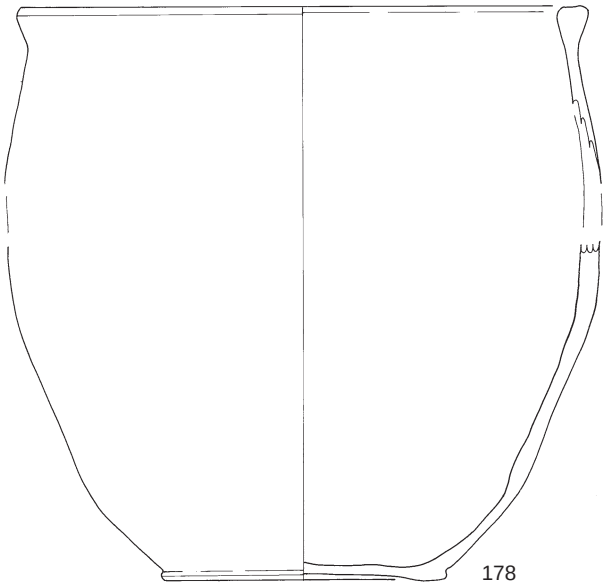




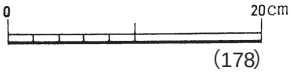




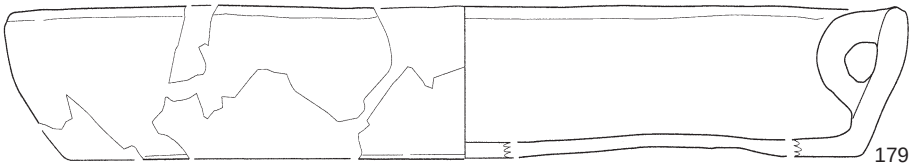
177



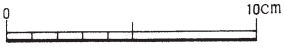
178



(178)

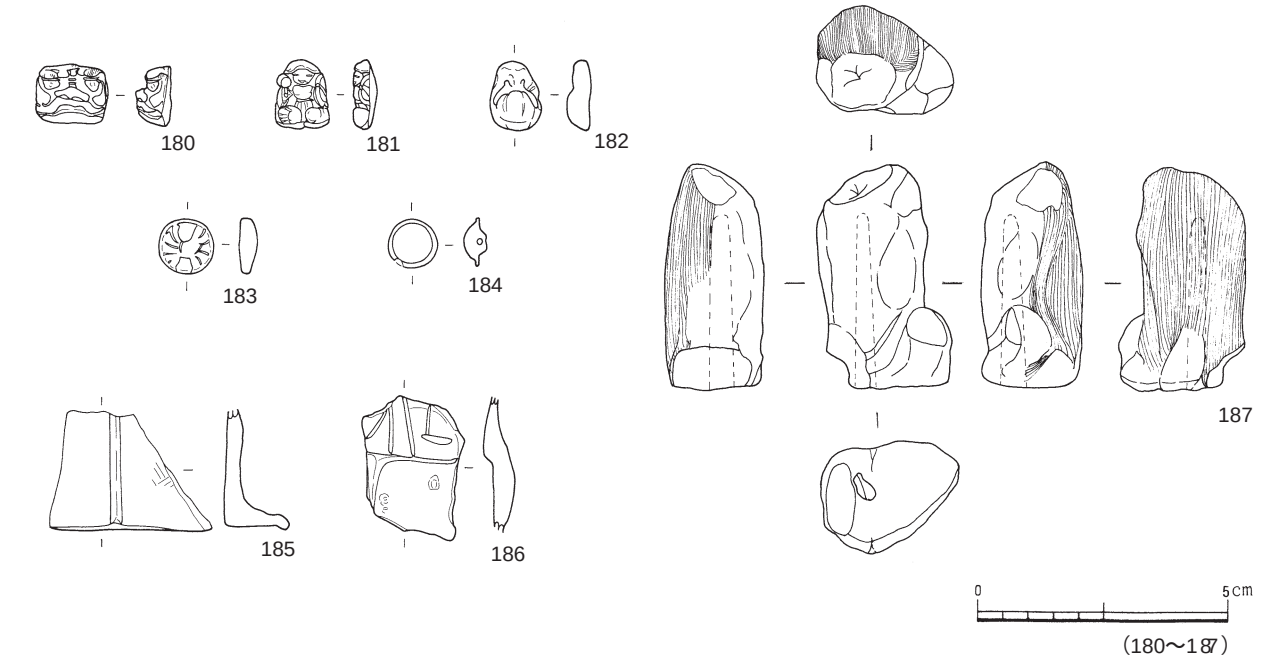


179

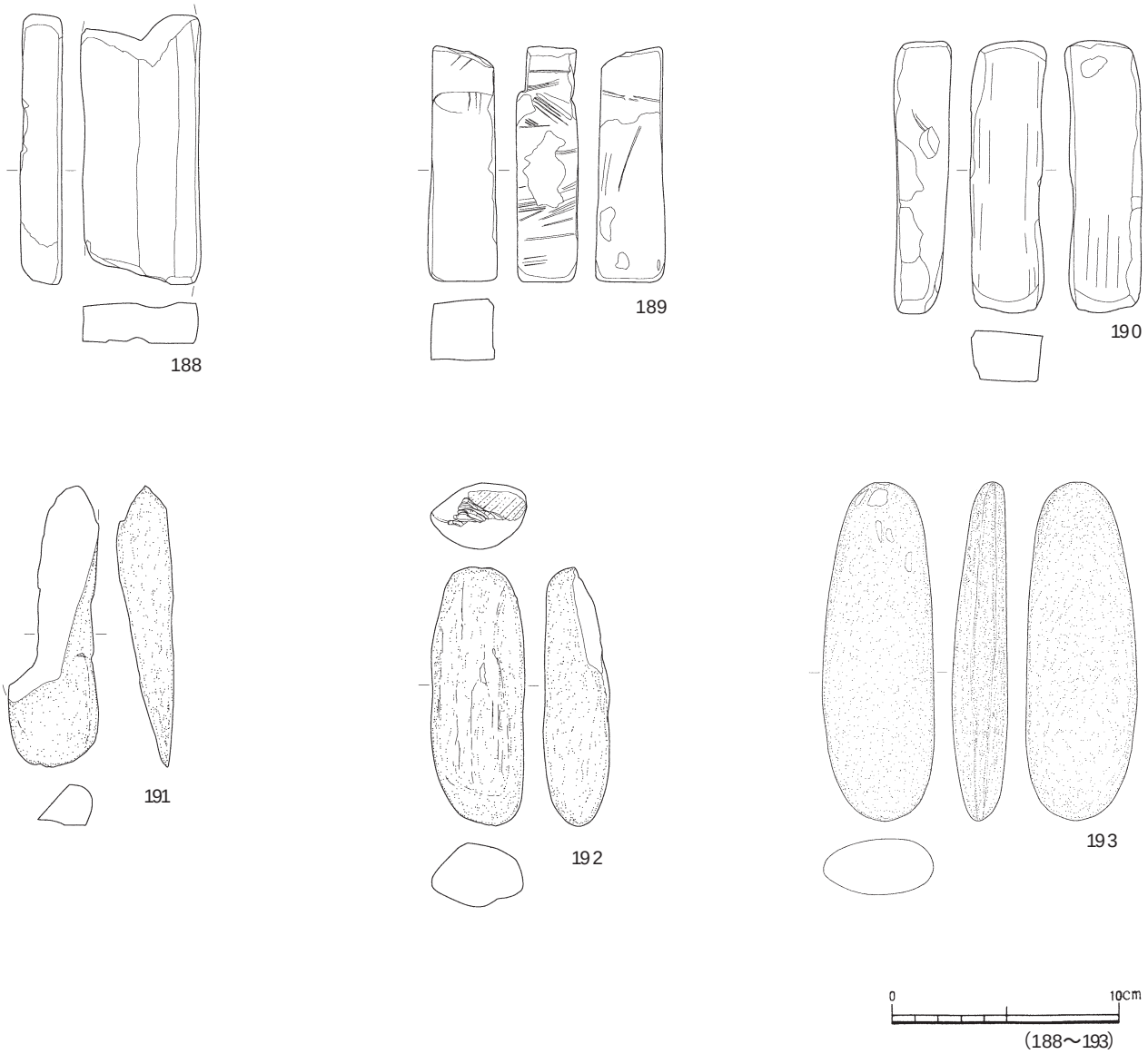


(177－179)

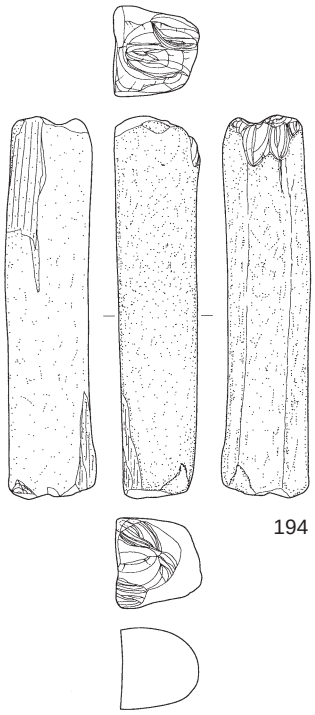
PL－48　土製品　石製品（1）

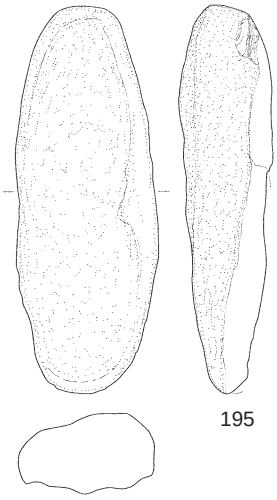


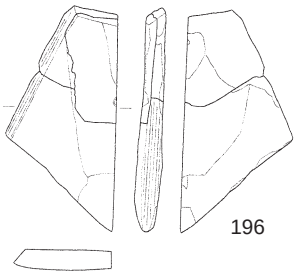
（180～187）

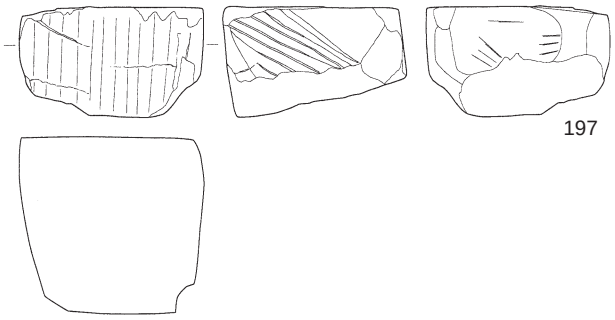


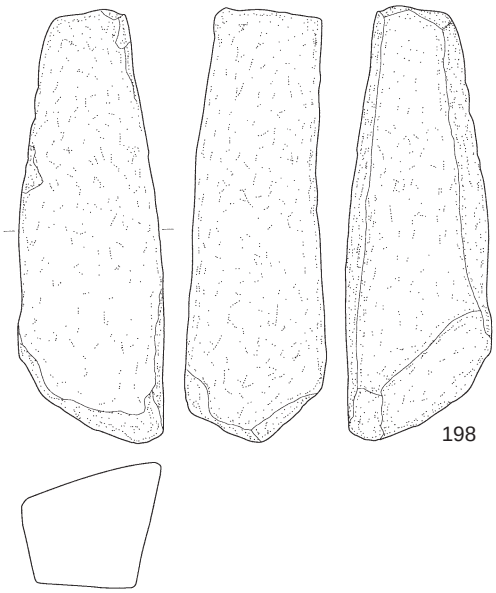
（188～193）

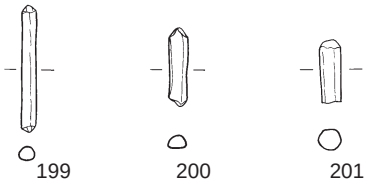


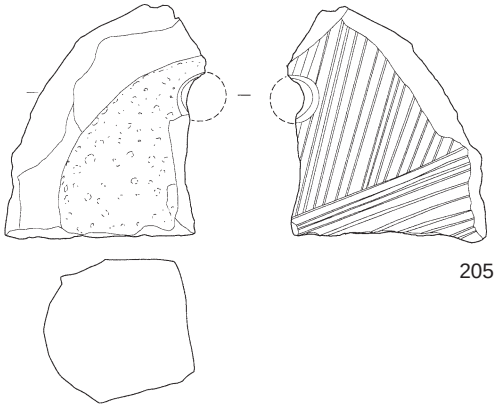








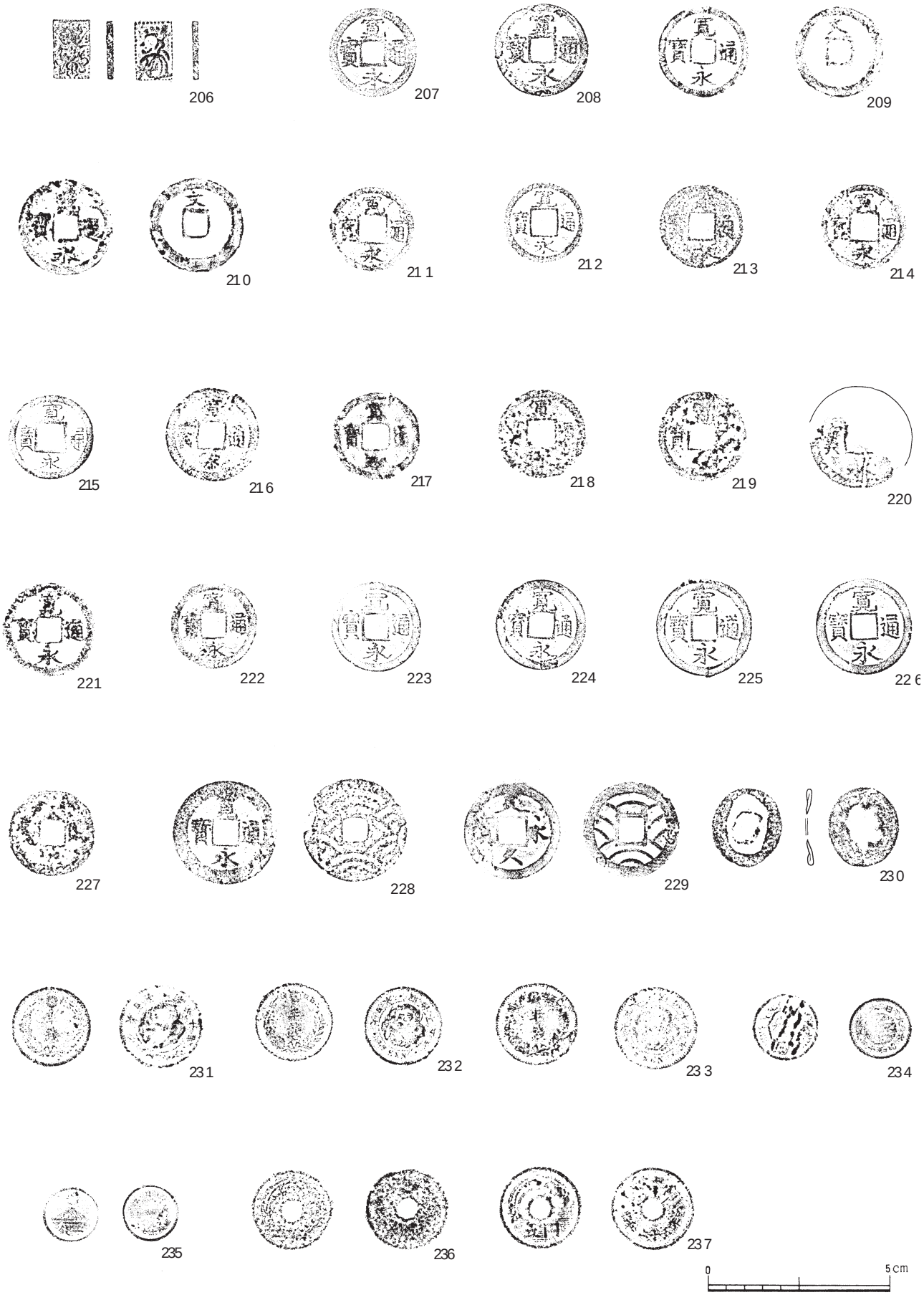




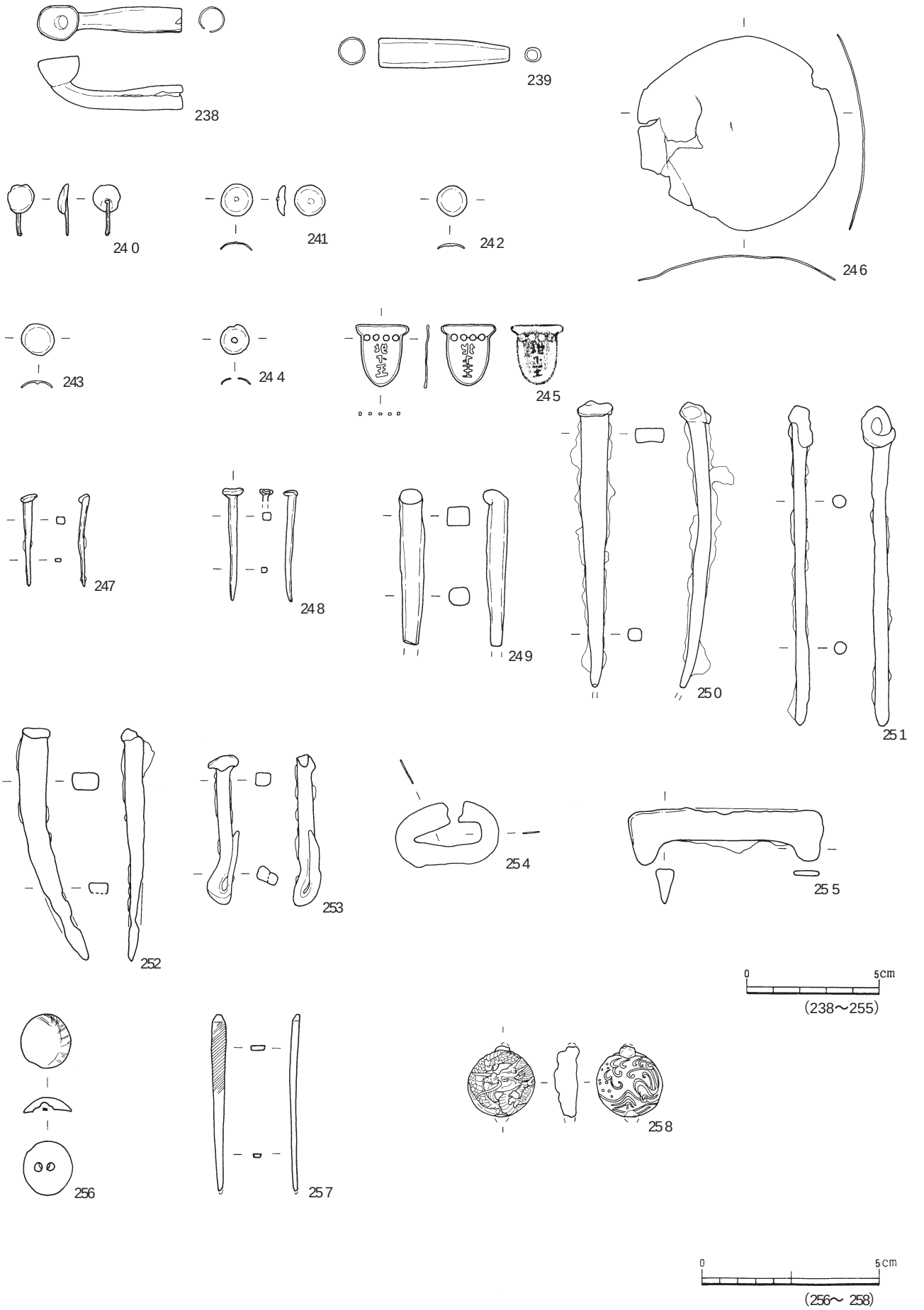
0　10cm
（194～204）

0　20cm
（205）

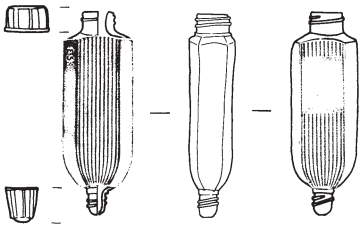
PL－50　銭貨


206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
0
5cm

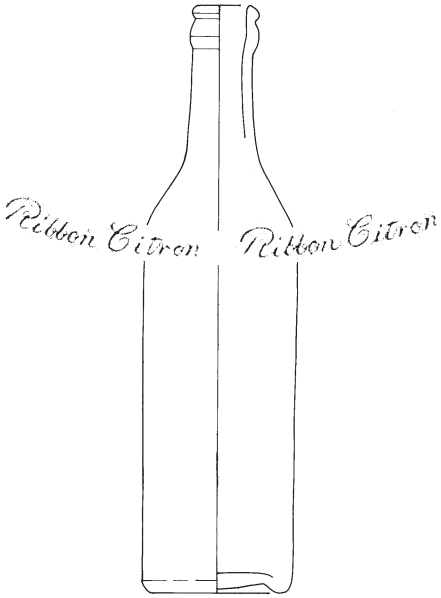
PL－51　金属製品　骨角製品　プラスチック製品



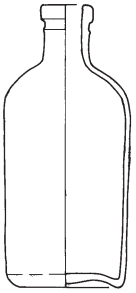
PL－52　ガラス製品



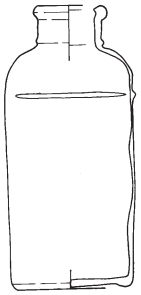
259



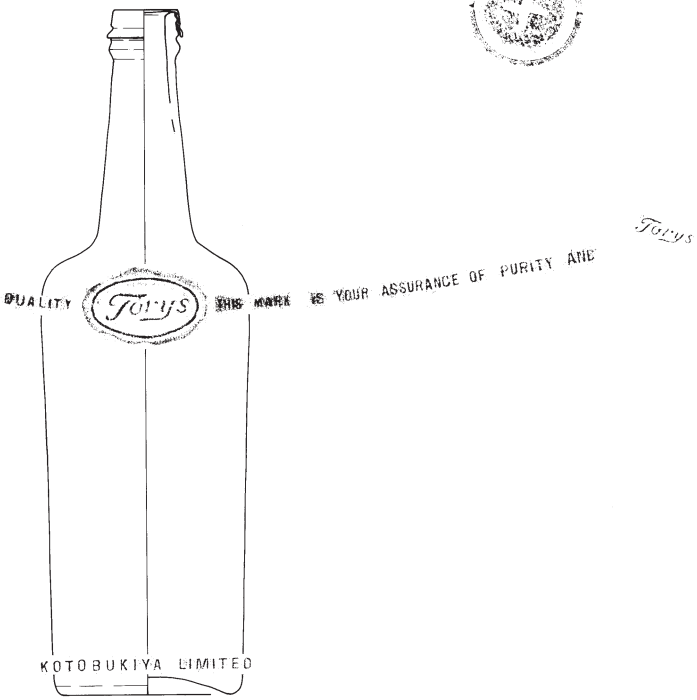
262



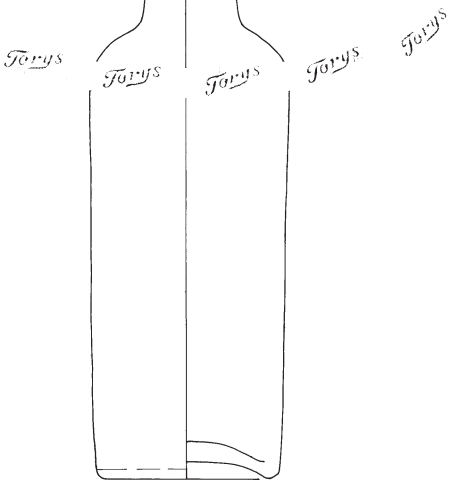
26 0



261



263

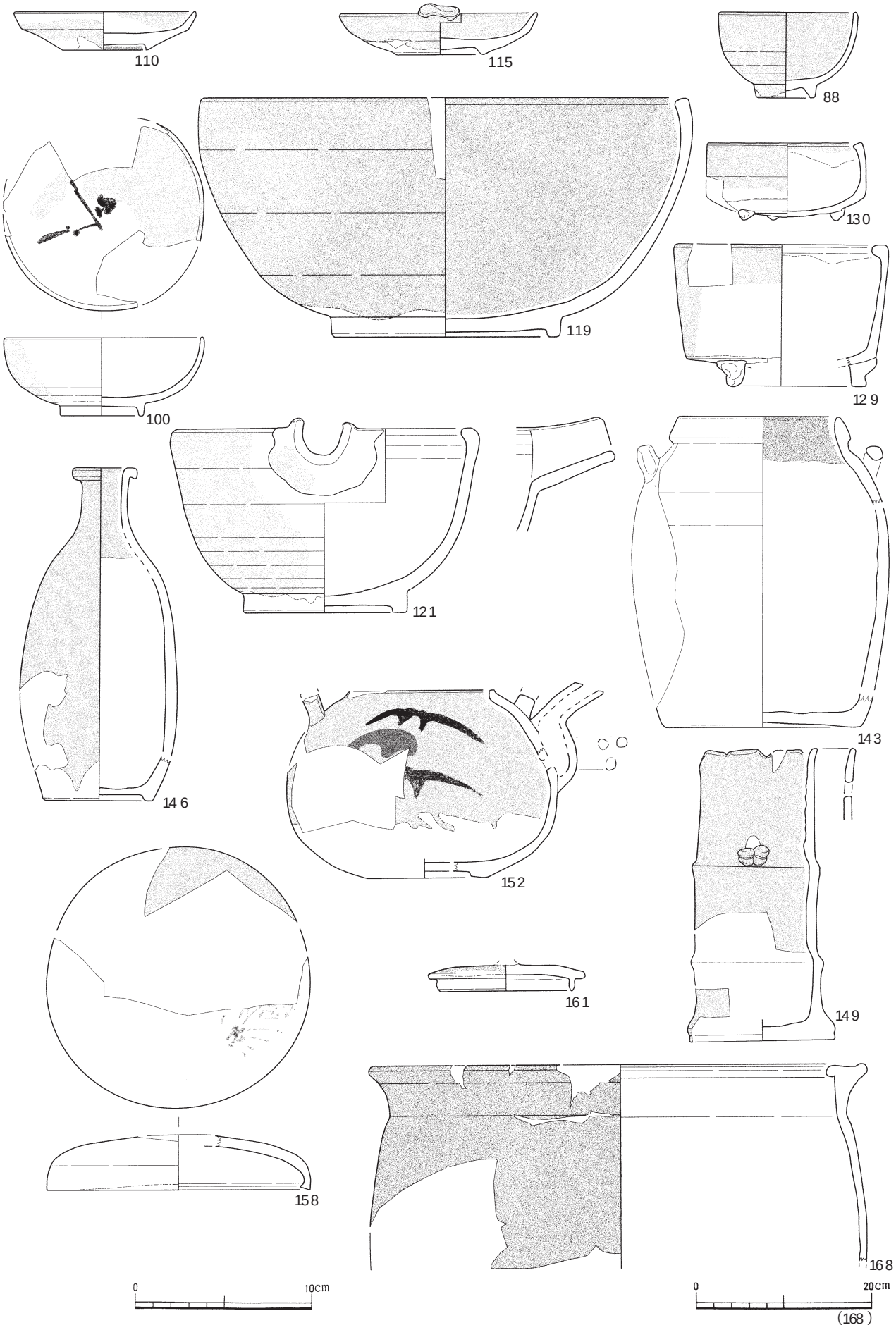


264

0　10cm

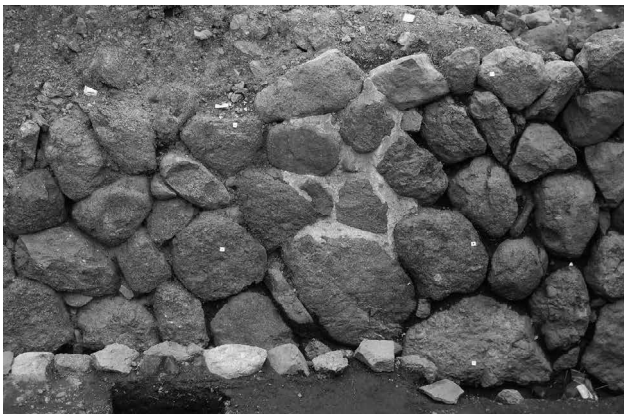
PL－53　熱を受けた陶磁器（1）

PL—54 熱を受けた陶磁器（2）



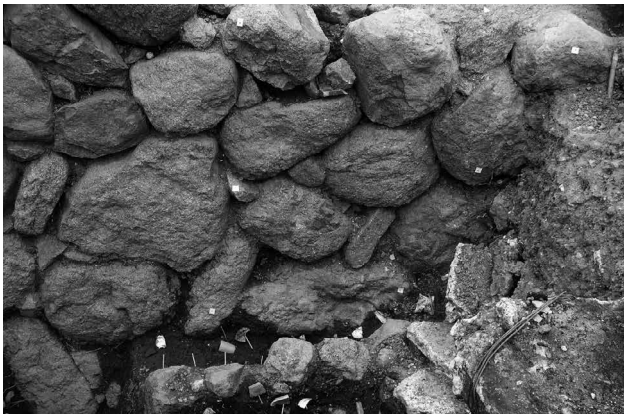
1号石垣（北から）

1号石垣（北から）



1号石垣（北から）

1号石垣（北から）



1号石垣（北から）

PL－56　2号石垣

2号石垣（東から）

2号石垣（東から）

2号石垣（上面）

2号石垣（東から）

2号石垣南端（東から）

3号石垣（西から）

3号石垣（南西から）

3号石垣（北西から）

3号石垣（西から）

PL－58　4 号石垣

4 号石垣（西から）

4 号石垣（北から）

4 号石垣北端（西から）

4 号石垣（北西から）

4 号石垣北端（上面）

5 号石垣下層（西から）

5 号石垣上層（南から）

5 号石垣下層（北東から）

5 号石垣下層（南から）

5 号石垣下層北端（北から）

PL－60　6 号石垣

6 号石垣（東から）

6 号石垣（東から）

6 号石垣（東から）

6 号石垣（東から）

6 号石垣（北から）

1号石列（東から）

1号石列（南西から）

1号石列（東から）

1号石列（西から）

PL－62　２号石列

２号石列（北西から）

２号石列（北から）

２号石列・１号埋甕

２号石列（西から）

3 号石列下層（西から）

3 号石列上層（北から）

3 号石列下層（北から）

3 号石列上層（上面）

3 号石列下層（上面）

PL－64　4 号石列

4 号石列下層（東から）

4 号石列上層（南東から）

4 号石列下層（南東から）

4 号石列下層（南から）

4 号石列下層（北から）

5号石列（西から）

5号石列（東から）

5号石列（上面）

5号石列（上面）

5号石列出土遺物（北から）

5号石列・1号埋甕（北から）

PL－66　１号集石

１号集石（南西から）

１号集石（西から）

１号集石（南から）

１号集石（西から）

１号集石（南から）

2号集石（上面）

2号集石（北から）

2号集石（北西から）

2号集石（北から）

2号集石（南から）

PL－68　3号集石

3号集石（西から）

3号集石（東から）

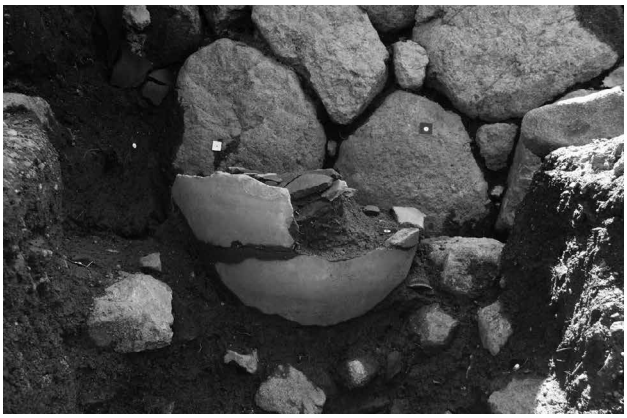
3号集石（北から）

3号集石（西から）

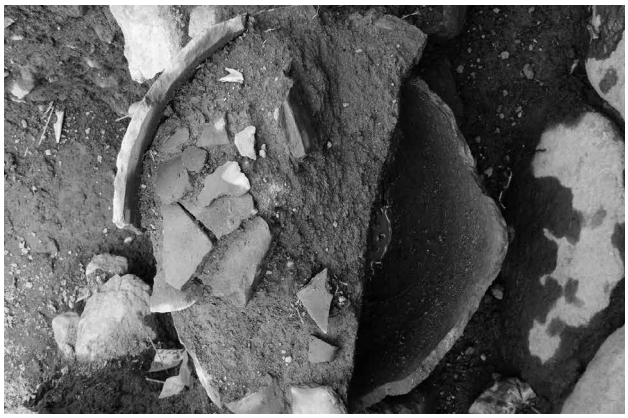
3号集石（東から）

1 号埋甕・2 号石列（北から）

1 号埋甕・2 号石列（上面）



1 号埋甕（北から）



1 号埋甕（上面）

1 号埋甕・5 号石列（北から）

PL－70　１号土器集中区

１号土器集中区（東から）

１号土器集中区（南から）

１号土器集中区（上面）

１号土器集中区（南から）

１号土器集中区遺物取上げ後（上面）

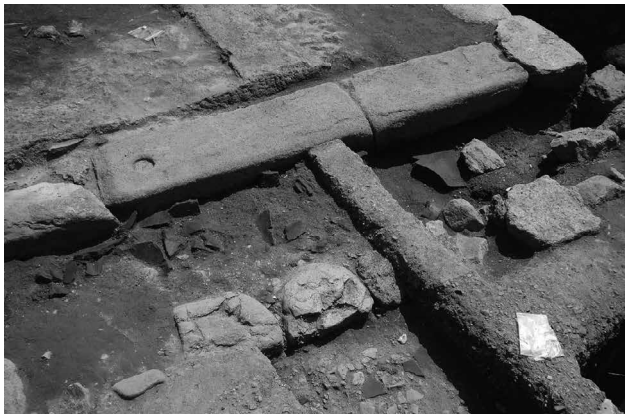
1号道路（西から）

1号道路（東から）

PL－72　１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区

１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（東から）

１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（南西から）



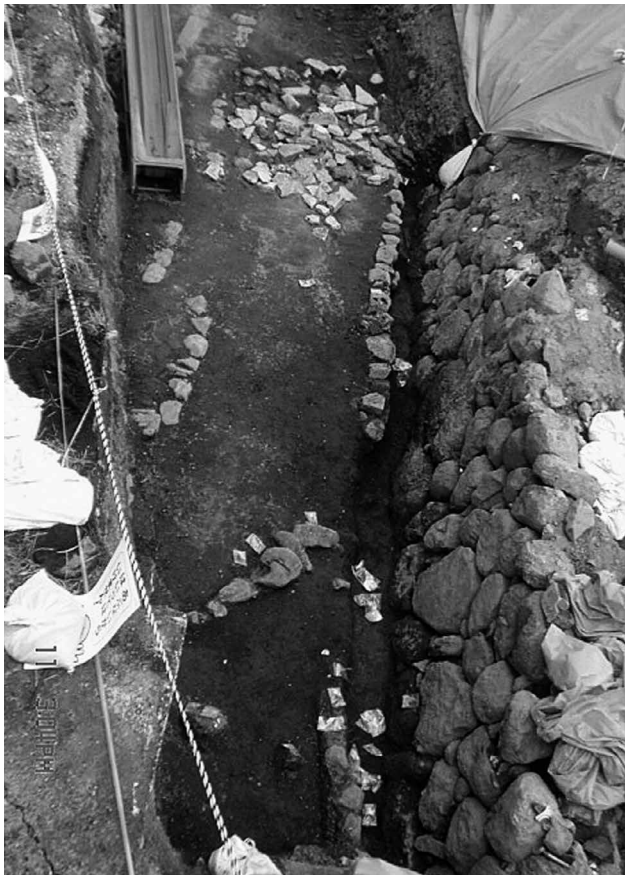
１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（南から）

１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（南から）

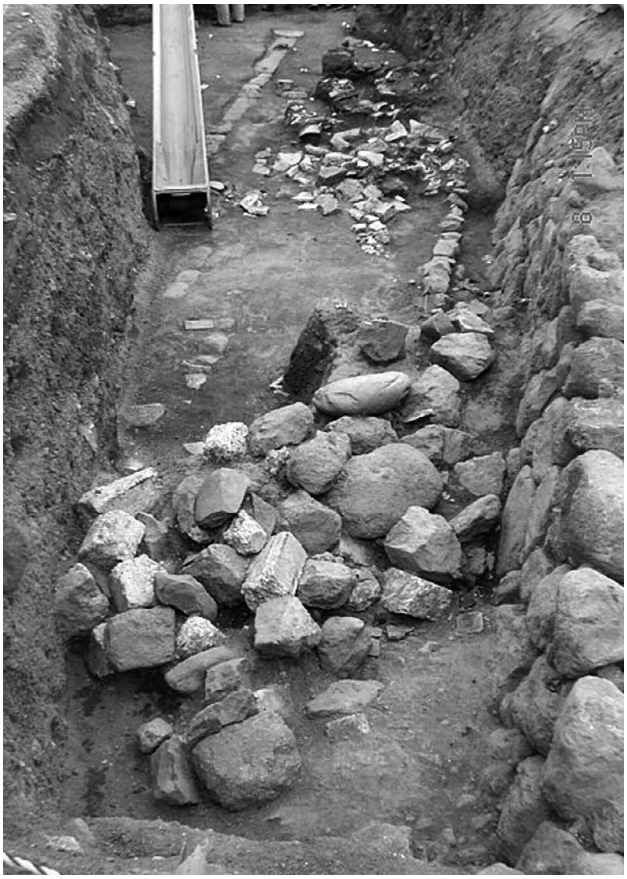
１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（西から）

１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（南から）

１号建物跡・１号礎石・１号瓦集中区（北から）



１号廃棄（西から）



１号廃棄（西から）

１号廃棄（北から）

１号廃棄（東から）

１号廃棄（東から）

１号廃棄（南から）

PL－74　a 区検出遺構

第１面全景（東から）

一分判金出土状況（北から）

一分判金出土状況近景（北から）

第2面全景（西から）

第 1 面検出状況（南から）

第 1 面検出状況（北東から）

第 1 面焼土層確認状況（南から）

第 1 面焼土層確認状況（北から）

第 1 面焼土層掘り下げ状況（南から）

第 2 面検出状況（南から）

第 2 面検出状況（北から）

PL－76　調査前後・空撮風景

調査前全景（南から）

調査前県道際石垣（北東から）

調査後全景（南から）

調査後県道際（東から）

空撮図化風景（南から）

調査区北壁・１号道路（南から）

１号道路（北から）

１号石垣基部：２号トレンチ内（北から）

１号道路土層（中央部）：２号トレンチ内（東から）

１号道路土層（中央部）：５号トレンチ内（西から）

１号道路土層（東端部）：11号トレンチ内（東から）

１号建物跡土層（中央部）：９号トレンチ内（西から）

１号列石土層（中央部）：５号トレンチ内（西から）

PL－78　b区焼土層断面

東西断面（南西から）

東西断面（北から）

南北断面E－E'地点①（東から）

南北断面E－E'地点②（西から）

東西断面A－A'地点（北から）

東西断面B－B'地点（北から）

東西断面C－C'地点（北から）

東西断面D－D'地点（北から）

炭化材等検出状況（東から）

遺物検出状況（西から）

土壁検出状況（西から）

磁器検出状況（西から）

土壁検出状況（西から）

PL―80　オルソ画像（b区東壁・西壁）

b区西壁（東から）

b区東壁（西から）

ｂ区南壁（北から）

ｂ区北壁（南から）

PL―82　オルソ画像（１号埋甕・２号石垣）

２号石垣（東から）

１号埋甕（上面）

１号埋甕（北から）

PL－83　オルソ画像：３号石垣・５号石垣（1）

３号石垣（西から）

５号石垣（東から）

PL―84　オルソ画像：４号石垣・５号石垣（2）

４号石垣（北から）

５号石垣（北から）

６号石垣（上面）

６号石垣（東から）

PL―86　オルソ画像：３号石列・５号石列

３号石列（北から）

５号石列（上面）

丸形小坏（ID1）

丸形小坏（ID2）

端反形小坏（ID3）

薄手酒坏（ID4）

薄手酒坏（ID5）

貝殻形紅皿（ID6）

丸形小碗（ID7）

丸形小碗（ID8）

丸形小碗（ID9）

半球形小碗（ID10）

半筒形小碗（ID11）

半筒形小碗（ID12）

輪花形小碗（ID13）

筒形小碗（ID14）

筒形小碗（ID15）

PL—88　磁器 碗類（2）

ゴム版丸形小碗（ID16）

銅版筒形小碗（ID17）

銅版丸形小碗（ID18）

浅半球形中碗（ID19）

浅半球形中碗（ID20）

浅半球形中碗（ID21）

丸形中碗（ID22）

丸形中碗（ID23）

丸形中碗（ID24）

丸形中碗（ID25）

丸形中碗（ID26）

丸形中碗（ID27）

丸形中碗（ID28）

丸形中碗（ID29）

丸形中碗（ID30）

丸形中碗（ID31）

丸形中碗（ID32）

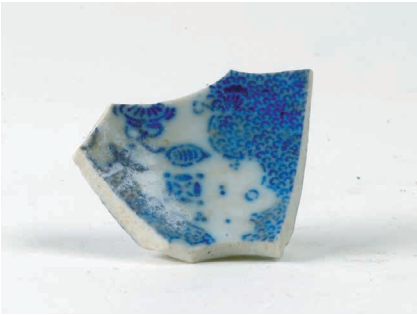
小碗（ID33）

端反形中碗（ID34）

端反形中碗（ID35）

端反形中碗（ID36）

端反形中碗（ID37）


型紙平形小碗（ID38）

丸形碗（ID39）

丸形大碗（ID40）

仏飯器（ID41）

仏飯器（ID42）

丸形極小皿（ID43）

隅切四方形極小皿（ID44）

輪花形極小皿（ID45）

PL―90　磁器 皿類（2）

隅切形極小皿（ID46）

丸形小皿（ID47）

腰張形小皿（ID48）

丸形小皿（ID49）

丸形小皿（ID50）

丸形小皿（ID51）

丸形小皿（ID52）

型紙丸形小皿（ID53）

型紙小皿（ID54）

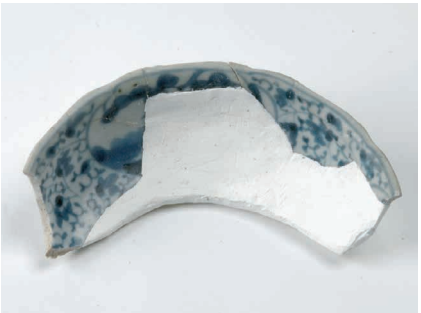
平形小皿（ID55）

五寸皿（ID56）

丸形五寸皿（ID57）

丸形五寸皿（ID58）

丸形五寸皿（ID59）


輪花形五寸皿（ID60）

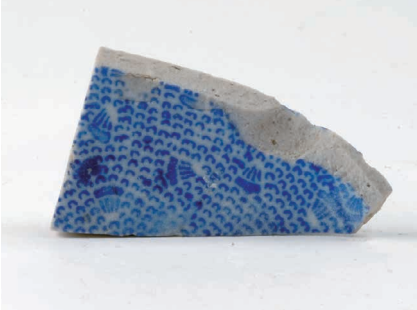
輪花形五寸皿（ID61）

丸形中皿（ID62）

輪花形中皿（ID63）

偏平鼎形香炉（ID64）

半筒形火入（ID65）


鉢（ID66）

端反辣韮形小瓶（ID67）

四方面取辣韮形小瓶（ID68）

四方面取辣韮形小瓶（ID69）

逆蕪形中瓶（ID70）

端反辣韮形大瓶（ID71）

端反辣韮形大瓶（ID72）

端反辣韮形大瓶（ID73）

端反辣韮形大瓶（ID74）

瓶（ID75）

PL—92　磁器 瓶類（2）・壺類・水注類・
杓子類・蓋類　陶器 碗類（1）

逆蕪喇叭口瓶形仏花瓶（ID76）

胴丸形髪油瓶（ID77）

豆腐形水滴（ID78）

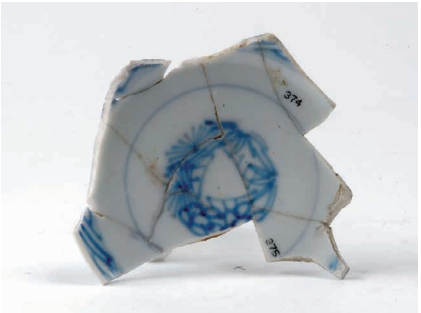
豆腐形水滴（ID79）

羽釜形（ミニチュア）（ID80）

花蓮華（ID81）

丸形蓋物蓋（ID82）

端反形中碗蓋（ID83）


丸形中碗蓋（ID84）

水注蓋（ID85）

水注蓋（ID86）

四角形蓋（ID87）

丸形小碗（ID88）

丸形小碗（ID89）

腰張形小碗（ID90）

腰折形小碗（ID91）

半筒形小碗（ID92）

丸形碗（ID93）

丸形碗（ID94）

腰張形中碗（ID95）

腰張形中碗（ID96）

腰張形中碗（ID97）

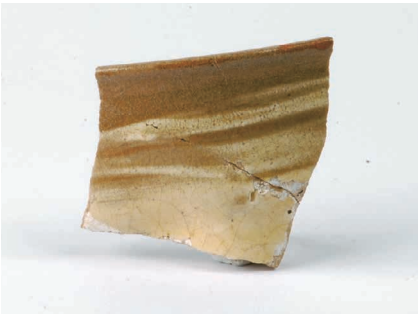
呉器形中碗（ID98）

呉器形中碗（ID99）

浅半球形中碗（ID100）

半筒形中碗（ID101）

杉形碗（ID102）


拳骨形碗（ID103）

碗（ID104）

丸形仏飯器（ID105）

PL―94　陶器 碗類（3）・皿類・鉢類（1）

丸形仏飯器（ID106）

丸形小皿（ID107）

丸形小皿（ID108）

花菱形小皿（ID109）

盤形小皿（ID110）

丸形小皿（ID111）

灯明皿（ID112）

灯明皿（ID113）

灯明皿（ID114）

摘付灯明皿（ID115）

油溝アーチ状形灯明受皿（ID116）

油溝切立状灯明受皿（ID117）

灯明皿（ID118）

丸形大鉢（ID119）

溝縁形大鉢（ID120）

丸形片口鉢（ID121）

餌擂鉢（ID122）

口縁内凸帯擂鉢（ID123）

折縁形擂鉢（ID124）

擂鉢（ID125）

擂鉢（ID126）

擂鉢（ID127）

擂鉢（ID128）

三足半筒形香炉（ID129）

三足半筒形香炉（ID130）

香炉（ID131）

三足半筒形香炉（ID132）

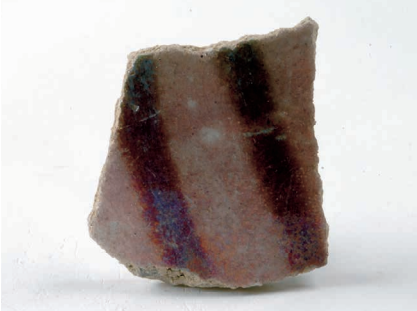
三足半筒形香炉（ID133）

三足半筒形香炉（ID134）

半筒形火入（ID135）

PL―96　陶器 鉢類（3）・壺類・瓶類・水注類（1）

筒形香炉（ID136）


火鉢（ID137）

丸形蓋物鉢（ID138）

鉢（ID139）

鉢（ID140）

鉢（ID141）

甕（ID142）

双耳形中壺（ID143）

肩衝形中壺（ID144）

ぺこかん中瓶（ID145）

撫肩形中瓶（ID146）

瓶子丸耳形仏花瓶（ID147）

瓶子丸耳形仏花瓶（ID148）

竹筒形掛花生（ID149）

丸形土瓶（ID150）

丸形土瓶（ID151）

丸形土瓶（ID152）

土鍋（ID153）

行平鍋（ID154）

横付き把手（ID155）

乗燭（ID156）

たんころ形乗燭（ID157）

丸形蓋物蓋（ID158）

落し蓋壺蓋（ID159）

土瓶蓋（ID160）

土瓶蓋（ID161）

蓋（ID162）

平形蓋（ID163）

丸形急須蓋（ID164）

土瓶（ID165）

PL—98　炻器　水注類（2）・瓶類・甕類　土器　皿類・
蓋類・鉢類・鍋類・甕類　土製品（1）

土瓶（ID166）

四方形瓶（ID167）

口縁断面Ｔ字形大甕（ID168）

極小皿（ID169）

小皿（ID170）

小皿（ID171）

火消壺蓋（ID172）

銅丸形火鉢（ID173）

七厘（ID174）

方形火鉢（ID175）

焜炉（ID176）

筒形七厘（ID177）

大甕（ID178）

内耳形焙烙（ID179）

泥めんこ（ID180）

泥めんこ（ID181）

泥めんこ（ID182）

泥めんこ（ID183）

ボタン（ID184）

人形類（ID185）

人形類（ID186）

人形類（ID187）

砥石（ID188）

砥石（ID189）

砥石（ID190）

棒状礫（ID191）

棒状礫（ID192）

棒状礫（ID193）

棒状礫（ID194）

棒状礫（ID195）

PL一100　石製品（2）　銭貨（1）

硯（ID196）

砥石（ID197）

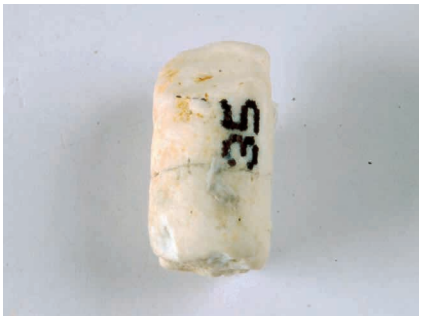
小型加工品（ID198）

石筆（ID199）

石筆（ID200）

石筆（ID201）

石筆（ID202）



石筆（ID203）

ボタン（ID204）

石臼（ID205）

元禄一分判金（表）（ID206）

元禄一分判金（裏）（ID206）

古寛永（ID207）

古寛永（ID208）

新寛永（ID209）

新寛永（ID209）

新寛永（ID210）

新寛永（ID210）

新寛永（ID215）

新寛永（ID216）

新寛永（ID217）

新寛永（ID218）

新寛永（ID221）

新寛永（ID222）

新寛永（ID223）

新寛永（ID224）

新寛永（ID225）

新寛永（ID226）

新寛永（ID228）

新寛永（ID228）

PL－102　銭貨（3）　金属製品（1）

文久永寶（ID229）

文久永寶（ID229）

雁首銭（ID230）

半銭銅貨（ID231）

半銭銅貨（ID232）

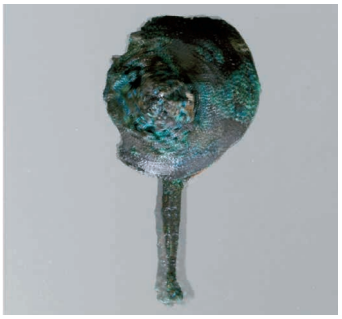
半銭銅貨（ID233）

一銭（ID234）

一銭（ID235）

煙管（ID238）

煙管（ID239）


鋲（ID240）

こはぜ（ID245）

杓子（ID246）

釘（ID247）

釘（ID248）

釘（ID250）

鍔（ID254）

鎹（ID255）

目薬ビン（ID259）

薬瓶（ID260）

薬瓶（ID261）

飲料瓶（ID262）

飲料瓶（ID263）

飲料瓶（ID264）

骨角製品（ボタン）（ID256）

骨角製品（つまようじ）（ID257）

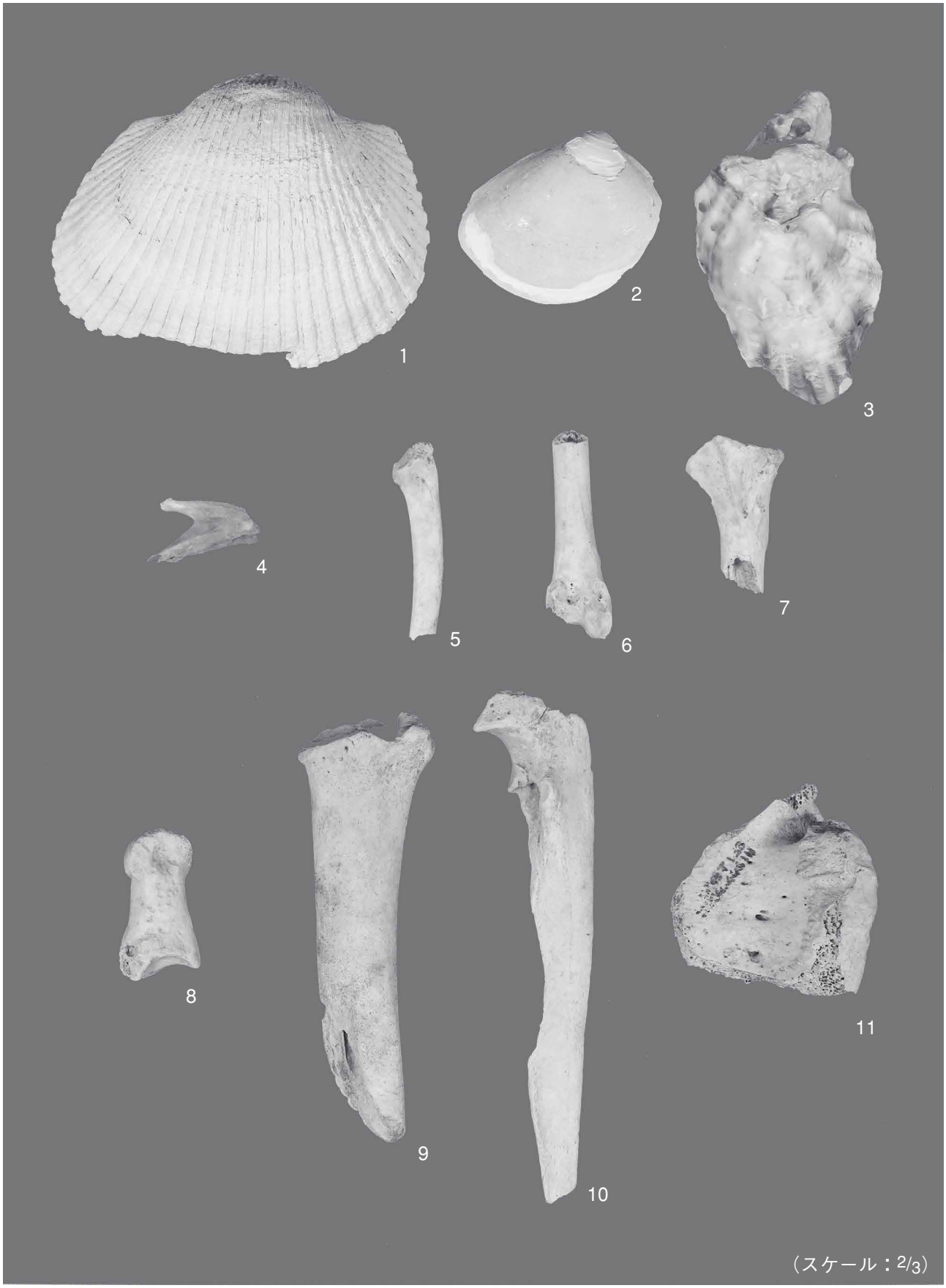
プラスチック製品（バッチ）（ID258）

おはじき（ID285）

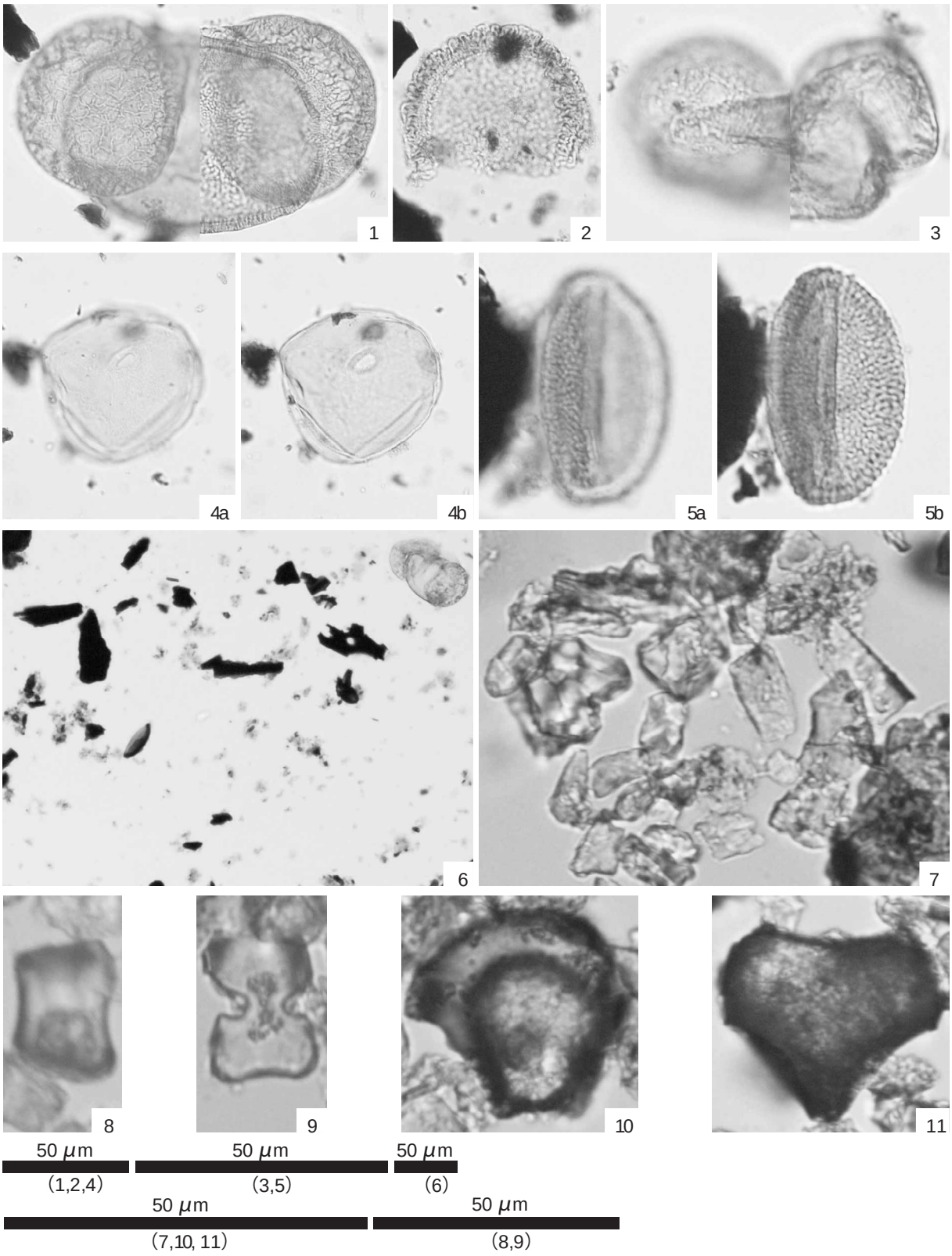
おはじき（ID285～299）

ビー玉（ID265～284）

PL－104　動物遺体

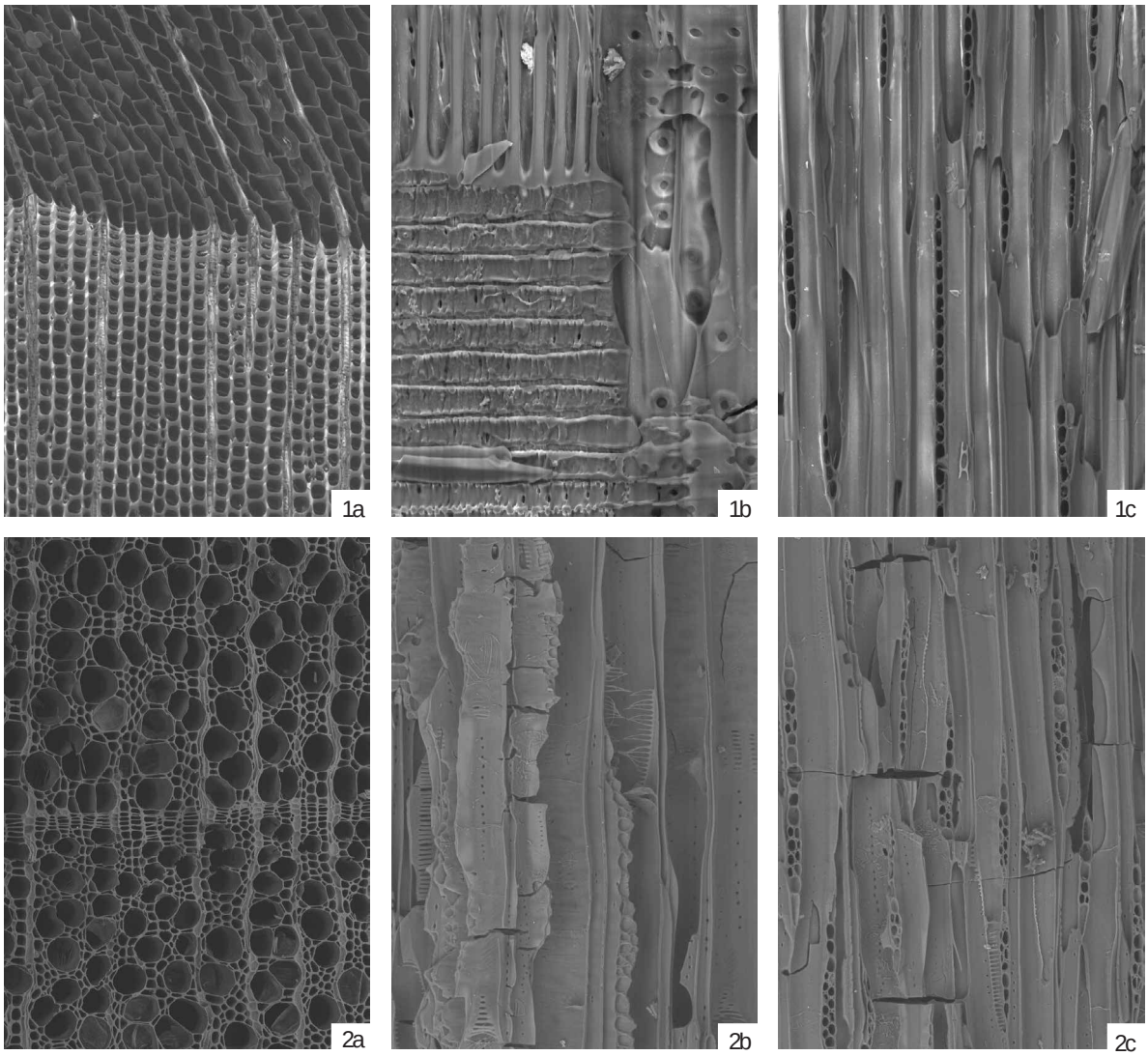


1．アカガイ　2．ハマグリ　3．マガキ　4．サバ属（歯骨）　5～7．ニワトリ（5：尺骨、6：大腿骨、7：脛骨）　8．ニホンジカ（中節骨）　9・10．カモシカ（9：橈骨、10：尺骨）　11．ウマ（大腿骨）



1．モミ属（SH319）
2．ツガ属（SH319）
3．マツ属（SH319）
4．イネ科（SH319）
5．ソバ属（SH319）
6．花粉分析プレパラート内の状況（SH319）
7．植物珪酸体分析プレパラート内の状況（鉱物粒子が散在）（SH319）
8．タケ亜科短細胞珪酸体（SH319）
9．ススキ属短細胞珪酸体（SH319）
10．タケ亜科機動細胞珪酸体（SH319）
11．シバ属機動細胞珪酸体（SH319）

PL－106　炭化材同定

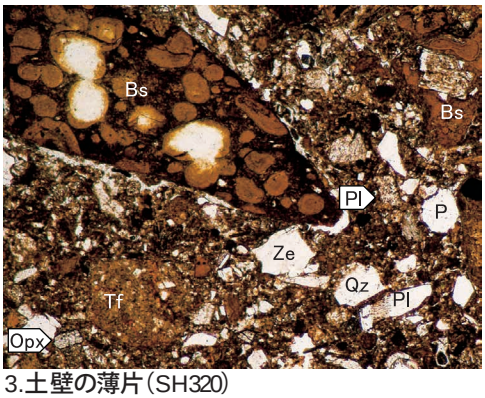


1. モミ属（SH324）
2. カツラ（SH327）
　a:木口,b:柾目,c:板目

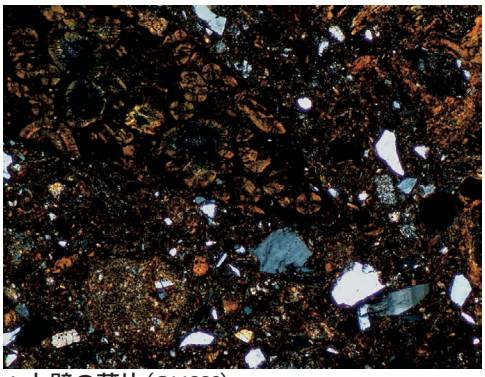
200μm:2a
200μ
m:1a,2b,c

1. 土壁の破片（SH320）

2. 土壁の断面（SH320）



3.土壁の薄片（SH320）



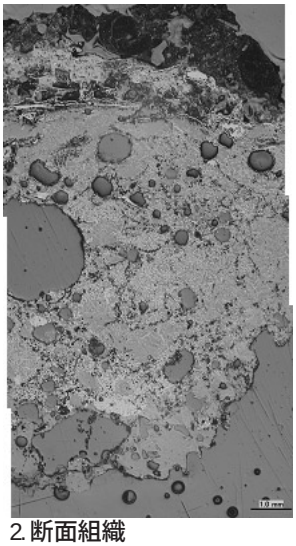
4. 土壁の薄片（SH320）

Qz:石英. Pl:斜長石. Opx:斜方輝石. Ze :ゼオライト. Tf:凝灰石. Bs:玄武岩. P:孔隙.
薄片写真左は下方ポーラー、同右は直交ポーラー下。

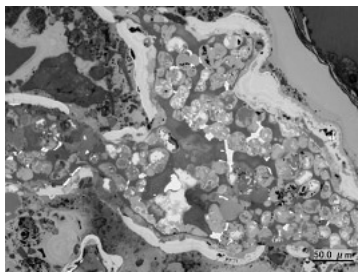
0.5mm

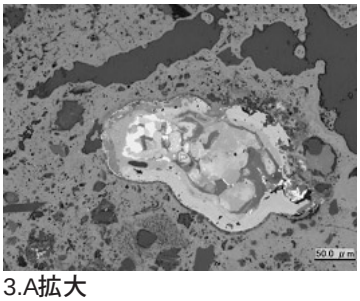
1. 外観

2cm

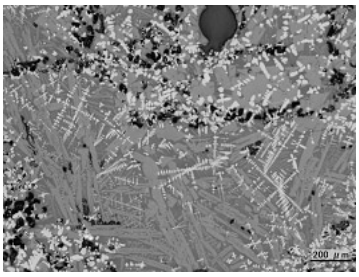


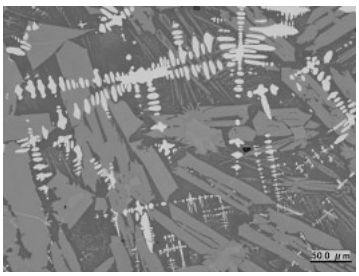
2. 断面組織

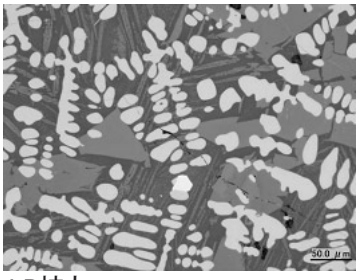




3.A拡大

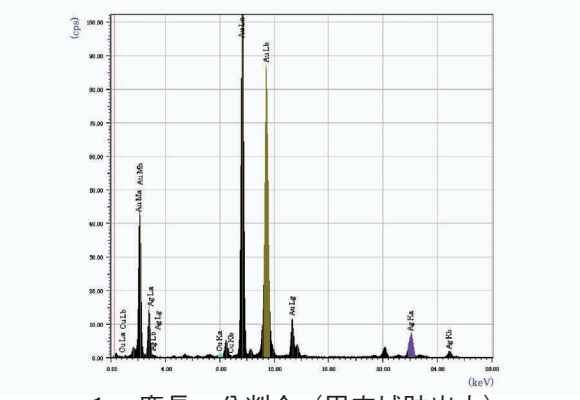




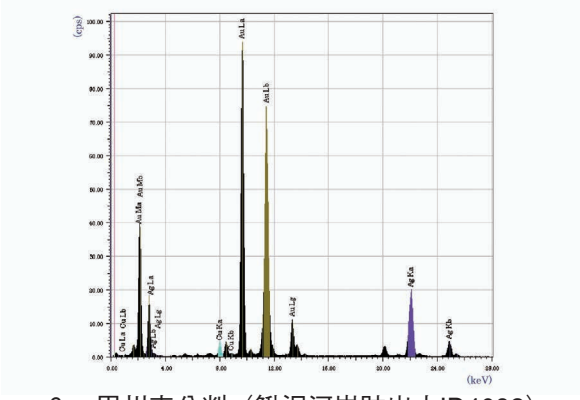


4. B拡大

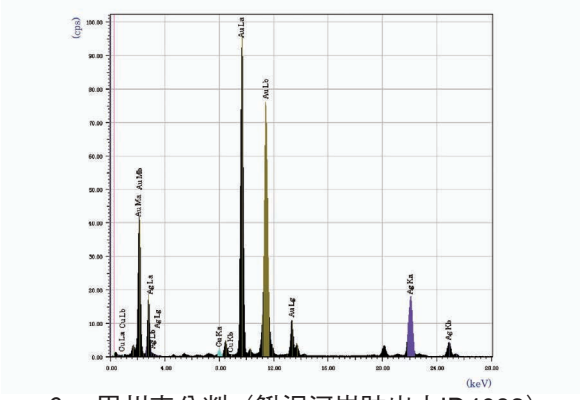
PL一108　蛍光X線スペクトル・分析部位画像



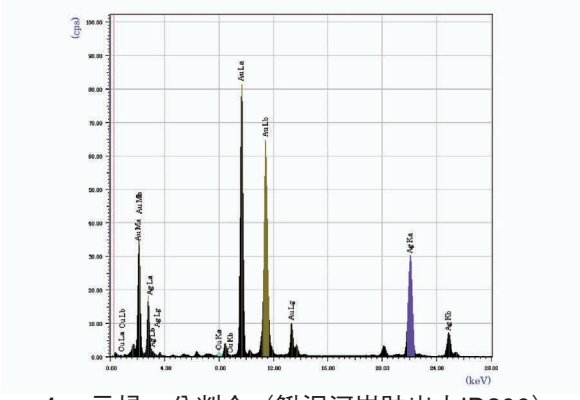
1．慶長一分判金（甲府城跡出土）



2．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4092）

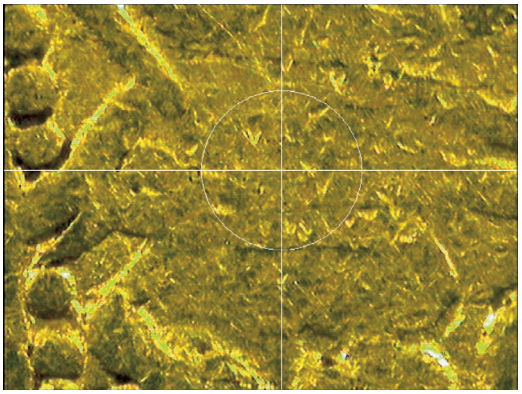


3．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4093）

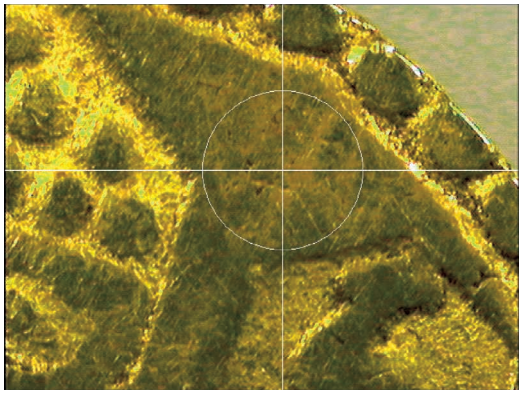


4．元禄一分判金（鰍沢河岸跡出土ID206）

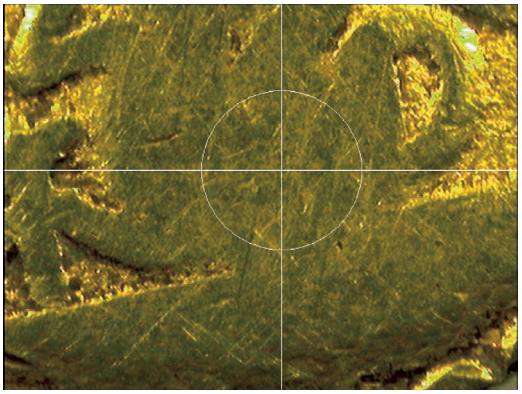
蛍光X線スペクトル



1．慶長一分判金（甲府城跡出土）



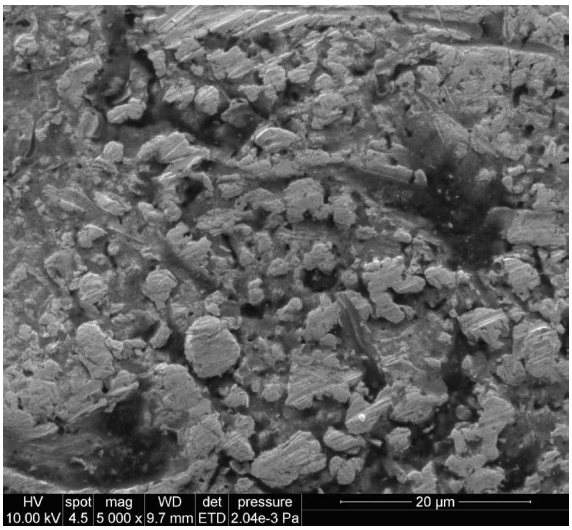
2．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4092）



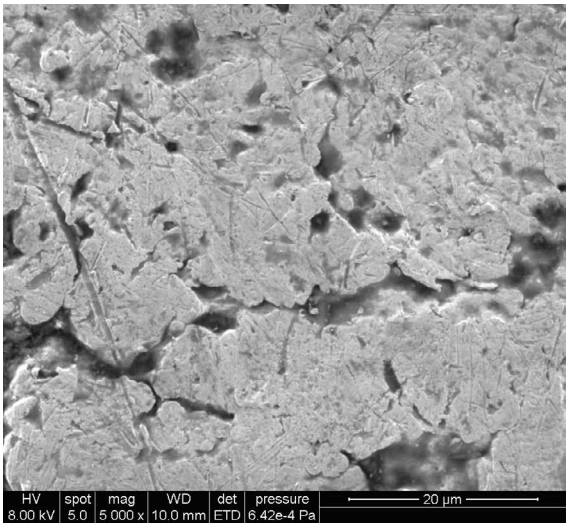
3．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4093）

4．元禄一分判金（鰍沢河岸跡出土ID206）

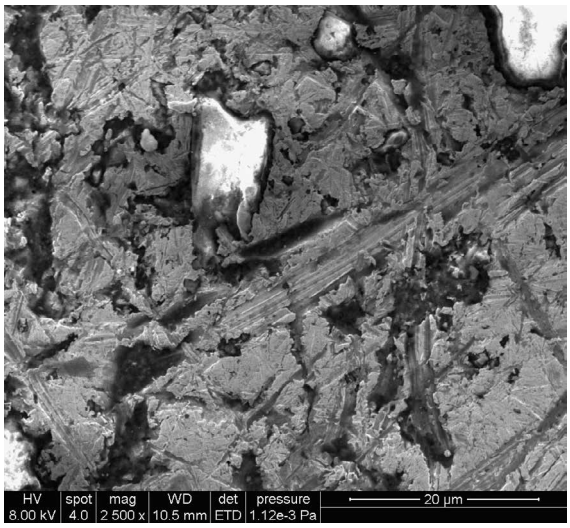
分析部位画像



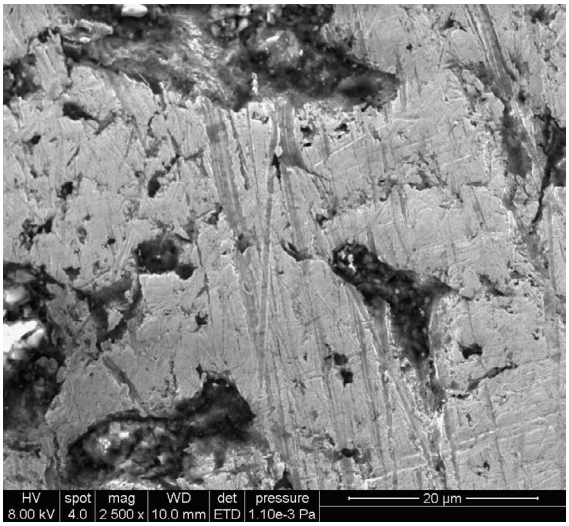
1．慶長一分判金（甲府城跡出土）



2．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4092）



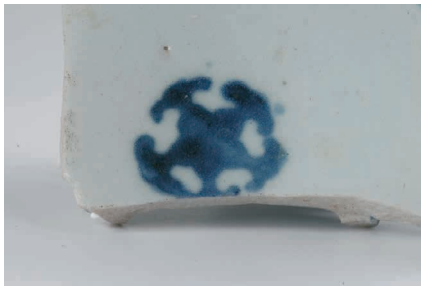
3．甲州壱分判（鰍沢河岸跡出土ID4093）



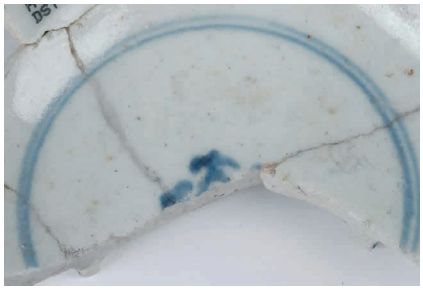
4．元禄一分判金（鰍沢河岸跡出土ID206）

走査型電子顕微鏡画像

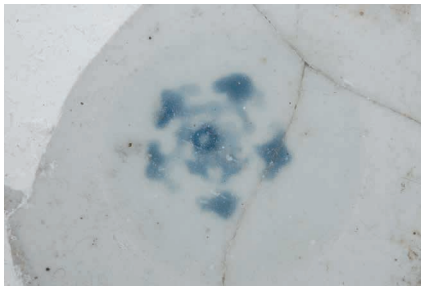
PL―110　見込文様・銘款等（1）



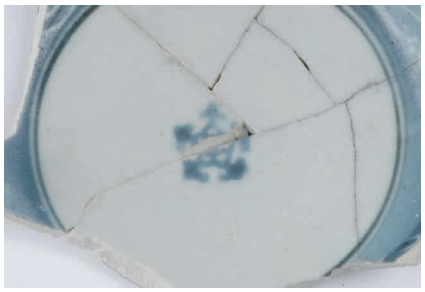
1-五弁花文（ID11）



2-五弁花文（ID34）



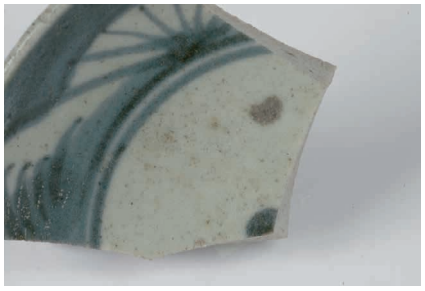
3-五弁花文（ID40）



4-五弁花文（ID48）

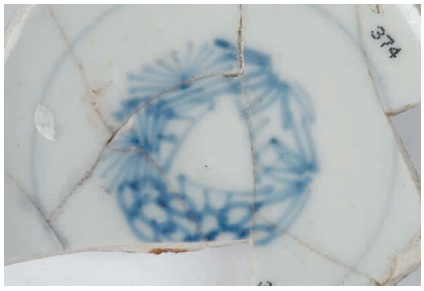
5-五弁花文（ID57）

6-五弁花文（ID58）



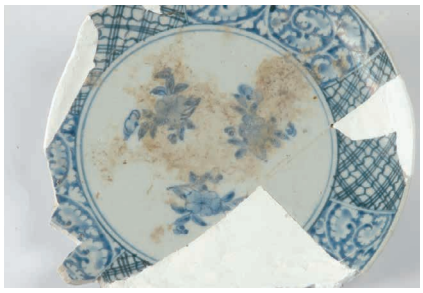
7-五弁花文？（ID43）

8-環状松竹梅文（ID59）



9-環状松竹梅文（ID84）

10-花文（ID9）



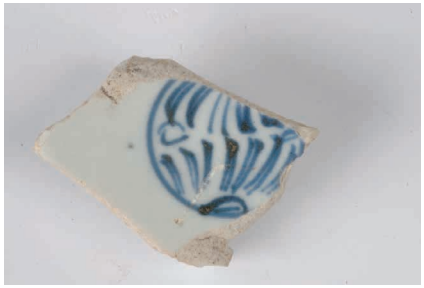
11-花文（ID62）

12-花文（ID63）

13-花文（ID45）

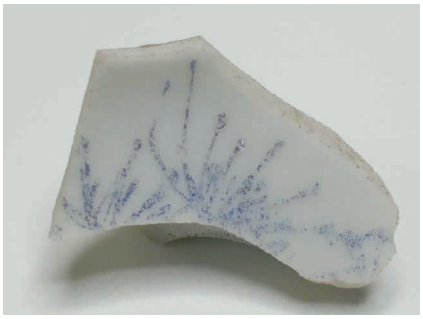
14-草文（ID32）

15-火炎宝珠文（ID10）



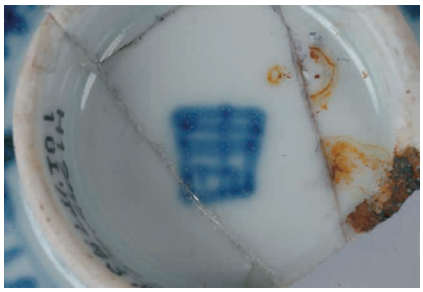
16-丸文（ID33）

17-銘款（ID37）



18-江戸絵付け（ID5）

19-赤絵（ID3）



20-異形字（ID84）

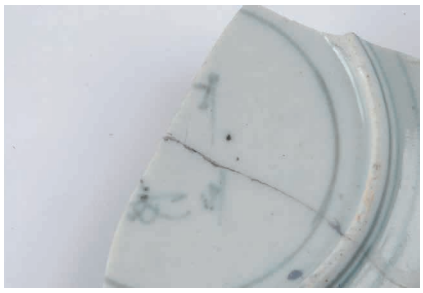
21-大明年製（（ID29）

22-大明年製（ID30）

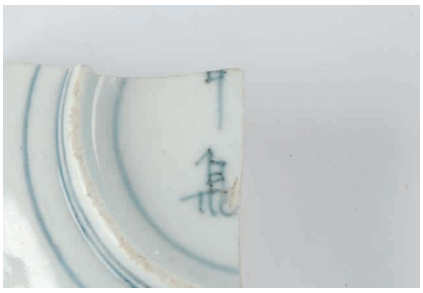
23-大明年製（ID31）

24-大明年製（ID48）

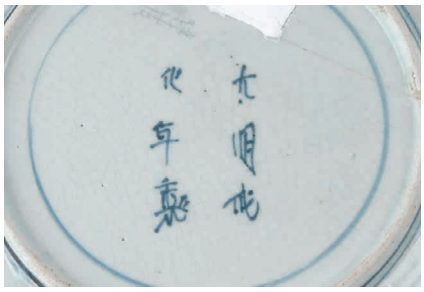
25-大明（年製？）（ID56）



26-大明（年？）製（ID57）

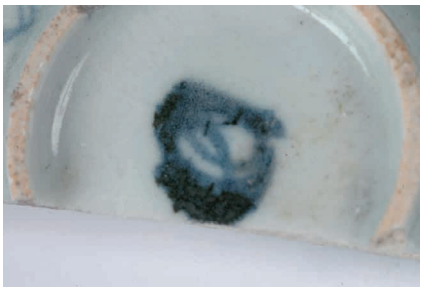


27-（大明？）年製（ID61）



28-大明成化年製（ID62）

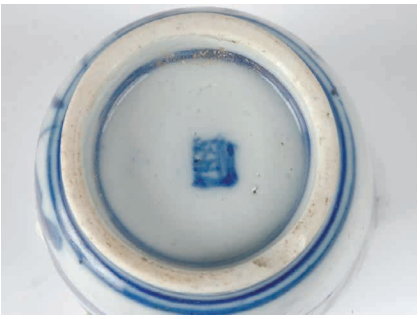
29-二重角渦福文（ID63）



30-二重角渦福文（ID9）

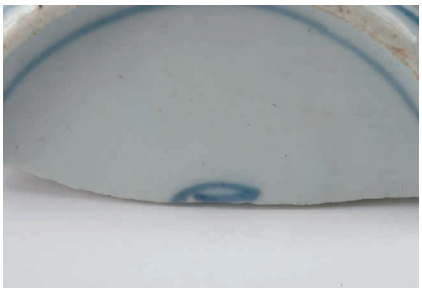
PL―112　見込文様・銘款等（3）

31-銘款（ID28）


32-角記号（ID14）

33-角記号（ID15）

34-記号（ID23）


35-記号（ID58）

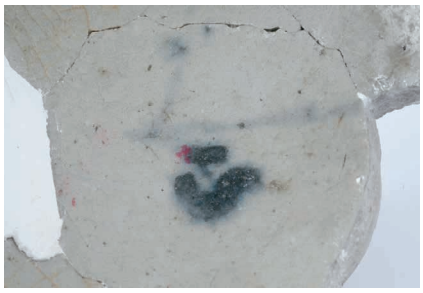
36-記号（ID34）

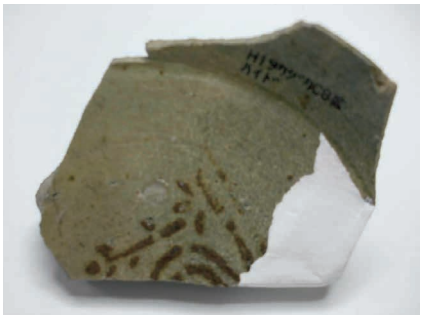
37-刻印（ID45）

38-統制番号製品（ID55）

39-焼継印（D59）

40-菱形文・山文（ID11）


41-100花文


42-108摺紙文様

43-刻印「清水」（ID95）

44-文字（ID101）

45-文字（ID167）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かじかざわかしあと
書名	鰍沢河岸跡Ⅵ
副題	一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う横町地区発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第254集
著者	保坂和博、堀込紀行
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923　TEL　055－266－3016
発行日	2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （新）	東経 （新）	調査期間	調査面積㎡	調査原因
かじかざわかしあと 鰍沢河岸跡	やまなしけんみなみこまぐん かじかざわちょう 山梨県南巨摩郡鰍沢町1513-3外	19362	4464	V－48G 35°32′23.62″	V－48G 138°27′24.07″	2007年5月28日～2007年8月3日	340㎡	一般国道52号改築 （甲西道路建設）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鰍沢河岸跡	河岸跡	近世 近代	石垣６面、石列５基、集石３基、埋甕１基、土器集中区１基、道路１、建物跡１基、礎石１基、瓦集中区１基、廃棄帯１基の総数21基	磁器、陶器、土器、土製品（泥めんこなど）、石製品、銭貨、金属製品、角骨製品、ガラス製品	鰍沢河岸跡北端部に位置する江戸時代以降の居住区域。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第254集

2008（平成20）年３月17日　印刷

2008（平成20）年３月31日　発行

鰍沢河岸跡Ⅵ（かじかざわかしあと）

－一般国道52号改築（甲西道路建設）事業に伴う横町地区発掘調査報告書－

編　　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL　055－266－3016
E-mail maizou-buk@pref.yamanashi.lg.jp

発　　行　山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

印　　刷　株式会社少國民社